

紅眼の黒竜に懐かれた

Monozuki

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

若くして命を落とした男が遊戯王GXの世界へ転生し、紅眼の黒竜と共に生きていく話。

目次

|             |     |
|-------------|-----|
| 〜転生、黒竜を添えて〜 | 1   |
| 〜黒炎弾の人〜     | 9   |
| 〜譲れないもの〜    | 23  |
| 〜月1試験〜      | 36  |
| 〜悪魔を食らう黒竜〜  | 47  |
| 〜予想外の人物〜    | 60  |
| 〜帝王からの挑戦〜   | 68  |
| 〜推しの旅立ち〜    | 80  |
| 〜青春の黒炎〜     | 87  |
| 〜進化した者達〜    | 103 |
| 〜転生者の決意〜    | 112 |
| 〜全力の決闘〜     | 122 |
| 〜事件の前兆〜     | 138 |
| 〜最初の戦い〜     | 147 |
| 〜黒竜vs怒りの黒竜〜 | 154 |
| 〜謎多き恩人〜     | 163 |
| 〜不死と可能性〜    | 172 |
| 〜愛ある一撃〜     | 187 |
| 〜新しい看板娘〜    | 198 |
| 〜学園祭デート〜    | 211 |
| 〜超魔導コスプレ〜   | 223 |
| 〜最悪への序章〜    | 239 |
| 〜触れられた逆鱗〜   | 251 |
| 〜三幻魔降臨〜     | 262 |

〜最凶の最強〜



275

〜1年の終わり〜



290

〜巻き込まれた恋路〜



302

〜14度目の正念場〜



313

く転生、黒竜を添えてく

——デュエルアカデミア。

この言葉をご存知だろうか。伝説のデュエリスト海馬瀬人によって設立され、将来有望なデュエリストの育成を主な目的とする学校である。

南海に浮かぶ孤島に存在し、生徒は全て寮生活となる。まさしく全ての時間を懸けてデュエルを学ぶ場所なのだ。

プロデュエリストへの道も開かれる夢の学校には、毎年多くの受験者が募る。中等部から進学しない高等部への外部受験者たちの本気度は他の学校の追隨を許さず、倍率は言うまでもなく高い。

決して軽い覚悟で通れる広き門ではない。

そう、軽い覚悟では。

(……なんでこうなったかなあ)

デュエリストの象徴とも言えるデュエルディスクを装着しながら、自身の置かれている状況に呆然とする男が一人。場所は人々で溢れている、とある会場だ。

目の前には同じくデュエルディスクを装着した大人。厳しい顔付きで此方に視線を向けており、ハキハキとした口調で話しかけてくる。

「受験番号47番、竜伊紅也。準備はいいか？」

「——え？ ……ああ、はい」

煮え切らない態度ではあるが、試験官である男は特に気にしない。受験者故の緊張であると受け取ったのだ。そうでないことに気付く訳もないのだが。

これより始まるのは——決闘。

デュエリスト同士のぶつかり合い、試験とは言え真剣勝負。会場の観客席からも、所々から視線が集まる。

「さあ、始めよう」

「……はい」

ぎこちない動作でデュエルディスクを起動する紅也。そこにセツトされた自身のデッキを見つめながら、ため息を溢した。

(……どうしよう)

命を落としたら、転生していた。

普通の会社員だった竜伊紅也は二十五歳という短い人生を爆走トラックに終了させられると、遊戯王の世界へと転生していた。

何故遊戯王と分かったのか理由は単純であり、少しその辺を歩けば至る所でデュエルしている場面を目撃したからだ。趣味程度で遊戯王に関わっていた紅也も、青い龍と共に高笑いしながらテレビに登場した社長が誰かは流石に理解した。

とあるカードがお気に入りの子供の頃から遊んできた遊戯王。アニメも軽く見る程度には好きだったコンテンツの世界へ転生したことを最初は素直に喜んだが、冷静になると絶望案件だった。

何故か若返っている身体、天涯孤独の身、持ち物は十分な金額の貯金と前世で使用していたデッキが一つ。

訳が分からず脳内がショートしていた紅也を救ったのは、一枚のカードであった。そのカードこそ、紅也が遊戯王を始めたきっかけであり、この世界に来ることになったきっかけでもあった。

そのカードには精霊が宿っており、意思の疎通が可能だった。なんでも長い間自分のカードを大切にしていた紅也を気に入っており、この世界へ転生させたという話らしい。更にショートしそうになった紅也も、唯一関わりのある存在からそう言われてしまえば納得せざるを得なかった。

そして一枚の紙を渡される。それがデュエルアカデミアの受験票だった。

以上が、竜伊紅也のこの場に立つ理由の全てである。

他にやることがない。ただそれだけの理由で、彼は最難関の倍率を誇る学校を受験しているのだ。

何年ぶりの勉強に手こずりながらも乗り越えた筆記試験、そこま

では良かった。問題は実技試験である。

竜伊紅也はただの一般人なのだ。

普通の人生を送り、急に終わりを迎えた。それだけの一般人だ。そんな男がいきなりデュエルとは、中々に酷な状況だ。

しかし、これは紅也に問題がある。コミュ障とまではいかずとも内気な性格をしていた彼は、他の人に声を掛けてデュエルを挑むということが出来なかった。なので、彼にとってこの世界での初デュエルが今始まったのだ。

デュッキの調整で一人、対人戦などやれる筈もない。カードのパワーバランスを考えて持っていたデュッキには使う訳にもいかないカードが多く存在した。そのこともあり、カードショップへ入れ替えるためのカードを買いに行つた際もデュエルすることは叶わなかった。紅也は自身の不甲斐なさを恥じた。

「私の先攻だ。ドロー！」

自身のこれまでを振り返っていると、試験官が声を上げデュエルが開始された。勢いよくデュッキからカードをドローした試験官を見て、紅也はそこまで勢いつけなくても良いのではないかと思うぐらいに一般人だ。

試験官 LP4000

紅也 LP4000

開始時のライフは4000。

デュエルディスクに表示される自身の命を<sup>ポイント</sup>確認してから、紅也は試験官へ視線を移した。

「魔法カード『増援』を発動！ デュッキからレベル4以下の戦士族モンスター1体を手札に加える。『切り込み隊長』を手札に加え召喚！」

試験官がデュエルディスクへカードをセットすると同時に、フィールドへ屈強な戦士が現れる。

ソリッドビジョンと呼ばれるシステムにより、カードのモンスターが立体的に現れるのだ。

「そして『切り込み隊長』の効果発動！ このカードが召喚に成功した時、手札からレベル4以下のモンスターを特殊召喚することが出来る

！」

『切り込み隊長』 ATK／1200 DFE／400

遊戯王というゲームに置いて、モンスターの召喚は1ターンに1度まで。しかしモンスター・魔法・罫の効果によって、様々な例外が存在するのだ。

「2体目の『切り込み隊長』を召喚！ このカードの2つ目の効果により、君はこのカード以外の戦士族モンスターを攻撃対象に出来ない！」

2体の『切り込み隊長』が互いの効果で互いを守り合う”切り込みロック”と呼ばれるコンボに会場が少し騒つく。1ターン目からあんなコンボをされてはいきなり手の出しようがないと、紅也への憐れみも混ざっていた。

「更に装備魔法『団結の力』を2枚発動！ 『切り込み隊長』たちの攻撃力をアップさせる！」

『団結の力』。装備しているモンスターの攻撃力・守備力を、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターの数×800ポイントアップさせる効果を持つ装備魔法だ。

これにより2体の『切り込み隊長』たちの攻撃力は1600ポイントアップ。元々の攻撃力と合わせて2800となった。

『切り込み隊長』 ATK／1200↓ATK／2800

『切り込み隊長』 ATK／1200↓ATK／2800

低レベルモンスターとは思えない高い攻撃力、しかもそれが2体である。勝ち負けで試験の結果が決まる訳ではないが、眺めてる者達は大抵が既に紅也の勝ちが薄いだらうと結論付けた。

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

ここで試験官のターンが終了。手札を十分に活用し、万全とも言える盤面を整えた。

更に伏せられたリバーズカードは、相手の攻撃宣言時に相手の攻撃表示モンスターを全て破壊する『聖なるバリアミラーフォース』。もしもの時でも抜かりはなかった。

「……ドロー」



試験官とは打って変わって静かにドロローする紅也。デツキから一枚手札に加え、どう展開していこうか思考し——表情を歪ませた。

(えええええええ)

彼のこの反応を普通に見れば手札事故、何もすることが出来ないのだと思われるだろう。しかし実際のところ真逆であり、余りにも出来過ぎていた。

この方法で勝てば間違いなく目立つ。断言しても良い程に。だが、この方法以外であの盤面を相手に出来ることもない。紅也は胃が痛くなった。

(そもそもコイツ出しても目立つよなあ。嫌だなあ、やめようかなあ) 唸りながら考えを巡らせる紅也。やはり打つ手がないのかと周りに思われ始めた次の瞬間。

『——グルウオツ』

背後から強烈なプレッシャーが放たれる。対峙する試験官、観客席から見ていた者達、その全ての存在がゾクリと背筋に恐怖を感じた。

内気そうな一人の男に何を、そう思うにも関わらず、確かなプレッシャーは放たれ続けている。

そして今まで固まっていた紅也が動き始める。ぎこちなさなど何処かへ消えた滑らかな動きでカードを操り出したのだ。物凄い冷や汗をかきながら。

「……魔法カード『古のルール』を発動。手札からレベル5以上の通常モンスター1体等特殊召喚します」

発動されたのは決闘王・武藤遊戯も使用した魔法カード。効果により手札から高レベルのモンスターを特殊召喚出来る。

放たれるプレッシャーもあり、どんなモンスターが出てくるのかと会場中の視線を独占している。

地獄のような状況で内心泣きながら、紅也は一枚のカードをデュエルディスクにセットした。紅也に取って現状、いや、二度目の人生で最も特別なカード。

海馬瀬人の最強『青眼の白龍』と並び称される伝説の竜。

青き龍は勝利をもたらす。しかし赤き竜がもたらすのは勝利にあらず、可能性なり。

戦う勇氣など微塵も無い男は——赤き竜を降臨させた。

「——『真紅眼の黒竜』」

レッドアイズ・ブラックドラゴン

その瞬間、会場の時が停止する。

僅かに聞こえたのは、余りの美しさに息を呑む音のみ。

1匹の竜は、完全にこの空間を支配した。

『真紅眼の黒竜』 ATK/2400 DFE/2000

(……………出しちゃった)

肩を落とす紅也とは裏腹に、満足気な表情を浮かべる黒竜。ソリツドビジョンである割に表情は豊かである。

デュエルキング

決闘王・武藤遊戯の生涯の友、城之内克也のエースモンスターが

『真紅眼の黒竜』である。

この世界では超の付くレアカードであり、手に入れようとして全財産が消えた者も居る。

紅也が愛し、紅也を愛した結果、彼をこの世界に転生させた張本人。

いや、張本竜。

『……………やらないと駄目かな?』

言葉に出さず質問する紅也。意識がリンクしているため出来る芸当だ。それに対する黒竜の返答は軽い領き。翻訳すると、全力出さないと焼く、ということになる(紅也の翻訳)。

少しの時間が空き、会場の停止が解かれ始める。徐々に高まり出す声に胃痛を深めながら、紅也は意を決して勝負を終わらせに行く。

「……………勝たせてもらいます」

「なに?」

試験官にのみ聞こえる音量で告げられた宣言。この盤面を問題としない発言に思わず声が溢れる。

「魔法カード——『黒炎弾』を発動」

黒竜の口から巨大な火球が放たれ、試験官を業火に包んだ。

「うわああああアツ!!」

試験官 LP4000↓LP1600

『黒炎弾』

このカードを発動するターン、『真紅眼の黒竜』は攻撃できない。自分のモンスターゾーンの『真紅眼の黒竜』1体を対象として発動できる。その『真紅眼の黒竜』の元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。」

この効果によって2400ポイントのダメージを受けた試験官は、ライフポイントを大幅に削られた。

効果ダメージ。所謂バウンドダメージとして最高峰のダメージを叩き出す『黒炎弾』を喰らったのだから、当然の結果ではある。

「——くっ! 『真紅眼の黒竜』だけでなく『黒炎弾』までとは! だがまだ私のライフは残っているぞ!」

そんな試験官の訴えは、紅也の一言によって吹き飛ばされる。

「……………2枚目あります」

「なにいいいいイイツ!」

再び口を開く黒竜。灼熱のエネルギーを溜めて火球を生成。狙いを定め、勢いよく打ち出した。

試験官 LP1600↓LP0

あまりにも呆気ない決着、紅也は勝利した。

そして二発も『黒炎弾』を受けた試験官は、ソリッドビジョンであるにも関わらず気絶。担架に乗せられて運ばれて行った。

(……………やり過ぎだろ)

『グルウオ』

デュエルが終わり姿を消し始める黒竜。恨みがましく言っではみたまもの、当の本人は満足気で消えていった。

「……………ごめんなさい」

試験官が運ばれた方向へ向き、謝罪する紅也。

自身に向けられていた火球という名の脅しを代わりに喰らわせたこと、後悔はせずとも深く謝罪した。

そんな紅也を観客席から見つめる女性が一人。

(真紅眼の黒竜。兄さんと……同じ)

波乱の入学試験は終了し、頑張り時の受験期も終了した。後は合格発表を待っただけだ。

こうして——転生者、竜伊紅也の物語は再び幕を開けた。

真紅の眼をした、黒竜と共に。

## く 黒炎弾の人く

無事にデュエルアカデミア合格となった紅也。

やり過ぎで不合格という不安もあったが、杞憂に終わってなによりだった。

デュエルアカデミアまで巨大ヘリでの空の旅を満喫し、念願のアカデミアへ到着した合格者達。受験を乗り越えたからか全員表情は緩く、雰囲気は朗らかであった。これから始まる学園生活に期待を膨らませているということもあるだろう。

「……………」

しかし、黒竜に愛されし男、竜伊紅也の表情は優れない。

乗り物酔いなどならまだ良かった。薬を飲めば治るのだから。彼の置かれている状況は薬を飲んでも治らない。

「アイツだぞ」

「レッドアイズ使った人か」

「暗い人だわ」

遠巻きに見られながらヒソヒソと小声で話題にされるとするのは、中々に気分が良くない。ヘリの機内でも同じようなことがあったのだが、上陸してより多くの者に顔を見られてから頻度が増えたのだ。

だが今のようなヒソヒソであればまだマシだ。紅也が特に嫌なのは別にある。

「アイツだぞ…………『黒炎弾』の人」

「『黒炎弾』使った人か、二発も」

「『黒炎弾』の人だわ」

グサグサと刺さる言葉を受けながら、紅也はアカデミアへと入った。

(…………誰が『黒炎弾』の人だ)

入学初日、不名誉なあだ名が付いた。

????????????????????????????????

《遊戯王デュエルモンスターズGX》。

アニメ遊戯王第二作品目として放送され、初代からの人気を落とすことなく遊戯王の人気を更に高めたファンの多い作品である。

この世界がGXの世界であることは紅也も分かっていた。そこまですで熱心に見ていた訳では無いが、少々の知識ぐらひは持っていたからだ。デュエルアカデミアと言えばGXというのも分かりやすいポイントではあった。

デュエルを愛す熱血少年、遊城十代ゆうきじゅうだいを主人公とするGX。

デュエルモンスターズの精霊を視ることが出来る十代が様々な経験を経て、子供から大人に成長していく物語だ。

(アニメならGXが一番好きだったかなあ)

空を見上げながらデュエルディスクを起動する紅也。

入学式を終え、島を見て回る自由時間中に懐き度MAXの背後霊黒竜と歩いていた、そんな時だ。

——主人公しゅじんこうに捕とらまった。

「デュエルしようぜっ!」

開口一番これである。流星は歴代主人公でトップクラスのデュエルバカだ。

そしてセールスマンもビックリな押し強さで押されまくった結果、内気な紅也は上陸して三時間でデュエルディスクを構えることになったのだ。

(……本当に十代だ)

目の前にアニメの主人公。熱心なファンであつたという訳でもなかったが、いざ体験すると込み上げてくる嬉しさはある。見ただけで元気に満ちている若さは、精神年齢二十五歳の男には眩しい。

「受けてくれてありがとな! 俺、遊城十代! お前の名前は?」

「……竜伊紅也。よろしく」

「紅也か！ よろしくなっ！」

「僕は丸藤翔まゐらふじしやうつス。よろしく紅也くん」

十代の後ろに立つ水色の髪をした気弱そうな男。原作通り、丸藤翔は十代の弟分に落ち着いたようだ。軽くお辞儀してから、十代へ向き直る。

「翔に聞いたぜ！ あのレッドアイズを使うんだろ？ 俺が会場行った時にはもう紅也の試験終わってたからさ、翔に話を聞いてからずっとデュエルしたかったんだ！」

目をキラキラさせながら言葉を放つ十代。試験が紅也より後に行われる予定で、更に遅刻してきた十代は紅也のデュエルを観られなかったようだ。

本当に楽しそうな様子を見て、デュエルを引き受けて良かったと紅也は少し思った。

「——じゃあ、いくぜ！」

「……お、おう」

「デュエルッ！」

「……デュエル」

十代 LP4000

紅也 LP4000

ヘナチヨコの照れにより開始宣言の音量は異なったものの、デュエルが開始された。先攻は十代、勢いよくデッキからカードを引いた。

「俺のターン！ ドロー！」

十代のデッキはE・HEROエレメンタルヒーローを中心とし、それらを素材とする融合モンスターで戦うスタイルだ。

「いくぜ！ 魔法カード『融合』！ 手札の『E・HEROフェザーマン』と『E・HEROバーストレディ』を融合し、『E・HEROフレイム・ウイングマン』を召喚だ！」

『E・HEROフレイム・ウイングマン』ATK/2100 DFE  
/1200

そして十代の最も恐るべき特徴。それはドローの強さ、つまり引き

の強さである。初手の手札に『融合』と融合素材が揃っていることなど普通、驚く程のことですらないのだ。

どんなに苦しい状況でも一回のドロローで全てをひっくり返す。主人公補正と呼ぶにはあまりにも凶悪だ。

「へへっ、カツコいいだろ？ マイフェイバリットカードだぜ」

「ああ、カツコいいな」

「おっ、分かってるじゃん！ まあ先攻は攻撃出来ないから、カードを2枚伏せてターンエンドだ」

攻撃出来ない状況でエース級モンスターを出しても対策されやすい。そのため先攻は派手に動かず盤面を整えるもののだが、十代にはそんなことお構いなしのようだ。

「お、俺のターン、ドロロー」

十代という主人公のオーラに当てられたのか、少し声が大きくなる紅也。ドロローを含めた6枚の手札を確認。どうやら試験の時のようなことにはならなそうだと一安心。

『マスクド・ドラゴン仮面竜』を召喚」

『仮面竜』ATK/1400 DFE/1100

全身が硬そうな筋肉に包まれたドラゴンがフィールドに現れる。戦闘破壊された時にデッキから新たなドラゴンを呼ぶことが出来る優秀なリクルーターだ。

「おおっ！ ドラゴンか！ カツコいいぜっ！」

今使用しているのは、この世界で買い揃えたカードに前世のデッキから抜いたレッドアイズを入れて構築したデッキだ。ちなみにレッドアイズは初期イラストであり、レアリティはレリーフだ（自慢）。

そして時代からか、通常モンスターの割合が多めになっている。

「魔法カード『おろかな埋葬』を発動。効果でデッキからモンスター1体を墓地に送る。『真紅眼の黒竜』を選択」

「ええ!? レッドアイズを墓地に送るのか!？」

十代の反応に答えようかと思ったが、既に頭は精一杯であった。まだまだデュエルには慣れないようだ。

「魔法カード『死者蘇生』発動。墓地から『真紅眼の黒竜』を特殊召喚」



『真紅眼の黒竜』 ATK/2400 DFE/2000

墓地から蘇るのは不動のエース。真紅の瞳を輝かせ、対峙するヒーローへ咆哮した。

「おおっ！ すげえ！ レッドアイズだ!!」

拳を握りながら子供のようにはしゃぐ十代。大切なカードの登場にそこまで喜ばれると、紅也も素直に嬉しかった。だからこそ、十代のためにも真剣勝負に手は抜かないという思いが湧き上がる。

「魔法カード『スタンピング・クラッシュ』。自分フィールド上にドラゴン族モンスターが表側表示で存在する場合に発動。フィールド上の魔法・罠カード1枚を破壊し、破壊したカードのコントローラーへ500ポイントのダメージを与える」

十代の場に伏せられている1枚のリバースカードを竜の足で踏み潰し、破壊した。

『ヒーローシグナル』が……うわあっ!」

十代 LP4000↓LP3500

モンスターが破壊された時にデッキからE・HEROを呼ぶことが出来る優秀な罠を破壊し、『スタンピング・クラッシュ』の追加効果で十代のライフが削られる。

「続けて魔法発動だ、『禁じられた聖槍』。効果により『フレイム・ウィングマン』の攻撃力を800ポイントダウンさせる」

「うおっ！ マジかよー!」

『E・HEROフレイム・ウィングマン』 ATK/2100↓ATK/1300

「バトルフェイズだ。『仮面竜』で『フレイム・ウィングマン』を攻撃」「させないぜ！ 罠発動!」「ヒーローバリア」ツ！ E・HEROへの攻撃を一度だけ無効にする!」

攻撃力を低下させることで僅かにこちらが上回った一撃は、伏せられていた罠によって防がれた。しかし、紅也にはまだ攻撃権を残しているエースが居る。

(……………楽しい)

この世界に来て初めて湧き上がる感情が徐々に紅也を昂らせる。

これも主人公の成せる技なのだろうか。柄にもなく”ワクワク”という言葉を使いたい気分にならなっている。

「次の攻撃は防げるか？」

「へへっ、どんとこい!!」

闘志が滾る瞳を煌めかせる十代。そんな彼にやはり感化されてしまふ。

「……いくぞ。『真紅眼の黒竜』で『フレイム・ウイングマン』を攻撃」  
やれるだけやろう、そんな覚悟と共にした攻撃宣言——だったのだが。

「……あれ？」

名指しで指定したにも関わらず、黒竜はピクリとも動かない。

「攻撃」

声が小さかったかと思い、言い直す。しかし、黒竜は動かない。

「こ、攻撃ー！」

出来る限り張り上げた一声でも、黒竜は動かない。空を流れる雲でも眺めるように静かだ。

まさか遊戯王をやっていて、モンスターが言うことを聞かない状態になるとは思わなかった。同じモンスターでもポケットに入る感じじゃなく、カードから出てくるモンスターなのに。

(なあにこれえ)

思わず変な口調になる紅也。十代も頭に？ を浮かべている。このままではデュエルにならない。紅也はポケーつとしている黒竜へ慌てて声を掛けた。

『こ、攻撃って言うてるだろ！ レッドアイズさんッ!?!』

届いている筈の声にすら反応を見せないレッドアイズさん。完全なる無視である。まるでそれぐらい自分で分かれと言わんばかりの態度だ。

(……考えろお、なんでだ?)

真剣勝負うんぬんの覚悟を決めた瞬間に、エースモンスターに出鼻を挫かれるデュエリストが居るらしい。

そんな情けない男は脳みそをフル回転中、解決策を導き出そうとし

た。

(なんか気に入らないんだろうな。じゃなきゃコイツは俺を困らせることなんてしない)

精霊としての付き合いは短いが、嫌われている訳でないことは分かっている。であれば原因は他にある。何が気に入らないのか、紅也の頭に一つの考えが浮かんだ。

(……いや、まさかなあ)

しかし思いついた本人すらアホらしいと思う考え。十中八九違うとは思うが物は試し、紅也は僅かばかりの希望に縋りついた。

「――黒炎弾!!」

『グルウオオオオオオッ!』

先程までの緩さが一瞬で消え、黒竜として恥じない業火球を『フレイム・ウイングマン』へ発射。力の差を見せつける一撃で粉碎した。「うわああアアッ!!」

十代 LP3500↓LP2400

(……えええええ)

技名を叫ばないから負ける。とんでもなくダサい負け筋からなんとか逃れた紅也。自分のエースモンスターが思ったより面倒臭いと、今回のデュエルで分かった。

「気合の入った一発貫つちまったぜ!」

「……お、おう。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

十代の賞賛に苦笑いで応える紅也。残り1枚となっていた手札を伏せ、自身のターンを終了した。

(ま、まあ。なんとかあったな)

ハプニングが起こりそうではあったが、結果だけ見れば上々。

十代の方は綺麗さっぱり残っておらず、手札も次のドロワーを含めても2枚。対してこちらにはドラゴンが2体。保険のリバースカードも存在する。手札こそ使い切ってしまったが紅也が優勢で十代は劣勢、誰がどう見てもそう思うだろう。

(……ひっくり返されるのか?)

ここまで優勢な立場でありながら、紅也の頭からそんな疑念は消え

ない。

なにせ相手はそこらのモブキャラではない、主人公・遊城十代なのだ。どんな絶望的状况でも諦めず自らのデッキを信じて奇跡を起こしてきた男を相手に、紅也は逆転されるかもしれないという焦りと、逆転する様を見せてくれという相反する思いを抱えた。

「紅也！ お前最高に強いな！ 燃えてきたぜ！」

「逆転……するつもりか？ この状況から？」

そんな紅也の問いに、十代は間を置かずに即答した。

「——当たり前だろ！」

そんな言葉が紅也に衝撃を与える。

これが物語の時を進める者。誰よりも勇敢に戦い、世界の危機すら救ってしまふ主人公だ。

「……じゃあ、見せてくれ」

「おう！ 見せてやる！ 俺のドロローは奇跡を呼ぶぜ！」

闘志を更に引き上げ、己のデッキに指を掛ける。そのまま勢いよく、主人公は運命の1枚をドロローした。

「俺のターン！ ドロローッ！ よっしや！ いくぜ!!」

手札は2枚。手札の枚数Ⅱ出来ること、遊戯王に置いて手札はなによりも重要なアドバンテージと考える者も少なくない。たった一度のドロローで奇跡を呼び込んだ男は、逆転に向けて動き出した。

「魔法カード『強欲な壺』！ 更に2枚ドロローする！」

手始めに『強欲な壺』。これも十代の引きの強さによって成せる技だ。

引いた2枚のカードを見て、十代はニヤリと口端を上げる。

「『E・HEROバブルマン』を守備表示で召喚！ そして効果発動！ このカードが召喚に成功した時、自分フィールド上に他のカードが無い時、デッキからカードを2枚ドロロー出来る！」

「……おお〜」

アニメ効果の強欲な『バブルマン』。実際に目の当たりにするとイ

ンチキ効果も大概にしろ案件である。

「きたきたっ！ 俺は魔法カード『融合』発動！ 手札の『E・HERROスパークマン』と『E・HERROエツジマン』を融合し、『E・HEROプラズマヴァイスマン』を召喚だ!!」

『E・HEROプラズマヴァイスマン』ATK／ 2600 DFE  
／2300

黄色のボディに圧倒的な巨体。身体からはバチバチと電撃が弾けており、まさしく雷の巨人である。

「……すげえ〜」

攻撃力自体がレッドアイズを上回っているが、『プラズマヴァイスマン』の真価は秘められた効果にある。

『プラズマヴァイスマン』効果発動！ 手札一枚を墓地に送ることで、相手フィールド上に攻撃表示で存在するモンスター1体を選択して破壊する！ 対象は『真紅眼の黒竜』だ！」

黄金の雷に焼かれ、レッドアイズは破壊された。

「——ッ！ ……レッドアイズ」

「まだまだいくぜ！ 『プラズマヴァイスマン』で『仮面竜』を攻撃！」

紅也 LP4000↓LP2800

エースを破壊され、残ったモンスターも掃討された。圧倒的優勢であつた盤面は1ターンで見事にひっくり返され、紅也の場に存在していたドラゴンは1体も残されていない危機的状況だ。

「よっしやあつ！ やったぜ！」

「……すげえ〜」

無邪気な笑顔でピースしている十代を、呆然と眺める紅也。中々上手い立ち回りが出来たと自負していたのだが、それを1ターンで覆されてしまった、この事実が紅也を少しの時間硬直させた。

「これでターンエンドだ！」

「……あ、罨を発動。『レッドアイズ・スピリッツ』」

『レッドアイズ・スピリッツ』

自分の墓地の『レッドアイズ』モンスター1体を対象として発動できる。そのモンスターを特殊召喚する」

アカデミアの生徒がこのカードを見れば、蘇生させられるモンスターに条件の無い『リビングデッドの呼び声』の方が良いということを言うだろう。

しかしこのカードが良いのだ、汎用性よりもテーマというロマンが勝るのだから。

「やるな！ レッドアイズが戻ってきたぜ！ ワクワクしてきた！」  
ターンエンドさせる前に墓地へと沈んだレッドアイズを無事に蘇生。ガラ空きのフィールドは回避したが、手札は0だ。次のドローで全てが決まる大一番、何を引けばこの状況から逆転できるのかすら分かってはいないのだが。

(どうすればいいんだよ。てか普通にプレミしたし)

場にレッドアイズが居るとはいえ、他に使えるカードは何もない。綺麗に逆転された動揺から『仮面竜』のリクルート効果を発動することすら忘れていたので、2体目のモンスターを呼べなかった痛恨のプレイングミスも響いている。

そして何より今のひっくり返しを見せられてしまえば、次のターンで決めなければ負けるという思いも湧き上がってくる。

(『プラズマヴァイスマン』は戦闘破壊出来ない)

攻撃力が負けているため、自滅行為に他ならない。

(レッドアイズで『バブルマン』を破壊?)

その場合次のターンでレッドアイズが効果破壊され、モンスターでも出されればダブルダイレクトアタックで敗北。しかも『バブルマン』は攻撃表示ではなく守備表示、十代のライフにはダメージすら与えられない。

(……無)

『グルウオ』

(——理じゃないです)

諦めモードを1秒すら許さない黒竜によって、紅也のネガティブな思考は焼き尽くされた。どうせ次のドローで決まるのだ。ヤケクソである。

(……ん？ 待てよ?)

ここでふと気づく。対象となったのは十代に残されたライフポイントだ。

(――2400か)

デッキを信じれば答えてくれる。真のデュエリストは必要なカードを己の力で呼び込む。時代に名を残す者達はそうして激闘を勝ち抜いてきたのだ。

作ったばかりで愛着もそこそこではあるが、今使用しているデッキがこの時代に置けるメインデッキだ。

(よ、よし。信じるぞ)

思い描くは1枚のカード。モンスターでもなければ罫でもない。紅也自身が信じる最強のバーンカードだ。

「……いくぞ、遊城」

「おう！ 全力で来いっ！」

自身の前に居る黒竜とデッキを信じ、紅也は腕を振り切ってドロウした。

その結果――デス<sup>神</sup>ティニード<sup>引</sup>ロー<sup>き</sup>である。

「……悪いな。俺の勝ちだ」

「ツ!? 不味い！ あれが来るよ！ アニキツ!!」

似合わない勝利宣言をする紅也。そんな彼の言葉に反応したのはデュエルを観戦していた丸藤翔であった。何故なら十代とは違い、翔は紅也の試験デュエルを目撃しているのだから。引いたばかりのカードを渋い表情で発動。

「魔法カード――『黒炎弾』」

紅也は不名誉なあだ名を、甘んじて受け入れた。

????????????????????????????

「があー！ 負けたあ！」

(……危ねえ)

デュエルが終了。結果自体は紅也の勝利であったが、その内容は実にギリギリなものだった。

(……『レッドアイズ・スピリッツ』伏せてなかったら負けてた)

運命力を発揮したドロローもそうだが、そもそもレッドアイズが場に居てくれなければ負けていた。

更に十代に訊ね、次のドロローカードを教えてもらったところフィールドか墓地で融合召喚を行える『ミラクルフュージョン』。やはりあのターンで決めていなければ負けていた可能性が高い。ギリギリのギリだ。

「やっぱレッドアイズはカッコいいぜ！ 次は負けないからな！ 紅也！」

「あ、ああ。次もいい勝負しよう、遊城」

「十代でいいぜ！ もう友達だろ！」

自身とは別次元のコミュカに感動しながら、紅也は照れを捨てて返答する。

「じゃ、じゃあ十代。よろしくな」

「おう！ よろしく！」

「僕も翔でお願いするっス！ 紅也くん」

「よ、よろしく……翔」

十代と翔は赤色の制服、つまり《オシリスレッド》の生徒。

紅也の着ている黄色の制服が所属する《ライイエロー》とは別の寮なので、これから仲良くしようという挨拶を終えると別方向へと歩き出した。

友達として十代と翔とメアドを交換した。空白であった自身の端末に新しく連絡先が増えたことは素直に嬉しかった。

『……頼むって。あんま焦らさないでくれよ』

『……………』

紅也はデッキから取り出した1枚のカードを見つめながら、諭すように優しく言葉を放つ。技名を叫ぶかどうかで追い詰められるデュ



エリストなど、世界中探してもそうそう見つからないだろう。

紅也の言葉にも特に反応を見せないツンデレ黒竜。身体が薄く精霊化しており、隣を低空飛行しながらついてきている。この状態だと他の人間にはその姿を視る事は出来ない。

例外として十代は視ることが出来るが、先程は精霊化しなかったの  
でこの黒竜が精霊であることを彼はまだ知らない。

1人と1匹で歩き、順調に《ラーイエロー》の寮付近まで来た時であつた。

「——竜伊、紅也くん？」

不意に後ろから声を掛けられる。振り返ってみるとそこには、青い制服で身を包む品のある女性が立っていた。

「……そうですけど。……あつ」

大人っぽい雰囲気溢れているため歳上かと思ひ敬語。まあ初対面で敬語以外を使える程太い神経はしていないのだが。

しっかりと視線を向けてから、声を掛けてきた女性が誰なのかを理解した。アニメGXにてヒロインとも呼べる立ち位置だった女性だ。

「私は天上院明日香。貴方と同じ高等部一年よ」

紅也が明日香の登場に驚きを隠せないでいると、神妙な表情をした明日香が口を開く。

「……貴方の試験デュエルを見たの。レッドアイズを使っていたわよね」

「え？ あ……そ、そうですけど」

美人との会話に免疫が無いこの男。ぎこちなさはありながらも、なんとか言葉を返す。

「少し興味があつたの。ごめんなさい、急に声を掛けて」

これ程の美人にそのようなことを言われれば、大抵の男は嬉しいだろう。もちろん紅也もその内の1人だ。

内心舞い上がっていると、明日香は一言謝罪してから背を向けた。

「またね。今度は私とデュエルして欲しいわ」

手を振りながらそんな言葉を残し、明日香は去って行った。

「……なんだったんだ？」

原作キャラ達との邂逅を果たした入学初日。  
黒竜と共に過ごす学園生活が、始まった。

く譲れないものく

とある内気な少年は、一つのカードゲームを知る。

親に頼み、パックを買ってもらった。

初めて手にしたカードは鈍く光を放っていた。

少年はそのカードに、心を奪われた。

学校終わりに家で遊ぶ、一緒にカードを買いに行く。

少年には、そんな友達が多く出来た。

幸福を与えてくれたカードを、少年は一番の宝とした。

??  
デュエルアカデミアでの生活が幕を上げ、期待に胸を膨らませる新入生たち。その内の一人である紅也も無事《ライイエロー》に入寮を済ませ、学園の散策をして一日を終えようとした。

現在の時刻はもうすぐ日付が変わる程の深夜。明日から本格的に授業が開始されるため多くの新入生は早めの就寝を心がけるだろうが、紅也はまだ就寝するつもりがない。行かなければならない場所があるからだ。

「……」  
デュエルディスクを装着していることから、目的は一目瞭然。表情はいつも通り変わらないが、僅かばかりに怒りの感情が滲んでいる。

懐から前世で使用していたデッキを取り出し、少し迷うような態度を見せた後——一枚のカードを手に取り、今のデッキへと投入した  
「……行くか」

そうして部屋を後にする紅也。  
同じく怒りの感情を昂らせている、黒竜と共に。

デュエルアカデミアには当然の如く、デュエルをするためのフィールドが多く存在している。授業用のものから寮ごとに与えられた専用のフィールドなども完備されているのだ。

紅也が足を運んだのはデュエルアカデミアの中でもエリートのみが所属することの出来る《オベリスクブルー》専用のデュエルフィールド。エリートたちが使用するだけあり、最新設備のオンパレードである。

到着した紅也を、男の声が出迎えた。

「竜伊紅也、逃げずに来たことを褒めてやる」

「……それはどうも」

セットするのが難しそうな髪型と自信に満ちている高圧的な態度。青色の制服に身を包む男は、腕を組みながら上から目線の一言を放った。

この男、まんじょうめじゅん万丈目準。デュエルアカデミア中等部を首席で卒業しており、エリート集団の中でも抜きん出た才能の持ち主だ。

世界にも名が轟く栄誉ある万丈目グループの三男でもあり、生まれながらのエリートでもある。

「覚悟は出来ているようだな」

「……ああ」

不敵な笑みを浮かべる万丈目に対して、紅也の表情は静かだ。挑発とも取れる言葉を流し、デュエルフィールドへと上がった。

そもそも事の発端は昼間にまで遡る。十代、翔の二人と共に学園内の施設を巡っていた時、万丈目とその取り巻きたちに遭遇した。

その際に試験でレツドアイズを使った『黒炎弾』の人であることに

気付かれ、因縁を付けられる。

『やあ、竜伊紅也くん。午前0時デュエルフィールドにて待つ。互いのベストカードを賭けたアンティルールで勝負だ』

夕食を終えて部屋でまったりしていた時、紅也の端末に送られて来たビデオメールの内容である。紅也の性格的に無視する案件なのだが、今回の件を無視する訳にはいかなかった。

内容に付け足された万丈目からの一言が、彼を普通に怒らせたのだ。

『お前にレッドアイズは宝の持ち腐れだ、代わりに俺が完璧に使いこなしてやるよ』

紅也にとつて最も大切であると言っても過言ではないレッドアイズ。それに対してここまで言われたのだ。引き下がるという選択肢は紅也になかった。

「ルールは覚えているな。ベストカードを賭けたアンティルールだ。まあ、お前はレッドアイズだろう」

「……お前は何を賭けるんだ?」

「ふっ、必要ないと思うがな。まあいい、お前が決めると良いさ。俺に勝てたのなら」

自分の勝利を少しも疑っていない万丈目。紅也は提示された案に対して、デュエルディスクを起動させながら返答した。

「カードは要らない」

「なんだと?」

「代わりに俺が勝ったら——頭を下げて謝罪しろ」

「……舐めた口を叩きやがって。後悔するんだな、あのドロップアウトボーイを潰す前にお前を潰してやろう」

眉間に皺を寄せながら、同じくデュエルディスクを起動する万丈目。

互いの準備が完了し、デュエルが開始されようとしていた時、新たにこのフィールドへ一人の女性が現れた。

「何やってるの!」

現れたのは天上院明日香。使用時間外にデュエルフィールドが動

いていることを不審に思いやって来たようだ。彼女自身もこんな時間に出歩いているので、怪しきで言えば同じなのだが。

「やあ、天上院くん。生意気なルーキーに現実の厳しさを教えてやろうと思ってるね」

「アンテイルールって聞こえたけど。校則で禁止されているのは知ってるわよね?」

ド正論を言われ口を閉じる万丈目。このままデュエルもお流れになりそうな雰囲気だが、それを振り払ったのは紅也であった。

「天上院……さん」

「竜伊くん。貴方もこんなデュエル受けちゃ駄目よ」

「——そうはいかない」

「ッ!!」

やめさせようとした明日香に、強い口調で返す紅也。昨日の大人しそうな印象とは違う態度に、明日香は思わずビクツと肩を震わせる。

「悪いけど、見逃してくれ。……始めるぞ、万丈目」

「”さん”を付ける! 後悔するなよ竜伊ッ!」

激昂する万丈目と静かに怒りを滾らせる紅也。

そんな様子を見て止めることを諦めた明日香。無理ならばと観戦することに決めたようだ。そうして二人の男によるアンティデュエルが開始された。

「デュエルッ!」

「デュエル」

万丈目 LP4000

紅也 LP4000

「俺の先攻! ドロー!」 『ヘルソルジャー地獄戦士』を攻撃表示で召喚!」

『地獄戦士』 ATK /1200 DEF /1400

現れたのは凶暴な顔をした屈強な戦士。攻撃力は低いが厄介な能力が備わっているモンスターだ。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド!」

派手には動かない静かな立ち上がり。十代とは違うデュエルスタイルであることが分かる。

「……ドロー」

カードを引いた紅也に熱い意志が向けられる。背中を焼くように熱いそれは、背後に浮かぶ激おこ黒竜が放っているものだった。  
(分かってるよ)

早く自分を出せと訴えてくる相棒。自分よりも怒っている存在に苦笑いしながら、要望に応えるため動く。

「魔法カード『召喚師のスキル』を発動。デッキからレベル5以上の通常モンスター1体を手札に加える。『真紅眼の黒竜』を選択」

「ふん！ このデュエルが最後だ。精々活躍させてやるんだな」

「更に魔法カード『古のルール』を発動……来い、レッドアイズ」

『グルオオオオオツ!!』

『真紅眼の黒竜』 ATK/2400 DFE/2000

手札に加えられたのも束の間、すぐ様フィールドに飛び出して来たレッドアイズ。激しい咆哮をフィールドに響かせた。

十代とデュエルしていた時とは違い、燃える炎のような真紅の瞳は、より深い光で輝いている。

「装備魔法『団結の力』。レッドアイズに装備する」

『団結の力』

装備モンスターの攻撃力・守備力は、自分フィールドの表側表示モンスターの数×800アップする」

現在の紅也フィールドにはレッドアイズのみのため、攻撃力は800ポイントアップした。

『真紅眼の黒竜』 ATK/2400↓ATK/3200

「レッドアイズで『地獄戦士』を攻撃——黒炎弾」

紅也の宣言と同時に圧倒的な熱量の火球が邪魔されることもなく万丈目を襲う。ライフポイントの半分を奪う一撃は激しい衝撃となった。

「うわあああつ!!」

万丈目 LP4000↓LP2000

大きなダメージを喰らったが、地獄の戦士はただでは死なない。

『地獄戦士』の効果発動！ 戦闘によって破壊され墓地へ送られた

時、自分の受けた戦闘ダメージと同じ数値のダメージを相手に与える！」

紅也 LP4000↓LP2000

死に際の足掻きによって同じくライフが半分となる紅也。しかし焦った様子は見えない。

「更に罨発動！ 『ダメージ・コンデンサー』！ 手札を1枚墓地に送り、俺が受けた戦闘ダメージ以下の攻撃力を持つモンスター1体をデッキから攻撃表示で特殊召喚する！ 現れる！ 『地獄將軍・メフェイス』！」

『地獄將軍・メフェイス』 ATK/1800 DFE/1700

生贄が必要な☆5の上級モンスターではあるが、2000ダメージを受けた時の『ダメージ・コンデンサー』の効果対象であるため、デッキからフィールドへと降り立った。

攻撃力の低い『地獄戦士』を攻撃表示で出していたのは効果を発動させるためだけでなく、次の一手のための布石でもあったようだ。デュエルアカデミア中等部主席は伊達ではない。

「迂闊な攻撃だったな。やはりお前にレッドアイズは相応しくない！」

「カードを2枚伏せて、ターンエンド。早くしろ……お前のターンだ」  
万丈目の挑発にも大した反応を見せない紅也。冷めた態度でデュエルの進行を促した。

「チツ……俺のターン！ ドロー！ フツフツ……見せてやろう！  
これが落ちこぼれとは違うエリートの力だ！ 装備魔法『デーモンの斧』によって1000ポイント！ そして『悪魔のくちづけ』で700ポイント！ 合わせて『メフェイス』の攻撃力を1700ポイントアップ！」

『地獄將軍・メフェイス』 ATK/1800↓ATK/3500

ダブル装備魔法で大幅に攻撃力を上昇させたことで、レッドアイズの攻撃力では到底敵わない差が出来てしまった。

『メフェイス』で『真紅眼の黒竜』を攻撃！ ヘルスラッシュュ！  
「罨発動、『ガード・ブロック』。戦闘によって発生したダメージを0に



して、デッキからカードを1枚ドロウする……ドロウ」

伏せていた罫によりダメージは受けず手札も増えたが、振り上げられた斧によってレッドアイズが一刀両断される。

「ふん、小癩な。まあいい、次の俺のターンでお前の負けだ」

『地獄將軍・メフィスト』には相手に戦闘ダメージを与えた時、相手の手札からランダムに1枚を墓地へ捨てさせる効果がある。それは防がれたが、有利なことに変わりはない。万丈目は満足気に笑った。

「ターンエンドだ」

「その前に罫発動、『レッドアイズ・スピリッツ』。『真紅眼の黒竜』を特殊召喚する」

『真紅眼の黒竜』 ATK/2400 DFE/2000

「無駄な足掻きだな。レッドアイズでは今の『メフィスト』は倒せん」

万丈目の言葉を聞き、確かにと納得する紅也。しかし、その問題は先程の『ガード・ブロック』によってドロウした1枚のカードによって解決することが出来てしまう。

「次の俺のターンでお前の負けだ、そう言ったな」

「……？」

復活したレッドアイズに視線を向けながら、呟くように言葉を放つ紅也。不審に思う万丈目へと視線を移し、紅也はハッキリと断言した。

「——次のターンで負けるのはお前の方だ」

「なにッ!？」

「俺のターン。ドロウ」

ドロウしたカードを確認もせず、デュエルを終わらせるため動く。そんな紅也に動揺しつつも、自身の勝ちを疑わない万丈目。

そもそも慎重な男である万丈目は紅也の試験デュエルから万全の対策を行なっている。その対策とは——『黒炎弾』に対してのものだ。  
(土壇場で『黒炎弾』を引いたか)

そうだとするならば、確かに敗北するのは自分だろう。しかし、万丈目は笑みを深める。『黒炎弾』の対策として投入したカードを罫として伏せているからだ。

（俺が伏せているのは『封魔の呪印』。手札にコストとなる魔法カードもある。お前が『黒炎弾』を発動した瞬間、お前の敗北は決まる！）  
『封魔の呪印』

手札から魔法カードを1枚捨てる。魔法カードの発動と効果を無効にし、それを破壊する。相手はこのデュエル中、この効果で破壊された魔法カード及び同名カードを発動する事ができない」

更に『封魔の呪印』は魔法カードの効果を無効にするだけでなく、無効にした魔法カードと同名カードをデュエル中に使用出来なくする追加効果を備えている。2枚目を引かれても問題はないのだ。

（レッドアイズは……貫った）

己の勝利を確信する万丈目。そんな彼の心情など知る訳もなく、紅也は1枚のカードを手にとった。次の瞬間、紅也以外の全員が驚愕することとなる。

「俺はレッドアイズを生贄に捧げる」

「——ッ!? なんだどっ!?」

万丈目だけではない、薄ら笑いを浮かべていた取り巻きも、黙って観戦していた明日香でさえも声を上げた。

「追い詰められて血迷ったか!」

「安心しろ、至って正気だ……そして手札からモンスター1体を特殊召喚する」

ここへ来る前にデッキへ投入したモンスター。前世で使用していたデッキに入っていたカードであり、この時代ではまだ存在しない未来のカードだ。だからこそ使うかどうか迷いもしたが、このデュエルはレッドアイズで叩き潰すと決めたので使うことにしたのだ。

消えていくレッドアイズを確認し、紅也はカードをデュエルディスプレイへとセットした。

「——『レッドアイズ・オルタナティブ・ブラックドラゴン真紅眼の亜黒竜』」

激しい黒炎が巻き上がり、1体の黒竜が姿を現す。より攻撃性を増した身体はレッドアイズよりも深い漆黒で覆われ、両の眼は禍々しさ

さえも感じる。

『真紅眼の亜黒竜』 ATK/2400 DFE/2000

「……な、なんだこのモンスターは」

『真紅眼の亜黒竜』は手札またはフィールドの”レッドアイズ”モンスター1体を生贄に捧げることによって特殊召喚することが出来る。そして魔法カード『サイクロン』を発動、『悪魔のくちづけ』を破壊する『地獄將軍・メフィスト』 ATK/3500↓ATK/2800

装備魔法が1枚減ったことで攻撃力が下がる。

「バカめ！ それでも『メフィスト』の方が攻撃力が上だ！ それに『デーモンの斧』ではなく『悪魔のくちづけ』を破壊するとは！ 所詮は《ラーイエロー》だな！」

万丈目の言葉に取り巻きたちも笑い声を上げる。『封魔の呪印』で『サイクロン』を無効化することも出来たが、どちらの装備魔法を破壊されても攻撃力の逆転は起こらない。それよりも警戒しなければならぬのは、やはり『黒炎弾』だ。レッドアイズを蘇生させる手段が無いとも限らないのだから。

明日香は取り巻きたちに冷めた目を向けるが、紅也の状況が悪いことも理解していた。

(……どうするつもり?)

心配そうに紅也を見つめる明日香。これはアンテイルール、いざとなれば自分が止めるつもりではあるが、それとこれとは別問題。

そんな彼女の心配など他所に、紅也は黒竜へと指示を飛ばした。

『真紅眼の亜黒竜』で『地獄將軍・メフィスト』を攻撃——オルタナティブ・フレア」

レッドアイズではないが進化系統なので、一生懸命技名を考えたのだ。そんな紅也に応えるように、オルタナティブは激しい黒炎を放射した。

「勝負を捨てたか！ 迎え討て！ 『メフィスト』ッ！」

紅也 LP2000↓1600

僅かな攻撃力の差で、オルタナティブは破壊される。これにより紅也のフィールドにモンスターはおらず、次の万丈目のターンで勝負が

決まる。この場に居る誰もがそう思った——そう、紅也以外は。

「この瞬間……『真紅眼の亜黒竜』の効果発動」

「何をしようと無駄だ！」

見たことのないモンスターには驚かされたが、既に破壊済み。大した効果でもないだろうと一蹴する万丈目。

「このカードが戦闘または相手の効果で破壊された場合、『真紅眼の亜黒竜』以外の自分の墓地に存在するレベル7以下の”レッドアイズ”モンスター1体を特殊召喚出来る——『真紅眼の黒竜』を召喚する」

『真紅眼の黒竜』 ATK/2400 DFE/2000

何度も現れるレッドアイズに対し、万丈目が吠える。

「くだい！ 例えお前の手札に『黒炎弾』があろうとも俺には効かん。無駄なことだと何度言わせる気だ！」

「……『黒炎弾』は使わないさ」

「なんだと？」

紅也の一言に目を細める万丈目。そんな彼にゆっくりと言葉を放つ紅也。

「レッドアイズをよく見てみる」

「……？ 何だと言うんだ……ッ!!」

促されるままにレッドアイズへ視線を向ける万丈目。何も変わらない姿に疑問を深めるが、ある一点の変化に気付くと、冷や汗を流しながら声を荒げた。

「こ、攻撃力——4800だとッ!?」

『真紅眼の黒竜』 ATK/4800 DFE/2000

対峙している黒竜は先程までとは別物。そう言える程に圧倒的な攻撃力を携えて復活を遂げていたのだ。

「どういうことだッ!!」

「『真紅眼の亜黒竜』の効果で『真紅眼の黒竜』を特殊召喚した時、元々の攻撃力は倍になる」

「……そ、そんな馬鹿な」

「バトルフェイズ中に特殊召喚されたモンスターには攻撃権がある。よってまだ、俺のバトルフェイズは終わっていない。更にその伏せカード、攻撃反応型じゃないだろ。流石に2000ポイントダメージを受けて『メフィスト』は割に合わないもんな。使える罠ならさつき使ってた筈だ」

「……………」

紅蓮の瞳を向けられる『地獄將軍・メフィスト』の攻撃力は2800。レッドアイズとの攻撃力の差は2000。この事実が意味する結果を、万丈目は受け止めきれなかった。攻撃を止める罠も無い、辿り着く結末は1つだった。

「…………ま、まさか…………『デーモンの斧』を破壊しなかったのは…………」

「悪いな、結構怒ってるらしい——黒炎弾ツ!!」

『グルオオオオオオツ!!』

「うわああアアアアツ!!」

万丈目 LP2000↓LP0

怒りの業火に身を焼かれ、万丈目は膝から崩れ落ちた。

——ジャストキル。

わざわざライフポイントを丁度削り切れるように立ち回られるという見下されるような敗北は、これまでの人生をエリートとして歩んできた男には余りにも重過ぎた。

「俺の勝ちだ。約束は守ってもらおう」

「う、嘘だ…………。嘘だああアアツ!!」

頭を抱えながら走り出す万丈目。紅也に背を向けて足を動かす姿は、先程までの高圧的な態度を微塵も連想させはしない。

引っ付いていた万丈目の無様とも言える敗走に、取り巻きたちも慌ててその場を去っていく。最後まで来た意味の無い者たちであった。

一息ついていた紅也の意識を覚醒させたのは、慌てたように掛けられた明日香の声だった。

「竜伊くん！ ガードマンが来るわ！ 逃げましょう！」

それは見回りのガードマンが来たことを知らせるもの。

時間外のデュエルフィールドの使用、深夜の外出、怒られる要素は



「あ、ありがとう。紳士なのね、竜伊くん」

勇気を振り絞った紅也の提案を素直に受け入れる明日香。断られていれば、彼の心に少しだけ傷が入っていた。

「じゃあ、お願いするわ。よろしくね」

「あ、ああ」

「少しの間だけど、さっきのデュエルのこと聞かせて欲しいわ」

「……良いけど期待するなよ？ 余り説明は得意じゃないんだ」

「大丈夫。口下手な人とは普段話カイザしなれてるから！」

デュエルアカデミアの帝王カイザにそんなことを言えるのは、アカデミアの中でも彼女ぐらいのものだろう。

月明かりが照らす夜道。

紅也と明日香は肩を並べ、適度に談笑しながら帰路についた。

## く月1試験く

デュエルアカデミアには1ヶ月に1度、在籍する生徒全員に対して午前筆記と午後実技の2つの試験が行われる日がある。

この試験の結果によつては所属する寮のランクも上がるという、生徒達にとつては全力で望まねばならない行事なのだ。特にレッドゾーンと揶揄される《オシリスレッド》の生徒達は。

そんな大事な試験の内の1つである筆記試験が終わり、休み時間を迎えた教室。既に大多数の生徒は姿が見えない。教室に残っているのは少数であり一箇所に集まっていた。

「その問題は少し迷ったけどDだと思うよ」

「こつちの選択問題はAにしたわ。三沢くんは？」

「ああ、俺もAだよ。まず間違いない」

テスト後に自分の答えを言い合い、答え合わせをする者達。

「ああ、やっちゃまったく寝ちまったく。何のために勉強したんだか」「気にすんな。午後の実技テストが本番よ」

徹夜による寝不足から寝落ちした者、元から筆記を捨て実技試験に重きを置いている者。それぞれが思い思いの様子で過ごしているが、その中心に座る男は渋い顔をしていた。

「……いや、なんで俺の席に集まる？」

どうにか空欄を作らずにテストを終えた紅也だった。

ようやく頭を悩ます筆記を乗り切ったと安堵していた所へ集まってきた4人。集まってきたかと思えば各々自由に過ごし始めた。何故広い教室で自分の席に来たのか、紅也は溜め息を溢しながら呟いた。

「そう言うな。丁度中心で集まりやすかったんだ、47番くん」

「その呼び方やめてくれ。ていうかお前の席は俺の2つ隣だろ、三沢」  
紅也の呟きに返答したのは黒髪オールバックの男。受験番号1番



という筆記試験トップで入学した秀才であり、紅也と同じ《ライイエロー》所属である三沢大地みさわだいちだった。

レッドアイズを使用していた紅也に対し興味を持ったようで、寮で行われた歓迎パーティーの際に面識を持った間柄だ。

十代のことを一番くんと呼び実力を評価している、《オシリスレッド》にも差別意識が無い気持ちの良い男だ。

「良いじゃない。確かに集まりやすいもの」

「お前の席は遥か後ろだろ。天上院」

三沢に便乗するように口を開いたのは、わざわざ後方の席からやって来た天上院明日香。エリートが所属する《オベリスクブルー》の彼女も三沢同様、格下の寮に対する差別意識は無い。

万丈目とのアンティデュエル以降、紅也とはよく話す関係になっており、フレンドリーな態度で接している。

「やっちゃまったよお、紅也くくん！」

「な、泣くなよ。翔」

寝る間も惜しんで勉強した者の悲劇。脱力したように泣きついてくる翔を宥めながら、肩に手を置き距離を取る。

「紅也はどうだったんだ？ 俺は寝てたぜ」

「30分も遅刻してきたしな。本当凄いや、十代」

「へへっ！ そうか？」

「褒めてないからな」

遅刻して来たというのに何も気にせず突撃出来る面の皮の厚さ。小心者の自分に少しでも良いから分けてほしいと、紅也は心の中で思った。

「にしても他の奴らどこ行ったんだ？ もう昼飯か？」

そんなことを思われているとは知る筈もなく、十代はスカスカとなった教室を見回した。

「購買部さ。なんせ昼休みに新しいカードが大量入荷するらしいからな」

「ええ〜!! 新しいカード!？」

三沢の説明に驚く翔。どうやら知らなかったようだ。

「午後からの実技試験のために、新しいカードでデッキを補強しようとしてるんだらうな」

「だからあんなに猛ダツシユだったのか」

納得したような声を出す紅也。翔と同じくカード大量入荷の話は知らなかったらしい。

「み、三沢くん達は行かないの？」

「俺は自分のデッキを信頼している。新しいカードなんて必要無いからね」

「私も同じね。調整する時間も満足に無いし、急に新しいカードを入れても邪魔になってしまうでしょうから」

「俺はそもそも知らなかった。そんなに興味は無いな」

三沢、明日香、紅也の3人は購買部に行く意思が無いようだ。しかし十代はそうでもないらしく、翔と共に走り出していった。

「慌ただしいな」

「全くだ。実技試験までまだ少し時間があるが、紅也はどうするんだ？」

「俺は休憩スペースにでも行ってるよ。三沢は？」

「ビデオルームかな。対戦する可能性のある相手のデータを調べておくさ、君の分もね。じゃあ俺は行くよ、また後で」

紅也と明日香に別れを告げ、三沢も教室を出て行く。

アカデミアで行われた数多くのデュエルの録画を見ることが出来るビデオルーム。1年生で最も通っている人物は間違いなく三沢だろう。

「努力家だな。三沢は」

「だからこそ筆記の成績が1位なんでしょうね。凄いわ」

「そうだな……天上院はどうするんだ？」

「うーん、そうね。私も休憩スペースに行こうかしら」

「疲れてるのか？」

「ええ、少し」

「……じゃあ、行くか」

席を立ち、出口に向かって歩き出す紅也とその後ろをついて歩く明

日香。実技試験まで残り1時間程の空き時間。筆記での疲れを軽くするため、二人揃って休憩スペースへと向かった。

デュエルアカデミアはとても広大な教育施設である。

デュエルに関するものはもちろんのこと、絶海の孤島であるが故に生活を豊かにするための施設も充実している。

紅也と明日香が訪れた休憩スペースもその内の一つ。多くの生徒達が利用出来るよう広い空間に作られ、大量の机と椅子が置いてあるだけでなくソファなども設置されている。

性格的に自分から誘うなど無理だが、女子側からの誘いもあったことで、紅也と明日香は現在横並びにソファへと腰掛けていた。埋もれるタイプではなく反発する硬めのソファにはあるが、椅子よりも距離が近く感じられ、小心者はドキドキしていた。

「んん……ふう、落ち着く」

「……そ、そだね」

楽な体勢になったからか、指を絡ませ一つ伸びをする明日香。小さく声を溢しながらの伸びは、年齢にそぐわないスタイルを惜しげもなく見せつけている。

「ん？ どうしたの？」

「な、なんでもない」

「そう？ ——それにしても、余り人は居ないのね」

挙動不審な紅也の顔を不思議そうに見ながら、休憩スペースに人が居ないことを確認する明日香。

「ま、まあ、ほとんどはデツキ調整じゃないか？ 実技試験前だしな」

「それもそうね。竜伊くんは余裕そうだけど」

「それは天上院も同じだろ」

「私は日頃から調整を怠っていないから」

「翔も見習うべきだな」

流石は優等生。テスト勉強も同じように毎日やっていたのだろう。そんな紅也の言葉に明日香が反応する。

「翔くんと言え、この間翔くんのお陰で十代とデュエル出来たわ」

「そうらしいな。負けたんだって？」

「……………ええ」

「ご、ごめん。嫌がらせで言ったんじゃないんだ」

リラックスから一変、強張った表情へ切り替わる。やはり負けず嫌いということなのだろう。

「翔が風呂場覗きの現行犯だったっけ」

「ええ、冤罪だったけど」

「だろうな。翔はそんなことしない」

「友達なものね」

言い切る紅也を微笑ましく思う明日香だったが、紅也の発言は彼女の意志とは方向性が違った。

「いや、翔にそんな度胸はない」

「……………そ、そうね」

翔がこの場に居ればなんとも複雑な表情をしていただろう。

覗きの件は紅也も原作知識で知っていただけでなく、十代からの連絡で呼び出されもしていた。しかし結果は分かりきっているため、行かない選択肢を取ったのだ。夜遅くで眠かったこともあるが。

「……………ふわぁ、寝そうだ」

身体全体を預けている程良い硬さのソファは、筆記で疲れた身体に眠気を与えてくる。目を閉じればぐぐつと睡魔が襲って来た。

「ふふっ、寝ちゃダメよ？ この後は実技試験なんだから」

「天上院は眠くないのか？」

「ん、竜伊くんの顔を見ると眠くなってくるかもね」

「それは良くないな。起きるよ」

自分だけならともかく明日香に迷惑をかけては良くないと、紅也は背もたれから背中を離し上半身を起こす。

寝ぼけ始めた頭をスッキリさせるため、そして実技試験のために

デツキの最終チェックを行おうと思いついた。

「デツキの確認？ 私、隣に居るんだけど……」

少し困り顔になりながら発言する明日香。デュエリストに取って魂とも呼ぶべきデツキを他人に、ましてやデュエルしたことのない相手に見せていいのかという彼女なりの配慮だった。

「あー、そうか。じゃあ、余り見ないでくれ」

「……はあ、私もさせてもらうわ。それならフェアでしょ？」

その言葉通り腰のケースからデツキを取り出した明日香。気遣いを見せにする紅也の様な男にも、彼女は優しかった。

「竜伊くんは……ドラゴン族主体か。やっぱりレッドアイズの影響よね？」

「ああ。ていうか1年生のほとんどが知ってるんだよ……。俺がレッドアイズ持つてるって」

「試験デュエルで派手に決めてたもの。レッドアイズで1ターンキル、誰がやったって目立つわよ」

それもそうだと素直に納得。目立つと分かってはいたが、あの状況ではやらざるを得なかった。背後から黒炎弾で脅されていたのだから。

『グルウ』

『ごめんて』

低く唸る精霊化した黒竜へすぐに謝罪し、紅也は明日香のデツキへと視線を向けた。

「天上院は……戦士族か」

「ええ、エースモンスターは『サイバー・ブレイダー』よ」

素材名称に指定ありの融合モンスターである『サイバー・ブレイダー』。

相手のフィールドに存在するモンスターの数によって効果が変わるという稀な効果を持っており、使い方が難しい分上手く使用できれば状況を一変させる力を持っている。

(……でもなあ)

さらっと見た感じ、やはり強いデツキとは思えなかった。

アニメでも明日香の勝率は低くはないが高くもない。まあ、相手と状況が悪いというのも要因の1つではあるのだが。

(そもそも……『サイバー・ブレイダー』出さなきゃ始まらないって感じか)

エースモンスターと言うだけあり、信頼しているのだろう。低い攻撃力を補うため『フュージョン・ウエポン』といった融合モンスター専用の装備魔法や、自分のモンスターを守りつつ攻めに転じられる『ドゥーブルパッセ』といった罫も投入されている。

『フュージョン・ウエポン』

レベル6以下の融合モンスターに装備可能。装備モンスターの攻撃力と守備力は1500ポイントアップする]

『ドゥーブルパッセ』

相手モンスターが自分フィールドの表側攻撃表示モンスターに攻撃宣言した時に発動出来る。攻撃対象モンスターの攻撃力分のダメージを相手に与え、その相手モンスターの攻撃を自分への直接攻撃にする。その自分のモンスターは、次の自分ターンに直接攻撃出来る]

紅也の率直な感想の通り、『サイバー・ブレイダー』を出さなければ話にならないのだ。紅也自身もレッドアイズを中心としていることから、似たようなスタイルではある。しかし、レッドアイズと『サイバー・ブレイダー』ではそもそも前提が異なるのだ。

(……召喚条件がなあ)

そう、レッドアイズと違ってくるもの、それは召喚条件だ。

名称指定されている融合モンスターは一部例外のモンスターを除き、指定されているモンスター同士を素材としなければ召喚することが出来ない。つまり、ただでさえ手札消費が激しい融合召喚に加えて、決められた融合素材を揃えなければならないということだ。

『サイバー・ブレイダー』の融合に必要なモンスターは『エトワール・サイバー』と『ブレード・スケーター』の2体。十代などの例外を除き、始めから融合素材が手札に揃うなんてことはほとんど起こり得ない。

これがレッドアイズならば最悪手札に来ておらずとも、サーチ魔法である『召喚士のスキル』で手札に呼び、召喚魔法である『古のルー』でフィールドに飛び出して来る。

そう上手くはいかずとも、『サイバー・ブレイダー』より召喚しやすいことには変わりはない。

「そうだ！ 良い機会だし、何か意見があれば聞かせて欲しいわ」  
「……………ええっ」

「他の人から見てもらえば新鮮な意見が貰えるでしょ？ まだまだデッキも改良していかなきゃいけないし」

「う、うくん」

唸る紅也。意見を言うだけならば簡単だ。思ったことをそのまま言えば良いだけのだから。しかしそう単純な話でもない。パツと見ただけで否定的な意見を言われて良い気分になる者など居ないだろう。

そんな紅也の思考をなんとなく察したのか、明日香が口を開く。

「竜伊くん、思ったことがあるなら教えて。何を言われても怒ったりしないわ。全部ではないでしょうけど、貴方の実力は分かってるつもりだから」

「え、え〜っ」と

目を泳がせる紅也に強い視線を送る明日香。先程までの優しい眼ではなく、強さを求めるデュエリストの眼であった。そんな風に見られてしまえば致し方ない、紅也は自分の考えをそのまま述べた。

「——って感じ……………です。俺は天上院のデュエルを実際に見たことがないから、あくまでもデッキだけ見て思った感想だ。的外れなものもあるかもしれないから……………その、ごめん」

緊張しながらも正直に意見した紅也。自身の考えが正しいとは限らないという意志も伝え、少しビクビクしながら明日香の方へと視線を送る。

「謝らないで、竜伊くん。ありがとう、凄く参考になったわ」

そんなビビりに、明日香は優しく微笑んだ。言われた意見は至極真っ当なものであると認め、笑いながら礼を言う。思わず見惚れそう

になる紅也だったが、取り敢えず怒らせてはいないことに安堵した。  
「ん〜となると『サイバー・ブレイダー』を出しやすくするカードを入れるべきかしら」

「……そうだな。融合召喚するカードは十分だから、戦士族をサーチする『増援』とか良いんじゃないか?」

「そうね、それがいいわ」

「後さ、『スピリットバリア』と『ドゥーブルパッセ』を組み合わせるのも面白いと思う」

『『スピリットバリア』』

自分フィールド上にモンスターが存在する限り、このカードのコントローラーへの戦闘ダメージは0になる」

永続罫であるこのカードを発動中に『ドゥーブルパッセ』を決められたなら、戦闘ダメージを0にしつつ、相手プレイヤーにダイレクトアタックすることが出来る。

「……!! 成程!」

「ま、まあ、今思いつくのはそんな感じ」

「ありがとう竜伊くん! 早速試してみるわ!」

距離を詰め、紅也の手を握る明日香。興奮しており、距離感がバグっているようだ。照れる暇もなく大きなチャイムが鳴り響く。もうすぐ実技試験が開始されるという合図だ。

「もうこんな時間ね。行きましょう、竜伊くん」

「……えっ? あ、ああ。そうだな」

「ごめんなさい。私ばかり意見貰っちゃった」

「いいよ、別に。また今度頼む」

ソファアールから立ち上がる2人。少々急いで試験場へ向かわなければならぬ中で、不意に明日香が問いかける。

「……ねえ、竜伊くん」

「ん? どうした?」

歯切れの悪い様子で数秒沈黙する明日香。その瞳には、僅かばかりの影が見えた。

「自分の他にレッドアイズを持っている人とかって……知ってる?」





「その呼び方本当にやめてくれ。47番で良いから」

肩を落とす紅也。三沢はそんな彼を笑いながらデュエルフィールドを見下ろした。

「やはり十代は強いな。戦うのが楽しみだ」

「……十代の相手は疲れるぞ。特に十代がドロ―する時とか」

「引きの強さも実力の内。俺みたいな凡人は、努力を積み上げるだけ  
さ」

「三沢が凡人なら、俺は何になるんだよ」

最後のデュエルを見終わり、寮へ帰るべく歩き出す。三沢もついてきていることから、紅也と同じく寮に戻るらしい。

「紅也。君にもその内、勝負を挑むよ」

「お断りします」

「フツ、受けてもらうさ」

楽しそうに笑う三沢とは反対に嫌そうな顔をする紅也。彼に三沢とデュエルするつもりは無い。他にやらなければならぬことがあるからだ。

少しだけ動かし視線が捉えたのは共にソファ―へ座った明日香。周りにいつもの女子達は居るが、心ここにあらずと言った様子だ。

(……これは、無視出来ないよな)

転生者が――動く。

く悪魔を食らう黒竜く

竜伊紅也は転生者である。

精霊が宿った『真紅眼の黒竜』に愛されたことで、命の終わりをきっかけにこのGXの世界へと転生した。

アニメを見ていたことで原作知識と呼ぶべきものが紅也にはある。流石に全話の記憶が残っている訳もなく、ハッキリとした記憶は要所要所のものでしかないのだが。

そんな覚えている記憶の中で自分イレギュラーが介入すべき所。それが月一試験の後に十代達が行う廃墟探検だ。

この話では十代を疎ましく思うクロノスが闇のデュエリストを名乗るタイタンという男を雇い、十代を退学に追い込もうとする。

しかし、問題はそこではない。問題はそれに巻き込まれる天上院明日香である。同じタイミングで廃墟に居合わせた結果、タイタンに人質として捕らわれてしまう明日香。それを阻止しようと紅也は動くのだ。

これを阻止しておけば、後に行われる十代と翔による退学を賭けたタッグデュエルの件も起こりはしない筈。一石二鳥である。

(……なんか夜行性になった気がする)

万丈目の件からそう日が経っていないにも関わらず、またもや夜更けに外出している。優等生とまでは言えずとも普通の生徒ではあると自負していた紅也だったが、夜間外出の不良になりつつあると苦笑い。

(……今回の件なら、使つていいよな?)

そんな思いを肯定するかのようには、腰に付いているデツキケースが震える。

『真紅眼の黒竜』はもちろん、それ以外の黒竜たちも賛成のようだ。

(——居た。十代達だ)

夜に似合わない元気な大声とビビりまくる情けない悲鳴。極め付けはコアラのような特徴的過ぎる髪型の男。あんな髪型をしているのは原作キャラの1人である前田隼人まえだはやと以外に有り得ない。

原作通りに廃墟へと行くようなので、こっそりと後を追いつける。物音を立てないように、細心の注意を払いながら。

??

天上院明日香にとって——兄、天上院吹雪は憧れであった。

お調子者で軽い態度、自身とは正反対の性格をしていたが、明日香は兄を尊敬していた。幼い時に教えてもらったデュエルモンスターズは、彼女の人生に大きな影響を与えるまでになったのだから。

負けず嫌いであった彼女は、兄の背中を追ってデュエルアカデミア中等部へと入学した。真面目な性格と天性の才が合わさり、明日香はすぐにトップクラスの实力者になったが、それでも兄には敵わなかった。

高等部では必ず勝利する。そんな想いと共に見届けた兄の卒業。

まさかそれが、兄の笑顔を直接見ることが出来る最後の機会になるうとは——夢にも思わなかった。

——天上院吹雪が失踪した。

特待生として高等部へ進学した男が行方不明との一報が入ったのだ。

中等部の頃から帝王カイザーと呼ばれたサイバー流の後継者丸藤亮まるふじりやう、そんな男のライバルとも呼ばれた天上院吹雪の消失は多くの者に衝撃を与えた。

大規模な搜索も結果は実らず、遂に吹雪を見つけることは出来なかった。それから次第に周りの記憶から彼のことは薄れていった、人間の記憶とはそういうものだ。

しかし、薄れるどころか日に日に強まっていく者達も居る。

親友である丸藤亮、そして妹の天上院明日香だ。

明日香が高等部へ進学してからというもの、亮とは毎日のように情報交換を繰り返している。あらゆる所から様々な情報を探っているが、一筋の光明すら見えてはこない。目の前にあるのは何も見えない闇ばかりだ。

諦めるつもりなど毛頭無い。だが、心というものは脆い。何も成果が無く、自分のしていることに意味を見失いそうになる、そんな日が幾度も訪れ始めた。無理かもしれない、無駄かもしれない、ネガティブな思考ばかりが増えていく。

気分転換も兼ねて亮が誘ったのは、高等部への編入試験デュエルの見学。既に生徒である者達は見学する権利を持つていたからだ。余り興味が持てず断ろうかとも思ったが、滅多に無い口下手男からのお誘いともあつて、明日香は同伴することにした。

——そこで光と出会うことになる。

探してやまない兄と同じモンスター『真紅眼の黒竜』を扱う少年。大人しそうという印象であり、吹雪とは似ても似つかない。しかし、レッドアイズという共通点が明日香の意識を引いた。派手な1ターンのキルも加わり、明日香は竜伊紅也という受験生に興味を抱いたのだ。

試験の内容からして《ライイエロー》である可能性が高いと察の近くを探してみた結果、挨拶することが出来た。

意図せず見かけた時間外のアンティデュエルでは、目の前でその強さと真つ直ぐな信念を見せられた。

月一試験では自身のデッキに対して思い付かなかったアイデアを授けてもらい、久しぶりに気持ちが高まった。

一緒に居て心地良く、そして楽しかった。

天上院明日香にとつて、竜伊紅也は一種の癒しにもなっていた。

だからこそ、兄に繋がる情報が無いと知った時、彼女は落胆した。

否、それは紅也に対してのものではない。自分が思った程、

落ち込んでいない自分に対して明日香は落胆したのだ。

——諦めかけている？ そんな訳がない。

明日香の心に再び火がついた。無茶は出来ないが、ギリギリまで攻める。彼女が改めて探索を開始した、そんな時であった。

立ち入り禁止とされる廃墟に入ろうとする十代達を見つけたのだ。当然注意する明日香だが、十代が聞く耳を持つ訳もない。説得は無駄に終わり明日香も引き下がる。

意気揚々と廃墟へ入っていく十代達を木陰から見送り、寮へ帰ろうとした所で——彼女の意識は闇に沈んだ。

「……よし。この女を餌に、遊城十代を誘い出すとしよう」

気絶している明日香を見下ろしながらそう呟く大男。全身が黒一色の装いをしており、顔には悪趣味な仮面が付けられている。

この男の名、タイタン。”闇のデュエリスト”を自称し、報酬次第でどんな依頼もこなす裏社会の何でも屋だ。

今回の依頼達成のため、近くに居た女子生徒を人質にしようと考えたタイタン。絵面だけでなく完全に犯罪者であり、闇といえは闇である。

「少し利用させてもらおうぞ」

気絶させた少女を運ぶため、手を伸ばした——次の瞬間。

「——その子に触るな」

咄嗟に身を翻し、その場を離れる。大きな身体からは想像出来ない程に俊敏な動きで臨戦態勢に入るタイタン。伊達に裏社会で生き抜いてはいないようだ。

「誰だ？」

警戒を途切らせることなく、背後から声を掛けてきた存在へ問いかける。暗闇でその姿をハッキリと確認することは出来ないが、声から

して若い男であるだろうと予想を立てていた。

ゆつくりと自身の方へ近付いてくるその男。気絶させた少女の近くまで歩み寄ってくると、ようやく姿を確認することが出来た。

黄色の制服に身を包む、至って普通の男子学生であった。大人しそうな顔立ちに、タイタンは少しだけ警戒を緩める。

「アカデミアの学生か。最近の子供は夜更かしが好きらしいなア」

「……狙いは廃墟に入っていた奴らだろ。この子は関係無い筈だ」

「ッ!? 何故それを——いや、いいさ。口封じさせてもらおう」

口端を吊り上げながらコウモリの羽に似た不気味なデュエルディスクを起動させるタイタン。プロデュエリストすらターゲットとしてきた実力は確かなものであり、間違ってもアカデミアの1年生が勝てる相手ではない。

しかし、対峙する少年は同じ様にデュエルディスクを起動。受けて立つ意志を見せてきた。しばらく起きる気配の無い少女を木の方へ運ぶと、デュエル開始の宣言をした。

「デュエル」

「デュエルウツ！」

少年      LP 4000

タイタン      LP 4000

「私のターン！ ドロー！ ……悪いが時間が無いんでね、すぐに終わらせるぞ」

ターゲットが廃墟に入ってから時間を考えても、このデュエルに時間は掛けられない。速攻で決めにいくため、タイタンは自身の戦術を展開した。

「私は手札からフィールド魔法『万魔殿バンデイモニウム—悪魔の巣窟—』を発動」

タイタンが使用するデーモンデッキの要とも言っているフィールド魔法が少年も巻き込み発動される。禍々しいオーラと不気味な悪魔の石像に囲まれた空間は、ホラーが苦手な者ならば絶叫しかねないレベルだ。

「これにより、私は“デーモン”と名のついたモンスターの効果でライフを払わなくてもよくなった。そして『ジェネラルデーモン』を召

喚！」

『ジェネラルデーモン』 ATK／2100 DEF／800

現れたデーモンは屈強な身体に羽を生やし、☆4の通常召喚可能モンスターでありながら高い攻撃力を備えていた。

そしてフィールド魔法の効果により、『デーモン』モンスター最大のデメリットであるライフの支払いが帳消しとなる。タイタンお得意の展開だ。

『ジェネラルデーモン』は『万魔殿―悪魔の巣窟―』がフィールドに存在しない場合破壊されるが、もちろんそんなことにはならない」

地獄の入口のような風景に立つデーモンは、まさしく將軍ジェネラルの名に相応しい貫禄を醸し出している。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

手札を多く使って揃えた盤面。攻撃力の高いモンスターを出しはしたが、タイタンの狙いは攻撃による勝利ではなかった。

（私が伏せたカードは『魔法の筒』と『炸裂装甲』。さあ、攻撃してくるがいい）

例え相手に攻撃力を超えられたとしても問題はない。高い攻撃力ならば『魔法の筒』で相手がライフに大きなダメージを受けるだけ、複数体モンスターを出されても2枚目の罠『炸裂装甲』で破壊してしまえば関係ない。

『魔法の筒』

相手モンスターの攻撃宣言時、攻撃モンスター1体を対象として発動できる。その攻撃モンスターの攻撃を無効にし、その攻撃力分のダメージを相手に与える」

『炸裂装甲』

相手モンスターの攻撃宣言時、攻撃モンスター1体を対象として発動できる。その攻撃モンスターを破壊する」

「さあ、貴様のターンだ。言い忘れていたが私は”闇のデュエリスト”でね、今行っているのは《闇のゲーム》と呼ばれるものだ。敗者は永遠に救いのない闇の中を彷徨うこととなる……覚悟を決めるんだなア」



プレッシャーを与えるように言葉を放つタイタン。誰しも生命の危機という条件には身をすくませる。緊張で頭は回らなくなり、些細なミスを犯す。遊戯王は運の要素も絡むが、基本的には頭脳による戦略がモノを言う。動揺した精神状態では、満足なプレイングなど出来はしないのだ。

「フフフ……どうした？ 今逃げ出すなら見逃してやるが？」  
「……」

ドロローもせずに手札をジッと見ている少年。タイタンは己の言葉を聞き、戦意を喪失したのだと確信。逃げ道を提案することで速やかにデュエルを終了出来ると考えた。

しかし、対する少年にリアクションは無い。不審に思ったタイタンがもう一度言葉を放とうと口を開いた時、少年は動き出した。

「——ドロロー」

「……フン。後悔しないことだ」

どうやら降参の意思はないようだ。仕方がない、お決まりの脅しに効果が無いのならば実力で叩き潰すまで。

タイタンは改めて構える、闇に堕ちるのが自らであることを知る訳もなく。

「魔法カード——」  
「????????」

少年が1枚のカードを発動する。少年の声が小さかったからか、タイタンに聞く気がなかったからか。恐らく後者ではあるが、タイタンには何の魔法カードを発動したのか分からなかった。

「デツキから融合素材モンスターを墓地に送り……融合召喚を行う」  
「なに？ デツキからだと……？」

基本的に融合召喚を行う際には、手札から素材を選択する場合とフィールドから素材を選択する場合の2つのパターンが存在する。そのためそのどちらとも違うデツキから素材を選択するという言葉に少々驚かされた。

(……まあ、所詮はアカデミアの生徒。大したことはない)

しかし相手が学生という事実が驚きすら鎮火させる。これまでにならしてきた数々の仕事。彼をプロフェッショナルと呼ぶべき立場にする実績、それがタイタンの慢心を大いに膨らませていた。そしてその自信は——瞬く間に砕かれた。

「……な……なんだ……そのモンスターは……」

相手は一枚の魔法カードから手札を減らすことなく、融合モンスターを召喚した。

デーモンのような炎を噴射する——真紅の眼をした黒竜を。

タイタンが振り絞るように溢した問いに、少年が答えた。

「デーモン使いなのに知らないのか？ デーモンと『真紅眼の黒竜』の力を合わせた融合モンスター『ブラック・デーモンズ・ドラゴン』だよ」

『???』  
『???』  
2500 ATK/3200 DEF

少年の言葉を聞いたタイタンはそれを激しく否定した。

「ふ、ふざけるなアツ！ これが……『ブラック・デーモンズ・ドラゴン』だとツ!？」

恐れが身体を支配し、足が震え始める。視界に捉える黒竜は殺意にも似た波動を放ち続け、圧倒的な存在感でこの場を制圧した。

もちろん、タイタンもデーモン使いとして『ブラック・デーモンズ・ドラゴン』のことは知っている。しかし、目の前に立ちただかっているものは違う。確かに既視感はある、だがそれだけで——全くの別物だ。

そんなタイタンを尻目に、少年はターンを続行する。

「いくぞ……『ブラック・デーモンズ・ドラゴン』で『ジエネラルデーモン』を攻撃。この瞬間、速攻魔法『虚栄巨影』を発動。バトルフェイズ中、モンスター1体の攻撃力を1000ポイントアップする」

『???』  
『???』  
4200 ATK/3200 DEF

「——デビル・フレア」

『グルザアアアアアッ!!』

自身のモンスターを遥かに超える攻撃力。しかし、これは計算通りだ。込み上がる恐怖心をプライドで抑え込み、タイタンは動く。

「させるかアッ！ 毘発動！ 『魔法の筒』ッ！ フハハハハッ!!  
バカめッ！ これで貴様の負けだああアッ!!」

正体が分からないならそれでも良い。勝利してしまえば終わりなのだから。圧倒的な攻撃力は時として我が身を滅ぼす。4200ものダメージを受ければライフポイントは完全に吹き飛ぶ。タイタンは勝利した事実を高笑いを上げた。

——毘が発動すればの話だが。

「な、なんだとおおオオッ!!」

野太い声が地獄の入口に響き渡る。驚愕、そして理解不能な現実がタイタンを襲ったのだ。

「な、何故毘が発動しないッ!!」

ピッ、ピッと何度もデュエルディスクのボタンを押すが、やはり反応はない。激昂するタイタンに少年が冷えた眼を向けながら口を開く。

「このカードが攻撃する時、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罨・モンスター効果を発動出来ない」

「なんだとッ!？」

強力な効果。しかしそれ以上の理不尽にタイタンは吠える。

「効果だとッ!? 『ブラック・デーモンズ・ドラゴン』は効果を持たない融合モンスターの筈だッ!!」

『『ジェネラルデーモン』を破壊』

「グハアッ！」

タイタン LP4000↓1900

お構いなしと言わんばかりの攻撃で、ライフが大きく削られる。相手のモンスターを破壊するどころか、自分のフィールドがガラ空きになってしまった。

(ま、まだまだ……。ライフは残った)

生き残ったことを確認し、タイタンはなんとか平静を取り戻そうとする。次のターンであるモンスターをどうにかしなければ負ける。そんな考えを見透かすかのように、少年は言葉を放った。

「……次のターンはない」

死刑宣告とも取れるその発言は、タイタンの脳を停止させる。

「——融合召喚したこのカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、自分の墓地に存在する”レッドアイズ”通常モンスター1体を対象として発動出来る。そのモンスター元々の攻撃力分のダメージを……相手プレイヤーに与える」

「な、なんだと……」

少年が墓地から取り出した1枚。それはこのデュエルを終わらせる一撃となるものだった。

『真紅眼の黒竜』を選択——2400ポイントのダメージを受けろ」

その言葉と共に『ブラック・デーモンズ・ドラゴン』が唸り声を響かせる。口から溢れる重量を感じさせる黒炎、それはまさに地獄の業火。灼熱の火球が真つ直ぐ自身へと向けられ、タイタンは終わりを悟った。

（……私は……なんてものを相手にしたのだ……）

原始的な恐怖に支配された時、タイタンの意識は闇へと消えた。

??

——ん、んう……」

適度に身体を揺らす振動と顔を撫でる少し冷たい風により、気絶していた明日香はゆっくりと目覚めた。覚醒したばかりの意識はまだ少し朦朧としており、身体に力も入らない。

「……えっ」

何度かの瞬きで視界をクリアにすると、自身が誰かに背負われていることに気付く。反射的に身体を引き離そうとしたが、なにやら見覚

えのある後ろ姿に落ち着きを取り戻す。

「……竜伊……くん？」

「起きたか、天上院」

何故か同期に背負われているという不可思議な状況に、明日香の頭はショートしそうになった。

「ど、どうして？ ……それに、私……」

「散歩してたら天上院が寝ててな。昼寝好きなのは分かったけど、こんな時間にはやめておいた方がよいよ」

「なっ！ ち、違うわよ！」

「そうなのか。気持ち良さそうに寝息立ててたから、てっきりそうなのかと思ってた」

寝顔を見られただけでなく、寝息までバツチり聴かれていた。少女としてももちろん恥ずかしいので、明日香は顔だけでなく耳まで真っ赤に染まった。

「立てそうか？」

「ご、ごめんなさい……なんか痺れてて」

「ん、分かった」

自分の足で立とうとした明日香だったが、身体を支配する痺れによって断念。謝罪しつつ、再び紅也に背負われた。

「な、なるべく肌とかは触ってないから」

「……ふふっ、気にしないわよ」

少し照れたような紅也を見て、穏やかに笑う明日香。不器用な紳士さに微笑まじさを感じたようだ。

紅也に至っては、肌というより別の場所へ意識が向きそうになるのを必死に堪えていた。自身の背中に当たる圧倒的な柔らかさ、経験したことのない幸福感を与えられ、気を抜けば紅也は倒れそうだった。

「でもごめんなさい……私なんであんな所で寝ていたのか」

「……疲れてたんじゃないか？ 寝言も言ってたし」

「ほ、本当!？」

「ああ、言ってたぞ——兄さんって」

「……………」

紅也の言葉に黙り込む明日香。何かから話せばいいのか分からなくなってしまうようだ。

こんな夜更けに出歩いていること、紅也と知り合いになったこと、それら全てのきっかけは行方不明となった兄であり、頭の整理がつかなくなっていた。

そんな彼女の内心を察したのか、紅也は優しく言葉を続ける。

「そんな緊張しなくても大丈夫だって。無理に聞こうとは思ってないからさ」

「……竜伊くん」

作り笑いが慣れていないと一目で分かる笑顔。しかしそんな笑顔が明日香の心に余裕を与えてくれた。そして決心する。嫌な思いをさせてしまうかもしれないが、それでも話を聞いてもらおうと。

「……実はね、私の兄さん……行方不明なの」

「……そうか。それは心配だな」

「高等部に進学してから情報を集めてる……けど何も分かってないの」

行方不明であることを最初に切り出せたからか、スラスラと言葉を紡ぎ出す明日香。

「兄は——竜伊くんと同じ『真紅眼の黒竜』を使っていたの」

「……だから前に、俺以外に持つてる人を知らないかって訊いたのか」

「正直に言えば、竜伊くんから兄のことが何か分かるかもしれないって期待はあったわ……ごめんなさい」

背中越しの謝罪。顔は見えないが、声音から申し訳なさが紅也へ伝わる。

「謝ることないよ。むしろ力になれなくてごめんな」

「そんなこと！」

「——だからさ」

明日香の言葉を遮り、紅也が言葉を放つ。

「俺も協力するよ、天上院のお兄さんを探すの」

「……えっ」

「人数は多い方が良いだろ。レッドアイズ繋がりで、何かしら進展が

あるかもしれないしな」

それはオカルトっぽいか、などと笑いながらの言葉に、明日香は素直に嬉しさを感じた。何も飾っていないストレートな言葉は時に、人の心を大きく動かしてしまう。

「……良いの？」

「ああ、良いよ」

「ほ、本当に……？」

「本当に」

「……竜伊くん」

「ん？」

横目で明日香を見る紅也。木陰で隠れていた顔が、月明かりに照らされる。

「——ありがとう」

そこには、思わず見惚れてしまいそうになる程の笑顔。『黒炎弾』も顔負けな程のダイレクトアタックを喰らった紅也はと言えば。

「……お、お、おう」

甘酸っぱい空気など彼方に置き去り、盛大に目を泳がせたのだっ  
た。

〈予想外の人物〉

無事にタイタンの一件を片付けた紅也。

これにより十代と翔が行う筈だった制裁タッグデュエルも起こらず、概ね予想通りの展開となっていた。

そんな原作改変をした彼は現在、授業終わりの放課後で休憩スペースへと来ていた。1人ではなく、2人だけ。

「この場合は攻撃しない方が良いな」

「えっ？　なんでスか？」

「伏せカードが多いし、こっちに対策出来るカードが無いから」

「そ、そうっスね……」

椅子に座り、机でカードを並べる2人。デュエルディスクを使わない、昔ながらのデュエルをしているようだ。

片方はあれやこれやと指差しながら色々教えている紅也、そして教えられていたのは紅也が入学初日から知り合った丸藤翔だ。

何故こんな事をしているか、もちろん理由はある。

結果的に紅也が消した制裁タッグデュエル、このデュエルは丸藤翔というキャラにとって成長を遂げるポイントでもあった。そんなイベントを潰してしまった立場として、紅也は翔へデュエルの特訓相手になることを申し出たのだ。

負け犬根性が染みついた翔だったが、自分と似た内気な性格でありながら実力がある紅也からの提案を、割と素直に了承した。兄貴分である十代に勝つたのを目の前で目撃したことも大きいだろう。

そしてなにより——彼は変わ<sup>り</sup>た<sup>か</sup>つた。

幼い頃から感じていた優秀な兄への劣等感、デュエルの弱い情けない自分への怒り、勝利することへの憧れ。

『翔は弱くない、足りないのは知識と自信だけだ』

それが同情や憐れみから言われたのではないと素直に受け入れら



れたのも、紅也の持つ独特な空気感のお陰かもしれない。

素直に話しやすい相手なのだろう。翔にとって最大の悩みである、兄についても相談してしまっているのだから。

『別に急がなくて良いだろ。翔のペースでさ』

この言葉に、翔は少し気が楽になった。

心に余裕が出来たからか、前より取り乱すことが無くなったようにすら感じている。冷静でいることはデュエルでも重要だ。

「でも段々考えられるようになってきたな。前なんて取り敢えず攻撃の脳死戦術だったのに」

今回で4度目となる特訓。紅也から指摘されることも徐々に減っ  
ていき、翔のタクティクスは確実に向上していた。

「じゃ、じゃあ……ここでこうすれば、どうスか？」

「おお、良いじゃん。それはアリ」

「そ、そうスか！……へへっ、やったっス」

教師を相手にするより緊張せず、気楽な態度で接してくれる紅也。翔にとっては理想的な先生役であった。同年代であるにも関わらず、時々何故か年上を感じてしまうのは不思議だが。

紅也と翔が話し合っていると、2人の使う机に1人の男が近付いて来た。

「やあ、紅也。ここに居たのか」

「ん？ 三沢か」

紅也と同じ《ラーイエロー》に所属する三沢大地であった。言葉から察するに紅也を探していたようだ。

「2人でデュエルしてたのか？」

「うん！ 紅也くん色々教えてもらってるとこなんだ！」

「へえ、それは興味あるな」

「俺がお前に教えることなんてないぞ。むしろ教えて欲しいぐらいだ」

「ははっ、そんなことはないさ。俺は君から学ぶことが多いと思っ  
ているからね」

「……それで、何の用だよ？」

学年1位にそう言われても、あまり喜べない紅也。所詮自分は中間順位を取るので精一杯な男、少しムカツとしながら用件を訊ねた。

「前に話したろ？ 君にデュエルを――」

「お断りします」

「つて！ まだ全部言い終わってないぞ！」

「いや、それこそ前に断つたろ。お前とデュエルする気はない」

「な、何故だ？」

面倒だから、とは流石に言えなかった紅也。口で言っても諦めそうにない雰囲気なので、紅也は三沢にとある条件を出すことにした。

「じゃあ、十代に勝ったら相手するよ。その条件がクリア出来なきゃデュエルはしない」

「十代に……か？」

「そう、俺は十代に勝ってるからな。お前が1番くんと呼ぶ十代に勝ったら相手してやる。どうだ？」

「……分かった。約束は守れよ？」

「ああ、もちろん」

なんとも自分に有利な条件を通した紅也。余程三沢とのデュエルが面倒らしい。原作主人公に勝ったアドバンテージがこのような形で生きた。

息巻いて休憩スペースを出て行く三沢、部屋に戻ってデッキの調整でもするのだろう。無事、十代へ押し付けることに成功したようだ。

「行っちゃったっスね」

「そうだな。……ふわあ」

「眠そうっスね。あつ、こうして僕に教えてるから寝不足になったとか!？」

特訓が始まってからやけに多い欠伸。翔は自分が原因なのかと焦りながら訊ねた。

「違う違う、原因は……あれだよ」

「あれ?」

うんざりしたような表情で翔の後ろを指差す紅也。そこには翔にとって苦手な存在が、何故か紅也を恨むように睨んでいた。

「ええ……。紅也くん、何したんスか？ 《オベリスクブルー》の人達が凄く睨んでるっス！」

「んー、なんだろうな。身に覚えがない訳じゃないんだけど……あつ」

頬杖をつきながら紅也が視線をズラすと、休憩スペースの外である廊下に原因と思われる人物がタイミング良く現れた。

「ああつ、明日香さんだ！」

続いて翔も気付いたようで、嬉しそうに声を上げる。

歩いていた明日香も翔に気付いたようで、ニコツと効果音の付きそうな笑顔を見せる。そして紅也の方にも気付くと、翔とは違ったアクションを見せた。

——より柔らかい笑顔&小さく手を振る。

という普段の彼女からは考えられない可愛らしい仕草を、少し恥ずかしそうな表情で繰り出したのだ。

チラ見していた男子生徒達はギャップ萌えて悶絶、女子生徒はそんな彼らへ冷たい目を向けた。

そして同時に跳ね上がる紅也への殺意と嫉妬。《オベリスクブルー》の生徒達は血の涙を流す勢いで苦しみ出した。

「……………こういう事だと思っんだ」

無視する訳にもいかず、歩いていく明日香へ小さく手を振りかえす紅也。その様子を見て、翔は大体の状況を察した。

「なるほど、そういうことだったんスね」

デュエリストとしての高い実力と美しい容姿により、明日香は1年生ながら『オベリスクブルーの女王』と呼ばれている。女子生徒にも熱狂的な人気があるのだ、男子生徒からの人気は比べ物にならない程大きい。

そして最近、その女王に1人の男の影が見え始めた。

男からの下心ある接近であればすぐに制裁するのだが、なにやら話しかけるのは常に明日香側から。これでは文句の言いようがない。

そして相手はエリート《オベリスクブルー》ですらない《ラーイ

エロー』。紅也に対して嫉妬の感情が抱かれるのも無理はなかった。

「頼むから翔は勘違いしないでくれよ？　そもそも天上院に俺なんかじゃ釣り合わないって」

「そうっスか？　僕はお似合いだと思うスけど」

きよとんとした表情で言っていることから、翔は本気で紅也と明日香がお似合いだと思っっているようだ。

「……それに手出したら犯罪だし」

「えっ？　なんでスか？」

「だって年齢が……じゃなくて、顔がバランス取れてないからさ」

真実を口にしそうになる精神年齢25歳。女子高生に手を出せば犯罪という意識は、転生しても根強く頭に残っていたようだ。

そんな紅也へ、翔がニヤニヤしながら言葉を返す。

「紅也くん、カッコいいと思うスけどね。なんなら女子達が紅也くんの話してたの聞いたっスもん」

「……えっ、そうなの？」

「そりやそうっスよ。レッドアイズの使い手で、大勢の前でワンターンキルもしたっスからね。十代のアニキと同じく、1年生の中じゃ紅也くんのこと知らない人の方が少ないっスよ」

どうやら予想よりも自分は目立っているようだ、肩を落とす紅也。目立つことが本当に好きではない彼にとって、その状況は心の平穩によろしくない。

「……はあ、嫌だなあ」

「ほんとアニキとは正反対っスね」

笑いながら紅也を見る翔。紅也に対してやはり色々違うように感じる。

十代のようにアニキでもなければ、亮のように兄でもない。

(……先輩って感じっスね)

親しみやすく、尊敬しやすい。十代や亮とは違った魅力が紅也にはあった。

「さて、今日はそろそろ終わるか」

「はいっス！　ありがとう！　紅也くん！」

まだ時間は早い、そろそろお開きにしよう。紅也が発言。翔もそれに従い、カードをケースへと片付けた。

「じゃあまた明日！ お願いするっス！」

「あ、翔……ちよつと待て」

「なんスか？」

寮へ帰ろうとする翔を呼び止める紅也。制服のポケットから数枚のカードを取り出し、翔へ差し出した。

「これパックで当たったやつ。翔にやるよ」

「……えっ、これって！」

差し出されたのは4枚のカード。

・『ヘリロイド』

☆4 (風・機械族) ATK/1500 DEF/1300

このカードがフィールド上に存在する場合、自分フィールド上に存在する『ミサイルロイド』は相手プレイヤーに直接攻撃する事が出来る。

・『ランチャーロイド』

☆4 (炎・機械族) ATK/500 DEF/1500

自分フィールドに表側攻撃表示で存在するモンスター1体を選択して発動。選択したモンスターの攻撃力は500ポイントアップする。この効果を発動したターン、このカードは戦闘を行う事が出来ない。

・『ミサイルロイド』×2

☆4 (炎・機械族) ATK/1000 DEF/2000

このカードが戦闘を行ったダメージ計算後に発動。戦闘を行った相手モンスターの表示形式により、以下の効果を適用する。

●攻撃表示：その相手モンスターの攻撃力は、このカードの攻撃力分ダウンする。

●守備表示：その相手モンスターの守備力は、このカードの攻撃力分ダウンする。

全て翔のデッキテーマである”ビークロイド”のカード達だった。  
「い、い、良いんスかつ!? こんなに貰って!？」

「ああ、良いよ」

「で、でも、僕トレードするカードなんて……」  
「じゃあタダでやる。どうせ俺のデッキには採用してやれないし、翔が使ってやってくれ」

流石に自分では使いこなせないカードなので、紅也はカードを譲ることになんの躊躇いもなかった。

「……紅也くん。僕、強くなるっス」

ここまでしてもらって頑張れなければ、弱虫以下の恥知らず。なにより、友達からの協力を無駄にしたくなかった。初めて親身になって相談に乗ってくれた、大事な友達なのだから。

「ん、頑張れ。十代とかなら喜んで相手になってくれるだろ。負けても良いから、なんか学んでこい」

「そうっスね！ 僕、アニキに挑んでくるっス!!」

「おう。……っってもう走り出してるし、張り切ってるな」

カードが喜ばれたようであり、プレゼントした側としては満足な反応が見られた。翔の背中が見えなくなった辺りで、紅也もカードを片付けた。

『帰るか、お前達のカード磨きしないとな』

『……グルウ』

薄く姿を現した黒竜と共に、紅也も休憩スペースを離れる。

それを見た《オベリスクブルー》の生徒達は睨み続けていたが、見えない筈の黒竜によって気絶させられた。

紅也が木の棒で黒竜と戯れながら、自身の寮まで順調に帰っていた——そんな時だった。

「——竜伊紅也、だな？」

不意に背後から声を掛けられた。振り返ってみると、そこには意外過ぎる人物が腕を組み、紅也へ視線を向けていた。

「君を探していた」

このデュエルアカデミアで最強と謳われ、『帝王』カイザーと呼ばれるただ一人の男。

——丸藤亮。

紅也はとんでもない人に捕まった。

## く帝王からの挑戦く

(なんか……デジャブだな)

人の姿が見られない海沿いの倉庫近く。

紅也はそんな場所で潮風に当たりながら——デュエルディスクを起動していた。

前にもこんなことがあったなと空を見上げながら、真正面で同じ様に構える男へ視線を向けた。

「急な誘いで悪かった。どうしても君とデュエルがしたかった」

「えーっと……光栄です」

男の名は丸藤亮。デュエルアカデミア高等部3年生にして、学園最強のデュエリストだ。

部屋へ帰ろうとしていた紅也を捕まえ、この場所まで引つ張ってきた亮。想定外過ぎる展開に紅也も最大限に警戒しながら「何のご用でしょう……？」と恐る恐る訊ねた。すると亮が見せた反応は、無言で始めたデュエル開始の準備。紅也はリリースした。

亮曰く、デュエルの誘いをしていたつもりらしい。ついて来た時点です了承してもらえていたと思っていたらしく、紅也が乗り気でないことが分かると無表情が崩れる。

『……す、すまない。そうだったのか』

整った顔立ちであるが故に、表情の変化が非常に分かりやすい。形の良い眉毛は八の字に下がり、しよぼんという顔文字の様な顔をされた。紅也は断りづら過ぎるデュエルを受け入れたのだった。

(……それに)

デュエルディスクの起動を確認し、自身の左隣へ視線を向ける。普通の人間が紅也と同じ空間を見たとしても、何かを視認することは出来ないだろう。何故ならそこに居るのは、デュエルモンスターズの精霊と呼ばれる存在なのだから。



(なんでこんなにやる気なんだ?)

紅也と共にある精霊、『真紅眼の黒竜』<sup>レッドアイズ</sup>。そんな黒竜は何故か、紅也を遥かに超えたやる気を漲らせていた。

『……どうした? なんかに嫌なことあったか?』

『……………』

理由を訊ねても、黒竜は反応しない。ただただ亮を睨み、威嚇しているようにすら感じる。考えても答えは出ないと、紅也は思考を放棄した。

「では、始めよう。手加減は無用だ、全力で戦おう」

どこかキラキラした楽しそうな顔をする亮。そんな顔でそんな事を言われてしまえば、紅也も全力で望まざるを得ない。

「……はい」

互いにデッキをセット。デュエル開始の準備が整った。

「——デュエル」

亮 LP 4000

紅也 LP 4000

「先攻は譲ろう」

「じゃあ遠慮なく……ドロー」

相棒が手札に居らず、呼ぶ手段もないという珍しい初手。ならばと、紅也は様子見の盤面を整えた。

『『サファイアドラゴン』を攻撃表示で召喚します』

『『サファイアドラゴン』 ATK/1900 DEF/1600

現れたのは全身を宝石であるサファイアに覆われたドラゴン。ただ立っているだけで絵になるような美しいモンスターだ。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターン、ドロー」

カードを手札に加えると同時に、亮が動く。

彼が使用するデッキは『サイバー・ドラゴン』を中心としたサイバー流デッキ。そのため後攻からの展開を得意としている。

「相手フィールドにのみモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚出来る——『サイバー・ドラゴン』を特殊召喚」

『サイバー・ドラゴン』 ATK/2100 DEF/1600

やはりと言うべきか飛び出て来たメインモンスター。限度枚数である3枚をデッキに投入しているとはいえ、確実に初手の手札に持って来ているのは流石と言うべきか。

——と、亮の引きに感心している紅也だが、自分はデッキに1枚しか入れていない『真紅眼の黒竜』をほぼ毎回1ターン目で呼び出していたことを忘れていた。

『サイバー・ドラゴン』で『サファイアドラゴン』を攻撃、エヴォリユーション・バースト！」

機械的な動作で開かれた口、そこから発射された攻撃的な炎で『サファイアドラゴン』は破壊された。

紅也 LP4000↓LP3800

「そして魔法カード『タイムカプセル』を発動」

『タイムカプセル』

自分のデッキからカードを1枚選択し、裏側表示でゲームから除外する。発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時にこのカードを破壊し、選択したカードを手札に加える」

「デッキから1枚カードを選び、『タイムカプセル』へ入れる。発動後2回目の俺のターンに選んだカードを手札に加えることが出来る」

(……あれかなあ)

原作知識によって大体の予想を立てる紅也。卑怯ではあるが、知っているものは仕方ない。全力でやれと言ったのは亮なので、紅也は出来る限り全力で戦うつもりであった。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「ドロー……来た」

フィールドにはモンスターこそ居ないが、手札は十分にある。そして無事に相棒も引き込んだ、まだまだ勝負はここからだ。

『黒竜の雛』を召喚し、効果発動。このカードを生贄にすることで、手札からこのモンスターを特殊召喚します」

「——来るか」

卵から顔を出す可愛らしい黒竜を見て、亮が言葉を溢す。その予想通り、紅也は手札から一体のドラゴンを呼び出した。

「——『真紅眼の黒竜』を特殊召喚」

『グルオオオオツ!!』

『真紅眼の黒竜』 ATK/2400 DEF/2000

普段以上に気合の入った咆哮。ソリッドビジョンとしてではない、確実に精霊としてのものだろう。

何故かやる気満々の相棒を不思議に思いながら、紅也はお得意の一撃を繰り出した。

『魔法カード、『黒炎弾』。自分のフィールドに『真紅眼の黒竜』が居るので、相手プレイヤーにレッドアイズの元々の攻撃力分、2400ポイントのダメージを与えます』

『グルオオオオオツ!!』

とびきり大きい火球が亮へ向かって放たれる。本当に2400ポイントで収まる威力だろうか。

しかし、相手はアカデミアの帝王<sup>カイザー</sup>。そう簡単にライフは削れない。

『罨発動、『ダメージ・ポラリライザー』』

ダメージを与える効果が発動した時に発動する事が出来る。その発動と効果を無効にし、互いのプレイヤーはカードを1枚ドロースる』

伏せられていた罨によって『黒炎弾』が無効化される。灼熱の火球は亮に当たる一歩手前で消滅してしまった、初の不発である。

『効果により互いに1枚ドロースる』

流れを掴むための一撃は無効化されたが、レッドアイズが消えた訳ではない。紅也はむしろ良いカードがドロース出来たことを幸運と考えた。

『黒炎弾』を発動したので、もうこのターンにレッドアイズで攻撃することは出来ない。紅也はそう決めつけたが、『黒炎弾』の発動自体が無効化されているのでデメリットも消えたこと気付けなかった。こ

れまで全て決めてきた『黒炎弾』を無効化されたことに対して、少なからず動揺しているようだ。

「カードを1枚伏せて、ターンエンドです」

計2枚のカードを伏せた紅也。ダメージこそ与えられなかったが、悪くない状況だ。希望となるカードも伏せることが出来た。

「俺のターン、ドロロー。——魔法カード『融合』」

「……マジか」

前言撤回である、良くない状況だ。

「フィールドと手札の『サイバー・ドラゴン』2体を融合し、『サイバー・ツイン・ドラゴン』を召喚」

『サイバー・ツイン・ドラゴン』 ATK/2800 DEF/2100  
2体の機械竜が合体した凶悪モンスターが現れた。高い攻撃力もだが、なにより効果が単純にして強力だ。

「このモンスターは一度のバトルフェイズ中に2回攻撃することが出来る。『真紅眼の黒竜』を攻撃！ エヴオリューション・ツイン・バースト！」

「——ッ!!」

紅也 LP3800↓3400

「続けて2度目の攻撃！ プレイヤーへダイレクトアタック！」

「……うわ、結構怖いな」

紅也 LP3400↓600

この世界で行ったデュエルで初めてライフポイントが1000を下回った、今回は流石に相手が強い。

「これでターンエンドだ。……そんなものか？」

「……へっ?」

ドロローしようとしていた紅也へ、亮が言葉を放った。声を掛けられるとは思っておらず、紅也は間抜けな声を出した。

「君のことは明日香から聞いていた、凄いデュエリストだと。だが本当にそうなのか？」

「ああ……なるほど」

自分をデュエルに誘って来た理由がやっと分かった紅也。オブ

ラートに包むという言葉を知らない最上級生へ、苦笑いしながら返答した。

「過大評価……と言いたいんですけど、それを言ったら評価してくれるやつに申し訳ないですからね」

主に隣でキレてる黒竜に、とは言えないが。

「ならば見せてくれ。君の力を」

「……いきますよ。ドロー」

これで手札が3枚。更に良い感じにカードも揃って来た。

「魔法カード『召喚師のスキル』を発動。効果でデッキからレベル5以上の通常モンスター1体を手札に加えます」

普段はレッドアイズをサーチするための魔法だが、現在使用しているデッキにはまだこのサーチ条件に該当するカードが入っている。

「選んだのは——『メテオ・ドラゴン』」

☆6の通常モンスター。ステータスはそれに見合わず低いがこのモンスターを投入しているには別の理由がある。

「畏発動、『レッドアイズ・スピリッツ』。戻って来い……レッドアイズ」

『グルオオオオオオオッ!!!』

これでこのデッキ最強のレッドアイズを呼ぶ準備が整った。意趣返しと言わんばかりに、紅也は1枚のカードを発動させる。

「魔法カード……『融合』」

素材とするのはフィールドの『真紅眼の黒竜』、そして手札へ呼んだ『メテオ・ドラゴン』の2体。

「——『メテオ・ブラック・ドラゴン』を融合召喚」

『メテオ・ブラック・ドラゴン』 ATK/3500 DEF/2000

空から現れたのは隕石のような身体をした禍々しい黒竜。

その圧倒的な攻撃力はかの有名な『青<sup>ブルー</sup>眼<sup>アイズ</sup>の白<sup>ホワイト</sup>龍<sup>ドラゴン</sup>』さえも上回っている。

「実物をこの目で見られるとはな……」

亮の目の前に飛来してきた『メテオ・ブラック』は融合素材の関係で滅多にお目に掛かれるモンスターではない。『メテオ・ドラゴン』だけなら用意することは容易いのだが、『真紅眼の黒竜』は超レアカード。そのため召喚することが出来ないカードとして、シヨップなどでも安く手に入るのだ。

『メテオ・ブラック・ドラゴン』で『サイバー・ツイン・ドラゴン』を攻撃！」

「……くっ!!」

亮 LP4000↓LP3300

初めて亮のライフが削られる。しかしそれ以上に、一気に盤面を逆転されたことが亮の気持ちを昂らせた。

「……すまなかった。どうやら、明日香が言っていた通りのようだ」

「……余裕そうですね」

「そんなことはない。ただ……味のあるデュエルだ」

「……はい。これでターンエンドです」

サイバー流にある相手をリスペクトする精神。紅也はなんとなく、それが少しだけ分かったような気がした。

「俺も応えよう、君の全力に……ドロー！」

勢い良くカードを引いた亮。このターンで決める気のようなだ。あのカードを発動して2回目のスタンバイフェイズ、タイミングとしてはこれ以上ないターンだ。

『タイムカプセル』の効果により、封印していたカードを手札へ加える——『パワー・ボンド』を手札に」

(……やっぱりか)

『パワー・ボンド』

自分の手札・フィールドから、機械族の融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体を融合召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力は、その元々の攻撃力分アップする。このカードを発動したターンのエンドフェイズに自分はこの効果でアップした数値分のダメージ

ジを受ける」

亮が信じる究極の融合カード。

それを使い最強のエースを君臨させるため、準備を整える。

「畏れ動！ 『リビンググデッドの呼び声』。効果で墓地から『サイバー・ドラゴン』を特殊召喚！ 更に手札から『死者蘇生』を発動！ もう1体の『サイバー・ドラゴン』も蘇らせる！」

『サイバー・ドラゴン』 ATK/2100 DEF/1600

『サイバー・ドラゴン』 ATK/2100 DEF/1600

墓地から舞い戻った2体の機械竜。しかし、これだけでは終わらない。

「このターンのドローで、俺は3体目の『サイバー・ドラゴン』を手札に加えている。……これで全ての条件が整った」

場に緊張感が張り詰める。もしこのデュエルをアカデミアの生徒が観戦していようものなら、この先の状況が手に取るように分かるだろう。なにせこれから亮が出すモンスターは数多のデュエリストを打ち倒して来た最強の機械竜なのだから。

「感謝する、竜伊紅也。素晴らしいデュエリストとモンスターへ敬意を表し、俺の全力で望むでしょう」

モンスターは基本的に召喚条件が重ければ重い程、効果やステータスが強くなる傾向にある。

融合系のカードが必要、素材名称指定、同名モンスターが3体、これらの厳しい条件をクリアした者にのみ召喚を許されるモンスター。

亮はサイバー流の継承者に代々受け継がれて来た伝統のカードを——呼び寄せた。

「手札から魔法カード『パワー・ボンド』を発動！ 現れるッ！ ——

『サイバー・エンド・ドラ』

「——『マジック・ジャマー』ッ!!」

その瞬間、時間が止まった。

「……………えっ?」

「……………えっ?」

無効化され、スウーツと消えていく『パワー・ボンド』。それを目の前で見せられた亮は、生まれて初めて出したであろう声を発した。

『『マジック・ジャマー』』

魔法カードが発動した時、手札を1枚捨てて発動できる。その発動を無効にし破壊する」

まさに名前通りのカウンター罫は、亮が勢い良く発動した魂のカードを呆気なく消し去った。

——竜伊紅也は転生者である。

アニメのように画面映えを意識して、バトルの空気など読みはしない。相手のキーカードが魔法カードであると分かっていたので『マジック・ジャマー』を伏せた、それ以上でもそれ以下でもない。

先程の『ダメージ・ポラライザー』の効果で『マジック・ジャマー』を手札へ呼び込んだターンから、彼はこの瞬間のために布石を打っていた。そしてそれは見事に決まった。それだけである。

ヒーローの変身を邪魔した悪役のような気持ちになる紅也。固まってしまった亮へ視線を向けながら、心で言い訳を開始した。

（いやでもあそこで『サイバー・エンド』出されたら『メテオ・ブラック』が破壊されて負けるし……。全力でやれって言ってきたのはあちらさんだし……。そもそも俺だってさっき『黒炎弾』無効化された訳だし……。）

——などと心の平穏を保つため、紅也は思いつく限りに自分を正当化した。



そんな言い訳を繰り返していると、亮が硬直から復帰した。

「タ、タ、ターンエンド……」

一目で分かるレベルに動揺していた。

それを見て更に焦る紅也。やはりやらかしてしまったと、自分を責めた。

（ああああアアツやつちまったあああ）

内心騒ぎながらも、まだ勝負が決まった訳ではないと思考を切り替える。深呼吸を一つしてから、デッキトップへ指を掛けた。

（そ、そうだよ。まだ俺が勝つと決まった訳じゃない。このまま攻撃しても向こうのライフは削り切れない、大丈夫だ。あれは勝負を決める一手にはならない）

ポジティブに考える紅也。『マジック・ジャマー』の発動コストにより手札は0なのだ。相手の場には2体の『サイバー・ドラゴン』、伏せカードこそないが次のターンで勝負はまず決まらない。

（大丈夫、大丈夫）

神様仏様レツドアイズ様。困った時の神頼みである。

「ド、ドロー」

勝負はこれから。そう自分に言い聞かせ、カードをドロー。その瞬間、このデュエルの勝敗は決した。

「……あつ」  
「？」

とても細い声を溢す紅也。そんな彼を不思議そうに見る亮だったが、震えた手により発動された1枚の装備魔法を確認し、自分の結末を理解した。

『巨大化』

自分のLPが相手より少ない場合、装備モンスターは攻撃力は元々の攻撃力の倍になる。自分のLPが相手より多い場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力の半分になる」

LPの発動条件は満たしている。装備された『メテオ・ブラック』はその身体を巨大化させた。

『メテオ・ブラック・ドラゴン』 ATK／3500 ↓ ATK／7000

「……………すみません」

跳ね上がった攻撃力7000という超火力を受け、『サイバー・ドラゴン』はネジ一つ残らず消し飛ばされた。

亮 LP3300↓LPO

紅也はこの日——アカデミア最強に勝利した。

????????????????????????????????

……………はあ、終わった」

亮とのデュエルが終わり、ようやく《ライイエロー》の寮が見える所まで帰って来た紅也。疲労はMAXであり、身体も心も限界であった。

敗北した亮はと言えば、1分程爆笑した後「君と戦えて良かった。ありがとう、竜伊……いや、紅也」などとカッコいい台詞を言い残して去って行った。最初から最後までやりたい放題の好き勝手。あの豪胆さ、帝王カイザーと呼ばれるだけのことはある。  
「っ、疲れた。早く寝たい……」

既に空には月がある。夕食と風呂を済ませて早くベッドにダイブしたい。そんなことを考えていた紅也の頭に、コツンと軽い衝撃が走った。

「いてっ……ええ？ 今のお前？」

『グルウ』

「え……お前、今実体化した？」

『グルウウウ』

紅也の言葉に不機嫌そうに頷く黒竜。

紅也は取り敢えず、「お前実体化出来るんかい」というツツコミよりも先に黒竜の機嫌が悪い理由を確かめることにした。

「そういえばさっきのデュエルでもかなり怒ってたな。どうした？」

『……………』

理由を訊ねるとやはり黙ってしまふ。それ程言いたくない理由なのだろうか。

(……怒る、怒る、怒る。んー、なんか気に入らないこと……あつ)　そして思い付く一つの心当たり。自意識過剰かとも思うが、技名を叫ばないだけでご機嫌斜めになる精霊だ。この黒竜相手なら当たっている可能性の方が高いまである。

「カード磨きの邪魔されたから……とか?　——つて、そんな訳ないか」

「……………グウ」

——そんな訳あつた。

やはり大分懐かれていますらしいと、紅也は改めて黒竜からの好感度を確認した。そろそろ察が近いので、口ではなくテレパシーの方で言葉を送る。

『飯と風呂済ませたら磨いてやるからな』

『……………』

特に反応を見せない黒竜だが、気持ち尻尾が揺れているように見える。

ご機嫌になった相棒を微笑ましく思いながら、紅也はようやく察へ帰って来たのだった。

## く推しの旅立ちく

本日、デュエルアカデミアは半日で授業が終わる日であった。

デュエリストとしての時間を作るため、週に2日はこういった日が設けられている。

体育の授業を終えた三沢、十代、翔、そして何故か連れて来られた紅也の4人は《ライイエロー》の寮へ来ていた。

「いや〜！ 三沢は野球上手いな〜！」

「アニキ結局コテンパンだったスもんね」

「ふっ、秘訣はこれさ」

能天気に着める十代に、自らが使用したバットの裏側を見せる三沢。そこはペンで書かれた数式で埋め尽くされており、数学アレルギーを持つ者が見れば倒れかねないバットであった。

最早狂気すら感じる所業に、紅也が引き気味にツッコんだ。

「……なんだそれ」

「勝利の方程式というやつさ。打撃だけじゃないぞ、紅也。俺が投げた球も全て計算通りのものだった」

「それで十代を完封か。無敵だなお前」

「次は絶対俺が勝つからなっ！」

先程の体育で行った野球。内容は《ライイエロー》と《オシリスレツド》での試合だった。互いにエースである三沢と十代の対決は三沢に軍配が上がり、そのまま《ライイエロー》が勝利を収めたのである。

そしてその対決に勝利した三沢から敗北した十代達へ、罰ゲームと称して1つの頼みが通された。そのためこうして寮までやって来たという訳だ。

「それで僕達への罰ゲームってなんなんスか？」

そんな翔の言葉に不敵な笑みを浮かべ、三沢は取り敢えず3人を自分の部屋へ案内した。

「なんじやこりやあつ!？」

叫ぶ十代と翔。部屋に入ると同時に、衝撃的過ぎる光景が視界を襲ってきたからだ。部屋の壁、天井、机に椅子、至る所にまでビツシリ書かれていたのは数々の数式であった。

「俺が思いつくままに書き留めた計算式さ。君達には……この星々のビッグバンの手伝いをしてもらいたい！」

笑顔でモップとバケツを差し出す三沢。そんな彼を見て、別に罰ゲームを受ける立場ですらない男は小さな声で呟いた。

「……えっ、俺も?」  
紅也はビッグバンに巻き込まれた。

????????????????????????????????  
「はあ……」

引越しの手伝いをした時の疲労を思い出す紅也。昼飯を済ませた後これ以上付き合いきれないと、お馴染みの休憩スペースへ逃げ込んでいた。

ソファーに全身を預け、年寄りのようなため息を溢している。

「あら、竜伊くん。お昼寝?」

もう暫く動きたくない。紅也がそんな風に天井を見つめていると、彼に向けて女性のものと思われる声が上がった。

「……天上院、か」

「ご、ごめんなさい。声を掛けちゃダメだったかしら?」

ゲツ、と声を溢さなかったのは紅也のナイスプレーだろう。しかし表情には出してしまったらしく、明日香は何か悪いことをしてしまったのかと謝罪した。

もちろんそんな訳がないので、紅也は慌てて否定する。

「い、いや、そういう訳じゃなくて」

「そう? ——じゃあ、同席しても良いわよね?」

「えっ……はい」

実際すぐにこの場を立ち去りたかった紅也だったが、あまり露骨に避けるような行動も気分が良くない。紅也は諦めて1人分のスペースを空けた。

「ありがと。何してたの？」

「別に……休憩だよ。三沢の部屋でペンキ塗り手伝わされてさ」

「ペンキ塗り……？」

「深く考えないで良いよ。秀才でいるには、それなりの努力が必要なんだなって話」

「そ、そう。よく分からないけど、ここで会えてよかったわ」

「何か用だったか？」

疲労している理由を話し終えた紅也。そんな彼に明日香はデツキを見せながら話し出した。

「デツキのこと相談したかったの。……最近会えてなかったから」

「ちよつと待て、その言い方は良くない。誤解される」

「……誤解？ 何のこと？」

きよとんと首を傾げる明日香。

顔が良く、性格も良く、スタイルも良い。そんなモテる要素しかない人間でありながら、自分がモテることを理解していない人種というのはとても厄介だ。男女問わず、醜い嫉妬は生きていれば必ず湧いてくるものなのだから。

とても目立つ存在の明日香は、休憩スペースへ入って来た時から周りの視線を集めていた。どこへ向かうのかとそわそわ見ている男子生徒、その美しさに目を奪われていた女子生徒。

しかし、そんな注目の存在が話し掛けたのは——地味で冴えない1人の男。紅也が緊張感を持つのも無理はなかった。

「……ちよつとこつち来て」

「た、竜伊くん？」

ソファアールから立ち上がり、移動を開始した紅也。驚きながらも明日香がついていくと、立ち止まったのは広いスペースから離れた壁際にある端の方の席であった。

「天上院は奥に座ってくれ」

「え？ え？」

「ほら早く」

「あつ、ちよつと……！」

戸惑っている明日香を無視し、紅也が奥へと座らせる。その後、自分も明日香の隣へ座ることで準備完了。

この位置にある席であれば大勢の生徒に視線を向けられることなく、仮に近くを歩かれたとしても紅也が壁になって明日香のことは見えない。心の平穏を保つ、安心空間の完成である。

——と、思ったのだが。

(……ミ、ミスった。——近い!!)

端の方なだけありスペースは狭い。恐らく1人用のソファアールと席なのだろう、並んで座る紅也と明日香の肩はピッタリと触れ合っていた。

早く周囲の視線から逃れたいという気持ちが先走り、余りにも初歩的な事を見逃してしまつたようだ。

「あ、あの……。竜伊くん？」

「わ、悪い！ そんなつもりはなくて！」

「……別に、怒ってはないけど。なんでこの席に？」

セクハラまがいの行動にも寛容な態度の明日香。これはモテるなあと紅也が確信しながら、状況の説明を始めた。

「——そういう訳で、目立たない場所へ行きたかつたんだ」

「気にし過ぎじゃないかしら。私、そんなこと言われたりしてないわよ。」

「いや、天上院はそうでも俺は違うから」

「どうして？」

「それは……」

目と目が合ったらバトルと言わんばかりに殺意剥き出しで挑んでくる《オベリスクブルー》達。既に挑まれただけで62人、デュエルせざるを得なかったのが24人、デュエルすることを確約した相手は後18人も残っているのだ。紅也は青い制服とデュエルが嫌いにな

りそうだった。

「……まあ、色々あってさ。だから悪いけど、今後目立つ場所で話し掛けてくるのやめてもらっても——」

思わず固まる紅也。隣に座る明日香の顔を見たことが原因だ。

変わらず美しく、そして可愛らしい顔立ち、しかしその瞳は少しばかりの悲しみを感じさせた。

「……と、思ったけど。よく考えたら別にそんなこともないな、うん。俺はデュエルの相手が出来てラッキーだし、天上院とデッキの相談するのも楽しいし勉強になるし、良いことだらけだったわ、うん」

とても早口で意見をひっくり返す紅也。明日香の予想外の反応を見て、本能的に不味いと察した結果だった。

「……本当に、迷惑じゃない?」

「あ、ああ。迷惑じゃない」

「私……竜伊くんには色々頼ってるから。そう思われたとしても当たり前なんだって……」

「——天上院。あの件に関しては俺から言い出したんだ。迷惑なんて……思ってる筈ないだろ」

「……竜伊くん」

普段へタレが男気を見せる。やはり年下に弱いのだろうか、妹のように思えて仕方がない。紅也は保護欲にも似た感情を抱きながら、明日香と視線をぶつけた。

「……………」

暫く見つめ合っていると、へタレがへタレ出す。自分のしていること、言っていることに羞恥心を感じ始めたのだ。隣で見ていた黒竜は鼻で笑った。

「……と、とにかく! そういうことだから気にしなくてよし。これまで通り頼む」

「わ、分かったわ……。よ、よろしくお願いします」

「こ、こちらこそ」

なんとも言えない空気だったが、どうにか入れ替えることに成功。デッキの構築へ話を移すことが出来たのだった。



「じゃ、じゃあ……良い？」

「あ、ああ。もちろん」

声だけを盗み聞きしたことで更に変な方向へ勘違いした《オベリス  
クブルー》達が、般若の形相で紅也へデュエルを挑み——黒竜に消え  
ないトラウマを植え付けられたとか。

????????????????????  
アカデミア中心にあるデュエルフィールド。そこには黄色の制服  
を着た三沢大地と青い制服を着た万丈目準が、勝敗によって互いが所  
属する寮を入れ替える条件でデュエルを行っていた。

十代に敗北したことをきっかけにエリート街道から外れた万丈目。  
このデュエルに負ければ《ライイエロー》へ降格が決まる。そんな  
崖っぷちな彼は、三沢のデツキを海へ捨てるというデュエリストとし  
て最悪の反則を犯した。

——しかし、勝負は三沢の勝利で終わる。

捨てられたデツキは調整用の物であり、本命は肌身離さず常に持ち  
歩いてきたからだ。計算され尽くした三沢の完璧なタクティクスに、  
絶対に負けられないというプレッシャーを背負った万丈目が勝てる  
訳もなく、勝敗はすぐに決した。

「カードを大切に出来ない者は、デュエリスト失格だぞ」

「……くっ」

三沢のド正論に脱力する万丈目。最低の行いをしてまで臨んだ  
デュエルに敗北したショックは並大抵のものではなかった。勝者で  
ある三沢が《オベリスクブルー》への昇格を断ったことで残留という  
形に落ち着いたのも、万丈目のプライドを更に深く傷付ける要因と  
なった。

観戦していた十代、翔、明日香、亮、紅也の5人。それぞれが似た  
ような反応を見せている中、1人の男は必死にカードを押さえ込んで

いた。

(——ちよ、ちよつと、やめろつて！　これ以上追い討ちしたら万丈目折れるつて！　戻つて来れないぐらい壊れるつて！　丸刈りにでもし始めたらどうすんだよ!?)

押さえ込んでいたのは言わずもがなレットドアイズ<sup>相棒</sup>。

以前に万丈目が紅也に言った暴言をまだ根に持つており、実体化して頭を叩こうとしていたのだ。紅也はそれを必死になつて止めていた。

(……万丈目)

崩れ落ちる万丈目を見ながら、紅也は思い出す。あの男が、そんなに柔ではないことを。

(……次会う時は、黒い服<sup>黒い服</sup>だな)

こんな状況だというのに、紅也の頬が少し緩む。

生まれ変わった万丈目は弱小と蔑まれるモンスター達を使いこなし、伝説のレベルモンスターすらも使いこなし、最後の最後まで見ている者達を魅了する最高のデュエリストへと変貌を遂げる。

原作を知っている紅也にとつて万丈目は——。

最高のエンターテイナー<sup>推しキャラ</sup>なのだから。

## 青春の黒炎

冬休みは居残り組としてアカデミアに残り、黒竜と共にまったりした時間を過ごした紅也。

少し長めの休みも終わり、再び授業とデュエルに精を出していた。

「……よっ！」

「はあっ！」

「よいしょっ！」

「ふっ！」

規則的に続くボールが跳ねる音。場所がテニスコートであることから何が行われているのかは一目瞭然だ。

この間の野球に加え、サッカー、バスケット、バレーに水泳、そして現在がテニス。ここまで体育の種類が充実しているのも、やはりデュエリストには体力が必要ということなのだろう。

そんなことを考えながらラケットを振っているのは、冬休み前《オベリスクブルー》の男子生徒達を相手に18連勝した紅也。黒炎弾パーティーが開催されており、久しぶりに『黒炎弾』の人の異名を轟かせることになった。

そしてそんな紅也の相手をしているのは、紅也が18人切りしなければならなくなった原因である明日香。

普段の見慣れた制服姿とは違い、地味なジャージであるにも関わらず様になっているのは顔面偏差値の高さが成せる技か。

(……ていうか、アレはいかんだろ)

そしてこのラリーで紅也は苦しめられていた。若返っているため体力の問題ではない、問題は——明日香にあった。

(目のやり場に……困る！)

ラリーをしているため、当然明日香のことが目に入る。しかしそうなれば同時に、視線が奪われる魔力を放つ物体が猛威を振るうのだ。

ジャージということを押さえつけられてはいるものの、強く主張する身体の一部が右へ左へと激しい動きをすることで、とんでもないことになっている。

「……ああっ！」

「やった！ 私の勝ちね！」

遂に集中が途切れ、ボールに追い付けなかったようだ。そんな彼にしたり顔でピースする明日香。そんな彼女を見て、むしろ負けて拷問から解放されたようにすら感じる紅也だった。

「はあ、きつつ。——ッ！ 避ける天上院ッ!!」

上体をなんとか起こしながら空気を取り込もうとする紅也。

深呼吸をしようとした瞬間、明日香へテニスボールが飛んで来たのを確認。危険を伝えるため精一杯の大声で叫んだ。

そんな危機的状況の明日香を救ったのは、突如走り込んできた一人の男だった。華麗なラケット捌きでボールを打ち返し、審判をしていたクロノス教諭へダイレクトアタックした。

「大丈夫？ 怪我しなかったかい？」

キラーンと光る白い歯、爽やかな顔、優しそうな声と、まさしく王子様といった雰囲気だ。

周りの女子達は目をハートにしているが、明日香は冷静に助けられたことへのお礼をした。

「ええ、助けて頂いてありがとうございます」

「……い、いやあ、知らなかったよ！ 我が《オベリスクブルー》に君のような美しい人が居たなんて！」

「は、はあ……」

明日香の顔を見てだらしなく顔を緩ませる男、名を綾小路ミツル。《オベリスクブルー》の3年生であり、綾小路モーターズの御曹司というエリート中のエリート。玉の輿に乗るなら狙い目どころの騒ぎではない。

デュエルの腕前も相当なものらしく、あのカイザー亮に引けを取らないという噂すら流れている。

明日香がキザな態度に戸惑っていると、そんな状況から抜け出す救

いの声が上がった。

「天上院、大丈夫か？」

「竜伊くん。ええ、平気よ。こちらの先輩が助けてくれたの」

「そうか。先輩、ありがとうございました」

「え？ ……あ、ああ」

礼を言われる綾小路だったが、紅也と明日香の親しげな雰囲気を感じ取る。ピクピクと眉をひくつかせながら、紅也へ声を掛けた。

「き、君は……誰かな？」

「《ライイエロー》で1年の竜伊紅也です」

「竜伊……聞いたことないな。にしても《ライイエロー》か」

現在、綾小路の中は嫉妬の感情で溢れかえっていた。一目惚れにも似た感情を明日香へ向けていた所に登場した仲が良さそうな男。青春を信条とする綾小路にとって、自身の恋敵が現れたも同然だった。

「あ、明日香くんとは仲が良いのかい？」

「……普通ですね。デツキの話し合いとかならよくしますけど」

「なっ……。デ、デツキの相談……！」

普段当たり前のように繰り返していることだったので、特に何も意識せず答えた紅也。しかし、それが間違いであった。

（せ、宣戦布告……!!）

綾小路がそう捉えるのも無理はなかった。デュエリストにとって命程に大切なデツキの話し合いなど、余程親しくなければ出来ないことなのだ。しかも親しくなりやすい同性ではなく、年頃の男女。そういった考えをしてしまうのも当然と言えば当然だった。

熱き心を持つ青春男、綾小路ミツルは覚悟を決めた。

「——竜伊紅也くん！ 君にデュエルを申し込むッ！」

紅也へラケットを突きつけながら、決闘を挑んだのだった。

「……………あえっ？ 俺？」

更衣室へ行こうとしていた紅也はフリーズした。

(どうして……こうなるかな)

ジャージから着替え、再びテニスコートへ出てきた紅也。こっそり逃げようかとも思ったのだが、更衣室前で待ち伏せされては逃げようがなかった。

「さあ！ デュエルディスクを構えたまえ！」

紅也の左腕に無理矢理付けたデュエルディスクを構えろと吠える綾小路。目がヤバいと、紅也は素直にビビっていた。《オベリスクルー》の人間はどうしてこう勝手なのだろう。1年から3年まで揃いも揃って自分勝手、紅也は完全に青色が苦手になった。

だが、紅也はまだデュエルを受けた訳ではない。これから上手いこと綾小路に機嫌を直してもらい、どうにかデュエルを回避しようとしていた。

そのためにすることは、下手に出ることだ。

「あ、あのー、そもそもなんで俺は綾小路先輩みたいな凄い人にデュエルを挑まれてるんですかね？」

「ふっふっふ！ 分かってるようだね。僕が君に挑む理由——それは明日香くんだ！」

「て、天上院？」

まさかの理由に、紅也は顎を落として間抜けな顔を晒した。

(またこのパターン……。《オベリスクルー》の男子はカイザー以外みんな脳内お花畑なのか?)

顔に手を当て、ため息を溢す。そろそろ本格的に参ってきた紅也。逃げても逃げても、倒しても倒しても、次から次へと現れるこのパターン。

だがこうして真正面から挑んでくる分、綾小路はマシな部類かもしれない。数人で囲まれた時は流石の紅也もプツンしそうになったのだから。

「俺と天上院は何もありませんよ。ただの友達です」

「ただの友達？ 白々しい嘘はやめたまえ！ そうだろう？ 君達  
！」

「……君達？」

バツと手を向けた先に居たのは、裏切り者達であった。

「そうだー！ 紅也と明日香は仲が良いぞー！」

「そうよー！ 明日香さんはよくそいつと会ってるわー！」

「殿方とデツキについてお話しするのはその方だけですのー！」

元氣よく腕を上げながら叫ぶ裏切り者1号、十代。そして続くのは  
明日香の友達である裏切り者2号と3号の枕田ジュンコと浜口もも  
えだった。

「あ、あいつら……」

「彼らはこう証言しているんだ。認めたまえ！ 我が好敵手<sup>ライバル</sup>！」

十代は久々に紅也のデュエルが見られる&ドロップンによる買収、  
ジュンコとももえは面白そうな展開に悪ノリし十代を買収して参戦、  
紅也の敵になりたくなかった翔は颯爽と立ち去った。

一方的に奪い合う対象とされた明日香はと言えば——紅也と同じ  
く顔に手を当て、深いため息を溢していた。

なにやら綾小路は話を聞かないタイプ。十代もデュエルさせる気  
で、友人達もそちら側。明日香1人でどうにか出来る状況ではなかつ  
た。

(……ごめんなさい、竜伊くん)

(……うっそお、天上院)

アイコンタクトで諦めを告げた明日香。それを受け取り絶望する  
紅也。テニスコートは混沌と化していた。

「さあさあ！ 僕とデュエルだ！ ——それとも何か？ 所詮《ラー  
イエロー》程度の君では、僕を相手にするのが怖いのかい!？」

挑発するためだろう。紅也を貶すような発言をする綾小路。しか  
し相手は精神年齢25歳、そんな安い挑発など効きはしない。

そう——紅也には。

(ははっ、そんな挑発に乗るかっての。こちとら元社会人……ん?)

内心笑っていた紅也だったが、そこで異変に気付く。

自分の意思で動かしていないにも関わらず、何故か——自分の左腕が上がっていた。

(……な、なんで?)

デュエルディスクを付けた左腕を、綾小路へ突き出すように動かしたのだ。

「ふっつ、受ける気になったようだね！ それでこそ僕の好敵手だ！」  
「い、いや！ そうじゃなくて！ ——ええっ!?!」

言葉とは裏腹に、デュエルディスクを起動する紅也。足も勝手に動き出し、綾小路から距離を取る。デュエルを開始する準備があつという間に整った。

「話した条件は覚えているね！ このデュエルに勝った方が明日香くんのファイアンセになるんだ！」

何をバカなことを。紅也は素直にそう思ったが、今は自身に起きている異変の方が重要だ。

(なんでえ？ なんで身体が勝手に動くの?)

ここまでの行動、彼の意志によって動かされたものは1つとしてない。頼れる相棒に泣きつくため話しかけようとしたが——その前に犯人を見つけた。

『お前かああああアアアツツ!!!』

『グルウ』

『グルウじゃないから！ 何してくれてんだお前！ 以心伝心なんだから俺がこのデュエル断ろうとしてたの分かってただろ!?! レッドアイズくん!?!』

『グルウウウ』

1ミリも悪びれていない黒竜。やってやった感全開のドヤ顔を見せられ、紅也は盛大に肩を落とした。

どうやら綾小路の発言にムカついたらしく、紅也の身体を乗っ取り操作したようだ。

『お前……なんでも出来るな』

自身の精霊が危ない存在かもしれない。そんなあり得ない可能性



を考えてしまう程、紅也は頭を抱えていた。

こうなればデュエルが始まる。逃げる選択肢はもう無い。久しぶりのヤケクソである、もうどうにでもなれ。紅也はデュエルディスクを構えた。

「準備はいいね？」

「はあいッ!!」

「お、おお……良いやる気だ。では行くよー!」

若干紅也に押されながらも、デュエル開始の宣言がされた。

「デュエルツ!!」

綾小路 LP4000

紅也 LP4000

「僕の先攻! ドロー! 先手必勝! 魔法カード『サービスエース』を発動!」

「サ、サービスエース?」

思わぬカードの発動に、ヤケクソ状態が解除。紅也は戸惑いの声を上げた。

「このカードはね。僕が手札から除外したカードの種類を君が当てる、外した場合は君に1500ポイントのダメージを与えるんだ」  
「はあっ!?!」

『『サービスエース』

自分の手札のカード1枚を裏側表示で除外して発動できる。相手はそのカードの種類（魔法・罠・モンスター）を選ぶ。当たった場合はこのカードとそのカードを破壊する。外れた場合は相手に1500ポイントのダメージを与える】

「さあ、選びたまえ」

「……ま、魔法カード」

「残念! モンスターカードだ! そして『サービスエース』の効果で君に1500ポイントのダメージだ!」

「くっ」

紅也 LP4000↓LP2500

一気にライフが削られる。なんとというインチキ効果、『黒炎弾』など可愛いものではないか。

(……アニオリカードってやつか)

アニメオリジナルカード。それは現実でカード化されることのないカードであり、その多くのもにインチキ効果と呼べるものが存在する。

こんなカードがこの時代に現実へ出ていけば、遊戯王というカードゲームは間違いなく崩壊していただろう。

「1510。僕はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

「……ドロー」

いきなりの先制攻撃、手痛いのを喰らってしまった。しかしフィールドには1枚の伏せカードのみ、相手のデッキは中々に特殊なようだ。

『マスクド・ドラゴン 仮面竜』を召喚」

『仮面竜』 ATK/1400 DEF/1100

『魔法カード『おろかな埋葬』により、『ミラーージュ・ドラゴン』を墓地へ。そして『死者蘇生』で特殊召喚します」

『ミラーージュ・ドラゴン』 ATK/1600 DEF/600

「そんな攻撃力のモンスターをわざわざ呼ぶとは、何が狙いだい？」

「……『仮面竜』でダイレクトアタック」

爽やかに訊ねる綾小路を無視し、紅也は攻撃宣言を行った。

「甘いよ！ 罨発動、『レシーブエース』！ ……何故発動しない!? うわあっ！」

綾小路 LP4000↓2600

『ミラーージュ・ドラゴン』が存在する限り、相手プレイヤーはバトルフェイズ中に罨を発動出来ません」

「……ッ！ あ、ああ！ そうだったね！ 僕としたことが！」

明らかに知らなかった様子。まあドラゴン族を使わないのであれば無理もないと、紅也は深く考えなかった。ちなみに『レシーブエース』もアニオリカードであり、効果は凶悪。発動させなかったのは正

解だ。

『レシーブエース』

相手モンスター1体の直接攻撃時に発動出来る。その攻撃を無効にし、相手に1500ポイントのダメージを与える。その後、自分のデッキの上からカードを3枚墓地に送る」

「続けて『ミラージユ・ドラゴン』でダイレクトアタック」

「うわあああつー！」

綾小路 LP2600↓1000

2体のドラゴンによつて、やられた以上にライフポイントを削つた紅也。1枚のみの罫を警戒し、相棒ではなく『ミラージユ・ドラゴン』を選んだのが正解だったようだ。

『……グルウ』

『拗ねるなつて、勝ちにいくから』

納得いかなそうな声をデッキから出す黒竜。紅也は苦笑いしながらそれを宥めると、次のターンへの布石を置いてターンを終了した。

「カードを2枚伏せて、ターンエンドです」

「僕のターン！ ドロー！」

ギリギリのライフだからか、気合を込めてドローした綾小路。険しい顔のままカードを動かした。

「よし！ 僕は2枚目の『サービスエース』を発動！ さあ紅也くん、選びたまえー！」

「……モンスターカードで」

「残念！ 魔法カードだ！ 1500ポイントのダメージを受けてもらうー！」

(ええええええ)

紅也 2500↓1000

あのカード本当になんなんだろう。紅也が納得のいかない顔で睨むが、綾小路はどこ吹く風。気にした様子もなく、戦術を続けた。

「これで終わらせるよ！ 魔法カード、『スマッシュエース』！」

『スマッシュエース』

デッキの一番上のカードをめくる。そのカードがモンスターカー

ドだった場合、相手に1000ポイントのダメージを与える。めくったカードは墓地に送る」

「ま、またあ?」

「ドロー……モンスターカード! これで僕の勝ちだ!」

勝ちを確信し高笑いを上げる綾小路。しかし紅也も伊達に強者達と戦ってきていない、日々成長しているのだ。

「罨発動! 『ダメージ・ポラリライザー』。ダメージを与える効果が発動した時に発動出来ます。発動と効果を無効にし、互いのプレイヤーは1枚カードをドローします」

ドローで中々良いカードを引いた。この罨の効果でカードを引くと、何か補正でも乗るのだろうか。

「ぐぬぬ、首の皮1枚残したか……。でも君が引かせてくれたカードが、僕を勝利に導いてくれる! まず準備させてもらおうよ。『強欲な壺』! カードを2枚ドローだ!」

良いカードを引いたのは向こうも同じようだ。

チートカードのオンパレード。全然爽やかではない。

「引きの強さも実力の内! 君のお陰で条件は整った! 僕は永続魔法『デュース』を発動!」

「デュ、デュース……?」

徹底してるなど、むしろ感心してしまう紅也。

「こいつは互いのプレイヤーのライフが共に1000ポイントである時に発動出来る永続魔法。……だ、だからあの時ダイレクトアタックを受けたのは——計算通りだったという訳さ!」

(いや、どんだけ限定的な発動条件だ)

焦ったように言い訳するチート部長を流し、発動されたカードへ注目する紅也。

明らかに重過ぎる発動条件。となれば、強力な効果が秘められている可能性が高い。そんな紅也の予想は、見事的中することとなった。『デュース』の効果により、互いのプレイヤーはバトルフェイズ中1体のモンスターでしか攻撃出来ない。更にライフポイントが0になっても敗北はせず、2回連続でダメージを受けた時にのみデュエル

に敗北する」

(……勝利条件の変更。また面倒なカードを)

『『デユース』』

お互いのライフポイントが1000ポイントの時に発動出来る。お互いのプレイヤーはバトルフェイズ中にモンスター1体のみでしか攻撃出来ない。

以後、ライフポイントに関係なく相手に2回連続でダメージを与えたプレイヤーが勝者となる。この効果はターンを挟んでも有効とし、相手にダメージを与えられた時点で連続ポイントは無効となる。

(このカードがフィールド上にある限り、ライフポイントが0になっても敗北にはならない)

「やはりこのターンでフィニッシュよ！ 『伝説のビッグサーバー』を攻撃表示で召喚！」

『伝説のビッグサーバー』 ATK/300 DEF/800

「そして僕の最後の手札！ 『ファイヤー・ボール』！ 相手ライフに500ポイントのダメージを与える！」

(……『バーン』の人って呼び名を広めてやろうかな)

紅也がライフにダメージを受けたことで、綾小路にアドバンテージが与えられた。

紅也 LP1000↓500

綾小路 ○●

「そして『伝説のビッグサーバー』は相手プレイヤーにダイレクトアタックが出来る！ これで終わりだ！ ビッグサーバー!!」

勇ましい掛け声と共に、『ビッグサーバー』がサブを紅也へ向けて叩き込んだ。これを受ければ特殊条件により敗北、防がない訳がない。

「畏発動！ 『ガード・ブロック』！ 戦闘ダメージを0にして、カードを1枚ドロー！」

優秀な畏によりダメージを回避した紅也。ダメージさえ受けなければ『デユース』の効果で敗北することはない。綾小路は絶好のチャンス逃した。

「く、くううう!! あと一步の所で! ターンエンドッ!」

「俺のターン、ドロロー。……おっ」

この世界にて行うデュエルで、初めて手札にきたモンスターを目にした紅也。一応未来のカードなのだがカードパワーは控えめと考え、普段使用するデッキに投入していたモンスターだった。

今の状況には最善のカード、デッキにも懐かれ始めたかもしれない。

『『デュース』の効果でプレイヤーはモンスター1体でしか攻撃出来ない! 僕のライフに2回連続でダメージを与えることが出来るかな!?!』

「出来ます」

「なにいいイイツ?!」

まさかの即答に、雷が落ちたような衝撃を受ける爽やか王子。そんな男への鬱憤を晴らすかのように、紅也は1体のドラゴンを呼び出した。

『『仮面竜』と『ミラージユ・ドラゴン』を生贄にモンスターを召喚します』

手札から呼び出すのは、”レッドアイズ”の名を冠する黒竜。初のお披露目に、紅也も少し興奮しながらデュエルディスクへ置いた。

「——『レッドアイズ・ブラックフレアドラゴン真紅眼の黒炎竜』」

『真紅眼の黒炎竜』 ATK/2400 DEF/2000

名に”炎”と付いている証と言わんばかりに、身体中から噴き出す激しい炎。獰猛さの中にも美しさを感じる、そんな黒竜が現れた。

「おおっ!! 紅也! そのドラゴンめっちゃカッコいいぜ!」

「た、確かにね!」

「ワイルドですわ〜!」

裏切り者1号2号3号から上がる賞賛の声。裏切られたとはいえ自分のモンスターを褒められて悪い気はしない。むしろ初めて出せ

たブラックフレアなので、紅也のテンションは普段より高くなっていた。

「レ、レッドアイズ……なるほど、やはり君は僕の好敵手ライバルに相応しい男のようだ。だがそんなモンスターを召喚した所で話は変わらない！  
一体しか攻撃出来ないだからな！」

そういつた説明は死亡フラグ。遊戯王の世界では常識である。

「この黒炎竜は姿を変えることが出来るんですよ。——魔法カードデュアルサモン『二重召喚』。このターンのみ、俺はもう一度召喚権を得ます」

『二重召喚』

このターン自分は通常召喚を2回まで行う事が出来る」

「しよ、召喚権？」

『真紅眼の黒炎竜』はデュアルモンスター。召喚権を使うことで、通常モンスターから効果モンスターへ姿を変えるんです。俺は『ブラックフレア』を通常召喚扱いで再召喚、効果を与えます」

より一層激しい炎を噴射する黒炎竜。それを見て腰が引ける綾小路だが、自身の有利は揺るがないと強気で持ち直す。

「デュ、デュアルモンスター……？ そんな訳も分からないモンスターがなんだと言うんだ!!」

『ブラックフレア』で『伝説のビッグサーバー』を攻撃」

圧倒的な攻撃力差の前に、『ビッグサーバー』はなす術もなく焼き尽くされた。

綾小路 LP1000↓LPO

紅也 ○●

「ぐああああっ!!」

唯一のモンスターが破壊され、戦闘ダメージを受けたことでアドバンテージが取られる。ライフは0になったがまだ敗北ではない、これでは1手足りないのだ。

「だ、だが、終わりだろう……？ 僕のターン——」

「慌てないでください、まだ『ブラックフレア』の攻撃は終わっていませんよ」

「……な、なんだと」

取り乱す綾小路に、紅也はトドメを刺した。

『ブラックフレア』の効果。このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時に発動。——このカードの元々の攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与えます」

「バ、バカな……」

「先輩に2400ポイントのダメージです。……ゲームセット、ですね」

黒一色ではなく純粋な紅の炎が混ざり合った火球が生成され、勢いよく発射された。綾小路は灼熱の炎に焼かれ、黒炎竜の咆哮によつて——敗北の二文字を押し付けられたのだった。

紅也 ○○

——紅也はストレスを発散した。

??  
敗北した現実を受け止めきれなかったのか、綾小路は泣きながら走り去ってしまった。そのため、現在テニスコートには1年生しか居ない状況だ。

「——言い訳はあるのかしら?..」

「ありません」

「ありませんわ」

腕を組みながらキレているのは明日香。裏切り者である1号2号3号を全員正座させ、お説教タイムを実行していた。

紅也も参戦するかと思いきや、『ブラックフレア』で派手に勝利したことによりストレスが発散。仏のような心で裏切りを許したのだった。

『……ありがとな、『真紅眼の黒炎竜』。お疲れ様』

手にカードを持ち、活躍を労う紅也。カタカタと少し震えながら反応する黒炎竜を微笑ましく眺めていると、右隣から不服そうな声が聞



こえてきた。

『——グウウ』

『わ、悪かったよ。でも、今回は『ブラックフレア』の番だったってことでさ？ お前は毎回出てたんだから、一回ぐらい譲っても……』

『グルウオツ!!』

『分かった分かった！ 次は絶対出てもらおうから！ なっ？ 機嫌直せよ？』

『……グルウ』

ギリギリ納得してくれたのか、カードへと戻った黒竜。本当に出たがりな相棒である。

「た、竜伊くん」

「ん？ どうした、天上院」

「今日は、その、ごめんなさい」

「天上院が謝ることじゃないだろ。……っていうか、十代達どうした？」

「気にしないで」

「いやでも」

「気にしないで」

「……お、おう」

有無を言わせぬ迫力で、明日香は紅也を黙らせた。

飛び火してきては敵わないと、紅也はいつの間にか姿を消している裏切り者達の現状を頭から放り出した。

「ああー。……疲れた」

「そ、それで、竜伊くん。デュエルの条件のことなんだけど」

「えっ？ 条件？」

「その……ファイアンセ<sup>婚約者</sup>がどうか」

そういえばあつたなど、紅也は明日香の言葉で思い出した。途中でデュエルに熱中していたようで、すっかり忘れていたようだ。

「わ、私達……まだその……早いん」

照れながら言葉を続ける明日香。その姿は孤高の女王ではなく、可愛らしい普通の女子高生にしか見えない。そんな甘い空気を——読

めない男がぶった切った。

「ごめんな、天上院」

「……えっ?」

空気の抜けるような声を溢す明日香。紅也からの予想外過ぎる言葉に反応し遅れたようだ。そんな明日香の気持ちなど知らずに、空気の読めない男はターンを勝手に奪った。

「腹減り過ぎて……死にそう。奢るから飯でも食べよう、俺もう腹減っちゃってダメだ。テニスの後にデュエルはキツイ」

「……あ、ああ、そうね! 私もお腹空いたわ!」

「今日の食堂には何があるかね」

「カ、カレーとか?」

「カレーは毎日あるだろ?」

「そ、そうよね。そうだったわ……」

「結構汗かいたから顔洗ってくるよ。ちよつと待っていてくれ」

「ふえ? う、うん。……ま、待ってる」

1人で空回りしているようで、明日香はとても恥ずかしかつた。取り敢えず紅也が戻ってくるまでに、この顔の熱を冷ましておかなければならない。

走っていく背中を見つめながら、明日香は小さな声で呟いた。

「……バカ」

く進化した者達く

熱血テニス部長がデュエルに敗北したという噂が流れ、紅也へ挑む《オベリスクブルー》が減ってきた今日この頃。

ストレスも減り余裕が出てきた紅也はと言えば、デュエル場で行われている3つのデュエルを観客席で見ている。

コーラを飲みながらリラックスして観戦している紅也。そんな彼に1人の男が声を掛けた。

「紅也。ここに居たのか」

「三沢か。ちよつとデュエル観戦をな」

「見応えのある勝負でもあるのか？」

「まあな。……一応教えた側として、見といてやらないとき」

「教えた側？——ああ、そういうことか」

デュエルしている者を確認し、三沢は紅也の言葉の意味を理解した。紅也と共に特訓していた人物が《オベリスクブルー》の生徒と戦っていたからだ。

赤い制服を着た——丸藤翔。

真剣な顔をしているが、焦ってはいない様子。精神的にも随分と成長してきたようだ。

「翔か。ライフは負けているようだが」

「まあ、見てなって。面白くなるのはここからだ」

紅也の言葉を受け、三沢もデュエルの行方を追った。

翔 LP1200

ブルー LP2000

「僕のターン！ ドロー！」

「はっ、所詮《オシリスレッド》！ このまま勝ちまうぜ！」

煽るように騒ぐのは相手の《オベリスクブルー》。既に勝利を確信しているような態度だ。

そんな相手に気を取られることもなく、翔はカードを動かした。

「魔法カード、『サイクロン』発動！ 伏せカードを破壊する！」

「くっ！ 『ミラーフォース』が……！」

やはり発動出来ない運命にあるようで、頼みの綱は簡単に破壊された。伏せカードを無視しない慎重さも、確かな成長を感じさせる。

しかし翔のフィールドには攻撃力1000と頼りない『ミサイルロイド』が1体。逆に相手のフィールドには攻撃力2300の『ゴブリン突撃部隊』が攻撃表示で存在している、戦力差は歴然だ。

「モンスターの攻撃力で負けているか、まだ状況は不利だな」

「確かにな。……でも、勝つのは翔だ」

冷静に状況を分析する三沢だったが、紅也は翔が勝つと断言。三沢はどんな展開がされるのかデュエルへ注目した。

「毘発動！ 『リビングデッドの呼び声』！ 墓地から2体目の『ミサイルロイド』を召喚！」

毘の効果で並べられた2体の『ミサイルロイド』。ブルーの生徒はそんな光景を見て、翔を馬鹿にするように笑う。

「その程度のモンスターを幾ら並べようと意味ねえよ！ 俺の『ゴブリン突撃部隊』は倒せない！」

変わらず勝利を確信しているようだが、新たに翔が召喚したモンスターを見て、その笑顔は消え去ることとなった。

「『ヘリロイド』を召喚！ そして効果発動！ このカードがフィールドに存在する限り、『ミサイルロイド』は直接攻撃が出来る！」

「な、なんだとおっ!？」

2本のミサイルを装備し、『ヘリロイド』が狙いを定める。削るライフは1発で1000ポイント。防ぐ毘もなし、勝負有りだ。

「2体の『ミサイルロイド』でダイレクトアタック！」

「うわああああっ！」

ブルー LP2000→0

モンスターを素通りし、プレイヤーへの直接攻撃。これならばどれだけ攻撃力が劣っていようと問題はない。ライフが0になった方が負けなのだから。

「間違える程の成長だ。やはり、君から学んだことが大きいのかな？」  
「元々アイツは優秀だったよ。……そもそも、デュエルアカデミアに編入出来た時点で全員優秀なんだ。ここの倍率忘れられがちなんだよな」

「確かに、それもそうだな」

笑いながら同意する三沢に、紅也が声を上げて指を差した。見ていたのは翔だけではなかったのかと、三沢は差された方へ視線を向けた。

「あつちも決まりそうだぞ」

「あつち？ ……あれは小原か？」

翔の2つ隣でデュエルを行っていたのは、自身と同じ《ラーイエロー》に所属する同学年——小原洋司おはらようじであった。

「悩んでみたいだから相談乗ってたんだよ。緊張しがちなだけで、実力あるしな」

「それは知っているが……本当に小原なのか？」

三沢がそう言うのも無理はなかった。ほんの数日前まで、小原洋司という男はあんなに堂々とデュエルする性格ではなかったのだから。

「なんだアレは？ ……カチューシヤか？」

「そうそう。アイツ前髪長かっただろ？ それが暗くなる原因かなって思ってた。試しに付けさせたら、驚くぐらい性格変わったんだよな」

サラツと人格変更宣言をした紅也。その言葉通り緊張を感じさせない堂々としたプレイングで、小原は相手を確実に追い詰めていた。

『地獄の暴走召喚』を発動！ 特殊召喚した『強欲ゴブリン』をデッキから更に2体特殊召喚！」

『地獄の暴走召喚』

相手フィールドに表側表示モンスターが存在し、自分フィールドに攻撃力1500以下のモンスター1体のみが特殊召喚された時に発動出来る。その特殊召喚したモンスターの同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から可能な限り攻撃表示で特殊召喚し、相手は自身のフィールドの表側表示モンスター1体を選び、そのモンスターの

同名モンスターを自身の手札・デッキ・墓地から可能な限り特殊召喚する」

『強欲ゴブリン』 ATK/1000 DEF/1800

『強欲ゴブリン』 ATK/1000 DEF/1800

『強欲ゴブリン』 ATK/1000 DEF/1800

フィールドに3体出たゴブリンモンスターだが、攻撃力は貧弱。しかし小原の狙いはそこではない。自信満々な表情で勝負を決めるエースを手に取り、整えた王座へゴブリンの王を召喚した。

「——『キングゴブリン』を召喚！」

『『キングゴブリン』』

自分フィールド上にこのカード以外の悪魔族モンスターが存在する場合、相手はこのカードを攻撃する事は出来ない。このカードの攻撃力・守備力は、フィールド上のこのカード以外の悪魔族モンスターの数×1000ポイントになる」

『キングゴブリン』 ATK/3000 DEF/3000

鮮やかな戦術で並べられた”悪魔族”モンスター。宿る効果によって『キングゴブリン』の攻撃力は3000と圧巻だ。

『『キングゴブリン』で攻撃だっ！』

「ぐあああああっ!!」

相手の場にも『地獄の暴走召喚』でモンスターは増えたが、圧倒的な攻撃力差の前に勝負にすらならない。こちらも勝負有りだ。

「す、素晴らしい戦術だ……」

「本当にな、流石は小原」

パチパチと手を叩く紅也と違い、呆然と勝利を称賛する三沢。タクティクスだけで言えば、自分でも敵わないかもしれないと思わされてしまった。

「最後のデュエルも終わるな」

「まだあるのか!?!」

またも叫ぶ三沢。この流れでいけば、どうせまた驚かされるのだろう。そんな彼の予想はしっかりと的中することになった。

「今度は……神楽坂か。なるほどな」

「アイツこの間、翔とのデュエルで負けてな。その時、俺に相談してきたんだ」

「神楽坂ということとは……デツキの相談か？」

「そうそう、結構悩んだよ」

《ラーイエロー》の神楽坂<sup>かぐらざか</sup>。優秀でありながら勝率が良くないと、ある意味で有名な男だ。記憶力が良過ぎるため、一目見たデツキの特徴を完璧に覚えてしまう。そのせいでデツキを作れば他人の真似、コピーと蔑まれてきたのだ。

「どんなカードを使えばいいかとか聞かれてな。俺は『レッドアイズ』とか」ドラゴン族<sup>ドラゴン</sup>しか使ってこなかったから、色々考えたよ」

「それで？ どんなカードを薦めたんだ？」

「ドラゴン繋がりで……アレだよ」

ちょうどそのカードを使うタイミングだったようで、紅也は神楽坂を指差した。

『サンダー・ドラゴン』の効果発動！ 手札にあるこのカードを墓地へ送り、デツキから『サンダー・ドラゴン』を2体まで手札に加える！」

——『サンダー・ドラゴン』。

遊戯王初期に登場したこのカードは、約18年程の時を経て爆裂的に進化した。

- ・新規カードの登場。
- ・優秀な魔法・罫。
- ・強力な融合モンスター。
- ・相性の良いカードの数々。

長年日の目を見ることのなかったこのカードは、あつという間に環境を荒らし回る程の実力を発揮した。

もちろんこの時代では新規カードはない。しかし、神楽坂という類稀なデュエリストとの適合により、既に多くのデュエルに勝利していた。

「魔法カード、『融合』！ 手札の『サンダー・ドラゴン』2体を融合し——現れる！ 『双頭の雷龍』ツ！」

『双頭の雷龍』 ATK／2800 DEF／2100

たった2枚のカードから飛び出してきたエースモンスター。攻撃力も上級と言って差し支えなく、雷を纏いながら相手を威嚇している。

「魔法カード！ 『ライトニング・ボルテックス』！ 手札を1枚捨て、相手フィールド上の表側表示モンスター全てを破壊する！」

激しい閃光と共に落ちた雷によって、対戦相手のモンスターが全滅。フィールドはガラ空きとなり、直接攻撃を受ける準備だけが整った。

『双頭の雷龍』でダイレクトアタックッ！ 超放電サンダー・フレアッ!!」

「うぎやああアアッ!!」

2つの口から発射された稲妻のブレスが、相手のライフを残さず消し飛ばした。神楽坂のライフは4000のまま、完勝であった。

「……」

「どうした？ 三沢」

最早驚きの声すら上げず、黙ってデュエル場を見つめている三沢。翔だけでなく同じ寮の同期達までもが進化とも呼べる成長を遂げていたことに、まだ処理が追いついていないようだ。

そしてそんな三沢を更に追い込むデータが、席を立ち上がった紅也に声を掛けてきた。

「紅也」

「どうも、亮さん」

「カ、カイザーッ!？」

とても親しげな様子で話し掛けてきたのはアカデミアの帝王・丸藤亮。名前呼びしていることから、ただの顔見知りという訳でもないらしい。

「翔は成長したな……。お前のお陰だ。兄として、礼を言う」

「頑張ったのは翔ですよ、俺は少し勉強に付き合っただけですから。褒めてあげてくださいね……。翔はきつと喜びます」

「フッ、そうだな。久しぶりに翔と食事でもするとしよう」



「それは良いですね。じゃあ下に降りますか」

「ああ、そうしよう」

まるで友人のように会話している二人を、三沢は呆然と見ていた。入り込む隙などなく、紅也に声を掛けられるまで固まっていたのだ。た。

「お、お兄さん!？」

「翔……。良いデュエルだったな」

「お兄さんが……。僕を褒めて……。!」

すぐに涙を滲ませる翔。デュエリストとして成長しても、泣き虫なのは変わらないようだ。

「紅也ぐくんっ!! ありがとうとおく!」

「分かったから泣くな。そして俺から離れろ」

声を上げながら紅也に抱きつく翔。涙で制服を濡らされるだけでなく、周りからの視線も痛い。翔を引き剥がし亮へ押しつけると、今度はカチューシャ男子が口を開いた。

「紅也! 見ててくれたか!? 完璧だったよな!」

「ああ、見てた見てた。凄かったな」

「へへっ、だろ!」

「大原に報告してやれよ。喜ぶぞ」

おおはらすすむ  
大原進、小原と特に仲が良い大柄な男子生徒である。

この学園では珍しく、デュエリストではなくゲームデザイナーを目指している心優しい少年だ。

「分かった! じゃあまたな!」

元気よく走り出した小原を見送ると、3人目の教え子が声を上げた。

「俺の『サンダー・ドラゴン』は今日も強い! 紅也! 今度はお前の

『レッドアイズ』が俺達の相手をしてくれ！」

「……き、気が向いたらな。三沢が空いてるってさ」

「そうか！　じゃあ三沢！　今度はお前にデュエルを申し込む！」

「あ、ああ。分かった」

「俺は部屋に戻る！　すぐにデッキの調整をしなくては！　『サンダー・ドラゴン』をより輝かせるコンボを考えるんだ！　じゃあな！」

「が、頑張れ！」

目を輝かせながら寮へ帰っていった神楽坂。心から楽しそうな勢いに押され、紅也と三沢は怯まされた。

「……楽しそうだな」

「余程『サンダー・ドラゴン』が気に入ったんだろう。あんな神楽坂初めて見たよ」

「……アイツの前髪が雷みたいって思ったから勧めたとは言えんな」

初めて他人の真似ではない、自分だけのデッキ。神楽坂の抑えられない喜びは、紅也と三沢には本当の意味で理解出来ないだろう。

「紅也、俺達は食堂へ行く。お前も来るか？」

「お兄さんが奢ってくれるらしいっす！　行こうよ！」

紅也の腕を引っ張り、とても嬉しそうな翔。褒めてもらったこと以上に、亮から食事に誘われたことが嬉しいのだろう。

「いや、俺達はいいよ。……なっ？　三沢」

「えっ。あ、ああ。そうだな」

自分も誘われている対象とは思っていなかった三沢。同意を求められたことに驚きながらも、すぐに頷いた。

「兄弟で話したいこともあるでしょう。また今度の機会にお願いします」

「そうか。では、またな」

「紅也くん、三沢くん、またね！」

和やかに談笑しながら去っていく丸藤兄弟。

そんな後ろ姿を満足気に見ている紅也に、三沢は脱力しながら声を掛けた。

「……本当、お前の周りは退屈しないな」

「急にどうした。……俺も寮に戻るけど、三沢は？」

「そうだな……。俺も戻るとしよう」

肩を並べて帰路へ着く2人。欠伸をしている紅也を横目で見ながら、三沢は改めて決意を固めた。

十代ライバルに勝つため、そして紅也ライバルへ挑むため。

(帰ったら……。俺もデツキの調整だな)

学園で1番になるために倒さなければならぬ相手は多い。

三沢は自分の中に湧き上がった感情に気付くと、笑いながら寮へ帰る速度を上げたのだった。

## く転生者の決意く

「……三沢の様子が変？」

デュエルアカデミアの購買名物、ドローパーン。中身が分からないように包装されており、開けるまでどんな味が隠されているのか分からないギャンブルパンだ。

派手にぶっ飛んだ味もあるらしいが、紅也がドローしたのはコロツケ。サクサクの食感とソースの味に舌鼓を打ちながら、たまたま居合わせた明日香の話に首を傾げた。

「……黄金じゃないか」

紅也と同じくドローパーンを手に持つ明日香。お目当ての味を引けなかったようで、包装を開けて残念そうな声を溢した。

「ああ、1日1個限定のやつな。天上院好きなのか？」

「ち、違うの！ この間初めて食べたから忘れられなくて……じゃないか!!」

ぶんぶんと手を振りながら否定する明日香。どうやら1日1個限定である『黄金のタマゴパン』の味が忘れられないらしい。

そしてカウンターにて明日香と隣同士に座っている紅也だが、最近「は《オベリスクブルー》から因縁もつけられない。平和なものだ。」

「確か、十代達と一緒になんかしたんだっけ？ お前達の周りは忙しいな」

気付かない内に早乙女レイが来訪していたり、気付いた時には既に帰っていたり。知識から抜け落ちていたイベントには、ことごとく縁がない紅也だった。

「え、ええ。夜遅くに『黄金のタマゴパン』だけを盗んでいく泥棒が居たの。どうも一般の学生じゃない感じだったから——兄さんに関係あるかと思つて」

「無事解決しても、情報は無しか」

話を聞きながらパクパクと食べ進めていく紅也。パンと同じタイミングで購入したお茶を飲みながら、軽めの昼食を終えた。

「……それで？ 三沢が変って？」

少し落ち込み出した明日香。そんな雰囲気を変えようと、紅也は先程出た話題を訊ねた。

「なにか悩んでみたいなの。さつき見かけて声を掛けたんだけど、気付かないで歩いて行っただわ」

「……計算式でも考えてたんじゃないのか？」

病的なまでの数式オタクである三沢。十分あり得る仮説だが、明日香は首を横に振った。

「それはないと思う……。上手く言葉に出来ないんだけど、なんとなく近いものを感じたから」

「近い？」

「兄さんのことで悩む……。私自身に」

「……そっか」

明日香がそう言うならそうなのかもしれない。無条件でそう考えってしまう程には、紅也は彼女の鋭さを評価していた。

「あっ、ちよつと待って」

「どうした？」

断りを入れてから携帯端末を取り出した明日香。誰かからメールが届いたらしく、目を見開いて驚きを露わにした。

「十代からよ。……三沢くんのこと、分かったかもしれない」

「どんな内容だ？」

差し出された端末を見る紅也。そこには確かに驚くべき内容が記載されていた。

『三沢が学園対抗デュエルの代表に選ばれたってよ!! でもまだ決まった訳じゃなくて、もう1人選ばれたやつとデュエルして勝ったら決まるらしい! 三沢からの提案みたいだから、デュエルの相手は三沢が選ぶんだってよ! 俺が戦いたいから三沢を見たら教えてくれよな!!』

「なるほど……あつ、俺のここにもきた」

「三沢くん、相手選びで迷ってるんじゃないかしら」

学園対抗デュエル、原作で言えばデュエルアカデミア『ノース校』との話だろう。ようやくあのエンターテイナーが帰って来るらしい。

もうすぐ推しキャラが戻って来ると言う事実には、内心テンションが上がり出した紅也。

「十代で決まりだろ、他に適任も居ないし」

「問題があるとすれば、多分『オシリスレッド』の生徒ってことね。学園の代表だもの、クロノス先生辺りが騒ぐ光景が目には浮かぶわ。……十代側に立つ人がいれば話は別でしょうけど」

「……確かに」

原作では最初にカイザー亮からの推薦で十代が選ばれ、それに反発したクロノスが『ライイエロー』トップの三沢を推薦し、デュエルにまで持ち込んだ形であった。

しかしタッグデュエルを潰したことで十代と亮のデュエルも消え、代わりに紅也と亮がデュエルをしている。原作を少し変えたただけでも、やはり色々な影響は出てしまうようだ。

(……亮さん。俺のことは言わないでくれたのか)

顔を合わせれば談笑する程には仲の良い紅也と亮。目立つのを嫌う紅也へ、亮が配慮したということだろう。

「まあ、三沢が十代を選べば決まりだろ。その決定にまでは、クロノス先生も文句は言わない筈だ」

「……竜伊くんは、それで良いの?」

「……えっ? なんで?」

真剣な表情で訊ねる明日香に、思わず真顔で返した紅也。質問の意図が本気で分からないといった様子だ。

「多分三沢くんは……竜伊くんと戦いたいだよ」

「……俺?」

「話を持ちかけられた時にそのまま代表にならなかつたのは、自分が代表になつて良いのかつていう気持ちがあつたんだと思う。……前

に聞いたの、三沢くんの話——」俺には倒したいやつが2人居るんだ  
”って”

「十代と……俺ってことか？」

自分で言ってるから恥ずかしいが、恐らくは事実。その証拠に、明日香も頷いているのだから。

”十代を倒して、紅也に挑む”……三沢くんはそう言ってたわ」

(……そんな感じに断ったんだっけ。あの時は《オベリスクブルー》のやつらに因縁つけられて、精神的にやられてたからなあ)

自分が出した条件を忘れていた紅也。改めて思えば酷い条件だ、原作主人公を盾にしているのだから。

「同じ《ラーイエロー》ならクロノス先生も了承する筈だし、三沢くんは竜伊くんを対戦相手に選びたい筈よ」

「……それを渋ってるってことは」

「竜伊くんに気を遣ってるんでしょね。……自立つのが嫌いを知っているから」

お茶を飲み干し、紅也は納得がいかないように言葉を溢す。

「……大体、なんで俺なんかを。天上院だって他のブルーの生徒だって居る、それこそ小原や神楽坂だって」

「それでも——竜伊くんなのよ」

バツサリと紅也の言葉を切る明日香。強い意志が込められており、中途半端な返答は許されない雰囲気を感じた。

「多分、理由は自分でも分からないんでしょね。私も……三沢くんと同じ立場なら分からないと思う」

固まる紅也に、表情を緩める明日香。ドロップの包装を丸めながら、優しく言葉を続けた。

「——努力して、研究して、考えて考え抜いて、三沢くんがどうしても勝ちたいと思った相手は……貴方なの、竜伊くん。他の誰でもない、貴方なのよ」

「他の誰でもない……俺」

視線を落としながら、思考を巡らせる紅也。そんな彼を見て、明日香は優しく微笑んだ。

「本気でやらなきゃ——楽しくないでしょ?」

やんちゃ小僧のような笑顔で、明日香は紅也へそう告げた。まるで、勢いに任せて背中を押すように。

「……考えてみるよ」

席から立ち上がり、背を向けて歩き出す紅也。ドローパンの包装とお茶の入っていたペットボトルを捨てると、席に座る明日香へ一言だけ言葉を放った。

「……ありがとな、天上院」

明日香の方を振り返りもせず、紅也は購買を去って行った。

「……頑張つてね、竜伊くん」

黄色い制服を見つめながら、明日香は静かに呟いた。

竜伊紅也は転生者である。

今自分が存在しているのは、架空の世界。それは紅也がこの世界に  
来てから頭に残し続けている、”縛り”のような考えだ。

急に発生する危険な事件も、紅也は知識としてそれを覚えている。  
原作を見てきたのだから。

どのキャラがどんなデツキを使い、どんな性格で、どんな風に活躍  
するか、全てではないが知っている。原作を見てきたのだから。

どのタイミングで何が起こり、誰が関わり、どう解決するのか知っ  
ている。原作を見てきたのだから。

——竜伊紅也は転生者である。

故に、この世界を本物と信じられなかった。

故に、事件もただのイベントとしか思えなかった。

故に、物事に対しても、働くのは義務感だけだった。



『主人公だから』と、遊城十代のデュエルを受けた。

『罪悪感を感じた』から、丸藤翔を特訓した。

『見捨てても寝覚めが悪い』と、天上院明日香を助けた。

『やる必要が無い』と、三沢大地の挑戦を断った。

よく優しい性格と評価されるが、紅也はそれを否定する。決して、優しくなどはないと。

全ては”原作を知っていたからやったこと”であり、”自分の意志でやりたいと思ったことはない”のだから。

(……俺が自分の意思でやったことなんて、万丈目とのデュエルだけか)

青い空を独り占め出来る場所で、紅也は雑に寝っ転がっていた。この場所を教えてくれた十代は、ここでよく授業をサボっているらしい。そんな気持ちも分かってしまう程に、開放的な空間だった。

(お前に連れて来てもらった世界だけ……俺は何をすれば良いんだろうな)

唯一無二の相棒である『真紅眼の黒竜』のカードを手に取り、紅也は言葉を発さずに訊ねた。それに対して黒竜は精霊化しただけで、返答と呼べる反応は見せない。

目を閉じ、思考する。自分はそのままこうして生きていくのだろうか、黒竜に与えられた2度目の人生を。

(……それは、なんていうか、嫌だな)

レッドアイズのお陰で転生者となった。

十代とのデュエルで楽しさを知った。

万丈目とのデュエルで怒りに身を任せた。

明日香との話し合いが心地良かった。

翔との特訓に熱が入った。

亮とのデュエルで全力を出した。

それら全て、この世界に来て経験した大切なことだ。

そんな中で、同じ寮に所属ということでもよく言葉を交わし、授業も共に受け、食事と同じ机で食べている男が居る。

筆記の成績は学年1位、努力は決して惜しまない、1年生の中では

最強候補にも名前が挙がる程の実力者だ。

(そんなやつが俺と戦いたい……のか)

目を開ければ、すぐそこに黒竜。光を飲み込むような漆黒は、言葉に出来ない魅力を放っている。

「……お前は、どうしたい?」

『——グルウ』

そんなもの決まっている、そう言わんばかりに喉を鳴らした黒竜。この世界に來た時から変わらない答えを、レッドアイズは持っている。

「……じゃあ、やるか。相棒」

立ち上がった男の顔から、迷いは消えていた。黒竜はそんな男の背中を、満足そうに見つめている。

「本気でやらなきゃ……楽しくないもんな?」

「グルウオ」

——”どんな時でも側に居る”。

黒竜の答えは、それだけなのだから。

????????????????????????????????

初めて見た時から、アイツは目立っていた。

夕日に照らされた道を歩きながら、三沢大地は1人の人間について考えを巡らせていた。

伝説とも呼ばれるレアカード『真紅眼の黒竜』を操り、2発の『黒炎弾』を発動しワンターンキル。大人しそうな顔立ちとは裏腹に、試験デューエルをド派手に勝利した男のことだ。

話してみると良いやつだった。

知識量では負けないが、面白い発想に感心した。

捻くれていながら、周りに気を配る優しさがあった。

しかし、その男を凄いと思ったのは——それだけではなかった。

本人も自覚しているように、三沢大地は秀才である。膨大な知識量から様々なカードを操るが、それは自身に対してのみの恩恵。他人に教えを説いても、理解してもらえないことがほとんどだ。

故に、三沢は他者に何かを教えるということが出来なかった。

自分に出来ないことをやってのける人物。そんな存在に無条件で尊敬にも似た感情を抱いてしまうのは、人間として仕方のないことなのだろう。理論に基づく生き方をしてきた三沢でさえそうなのだから。

落ちこぼれと称される少年が、エリートに勝利した。

気弱な天才が、己の才能を発揮出来るようになった。

モノマネと呼ばれていた男に、進むべき道を示した。

自分に同じことは絶対に出来なかった。明確な瞬間があつたとすれば、それを実感した時だろう。

——”どうしても勝ちたい”と、思わされたのは。

「来たぞ、紅也。呼び出した用件を聞こうか」

寮からそう離れていない場所。木が一本生えているだけの殺風景な場所に、三沢は呼び出されていた。呼び出した本人である紅也を見つければ、無意識の内に少々強めの口調で問いかけた。

「悪かったな、呼び出して。寮の部屋で言うのも雰囲気が無いと思つてさ」

「? ……別に良いさ。考えに行き詰まっていた所だ」

紅也の言葉の意味が分からない三沢だったが、何かを決意したような顔に違和感を覚えた。

「——学園対抗デュエル。相手を探してるんだろ?」

「……知ってたのか。無条件で俺が代表になるのも気が引けてな、十代と君以外の相手を必死に選んでいる最中さ」

少し嫌味のように話す三沢。悩みの原因に直接話を振られたことで、反射的にそういった態度になってしまったようだ。それを察した紅也は笑いながら口を開く。

「俺が相手するよ」

「……はあ？」

思わず溢れた声。冷静な三沢からは想像出来ない程の間抜けな声であった。

「学園代表決定戦、お前の相手は俺がする」

「……本気か？」

予想外な言葉に、三沢は戸惑いながら聞き返した。紅也の性格を知っていたからこそ声を掛けなかった立場として、まさか本人から申し出があるなど思ってもいなかった。

「本気だ」

「……目立つぞ？」

「それは嫌だな」

「おい」

即答され、三沢がツツコむ。紅也は地面に視線を落としながらも、しっかりとした声で語り出した。

「目立つのは本当に嫌いなんだ。良いことないし、迷惑なことの方が多いし、出来ることなら避けたい」

「……………」

「けどさ、そういうの抜きにして考えた時……俺はお前と戦いたいと思っただけだ」

「……紅也」

他にやることがないからと、義務感でやってきた。知っているのは自分だけだと、義務感でやってきた。自分の意志などそこには無かった。

——しかし。

「これは俺の意志だ。お前の相手は……俺がする」

空気が震える。鼓動が早まる。感情が——昂る。

「勝負しよう、三沢。俺の『レッドアイズ』とお前が本気で考えたデツキ……どっちが強いハッキリさせよう」

竜伊紅也<sup>転生者</sup>は、自らの意思で1歩を踏み出した。

「三沢。——お前にデュエルを申し込む」

## 〈全力の決闘〉

「この世界で初めて」自分の意志によってデュエルを挑んだ紅也。準備期間の3日は瞬く間に過ぎ去り、学園対抗デュエル代表を決める代表決定戦の日がやってきた。

「……竜伊くん」

「なんだ？ 天上院」

デュエル場へ入るための通路。そこには決戦前に感情を昂らせている紅也と、それを見て不安そうな目を向けている明日香が立っていた。何故明日香が不安そうにしているのか、理由は単純だった。

「それ……隈よね？」

紅也の目の下で存在感を放つ隈。黒ずんだそれを見て、明日香は心配そうな声を上げたのだ。

「大丈夫、大丈夫。この3日ぐらい4時間睡眠が続いただけだから。テンション上がっててむしろ絶好調だよ。狙ったカード引いたり、地面からカード引いたり出来そう」

「ほ、本当に大丈夫!？」

明らかに普段のテンションではないだけでなく、なにやら訳の分からないことまで言っている。明日香はデュエルさせていいのかと本気で心配になった。

「よし、いくか。ちゃんと見ててくれ、天上院」

「え、ええ。無理はしないでね」

「いや、する」

「ちよつと!」

明日香の言葉を秒で否定し、紅也は口端を吊り上げた。

「ありがとう、天上院」

「……えっ?」

「天上院が背中を押してくれなかったら、多分こうなってなかった。」

だから見て欲しいんだ。——本気でやってくるよ」

そう言い残し、紅也は通路を抜けてデュエル場へと上がっていった。耳を刺激する歓声、多くの生徒の視線、紅也が苦手とする要素満載の場だ。しかし、紅也の表情に動揺はなく、笑みすら浮かべていた。それを見ていた明日香はと言えば——。

「……えっ、はい」

呆然と、遅過ぎる返事をしていた。

????????????????????????????????????  
気持ちが高ぶる、興奮を抑えられない。こんな風になるのは前世から考えても初めてだと、紅也は己の状態に苦笑した。そしてそんな僅かな冷静さすら、目の前に現れた男を見て、一瞬で消え去った。

「しっかり考えてきたんだろうな。俺の『レッドアイズ』を倒せるデツキ」

「ああ。この3日間で、俺は俺にある全ての知識を1つに詰め込んだ。見ろ、これがお前達を倒す——俺のデツキだ！」

懐から取り出したデツキを紅也へ突きつける三沢。その表情には自信のみがあり、緊張や不安などは欠片も感じさせなかった。

「そういう君はどうなんだ？ 目の下に隈があるぞ？」

「めちゃくちゃ頭を働かせたのと……必要なカードを手に入れるために色々手伝いをしてた結果だ」

「寝不足で実力が出せないなんて言うなよ？」

「言わない。後、寝不足なのはお前もだろ。夜遅くまでカタカタカタカタキーボード叩きやがって。隣の俺の部屋まで聞こえてきたわ」

「ふっ、すまない」

「このデュエルが終わったら別の部屋にしてもらえるよう……寮長に

申請してやる」

次から次へと止まらない言葉の応酬。決闘前のそんなやり取りを止めたのは、このデュエルを取り仕切る役目を任された実技担当最高責任者だった。

「もういいノーネー！ 早く始めなさいーノペペロンチーノ!!」

独特過ぎる話し方すら、両者のテンションを下げる要因にはならない。互いにデッキをデュエルディスクへセット、高らかにデュエル開始の宣言をした。

「——デュエルツ!!」

紅也 LP 4000

三沢 LP 4000

「俺の先攻！ ドローー！」

先攻を取ったのは三沢。練り上げられたデッキから引いた6枚を確認し、滑らかな動きでカードを操った。

「『マスマティシヤン』を召喚！」

『マスマティシヤン』 ATK/1500 DEF/500

「効果発動！ 召喚に成功した時、デッキからレベル4以下のモンスター1体を墓地へ送る。『トロイホース』を墓地へ」

レベル制限はあるが『おろかな埋葬』と同じ効果。学者のような見た目通り、効果も優秀なようだ。

「そして墓地に送った『トロイホース』を除外し、手札から『岩の精霊タイタン』を特殊召喚する！」

『岩の精霊タイタン』 ATK/700 DEF/1000

効果で墓地へ送り、送ったモンスターをコストに効果で特殊召喚。流石と言うべきか、綺麗にモンスターを並べてきた。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターン、ドロー」

先攻としてはお手本のように盤面を整えてきた三沢。派手には動かず、相手の出方を見る構えだ。しかし、そんな悠長な気構えでは、今



の紅也は止められない。

「一気にいくぞ、『古のルール』を発動。手札からレベル5以上の通常モンスター1体を特殊召喚する。……こい、『レッドアイズ』」

『グウルオオオ!!』

『真紅眼の黒竜』 ATK/2400 DEF/2000

当然のように1ターン目で飛び出してきた不動のエアース。紅也のテンションに同調しているのか、既に口から黒炎が溢れている。

「手加減無しだ。——魔法カード『黒炎弾』」

『グウルアアッ!!』

たった3枚の手札消費で、ライフを半分以上消し飛ばす容赦ない攻撃。直接喰らったことのある十代だけではない、試験デュエルを見ていた者達も冷や汗を流した。

そんな中で黒炎弾が迫る三沢だったが、余裕の表情で伏せカードを発動させた。

「手札1枚をコストに罨発動! 『レインボー・ライフ』!」

「……マジか」

『『レインボー・ライフ』』

手札を1枚捨てて発動出来る。このターンのエンドフェイズ時まで、自分は戦闘及びカードの効果によってダメージを受ける代わりに、その数値分だけライフポイントを回復する」

7色の光が黒炎弾を吸収し、無効化。そして三沢のライフポイントを大きく回復させたのだった。

三沢 LP4000↓6400

「——12%。君が1ターン目から相手に『黒炎弾』を決めた確率だ。対策は打たせてもらったよ」

「……やるな」

ダメージを回避しただけでなく、『黒炎弾』の発動を無効化しないことで『レッドアイズ』の攻撃もしっかり封じている。研究し尽くしていることは間違いない。

『アレキサンドライドラゴン』を召喚」

『アレキサンドライドラゴン』 ATK/2000 DEF/1000

「バトルだ。『アレキサンドライドラゴン』で『岩の精霊タイタン』を攻撃」

『タイタン』の効果発動！ 相手のバトルフェイズ中のみ、攻撃力が300ポイントアップする！」

『岩の精霊タイタン』 ATK/1700 ↓ ATK/2000

効果が発動され、攻撃力が並ぶ。しかし紅也は構わず攻撃、モンスターを減らすことを優先したようだ。破壊された時に1ドロウ出来る効果を持つ『マスマティシヤン』を破壊したくなかったというのもあるが。

『タイタン』の効果を忘れていた訳じゃないだろう？」

『レインボー・ライフ』の効果はターン終了時まで続く、ダメージを発生させてこれ以上ライフを増やしてやる必要は無いからな」

「なるほど……。寝不足の頭ではないようだな」

「俺はこれでターンエンド」

三沢の皮肉をスルーして、紅也はターンを終了した。

「俺のターン！ ドロー！ 『強欲な壺』を発動！ 更に2枚ドロウだ！」

強力なドロウカードにより更に手札が増えた。新たに呼び込んだカードを確認し、三沢は不敵に微笑んだ。新たに呼び込んだ

「儀式魔法『チャクラの復活』を発動！」

「……儀式魔法か」

「『チャクラの復活』

『チャクラ』の降臨に必要。自分の手札・フィールドから、レベルの合計が7以上になるようにモンスターを生贄に捧げ、手札から『チャクラ』1体を儀式召喚する」

「手札から7つ星モンスターを生贄に、『チャクラ』を儀式召喚！」

『チャクラ』 ATK/2450 DEF/2000

儀式の炎が巻き上がり、大きな目玉と合わせて恐ろしい風貌をしており、アカデミアの生徒達は少し怯えた。

「バトルだ！ 『チャクラ』で『真紅眼の黒竜』を攻撃！」

繰り出された無数の斬撃、誤差のような攻撃力差で『レッドアイズ』

が破壊された。

紅也 LP4000↓3950

「続けて『マスマティシヤン』で攻撃！」

「……」

紅也 LP3950↓2450

「俺はこれでターンエンドだ。さあ、見せてくれ紅也。目の下に隈を作る程の覚悟で臨む、君達の力を！」

「言われるまでもねえよ。ドロー」

フィールドはガラ空き。そんな中で紅也が取ったのは驚きの行動だった。

「モンスターをセット。——ターンエンド」

「……俺のターン！ ドロー！」

あまりにも短いターン。勝負を諦めたと、そう感じた生徒も少なくなかった。観客席から見ている明日香、十代、翔、隼人の4人も慌てている程なのだから。

しかし、1人だけそう思っていない男が居た。対峙する三沢だ。

(……あのセットモンスター。ただの壁としてなのか？ それとも何か仕掛けがあるのか?)

微塵の油断もせず、紅也の考えを探ろうとしていた。相手は自分が心から倒したいと願うデュエリスト、この程度で終わる訳がない。

「何を狙っているかは分からないが……バトルだ！ 『チャクラ』でセットモンスターを攻撃！」

またも無数の斬撃によつて、紅也のモンスターが破壊される。再びフィールドはガラ空き、ダイレクトアタックのチャンス——ではなかった。

「セットモンスター、『レッドアイズペビードラゴン真紅眼の幼竜』の効果発動！ このカードが戦闘で破壊され墓地へ送られた時、デッキからレベル7以下の”レッドアイズ”モンスター1体を特殊召喚出来る」

「リクルート効果か!？」

三沢は攻め時と見て安易に攻撃した自分を責めた。幼竜を攻撃したばかりに、黒竜の怒りに触れたのだ。

「こい、『真紅眼の黒炎竜』」  
レッドアイズ・ブラックフレアドラゴン

『真紅眼の黒炎竜』 ATK/2400 DEF/2000  
『真紅眼の幼竜』の効果はまだある。墓地にあるこのカードをデッキから特殊召喚したモンスターに装備カード扱いで装備し、攻撃力を300ポイントアップさせる」

『真紅眼の黒炎竜』 ATK/2400↓ATK/2700  
「……厄介だな。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

盤面の戦力が塗り替えられたが、ライフアドバンテージが大きい。三沢は引き続き油断せず、カードを伏せた。

「俺のターン、ドロー。『真紅眼の黒炎竜』に召喚権を使い再召喚、効果を与える」

「デュアルモンスターか……」

「バトルだ。『ブラックフレア』で『チャクラ』を攻撃！」  
「くっ！」

三沢 LP6400↓6150

「更に『ブラックフレア』の効果発動。このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時——このカードの元々の攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える。2400のダメージだ」

「なんだと!?! しまったそんな効果が!! うわあああつ!!」

三沢 LP6150↓3750

燃え盛る炎によって大きなダメージが与えられ、あれだけあったライフは初期の数値に近いものとなった。

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

「やってくれるな……。ドロー！」

想定外の大ダメージを受けたが、ドローによって1枚のキーカードが手札へきた。

「——紅也。君に見せよう、これが俺の出した結論だ! 魔法カード『死者蘇生』発動! 墓地からモンスター1体を蘇らせる！」

汎用性の高い蘇生魔法によって、三沢は1体のモンスターを墓地から呼び覚ました。それは生半可なモンスターではなく、先程倒された『チャクラ』でもない。紅也と『レッドアイズ』を倒すために、三沢が

用意したとっておきの切り札であった。

「現れろっ！——『バスター・ブレイダー』ッ!!」

気合の入った声に応えるような勢いで、竜殺しの剣士は姿を現した。

そして会場は歓声に包まれた。

それもその筈だ、この『バスター・ブレイダー』はあの決闘王・武藤遊戯が愛用したモンスター。『ブラック・マジシャン』などに比べれば価値は下がるが、それでも十分に希少なカードだ。それを目の前で見られた興奮からか、椅子から立ち上がってしまった生徒も居る。

「……儀式召喚の時に生贄で墓地に送ってたのか」

「流石だな、その通りだ」

「それがお前の……秘策か。三沢」

「用意するのにも苦労したんだ。『レッドアイズ』を斬り倒す、竜殺しの力を持つ戦士をね」

『バスター・ブレイダー』 ATK/2600 DEF/2300

現時点で攻撃力は劣っているが、竜殺しと呼ぶに相応しい力がこのモンスターには備わっている。

『バスター・ブレイダー』は相手のフィールドと墓地に存在する”ドラゴン族”モンスター1体につき、500ポイント攻撃力をアップする！対象となるドラゴンは装備カード扱いの『真紅眼の幼竜』を除いた3体！よって攻撃力を1500ポイントアップする！」

『バスター・ブレイダー』 ATK/2600↓ATK4100

「先程使えばよかったと後悔させられたからね。厄介なカードには退場願おうか。『サイクロン』！」

今度は汎用性の高い除去魔法、オーソドックスは外さない三沢らしい性格が出ている。装備カード扱いの『真紅眼の幼竜』が破壊され、『真紅眼の黒炎竜』の攻撃力が下がる。

そして『真紅眼の幼竜』がモンスター扱いに戻ったことで”ドラゴン族”が増え、竜殺しの力は増した。

『真紅眼の黒炎竜』 ATK/2700↓ATK/2400

『バスター・ブレイダー』 ATK/4100↓4600

「このターンで終わりだ！ バトル！ 『バスター・ブレイダー』で『真紅眼の黒炎竜』を攻撃！ 破壊剣・一閃ッ！」

「罨発動！ 『ガード・ブロック』！ 戦闘ダメージを0にして、デッキからカードを1枚ドロウする！」

大ダメージは避けたが、『ブラックフレア』が破壊される。

「防いだが、だがまだ『マスマティシャン』のダイレクトアタックが残っているぞ！」

紅也 LP2350↓850

いよいよ後がなくなってきた紅也。ライフポイントは残り少なく、フィールドは3度目のガラ空き。観客である生徒達も三沢の勝利が近いと感じ始めていた。

こんな絶望的な状況であるにも関わらず、当の本人は笑っているのだが。

「……三沢、本当に強いな。やっぱり戦うことにして良かった」

「な、なんだ、急に」

「いや、お前に勝ちたいと思った俺の気持ちは——間違ってたなかつたと思ってるぞ」

とても穏やかな表情でそう言い放つ紅也。自分の状況が分かっているとは思えない発言だ。

「フィールドにカードはなく、『レッドアイズ』は墓地に居る。更に俺のフィールドには『バスター・ブレイダー』。逆転……するつもりか？」

そんな三沢の言葉を聞き、紅也は以前似たような質問を十代へしたことを思い出した。今ならば、十代の自信も理解出来る。デッキを信じ、最後まで諦めない。そんなデュエリストに、自分もなりたいたいのだから。

少しばかりの笑みと共に、紅也は返答した。

「——当たり前だろ」

「逆転のため、紅也は既に動いていた。」

「俺は破壊された『真紅眼の幼竜』の最後の効果を発動していた。装備カードとなっていたこのカードが墓地へ送られた時、デッキからレベールの”ドラゴン族”モンスター1体を手札に加えることが出来る。——選んだのは『黒竜の雛』だ」

破壊されても可能性を残す、幼くとも『レッドアイズ』の名に恥じない黒竜だ。

「……今更そんなカードを加えても、デッキに1枚のみの『真紅眼の黒竜』は墓地に居る。まさか、2枚目を!？」

「いや、俺のデッキに『真紅眼の黒竜』は1枚だけだ。けど意味の無いカードもない。この効果に意味があると、俺は信じる」

「面白い、俺の勝利の方程式を崩せるものなら崩してみろ！ ターンエンドだ!」

ワクワクしながらターンを終える三沢。手札は使い切ってしまったが盤面の出来は良い、紅也の動きに注目した。

「——俺のターン、ドロ! ……俺も使わせてもらおう『強欲な壺』! 2枚ドロ!」

これで手札は6枚、十分過ぎるほどに反撃のカードは揃った。

「魔法カード『おろかな埋葬』を発動。デッキから『サファイアドラゴン』を墓地へ送る」  
「なんだと!？」

驚愕の声を上げる三沢。それも当然だ、紅也が今したことは自滅行為に他ならない。相手のエースを更に強化しただけなのだから。

『バスター・ブレイダー』 ATK/4600↓ATK/5100

とうとう5000を超えた圧倒的な攻撃力。この強大な力を前にしても、紅也は少しも怯んでいない。

「……これで条件が整った」

「条件だと……? ——まさか!？」

流石は学年1位、紅也の狙いに気が付いたようだ。そんな秀才に敬意を感じながら、紅也は1枚の魔法カードを発動させた。

「……『龍の鏡』を発動」

「やはりか!!」

最悪の予想は当たっていたと、三沢は表情を歪めた。呼び出してくるモンスターが何なのか、既に見当がついているからだ。

『龍の鏡』

自分のフィールド・墓地から、”ドラゴン族”の融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを除外し、その融合モンスター1体を融合召喚する」

「俺は墓地から『アレキサンドライドラゴン』、『真紅眼の黒炎竜』、『真紅眼の幼竜』、『サファイアドラゴン』……そして『真紅眼の黒竜』をゲームから除外、5体のドラゴンを素材に——融合召喚を行う」

墓地からドラゴン達の魂が蘇り、混ざり合った。

「出てこい。——『ファイブ・ゴッド・ドラゴン』」

『F・G・D』ATK/5000 DEF/5000

5本の首を持つ巨大な龍が出現し、会場全体を支配した。最高峰の攻撃力もそうだが、放たれるプレッシャーにこの場に居る全員が息を呑んだ。

「……紅也。それが君の秘策か?」

「まあな。これを貰うために、大徳寺先生の授業をめっちゃ手伝ったんだ」

雑用、掃除、猫の世話、思い出したくもない程にこき使われた3日間。そんな苦痛を耐え、紅也はこのカードを手に入れていたのだ。

「だが攻撃力は『バスター・ブレイダー』の方が——しまった!」

「そう、上じやないんだよ」

自身の間違いに気付く三沢。劣勢に立たされたのは自分であると、ハッキリ理解させられた。

『バスター・ブレイダー』ATK/5100 ↓ 3100

竜殺しの力が及ぶのはフィールドと墓地のみ。ゲームから除外されたドラゴンには効果が及ばない。



「これを狙っていたのか……」

「相棒を除外はしたくなかったんだけどな。——お前に勝つためだ」  
むしろそんな躊躇いで勝ちにいかなければ、紅也は背後から黒炎弾に焼かれていたことだろう。

『勝つからな、絶対』

『……グルウ』

ケースへ戻した相棒に、勝利を誓う紅也。しかし、三沢もそう簡単に勝たせる程、甘くはない。

「——凌いでみせる！ 永続罠！ 『グラヴィティ・バインドー超重力の網』を発動する！ これによりレベル4以上の全てのモンスターは攻撃することが出来ない！」

『『グラヴィティ・バインドー超重力の網』』

フィールド上のレベル4以上のモンスターは攻撃出来ない

状況が不利であると、すぐさま守りの術を発動。こうして逆転された場合に対しても、しっかりと布石を打っておいたのだ。自らのモンスターにも影響を与えてしまうが、その効力は絶大。紅也からの攻撃は完全に防いだ。

「流石だな、三沢」

「本気で勝ちにきているのは俺も同じだ！」

「……知ってるか？ 三沢」

「な、何をだ？」

目を閉じ、静かに語り出した紅也。テンションの変化についていけない三沢を放置し、デッキの主役について口を開いた。

『『レッドアイズ』は——』可能性のドラゴン”だ』

『可能性……？』

「今からそれを見せてやるよ。俺は手札からモンスターを召喚する」

「そ、そのモンスターは!?!」

目を見開いて驚く三沢。強力なモンスターが対峙するフィールドに、あまりにも相応しくない弱さのモンスターが召喚されたからだ。

『黒竜の雛』 ATK/800 DEF/500

『バスター・ブレイダー』 ATK/3100 ↓ ATK/3600

「ここで、そのモンスターを……」

「コイツがこの勝負を決めてくれるんだよ。『真紅眼の幼竜』が手札に連れてきてくれた、コイツがな」

弱く、幼い黒竜。卵から出てもない、未熟過ぎる存在。口から吐く炎も弱火中の弱火、あれでは焼きおにぎりすら作れないだろう。

並び立つドラゴンの桁違いの身長差、雛がまるで豆粒のようだ。確かにあのモンスターなら『グラヴィティ・バインド』の効果も受けはしない。

だからこそ三沢は戸惑った。自身のライフはまだ十分、雛ごときに削り切れる量ではない。そもそも『バスター・ブレイダー』だけでなく『マスマティシヤン』にすら勝つことは出来ない。何をしてくるのか全く想像がつかなかった。

「……『ブラックフレア』が『バスター・ブレイダー』に破壊された時、『ガード・ブロック』の効果で引いたカード。それが可能性のカード、お前に勝つための……最後のとっておきだ！」

紅也は残った3枚の内、1枚の手札を発動した。

「——魔法カード『受け継がれる力』！ この効果で『F・G・D』を墓地へ送る！」

「そ、そんなカードを……!!!」

『受け継がれる力』

自分フィールド上のモンスター1体を墓地に送る。自分フィールド上のモンスター1体を選択する。選択したモンスター1体の攻撃力は、発動ターンのエンドフェイズまで墓地に送ったモンスターカードの攻撃力分アップする」

『黒竜の雛』ATK/800↓ATK/5800

5神龍の力を受け継ぎ、雛と呼ばれる黒竜は強大な力を得た。三沢のフィールドに居るモンスターを、全て焼き払える程に。

「そして魔法カード『禁じられた聖槍』。『バスター・ブレイダー』の攻撃力を800ポイント下げる！」

『バスター・ブレイダー』ATK/3600↓ATK/2800

「……ふっ、負けず嫌いめ」

この行動で、三沢は紅也の意図を理解した。攻撃表示の『マスマ  
テイション』を攻撃すれば勝利出来るにも関わらず、わざわざ『バス  
ター・ブレイダー』の攻撃力を下げた。

——”黒竜”で”竜殺し”を倒そうとしている。

それが分かった瞬間、負けず嫌いという言葉を使わずにはいられな  
かった。本当に、最高のライバルだ。

「仕上げだ……。装備魔法『団結の力』を『黒竜の雛』に装備！ 攻撃  
力を800ポイントアップする！」

『黒竜の雛』 ATK/5800↓ATK/6600

『バスター・ブレイダー』 ATK/2800

膨れに膨れ上がった攻撃力差は3800。他に攻撃を防ぐ手段も  
ない。三沢は現実を受け入れ、力無く笑った。

黒炎を集中させる雛の周りへ現れるドラゴン達の影、まさしく”団  
結の力”だ。

「——次は、俺が勝つぞ」

「——ああ、やってみろ」

短い言葉を交わし、紅也は最後となる全力の一撃を放った。

「トドメだ！ 『黒竜の雛』で『バスター・ブレイダー』を攻撃！ ——

——黒炎弾ッ!!」

「うああああアッ!!」

三沢 LP3750↓LP0

互いに持てる力を全てぶつけ合った決闘は、終わりを迎えた。

竜伊紅也の——勝利によって。

????????????????????

会場を揺らす程の拍手と歓声。これは全て2人のデュエリストに向けられたものだ。激しい攻防、強力なレアカード、予想も出来なかった魂の攻撃。行われたデュエルの全てに、デュエリスト達は惜しめない賞賛を送った。

「やられたよ、完敗だ。奥の手である『グラヴィティ・バインド』まで完璧に破られるとはな」

「……それは偶然だ。敢えて言うなら——可能性をもたらず”赤き竜”相手に、手札っていう”可能性”を与え過ぎたな」

デュエルが終わり、近寄って言葉を交わす紅也と三沢。激闘を繰り広げていたとは思えない程、2人とも穏やかで清々しい顔をしていた。

「代表おめでとう。俺まで誇らしいよ」

「……嫌味だろ。……それは絶対に嫌味だろ」

良い笑顔でそう告げる三沢に、紅也は肩を落とさずにはいられなかった。これで『ノース校』との学園対抗デュエルは自分が戦わなければならなくなったからだ。

(……まあ、良いか)

『グルウ』

相棒と共に勝利を噛み締め、紅也は前を向いた。

「さつきも言ったが、次は勝たせてもらうぞ。紅也」

「ああ。……次も勝つのは俺達だけだな」

距離を詰め、手を伸ばす両者。戦いが終わり、その場に立つのは良きライバル。健闘を讃える握手をしようとした——その時だった。

「……あ、れ?」

「紅也? どうした?」

急にフラフラと身体を揺らし始めた紅也。三沢が声を掛けるも、どうも平気そうではない様子だ。

「いや……なんか。……あつ、ヤバい、かも」

「紅也ツ!!!」

——そして、紅也は倒れた。

## く事件の前兆く

「……………あれ？」

光を感じ、意識を取り戻した紅也。目を開けると、真っ白な天井が視界に入った。背中に感じる柔らかさと身体を包んでいる暖かさ、どうやらベッドに寝かされているらしい。混乱している頭を落ち着かせながら、紅也はゆっくりと上体を起こした。

『グルウ』

「うおっ……………ビツクリしたあ」

起こしきった所で目の前に精霊化した黒竜。真紅の瞳とバツチリ視線が合わさった。ベッドの上に乗っかっている『真紅眼の黒竜』、普通に生きていたのではまず見られない光景に、紅也は苦笑いした。

「……………そっか、倒れたのか。ハハハ」

三沢とデュエルをしていたことは覚えていたが、何故ベッドに寝かされる事態となったのかはすぐに思い出せなかった。上がり過ぎたテンションと、少な過ぎた睡眠時間。いい歳した成人男性にあるまじき失態、紅也は口から震えた笑い声を溢した。

自らの幼さをすっかり反省した後、改めて実感する。

強い意志と覚悟、全力を持って臨んだデュエルに——勝利したのだと。

「……………うっし」

思わず緩んだ顔で、小さくガッツポーズ。幼さを反省した所ではあるが、こればかりは抑えられなかった。

そしてそういう人に見られたくない挙動をした時に限って、何故か人に見られるのはよくあることだ。

「——あっ」

「……………竜伊、くん？」

ガラガラと病室のドアが開き、明日香が顔を見せた。彼女の視線は

拳を握りしめている紅也をしっかりと捉えており、紅也はとても恥ずかしかつた。すぐにガッツポーズを解消しようとした紅也だったが、彼が動く前に明日香が足を動かした。

「大丈夫なの!？」

「あ、ああ。大丈夫、大丈夫!」

駆け寄ってきた勢いのままに、紅也の手を両手で包み込む。明日香の体温が紅也へ伝わり、ヘタレはキャパオーバーしそうになっていた。

そんな紅也のことなど知る筈もなく、明日香の勢いは衰えない。

「本当に大丈夫なのね? ——顔が赤いじゃない!」

君のせいだと、紅也は言いたかった。

気まずそうに顔を逸らす、それは明日香の手によって防がれる。そして更に顔が赤くなるような行動を起こされた。

「熱があるんじゃないの!？」

「ちよ、ちよつと……天上院、さん」

紅也の前髪を手で押さえ、自身の額を合わせる明日香。熱を測ろうとしているのは分かるが、紅也はそれどころではない。整った顔立ちときめ細やかな白い肌がほぼゼロ距離に来たのだから。

(まつ毛……なげえ)

あまりの衝撃に、紅也は小学生のような感想しか出てこなかった。目だけでなく、鼻までいい匂いに襲われている。顔の熱は簡単に上昇した。

「……熱いけど。本当に大丈夫?」

「ね、寝起きだからだつて!」

「あつ」

それっぽいことを理由に、明日香から距離を取る紅也。心臓に悪い顔面偏差値の暴力だ。

「でも……良かった。竜伊くんが倒れた時は本当に慌てたんだから」

「それは……ごめん。テンション上がり過ぎて」

「ええ、それはデュエルを見てて分かったわ。……凄かった」

「あ、ありがとう。なんか、柄にもなく熱くなったよ」

「それも伝わった。竜伊くん、見たことないぐらい楽しそうな顔してたから」

「なんというか、恥ずかしいな」

紅也は改めて考えても、毎日4時間睡眠になるほど熱が入ってしまったのが驚きだった。しかもそれが原因で倒れる始末、恥ずかしいことこの上ない。

(……三沢くんに、嫉妬しちゃうわね)

そして自分に呆れている紅也を見つめながら、明日香は内心で三沢へ嫉妬の感情を抱いていた。

冷めているとまでは言わないが、普段から落ち着きのある紅也。そんな彼が疲労で倒れる程の全力を出したデュエル。そんな相手を羨ましく思わないなど、明日香には無理だった。

そんな明日香の心情など知る訳もなく、紅也は気になっていたことを質問した。

「なあ天上院、学園対抗デュエルってどうなった？　そもそも俺はどれだけ寝てたんだ？」

代表を決めるために三沢とデュエルしたのが、学園対抗デュエルの2日前。意識を失って倒れた紅也としても、現在の状況を確認してきたかった。

明日香は紅也の質問に眉を少し歪めると、同情するような声で話し出した。

「……その、さっき終わったわ」

「……………へ？」

「ほんの1時間前……終わったわ」

「……………マジ？」

信じられないといった具合に訊ねる紅也へ、小さく頷いた明日香。気を遣っているような様子が信憑性を高めた。

「……2日も寝てたのか、俺」

「私が心配した理由も分かるでしょう？」

苦笑い気味の明日香に、紅也は肩を落とした。

「……誰が代表になった？　やっぱり三沢か？」



「いいえ、違うわ。——十代よ」

「……おお、どういうことだ」

予想外過ぎる展開の連続。紅也は頭を抱えなくなった。そんな彼への助け舟として、明日香は事情の説明に入った。

「三沢くんもあの後で体調を崩してね。竜伊くんみたいに倒れるとまではないかなかったけど、代表はその時点で辞退したのよ」

「そして流れて十代に、か。クロノス先生がよく許可したな」

「三沢くんと鮫島校長からの推薦もあったから」

「なるほど」

状況を理解しつつ、紅也は明日香は更に質問を重ねた。

「……天上院。『ノース校』の代表って誰だった？」

「驚くわよ。あの万丈目くんだったの」

今度は腕を動かさず、心の中でガッツポーズ。推しキャラは原作通り、不死鳥の如く蘇ってきたようだ。

「そ、そっかー。万丈目だったのかー」

緩みそうになる頬を必死に保ちながら、紅也は白々しい台詞を吐いた。一応驚く努力はしたようだが、演技力は皆無だった。

「こっちも凄いデュエルだったわ。結果的に十代が勝ったけど、万丈目くんが勝つてもおかしくなかった」

「……見たかったなあ」

本気で悔しそうに呟く紅也。しかしこの後悔に意味はない。もし倒れることなく代表になったとしても、それは万丈目と戦うことになる未来。紅也としては観客席からデュエルを眺めたいのであって、対戦相手になりたい訳ではなかった。

「取り敢えずはそんな感じね。デュエルが終わってここへ戻って来たら、竜伊くんがちょうど目を覚ましていたって訳」

「天上院、そんなに俺の様子見に来てくれてたのか」

「べ、別に……そんな頻繁に来てたとかじゃ……」

恥ずかしそうに顔を逸らす明日香。そんな彼女に感謝の気持ちを感しながら、紅也は湧き上がる欲求を口にした。

「……………腹減った」

2日近く何も食べていないのだから、当然と言えば当然である。意識してしまえば瞬く間に襲ってくる空腹感、紅也は悲鳴を絞り出すように声を発した。

「着替えよ……。天上院、少し出てってもらえるか？」

「わ、分かったわ。着替え終わったら教えて、私も付き添うから」

紅也からの返事を待たずに部屋を出た明日香。どうやら彼女が付き添うことは確定事項らしい。

過保護な少女を微笑ましく思いながら、紅也は黒竜に補助されながら立ち上がった。

「いくら心配だからって……。やりすぎじゃない？」

黄色の制服に着替え、いつも通りの服装となった紅也。2日ぶりの食事を摂るべく食堂へ向かおうとしたのだが、考えもしなかった緊急事態が発生した。

「ダメよ、また倒れたりされたら困るもの。私もついていく」

「それは別に良いんだけど……」

明日香の提案自体は断るようなものではない。問題は、彼女の付き添い方にあつた。

（ち、近いんだよなあ……）

紅也の腕にピツタリと密着し、身体を支えようとしている明日香。表情は真剣そのものであり、本気で紅也を心配しているのが伝わる。自身の行動が紅也を苦しめているとも知らずに。

（~~~~っ!!!）

歩き出そうとした途端、密着度が跳ね上がる。左腕は完全に支配され、動かすことすら出来ない。いや、むしろ動かさうものなら通報案

件となってしまうかもしれない。

(……柔らかな——いやいやいやいや)

溶かされそうになる理性をなんとか保ち、紅也は意志を強く持った。完全な善意によって支えてくれている明日香に対し、そのような感情を持つなど失礼なこと。紅也は左腕にダイレクトアタックし続けてくる幸せを、嬉しいながらも恨めしく思った。

「ちよ、ちよつと、天上院？」

「どうしたの？ 足でも痛い？」

「そ、そうじゃなくて……もう少し離れてもらえると」

「ダメ。竜伊くんフラついてるし、支えがないと危ないわ」

断固として首を横に振る明日香。紅也が目の前で倒れたことが、余程ショックな出来事だったらしい。

今の間答で言葉では無駄だと確信した紅也。そろそろ離れてもらわなければ色々ヤバい。混乱する頭を必死で働かせ、起死回生の一言を放った。

「の、喉乾いたなあ。自販機行っていい？」

「……ごめんなさい。そうよね、喉乾いてたわよね」

「実はカラカラでさ、今すぐ何か飲みたいんだ。だから少しだけ離してもらえると……」

「じゃあ、私が買ってこるわ」

「えっ」

有無を言わさない様子の明日香。通路に置いてあるベンチを見つけると、紅也の腕を引いて座らせた。

「ここで待っていて。戻ったところに自販機があったから」

「いや、普通に俺が買って」

「何が飲みたい？」

「だから……俺が」

「竜伊くん。——何が飲みたい？」

「……お茶でお願いします」

「うん。少し待っててね」

笑顔で駆け出しで行った明日香。そんな彼女の背中を見送りなが

ら、紅也はようやく一息つけたのだった。

(……あああああ)

壁に背中を預けながら項垂れる紅也。善意の思いやりに対して下衆な考えをしたこともそうだが、歳下の少女をパシらせてしまった事実にも凹まされていた。

(良い子だよなあ)

男女問わず好かれる理由が分かる。

紅也がそんなことを考えていると、一人の男から声をかけられた。

「——竜伊紅也！」

「……ん？ ……万丈目？」

重力に逆らう特徴的な髪型に、髪色と同じ漆黒のコートを着る男。見事デュエルアカデミア復活を果たした万丈目準であった。

急な推しキャラの登場で、落ち着いてきた動揺が再び高まった。

(おお、黒い。万丈目……サンダーか)

約3ヶ月ぶりに見た万丈目。偉そうな目と態度は変わっていないが、ブルーだった時の攻撃的なトゲトゲしさは消えていた。

生まれ変わった万丈目との再会を喜んでいると、万丈目が静かに口を開いた。

「……お前を探していた」

「俺を？ どうして？」

ベンチに腰掛けたまま訊ねる紅也。アンティデュエル以外で絡みはなかったもので、そのことだろうか。紅也が少しばかり警戒していると、万丈目は急に頭を下げ出した。

「——レッドアイズが宝の持ち腐れだと言ったことを……謝罪する。すまなかった」

「……万丈目」

しっかりと頭を下げ終えてから、顔を上げる。そして万丈目はどこかスッキリしたような表情で、紅也へ高らかに宣言した。

「約束は果たしたぞ！ これで文句はないな！」

「……ああ、ありがとう」

「フン！ 貴様から礼を言われる筋合いはない！ ——じゃあな！」

不機嫌そうに鼻を鳴らしながら、万丈目は背を向けて歩き出した。耳元で騒いでいるのは精霊である『お ज्याマ・イエロー』だろう。原作通りの推しキャラに、紅也は素直に嬉しくなった。

『……なっ？ 良いやつだろ？』

『……グウ』

どうやら黒竜からの評価も少し上がったようだ。これならば、万丈目を見かけて威嚇するようなことにはならないだろう。

相棒の様子に満足しながら、紅也はお茶を抱えて走って来た明日香を笑顔で迎えたのだった。

????????????????????  
「体調は良さそうだな、紅也」

「……お前もな、三沢」

授業終わりの教室。離れた席で受けていたため、三沢が紅也の席まで足を運び声をかける。全力デュエルで体調を崩した者同士、2人はお互いに相手を労った。

「知っているか？ 紅也」

「何を？」

紅也が教材を片付け終わると、三沢が面白い話でも聞いたように話し出す。

「十代達が大徳寺先生と課外授業に行くらしい。なんでも遺跡の近くまで行くとか」

「……へえ、そうか」

「少し羨ましく思ってたな。君はそうでもないようだが」

「……いや、錬金術の授業は取ってないからな。元々俺達には縁がない話だよ」

「確かに、では次の教室へ向かうか」

三沢は冷めている紅也の反応にも、気を悪くした様子はない。知り

合ってそこそこ時間も経っている上に、デュエルでぶつかりもした。人間性もそれなりに把握済みということだろう。

まあ、紅也の反応にも理由はあるのだが。

(学園対抗デュエルが終わって、万丈目も帰って来た。そして大徳寺先生との課外授業……)

物語の進行度から考えても、そろそろ始まる筈だ。1年生の時に起こる事件の中で——最も大きく厄介な事件が。

(……頑張りますか)

相棒のカードを取り出し、紅也は覚悟を決めた。

〜最初の戦い〜

「……バイトの募集？」

お馴染みとなったドローパーンを片手に、紅也は購買部のトメと会話を弾ませていた。メガネをかけた包容力のある女性であり、ミスデュエルアカデミアの称号を持っている。

デュエルアカデミア関係の人間にしては珍しく、デュエルに関しては素人同然だ。しかし、優しい性格や話しやすい態度から生徒達にも人気の人物である。

「そうなのよ、家の都合とかで1人辞めちゃってねえ。紅也ちゃん誰か紹介出来ないかい？」

「んー、特に心当たりはないかなあ。ていうか、俺より十代とかの方が知り合い多いんじゃないですか？」

「確かにそうかもだけど、あの子の知り合いは学生ばつかだろお？  
紅也ちゃんはなんか大人の知り合い多そうだと思ってねえ」

年の功というのか、トメは割と鋭かった。驚きを表に出さないように抑えながら、紅也はドローパーンに齧り付く。今回引いた味はまさかのイクラ、ハズレかと思っていたがプチプチとした食感はそれなりにパンに合っていた。

「……バイトか。良さそうな人居たら声かけときますよ、トメさん」

「そうかい！ ありがとねえ、紅也ちゃん！」

「あんま期待はしないでくださいよ？」

「分かってるわよお。……あら？ なんだいそれ？ 紅也ちゃんそんなの付けてたかい？」

ドローパーンのゴミを片付ける紅也に、トメが声をかける。見覚えのないアクセサリーが首から掛けられていることに気付いたようだ。そしてあまり趣味が良いとは言えないデザインに、トメは苦笑いした。

「……ああ、これですか。今朝校長室を通りかかったら、鮫島校長に貰えたんですよ」

「そうなのかい。……か、変わったデザインだねえ」

「確かにそうですね。でも、必要な物だから……。じゃあ、俺はそろそろ行きます」

「あいよ、いつもありがとね」

深くは語らず、紅也はトメに別れを告げた。これから忙しくなる。そのためデツキ調整をするため、紅也は真っ直ぐ部屋へ戻った。

「――三幻魔のカード？」

心底不思議そうに声を発したのは、遊城十代。

授業終わりに校長室へ行くよう指示を受けた十代と同じく、彼の他にも三沢、明日香、万丈目といった1年生。そして学園最強と名高いカイザー亮と実技担当最高責任者のクロノス。デュエルアカデミアでも飛び抜けた実力を持つデュエリスト達が集められていた。

「この島に封印されている、古より伝わる3枚のカード……それが三幻魔と呼ばれるモンスターです」

6人のデュエリストを呼んだ鮫島は、集まってもらった理由である三幻魔について話し出した。

鮫島曰く伝説によれば、三幻魔のカードが封印から解き放たれた時――世界には闇が広がり、破滅の未来を迎えてしまうらしい。

いきなり世界などという大きな話をされ、明日香や三沢、万丈目は息を呑んだ。亮は顔にこそ出していないものの、驚いているという点では同じだった。

そしてそれ程の力を持ったカードの封印を解こうとしている勢力がいた。

「……………」セブンスターズ」と呼ばれる7人のデュエリスト。彼ら



が三幻魔の封印を解こうと、アカデミアへ宣戦布告してきたのです。全くの謎に包まれた7人ですが、既にその内の1人がこの島へ侵入しています」

「なんですって!?!」

思わず三沢が声を上げた。挑戦してきた勢力が既に攻め込んで来ているとなれば、無理もない。

そんな三沢に同調するように、明日香が疑問の声を上げた。

「……でも、どうやって封印を解くんですか?」

「——三幻魔は『七精門』という七つの石柱によって封印されています。そしてその封印は七つの鍵によって解くことが可能です。……そしてその鍵が、これです」

鮫島が机の上に取り出した重々しい箱。優秀な頭脳で話を理解した三沢は、それを見てやるべきことを悟った。

「では……」セブンスターズはその鍵を奪いに?」

「その通り。そこで皆さんに力を貸してもらいたい。三幻魔の封印を解くにはこの鍵が必要不可欠。奪いにくる」セブンスターズ」から、この鍵を守って頂きたいのです」

「守ると言っても……どうやって?」

万丈目の不安そうな声に、鮫島はハッキリと答えた。

「当然……デュエルです」

七精門の鍵に選ばれるためにはデュエルに勝利しなければならぬ。それも古より決められた絶対的なルールだ。

以上の理由から、学園でも屈指の実力者達に鍵を守ってもらいたい。鮫島からの要求はそうだったものだった。

覚悟がある者は鍵を受け取ってほしい。そんな鮫島の言葉に真っ先に反応したのは、やはりと言うべきか十代。楽しそうなことにもでも挑むかのような笑顔で、箱から鍵を取り出した。

そんな能天気な十代に続き、呼ばれた者達全員が鍵を手にとった。

しかしここで、明日香があることに気付く。

「ですが校長……ここに鍵は6つだけ。残りの1つはどこへ?」

「ああ、それでしたら心配は要りません。皆さんと同じく、信頼の置け

るデュエリストが既に持つていてくれています」

「信頼の置けるデュエリスト……？」

「申し訳ないが、匿名希望だね。だが、必ず鍵を守り抜いてくれると信じている。……君達と同じようにね」

こうして三幻魔復活を阻止するため、”セブンスターズ”との戦い幕を上げたのだった。

??  
ほとんどの生徒が寝静まった夜、紅也は久しぶりの夜間外出をしていた。最近は十分に睡眠を取っていることもあり、眠気は欠片も感じない。

そしてこんな夜更けに部屋を出ている理由とは言えば、紅也の首から掛けられた紐に繋がる七精門の鍵だった。

(……緊張、するな)

この世界に来てから初めて感じる類のプレッシャー。それも無理はない、これから臨もうとしているのはただのデュエルではない。実際に痛みを伴う危険性がある——”闇のデュエル”なのだから。

原作知識によって敵が十代を狙ってくることは知っている。そのため紅也は《オシリスレッド》の寮近くで木の陰に姿を隠していた。緊張を紛らわせるためにデッキを取り出し、カードの確認を始める。

『……どうだ？』

『グルウ』

紅也の隣に現れた黒竜、紅也の言葉に頷くといった反応を見せている。

『……近付いてるんだな』

レッドアイズが感知していたのは、同族の気配。

これから相手しようとしているモンスターを紅也は知っている。だからこそ、こうして自身の相棒に頼っているのだ。

(……来たか)

2分程その場に待機していると、レッドアイズが低く唸り出す。どうやらお目当ての相手が来たらしい。

木の影から少しだけ顔を出してみると、怪しい仮面をつけた怪しい人物が寮へ歩き出そうとしていた。

今になって恐怖が湧き上がる。腕も肩も膝も、情けなく震え出した。しかしここまで来て震えて終わる訳にはいかない。これは義務感で決めたことではなく、自分の意志で決めたこと。逃げ出してしまえば、自分はもう戦うことは出来ないだろう。

自身を奮い立たせながら、紅也はレッドアイズと共に一步を踏み出した。

「……ひよつと待て」

恐怖から軽く噛んでしまったが、問題はない。気にしなければ勝ちである。変な仮面を付けているせいで聞こえ辛い筈と、紅也は淡い期待をした。

じわじわと恥ずかしさに襲われていると、声をかけられた男が目を赤く光らせながら口を開いた。

「なんだ貴様は？　——ほう、その鍵を持つ者か。なるほど」

「そ、そういう訳だ。……お前の相手は俺がする」

「面白い、ならば相手をしてやろう。……ちようどいい生贄も居るようだからな」

「……？」

気になる言葉に警戒する紅也だったが、男はお構いなしに話を進めた。赤い目を更に光らせ、辺り一面を包み込んだのだ。

咄嗟に腕を顔の前に持ってきた紅也。光が収まったのを確認し目を開けると、信じられない驚きの光景が広がっていた。

(……ファンタジー)

上を見れば黒煙が上がる夜空、下を見れば嫌でも命の危険を感じさせられるマグマ。周りを岩で囲まれていることから、移動先が火口で

あることが分かった。

そんな危ない場所に張られた光の床に、紅也は立たされていたのだ。

全く原理の分からない瞬間移動を経験したが、今は驚き続けている状況ではない。マグマから飛んで来た炎の竜、それが光の床に激突し先程の男が姿を現したからだ。

黒歴史確定のような格好でのド派手な登場。最早カツコ良さすら感じてしまう紅也だった。

「——我が名はダークネス。無謀にも私に挑みしデュエリストよ、貴様を最初の相手と認めてやろう」

「……どうも。早速始めようか」

引き返すことも出来ず、戦うしか選択肢にはない。紅也はデュエルディスクを起動させ、デッキをセットした。

「フッフ、威勢がいいな。これより行うのは“闇のデュエル”。覚悟は決まっているか？」

「……まあ、それなりに」

以前同じようなことを言っていた。パチモンとは訳が違う。放たれるプレッシャーもそうだが、真正銘のマジモンなのだから。

「良い眼だ……。これならば少しは楽しめそうだな。——アレは必要なかったかもしれない」

「……アレ？」

仮面のせいで口元しか確認出来ないが、恐らくは笑いながらダークネスがマグマを指差した。紅也が素直にその方向へ視線を向けると、そこには思わず声を上げてしまう人物が捕らえられていた。

「——天上院ッ!!」

紅也が立っている光の床よりも更にマグマへ近い位置。明日香はそんな危ない場所に作られた光の牢屋に閉じ込められていた。

「竜伊くん!」

「どうしてお前が……。ああ、クソッ!」

明日香自身もどうしてこんな状況に陥っているか分からないように、動揺を隠せていない。

「おい！ 天上院は関係ないだろ！ 今すぐ解放しろッ！」

珍しく声を張り上げながら全力で叫ぶ紅也。もちろん明日香の身を案じているのもあるのだが、それ以上に――。

この男が明日香を危険に晒しているという部分が許せなかった。

「光の檻に守られてはいるが、あれは時間と共に消滅する。このデュエルが長引けば、彼女はマグマの中だ」

「……なんでこうなるんだよ」

十代を狙っていたことは覚えていたが、明日香が巻き込まれていたことは忘れていた紅也。覚えてさえいれば防げた事態、紅也は自分を強く責めた。

「生半可な覚悟で臨んではつまらんからな。そして、このデュエルに敗北した者はこのカードに封印される」

挑発するような声音で取り出したのは一枚のカード。イラストもテキストも見られない白紙のカードだが、漆黒の闇に覆われており危ないオーラを放っている。

（……時間が無いな。――やるしかない）

明日香の命も危ういとなれば、最早緊張などしていられない。紅也は確実に勝つため、そして一刻も早く明日香を救出するために――懐に入っているデッキケースから一枚のカードを取り出した。

「では始めようか。魂を賭けた”闇のデュエル”を！」

「……速攻で終わらせる」

三幻魔復活を阻止するため、最初の戦いが始まった。

真紅の瞳を持つ――黒竜同士の戦いが。

く黒竜 VS 怒りの黒竜く

「——デュエルツ!!」

紅也                   LP 4000

ダークネス       LP 4000

マグマの上という絶対にデュエル場にはならないであろう危険地帯。そんなあり得ない場所で、命を懸けた決闘が開始された。

(天上院……)

生贄と称され、捕らえられた明日香。閉じ込めている光の檻は時間経過と共に崩壊していく、長引けば命が危ない。

(こんなことなら、初めからこっちのデッキを……いや、今はそんなこと考えても無駄だ。集中しろ)

懐に入れてある前世のデッキ。余程のことがない限りは使用しないと固く決めていたため、ダークネスには現世のデッキで挑むつもりであった。

しかし危険に晒されたのは自身だけでなく、巻き込まれた明日香も同様だ。紅也が咄嗟に出来たことは、デュエルが開始される数秒前に1枚のカードをE X <sup>エクストラ</sup>デッキに入れることだけだった。

(……まずは、ここが勝負だ)

そして初めの勝負所——先攻を取れるかどうかだ。

デュエルに於ける先攻・後攻は、開始時にお互いのデュエルディスクに表示される。これは完全にランダムであり、決して早い者勝ちではない。

この戦いで先攻を取れるかどうか、それは紅也にとって最も重要な要素であった。なにせ相手は自分と同じカードの使い手。最悪の場合、無抵抗に大ダメージを受ける可能性がある。それだけは避けたかったが、デュエルディスクに表示されたのは無情にも——後攻だった。

「私のターン、ドロロー！」

後攻になってしまったものは仕方ない。もう紅也に出来ることは最悪のパターンが飛んでこないように祈るだけだ。

「私は『黒竜の雛』を召喚！」

『黒竜の雛』 ATK／800 DEF／500

三沢とのデュエルで大活躍したモンスターだが、今回登場した役割はあの時とは違う。このモンスター本来の力を発揮するためだろう。

『黒竜の雛』の効果発動！ このカードを生贄にすることで、手札から『真紅眼の黒竜』を特殊召喚する！」

何度も経験したことがある王道パターン。マグマから飛び出して来た黒竜を見て、紅也は複雑な気持ちになった。

『真紅眼の黒竜』 ATK／2400 DEF／2000

しかしそんな微妙な感情を抱いている場合ではない。レッドアイズが出て来たということは、最悪のパターンに襲われる可能性が高まったということなのだから。

——そして、そんな予想は現実となった。

「魔法カード！ 『黒炎弾』！」

(……最悪だッ)

祈りはしたが続け様の不運。紅也は覚悟を決めて歯を食いしばった。

「私のフィールドに『真紅眼の黒竜』が存在する時、その元々の攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与えるッ！」

(……踏ん張れッ!!)

これまで数多くのデュエリストへ向けてきた火球が、今度は自分へ向けられている。紅也は意識を保つべく、身体にありったけの力を込めた。

「灼熱の業火に焼かれ燃え尽きるがいいッ！ 黒炎弾！」

生成された火球が——放たれた。

「うああああアアアッ!!!」

”熱い”、”痛い”、”苦しい”。

全身を焼き尽くそうとする炎はソリッドビジョンなどではなく、実際に紅也を焼いた。骨が溶かされたような錯覚すら起こし、精神は地獄のような熱さに支配されたのだ。

全身を刺すような激しい痛み。炎が消えても残り続ける激痛によつて、紅也は膝から崩れ落ちた。

紅也 LP4000↓1600

「……ガツ、く……。ああ……。カハツ」

肺に空気が上手く取り込めず、苦しきから手札を落としてしまう。空いた手で胸を押さえるが、受けた衝撃は消えない。冗談ではなく、確実に命が削られた。

「竜伊くんッ!!」

下から紅也の様子を見せられていた明日香が叫ぶ。いきなりこんな状況に連れてこられ困惑していたが、紅也から聞いたことのないような悲鳴が上がったことで涙すら出そうになった。

バンバンと自身を閉じ込める光の檻を叩いていると、徐々に光が薄まっていった。そしてついには、穴が空いたのだ。

「ぎゃあっー!」

勢いで身体が檻の外へ出そうになる明日香。なんとか踏み留まったが、もう少しでマグマへ落下する所だった。

「……て、天上院。大人しく……。してろ」

「竜伊くん! 無理しないで! 私のことはいいから! 貴方だけでも逃げて!」

恐らくは火口であろうこの場所、逃げ場などないことぐらい分かっている。しかし、叫ばずにはいられなかった。苦しみから立ち上がれでもない紅也を見ているのだから。

「フツ、一撃でこのザマとはな。どうやら見込み違いだったようだ」

失望したように笑うダークネス。自身の行動を先読みし、こうしてデュエルを挑んできたデュエリスト。いい勝負が出来ると期待したが、そうでもなかったらしい。

「潔くサレンダーしろ。楽になれるぞ」



そんなダークネスの言葉に耳を傾ける余裕すら、紅也にはなかった。今やるべきことは立ち上がることに、それ以外にないのだが身体が言うことを聞かない。刻み込まれた痛みと恐怖が、紅也の動きを完全に止めていた。

——しかし、このまま終わる訳にはいかない。

最後の手段と、紅也は相棒に頼った。

『……レッド、アイズ。——頼む』

『グルウウウ』

自分の意思で身体を動かさないのなら、自分以外の意思で動かせばいい。既にレッドアイズと同化すれば身体を動かせることは知っている。紅也は自身の身体を相棒に任せた。

「……ぐっ、ああ、ツ!!」

「立ち上がるか……面白い。どこまで足掻けるか見せてもらおう。私はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

とてつもなく長い時間が過ぎたようにすら感じつつも、紅也へターンが回って来る。床へ落とした手札を拾うだけでも一苦労だ。無理矢理動かしてもらっている身体はガクガクとフラつくが、紅也はレッドアイズと意識を共有し戦い始めた。

「……俺のターン、ドロウ」

全く動かさなかった腕が動く。レッドアイズとのシンクロ率は抜群なようで、行動と思考との間に違和感を感じられない。これならば存分にカードを操れる。

『一気に……いくぞ』

『グルウ』

人間と精霊による二人羽織デュエル。長引けば紅也の身体が限界を迎えるだけではなく、明日香の身も危ない。

——このターンで決める。

紅也とレッドアイズの意識は1つとなった。

「魔法カード『強欲な壺』を発動……。カードを2枚ドロウする」

いつもながらのドロースース。これを初手で引けるかどうかで、動ける回数に大きな差が出てくる。

そして2枚のドロローによって目当てのカードを引き込んだ紅也。レッドアイズの精霊補正でも乗っているのか、狙い通り過ぎる。普段のデュエルならば卑怯とも思ったが、今はそんなことを気にする余裕などない。

明日香との約束、明日香の命——そして自分の命。どれも捨てる訳にはいかない譲れないものだ。紅也はそれら全てを守るため、一切の遠慮を捨て去った。

「魔法カード『召喚師のスキル』。……デツキからレベル5以上の通常モンスター1体を手札に加える。選ぶのは——『メテオ・ドラゴン』」

選択されたモンスターの名前を聞き、ダークネスが声を溢す。あのモンスターが投入されているということは、融合素材とするドラゴンを所持しているのはほぼ確定と言っている。それ以外で投入する理由など特にないのだから。

ダークネスの読み通り、紅也は融合を行うつもりだった。ただ1つ間違いがあるとするならば——召喚するドラゴンが違うことだ。

「魔法カード『融合』。……手札の『真紅眼の黒竜』と『メテオ・ドラゴン』を素材とし……融合召喚を行う」

デュエル開始直前にEXデツキへ投入した1枚。前世から使用している融合モンスターであり、この世界で使えば4000のライフポイントなど容易く消し飛ばすバケモノだ。

紅也は苦痛に顔を歪めながら、レッドアイズの補助でカードをデュエルデスクへセットした。

大地が揺れると共に空気が震え出す。天高くより飛来した隕石がマグマへ落下すると、圧倒的な温度のエネルギーを吸収し——1体のドラゴンが姿を現した。

「——『流星竜メテオ・ブラック・ドラゴン』」

空気すら焼き尽くす獄炎を纏いしドラゴンが、紅也の前へと降りた。隕石から飛び出してきたとは思えない程に細身の身体をしているが、放たれるプレッシャーは異常と言う他ない。ダークネスを視線だけで焼き殺しそうな程だ。

「……流星竜、だど？　なんだそのモンスターは……『メテオ・ブラック・ドラゴン』では……ないのか」

現れた流星の名を冠するドラゴンに、ダークネスは動揺を隠せないでいた。予想していた『メテオ・ブラック・ドラゴン』と名前こそ同じだが、姿は全くの別物。紫色の身体を流れる血脈のような業火、恐ろしさと美しさが共存している異様な存在感から目が離せない。

『流星竜メテオ・ブラック・ドラゴン』 ATK/3500 DFE/2000

主人が死にそうな顔をしているからか、流星竜はダークネスへ向けて大きく咆哮する。火口に衝撃が轟くと共に、空からは再び隕石が降り注ぐ。ドラゴンの怒りを、形にするかのように。

「……『流星竜』の効果発動。——このカードが融合召喚に成功した時、手札・またはデッキから”レッドアイズ”モンスター1体を墓地へ送り、そのモンスターの元々の攻撃力の半分のダメージを……相手プレイヤーに与える」

「なんだとツ?！」

驚愕するダークネスに意識を割く余裕もなく、紅也はなんとか意識を保ちつつモンスターを選択した。

「俺は『真紅眼の黒炎竜』をデッキから墓地へ送る。元々の攻撃力の半分……1200ポイントのダメージを受けろ」

「がああああアアツ!!」

ダークネス LP4000↓2800

選ばれた『黒炎竜』の炎が流星となり降り注ぐ。ダメージは半分だが、先程の『黒炎弾』よりも炎の出力は大きい。

「……バトルだ。『流星竜』で『真紅眼の黒竜』を攻撃。——メテオ・フレア!」

『グルオオザアアアアアツツ!!』

身体中の炎を集中させ、隕石のような業火球を生成。あんなのをまともに喰らえば、存在した証はこの世から灰すら残らず消えるだろう。

ダークネスの『真紅眼の黒竜』は抗うことも出来ずに、断末魔を上げて消滅した。

「……………ぐはアツ」

ダークネス LP2800↓1700

戦闘ダメージを受けるダークネス。直接受けるダメージよりはマシなのか、先程よりは表情に余裕がある。ここで相手の攻撃は終わり、次のターンで巻き返しを狙っているのだ。

——自分に、次のターンがないことを知らずに。

「更に速攻魔法…………『融合解除』」

「ま、まさか!？」

「効果により『流星竜』の融合を解除。戻って来い…………『レッドアイズ』、『メテオ・ドラゴン』」

『真紅眼の黒竜』 ATK/2400 DFE/2000

『メテオ・ドラゴン』 ATK/1800 DFE2000

この戦いのために調整段階で新たに採用した『融合解除』が決まり、紅也のフィールドに2体のドラゴンが現れる。バトルフェイズはまだ終わっていないため、2体とも攻撃体勢だ。

『『レッドアイズ』で…………ダイレクトアタック。——黒炎弾!』

『グルウオオオオオオオッ!!』

自身を消し飛ばそうとする火球に対し、ダークネスもただ黙って見ているだけではなかった。

「畏発動! 『リビングデッドの呼び声』! 『真紅眼の黒竜』を墓地から特殊召喚する!」

「…………攻撃は続行。いけ、『レッドアイズ』」

互いの攻撃力は同じ、よって相討ちとなり2体の黒竜は破壊。だがこれで勝負は決した。ダークネスのフィールドにカードはなく、紅也のフィールドには攻撃権を残したドラゴンが存在しているのだから。

「…………そんなバカな、この私が——」

『メテオ・ドラゴン』のダイレクトアタック……これで終わりだ」

夜空へ上昇した隕石は全身に炎を纏うと、落下エネルギーを加算した強力な体当たりを繰り出した。

そしてそれは、この“闇のデュエル”を終わらせる——流星の一撃となった。

ダークネス LP1700↓0

「……………は？ ……竜伊くんッ!!」  
デュエルが終わり、激しい炎に包まれたと思えば、火口から別の場所へ転移していた。岩ばかりが見えることから、恐らく火山の上だろう。

怪我もなく無事に解放された明日香。辺りを見回すと、力無く倒れ伏している紅也が目に入った。すぐに駆け寄り様子を見る。息があることを確認し、最悪の状況ではないと安堵した。

「……て、天上院。……怪我不いか？」

「……………うん」

「そっか……良かった。——ゲホッ、ゴホッ」

「竜伊くん！ しっかりして！ ……これは——」

腕に抱えた紅也に声をかける明日香。声に覇気がなく、呼吸も乱れている。身体中がボロボロであり、先程受けた攻撃の激しさを物語っていた。

そしてある物に気付いた明日香。それは紅也の胸に揺れている——七精門の鍵だった。

「鮫島校長が言ってた信頼の置けるデュエリストって……竜伊くんだったのね」

「……まあな。このデュエルだけは……俺がやりたいと、思ってた。ごめんな、天上院。危ない目に遭わせて」

「——ッ！ 違うわ……私が、捕まったりしたから」

涙を滲ませる明日香。そんな彼女に申し訳なく思いながら、紅也は残された力を使って指を動かした。

「俺のことは……いいから。あの人を……」

「……えっ？ あの人？ ……ダークネス！」

紅也が指差した方向を見ると、同じく倒れている男が居た。紅也と命の削り合いをしていたデュエリスト、ダークネスだ。

「……早く。俺は、大丈夫……だから」

「竜伊くん！ 竜伊くん！」

限界を迎えたようで、紅也は意識を手放した。泣きながら叫ぶ明日香だったが、泣いてばかりもいられない。ゆっくりと紅也を寝かせ、ダークネスに向かって歩き出す。

そして明日香は、衝撃の事実を知る。

「………兄さん？」

敵だと思っていたダークネスは、明日香が探し続けていた実の兄——  
天上院吹雪てんじょういんふぶきだった。

く謎多き恩人く

デュエルアカデミア保健室。そこには2人の男子生徒がベッドに寝かされており、1人の女子生徒が不安そうな顔で看病をしていた。

寝かされている男子生徒の1人、天上院吹雪。

アカデミア最強と謳われるカイザー亮と互角に戦うことが出来たデュエリストであり、周囲からは好敵手と認識されていた。しかしそんな彼はこれまで行方不明となっており、アカデミアへ帰って来たのも久しぶりのことだ。

そして吹雪の隣のベッドに寝かされている男、竜伊紅也。

ダークネスに身体を奪われていた吹雪を倒すことで、吹雪を取り戻した張本人である。闇のデュエルで受けた『黒炎弾』のダメージが大きく、吹雪と同様に未だ意識は戻っていない。

「……兄さん。……竜伊くん」

眠り続ける二人を見守るのは、天上院明日香。

念願だった兄である吹雪との再会、闇のデュエルの恐ろしき、恩人である紅也の状態。たった1日で頭がオーバーヒートしそうになる程の情報量の多さだ。

鎮めようと努力はしているのだが、やはり心が乱れてしまう。何故なら彼女は目の前で目撃しているのだ。兄を取り戻すために、文字通り命を懸けた男の戦いを。

『俺も協力するよ、天上院のお兄さんを探すの』

月明かりが照らす夜道で交わした、1つの約束。

明日香は涙を堪えながら、その時のことを思い出していた。

数ヶ月程の付き合いではあるが、既に様々なことで助けられている。

そして今回、自身の中で最も強く叶えたいと思いつけてきた願いを——叶えてもらったのだ。

(……大丈夫)

彼らが眠りについてから3日。明日香は何度自分にそう言い聞かせたか、最早分からなかった。

看護教諭である鮎川恵美あゆかわえみが言うには目立った外傷もなく、命に別状はないとのこと。意識が戻るのも時間の問題らしいが、3日という時間で何も変化がなければ流石にネガティブな思考にもなる。

ここまで近い距離に居るにも関わらず、”ありがとう”の一言すら届けられはしないのだ。精神的にも厳しいものがあった。

そして明日香の頭を悩ませている要因はもう一つ。

——竜伊紅也という男の謎についてだ。

(……見たことないモンスターだったけど、間違いなく”レッドアイズ”だった。——でも)

あまりにも強過ぎた。明日香の疑惑はこの一言に尽きる。

召喚するだけで相手ライフを削るバーン、更にはその能力に見劣りしないステータス。アカデミアの学生が召喚して良いモンスターでは到底なかった。『融合解除』と合わせてワンターンキルとなったのも納得の強さだ。

(……竜伊くん。貴方は……何者なの?)

ベッドで眠り続ける紅也を見て、明日香は心の中で言葉を放った。自身よりも多くの知識を有する三沢に訊ねてみても、『流星竜』などといったモンスターは知らないと返された。三沢が知らないのならば、このアカデミアで知っているものなどまず居ない。

明日香が再び頭を悩ませていると、保健室のドアが開く。入って来たのは、明日香と同じく紅也と関わりのある者達だった。

「よっ、明日香。昼飯買ってきたぜー」

「君も少しは休んだ方がいい。お茶も買っておいた」

笑顔でドローパンを差し出す十代に、明日香を心配する三沢。彼らも紅也を心配しており、明日香のようにほぼずつとではないが保健室には毎日顔を出していた。



「……ありがとう。十代、三沢くん」

「紅也と吹雪さん、まだ起きてないか」

「今日で3日目か。心配だな」

「……ええ。ずっと眠っているわ」

袋から取り出したドローパーンを手に持ったまま、明日香は心配そうな表情で横たわる2人へ視線を向けた。

「まさか”七精門の鍵”を紅也が持ってたなんてな。”セブンスターズ”とも最初に戦ったみたいだし、驚いたぜ」

「まあ不思議でもないさ。彼の实力を考えればな」

「……でも、そのせいで竜伊くんが」

悲しそうな声を溢す明日香。目の前で紅也が倒れるのを見た分、心配する気持ちは特に大きい。

「心配すんなって」

「……十代」

元気がない明日香を励まそうと、十代が声を上げる。元気が服を着て歩いているような彼の言葉は、聞いた者に力を与えてくれる。

「紅也も吹雪さんもきつとすぐに目を覚ます！ お前の兄さんはあのカイザーとライバルだった男らしいし、紅也は俺達に勝った男だぜ！

なっ？ 三沢」

「ああ、十代の言う通りだ。明日香くんも、2人が目覚めた時のために元気でいなくてはな」

十代の言葉に、三沢も肩を組まれながら同意する。そんな2人の様子を見て、明日香は少しだけ気が楽になった。

「……そうよね。兄さんも竜伊くんも、きつとすぐに目覚めてくれるわよね」

明日香の言葉に強く頷いた十代と三沢。その後しばらく会話をした後、2人は保健室を去って行った。

1人に戻った明日香だが、先程までの暗い表情は消えていた。やはり友人からの言葉は元気に繋がる。

そこでふと、気付く。俯きがちだったからか、それともそんなことを考える余裕すらなかったからか。

明日香が目にしたのは、紅世のベッドの近くに置いてある台。その上には色の異なる2つのデッキケースが乗せられていた。

扱っていたのを見たことがある赤色のケースには普段使用しているであろうデッキ、もう1つの黒色のケースはメインではない予備デッキといった所だろう。複数デッキを所持しているデュエリストは数こそ少ないが存在する。流星に三沢のように3つ以上所持しているパターンは希少だが。

(……………)

現在、明日香の中では理性と好奇心が激しく戦っていた。デュエリストとして他人のデッキを盗み見るなど、恥ずべき行為だ。しかし、ほんの少し心に余裕が生まれたことで——魔が差してしまった。

(…………ごめんなさい)

椅子から立ち上がり、デッキケースを手にとった明日香。持ってみた感じ、普通の物と変わらない。ただの予備デッキ、頭ではそう考えているが、心はそう考えていない。

(この中に…………あのカードも)

もしそうならば、もう一度この目で見たい。兄を救ってくれたカード、見たこともないモンスター。看病で疲弊した明日香の心は、好奇心という名の欲望に敗北した。

「…………？ 開かない？」

指でケースのロックを外したが、何故か開かない。鍵穴も付いていないので普通に開けられる筈なのだが、デッキケースのフタはビクともしなかった。

「——ッ！ 私、なんてことを…………！」

そこで我に帰る明日香。慌ててケースを台の上に戻し、椅子に座り直す。中身を見なかったとはいえ、見ようとしたことは事実。明日香は強く自身を責めた。

(開かなくて良かった…………。ごめんなさい、竜伊くん)

紅世が起きたら素直に白状し、謝罪することを決めた明日香。恩人に対してやっていいことではないと、自らの行いを心から後悔した。

明日香は思わず、紅世の左手に自身の手を重ねる。伝わってくる体

温は低くはないが高くもない。顔色が良くないことも心配だが、寝顔が安らかなことだけが唯一の救いだつた。

「……早く、目覚めて」

少女は祈つた。

恩人と兄の意識が、早く戻ってくることを。

——身体が浮いている。

ハッキリとそんな感覚に囚われながら、紅也は目を開けた。周りには白い世界が広がっており、自身の他には何も無い。

「……えっ？ 死んだの？ また？」

転生者特有の笑えないブラツクジョーク、などというつもりもない。意識を手放す直前の記憶がある分、そう考えても無理はなかった。

「嘘だろ……。黒炎弾1発で？ 貧弱だなあ、俺」

むしろ十代やこの世界のデュエリスト達が異常なので、一般人の紅也と比べるのは少々酷な話だ。

紅也が遠い目になりながら己の貧弱さを嘆いていると、そんな彼の頭にコツンと軽い衝撃が走った。

「いて……レッドアイズ」

『グルウ』

振り向けばそこには、見慣れた相棒の姿。しかし身体が薄くなつていないことから、精霊化している訳ではなく実体化しているようだ。

「なあ、ここどこだ？ ていうか俺……生きてる？」

『グウ』

頷く黒竜、どうやら死んではないようだ。

最悪の事態は避けられたと、紅也は息を吐く。もし死んでしまったとすれば、明日香にトラウマを残してしまうことになる。せつかく兄

が戻って来たのにそれでは、流石に後味が悪過ぎる。

「死んでないってことは夢とか? ……うん、痛くないな」

ベタな方法ではあるが、頬をつねる紅也。痛みを感じないことから、自身の推測は当たっていると見て間違いなさそうだ。

「こんな状態になってるってことは……またベッドコースか」

起きた時にまた明日香から心配されそうだと、紅也は苦笑い。だがやるべきこと、約束は果たした。充実した達成感はある。

「……それで? お前がここに連れて来たのか?」

紅也の質問にまたも頷く黒竜。この不思議空間には相棒によって連れてこられたらしい。

「あのー、怒って……ますか?」

『……』

返答する代わりに口から黒炎を溢す黒竜。中々にぐ立腹の様だ。紅也も心当たりがないなどと言うつもりはないが、ここまで怒るとは思っていなかった。

「……悪かった。……ごめん」

低く唸り出し始めた黒竜へ、素直に頭を下げる。怒っている理由など、闇のデュエルで危険な目に遭ったこと以外に考えられない。

身体に火傷などは負っていない筈だが、精神には大きなダメージを受けた。だからこそ、こうして叱られているのだろう。

『グルウ』

「ん? ……おお、マジか」

黒竜が紅也から視線を外し、何も無い空間を見る。するとそこからいくつもの炎が舞い上がり、何体ものドラゴン達が姿を現した。

——前世から愛用している黒竜達だった。

「……すげえな」

そんな幼い感想しか出てこない程、紅也の目の前に広がる光景は壮観なものであった。

初めて転生者としてデュエルした時に力を貸してもらった——『悪

魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン』。

こうして意識不明となった原因である闇のデュエルで活躍した――『流星竜メテオ・ブラック・ドラゴン』。

2体を先頭に見覚えのある真紅眼達が、1体を除いて勢揃いしていた。

「……えーっと、怒ってる?」

『『『』――グルウ』』』』』

同時に上がる声。紅也自身も分かつてはいたが、彼の味方は1体も居なかった。いや、正確には味方しているからこそ、こうして責められているのだが。

「……すみませんでした」

もしお仕置きにデコピンでもされようものなら、紅也は本当に2度目の死を迎えるだろう。ただでさえこの場には、力加減の出来ない黒竜が多いというのに。

紅也がまたもや頭を下げていると、『流星竜』と『悪魔竜』が騒ぎ出した。精霊であるレッドアイズに召喚されたからか、紅也にもなんとなく言っていることが伝わった。

「……もうあんな戦いはやめろって?」

2体の黒竜に同調するかの如く、他の黒竜も騒ぎ出す。全員言いたいことは同じのようだ。

「それは……無理だな」

ブーイングの嵐、というより黒炎の嵐。紅也にギリギリ当たらない距離を黒炎が激しく走る。真紅眼集団ブチギレである。

「ま、待て待て、理由があるんだって」

一応聞く耳は持つらしく、黒竜達は大人しくなる。全ては紅也を心配しているからこそその怒り。間違いなく懐かれてはいるし、愛されてもいる。

「――って訳でさ、もう少し頑張るつもり」

紅也の説明に納得がいかなかったようで、再び巻き起こるブーイング（黒炎弾）の嵐。この一瞬で何人分のデュエリストのライフを削り切れたのだろうか。



「紅也と吹雪さん起きたかな？」

「……どうだろうな。明日香くんも睡眠を取っていると良いが」

昨日と同じく、肩を並べて保健室へ向かう十代と三沢。手に持つ袋には昼食のパンだけでなく、栄養ドリンクなども入っている。三沢による明日香へのせめてもの気遣いであった。

近付いてくる保健室。紅也と吹雪が目覚めていることを祈りつつ、三沢はドアを開けようと手を伸ばす。

——しかし、三沢の手が届く前にドアは開かれた。

飛び出してきたのは血の気が引いたような顔をした明日香。見るからに動揺しており、ただごとではない。

冷静さなど消え去った勢いで、明日香は衝撃の言葉を放った。

「竜伊くんがッ！——居ないのッ!!」

く不死と可能性く

「……割とキツいな」

額から汗を流しながら、辛そうな表情をして歩いている紅也。抜け出して来た保健室で明日香が騒いでいる頃だろうと罪悪感を感じながら、未だにあまり言うことを聞かない身体にムチを打っていた。

「ありがとう。レッドアイズ」

『……』

フラつく足取りの紅也を補助しているレッドアイズ。完全に実体化しており、足跡も残っている。自身の身体を支えにしながら寄り添う様は、完全に介護職の姿だ。

現在彼らが歩いているのは森、朝とはいえ木々が日の光を遮っている。周囲は暗い。整備されていない道を歩いているので、紅也としてもレッドアイズの補助はとても助かっていた。

(治らないもんだな……)

内心で呟く紅也。相棒に頼らざるを得ない状態なのも、ダークネスから受けたダメージによるものだ。何日か眠っていたようだが、自身の身体が回復しているとは思えなかった。

購買部で購入したおにぎりとお茶で手早く食事を済ませたので、空腹感を感じていないのが救いだ。トメに見つからなかったのも幸運だった。

闇のデュエルで受けたダメージは回復し辛いのか、それとも自分だけなのか。転生者だから受けるダメージが大きいなどは考えたくないが、自身が貧弱であると認めたくもなかった。

「……よし、もうちょいだ」

たとえ今回の戦いが終わった後で自分が倒れたとしても、その他の”セブンスターズ”は十代や三沢が倒してくれろという安心感。万丈目に明日香、更には亮やクロノスといった実力者達も控えているた



め、その後の戦いを心配する必要は微塵もなかった。

(天上院にはまた心配かけるかな。……先に謝つとこう)

目的地はもう目の前に迫っている。紅也は心の中で明日香へ謝罪した後、レッドアイズと共に決戦の地へと乗り込んだ。

??  
太陽の光が存在しない暗闇の洞窟。しかし何も見えないという訳でもなく、等間隔で設置されている蝋燭の火によって照らされていた。蝋燭の立てられているスタンドが洋風なのは、この洞窟に潜んでいた者の趣味である。

その者こそ、ダークネスに続くアカデミアへの刺客。

——第2の”セブンスターズ”であった。

腰まで伸びる鮮やかな緑色の髪に、透き通るような白い肌をした女性。男の視線を集めること間違いなしの抜群のスタイルをしており、露出度の高い赤いドレスと合わせて恐ろしい程の妖艶な魅力を放っている。

女性の名はカミューラ。

正真正銘の吸血鬼一族の末裔であり、ヴァンパイアを名乗れるこの世で唯一の存在だ。永き眠りについてきた所を起こされ、自らの野望を叶えるため”セブンスターズ”の一員となっていた。

勝利を得るために手段を選ばない覚悟のカミューラ。彼女は”七精門の鍵”を守るデュエリスト達を確実に倒すため、配下であるコウモリに敵対する者達のデツキの中身を確認させようとしていた。

最初から相手の手の内が分かっていたら対処するのは容易い。情報を持って帰って来る配下達を洞窟に身を潜めながら優雅に待っていた、そんな時だった。

——突然の来訪者が現れた。

帰って来たのは愛おしい配下達ではなく、これと言って特徴もない

平凡な少年が1人。侵入者に対しての警戒心が薄れてしまいそうになる程、何故か疲れた顔をしていた。

しかし、ある物を身に付けていたことで状況を把握。現れた少年が自身の敵であることを確信した。少年の胸に光り輝くそれは、カミューラがこの島に来た目的である”七精門の鍵”だったからだ。

「……どうも。初めまして」

やはり疲れているのか、覇気のない声が発せられる。歩き疲れでもしたのか、息も少し上がっているようだ。

気高きヴァンパイアとして誇りを持っているカミューラ。予想外の来客ではあるが取り乱すことなく、気品のある振る舞いと共に返答した。

「レデイの部屋に無断で入って来るなんて、礼儀知らずではなくて？

鍵の守り人さん？」

「……それは失礼。身体が動く内に貴女に会いたかったんでね」

まるで最初から自分がこの島に来ていたことが分かっていたかのような言い方に、カミューラは形の良い眉を歪ませる。

そもそもこの洞窟に身を潜めていると知っていること自体が可笑しな話だ。居場所を見抜かれる程、落ちぶれてはいない。カミューラは少年に対する警戒度を引き上げた。

「……貴方、嫌な感じね。ここで潰しておいた方が良さそう。情報収集する前に戦うつもりはなかったけれど、仕方ないわ」

「戦う気になってくれたなら良いんだ。……まあ、俺を逃すような甘い性格はしてないだろうけど」

「坊やのくせに、随分と知ったような口を利くじゃない」

少し苛立ったようなカミューラの言葉にも、少年は軽く笑みを浮かべるのみ。人間に対して強い憎しみの感情を抱いているカミューラにとって、少年の態度は面白くなかった。

「……じゃあ、始めようか」

「——ッ！ 後悔しないことね！ 私は人間相手に手加減出来ないわよっ！」

小さな火が照らす洞窟にて、三幻魔復活をかけた2回目の戦いが幕

を開けた。

互いにデュエルディスクを展開し、向かい合う2人。洞窟とはいえスペースはそれなりに存在し、デュエルするのに問題はなかった。カミューラが滞在するためにと、配下達が洞窟内を削りまくった恩恵であつた。

「分かっていると思うけど、これから行うのは”闇のデュエル”。文字通り命を懸けた戦いよ」

「ああ、分かっている。デッキの調整もしてきたんで、勝つ準備は整つてます」

「……可愛くない子ね」

眉間にシワが寄りそうになるのを堪えつつ、カミューラは手を広げて優雅に声を上げた。

「お相手させて頂くのは私。”セブンスターズ”の貴婦人、ヴァンパイア——カミューラ」

「……竜伊紅也。普通の学生です」

テンションの差が激しい名乗りを終え、カミューラと紅也は意識を切り替える。カミューラが言ったように行うのは”闇のデュエル”、腑抜けた気持ちで臨む戦いではない。

最低限の礼儀を済ませた所で、2人はデュエル開始の宣言をした。

「デュエルッ！」

「……デュエル」

カミューラ LP 4000

紅也 LP 4000

先攻を取ったカミューラは手札を確認した後、覚悟を決めてドロ―した。

「私の先攻……ドロ―！」

野望を叶えるため、カミューラは絶対に勝たなければならない。執念という力を糧に、彼女はカードを操った。

『不死のワーウルフ』を召喚！』

『不死のワーウルフ』 ATK／1200 DEF／1200

現れたのは狼男のようなモンスター。攻撃的な牙と爪は、荒々しい威圧感を放っている。

『おろかな埋葬』を発動。デッキから『ヴァンパイア・バッツ』を墓地へ送るわ。カードを2枚伏せて、ターンエンド』

低い攻撃力のモンスターではあるが、”アンデット”族には厄介な効果を持つモンスターが多い。紅也は気を引き締めながら、デッキトップに手をかけた。

「俺のターン、ドロー」

6枚となった手札を確認。初手としては悪くない。

「魔法カード、『紅玉の宝札』を発動。手札から『真紅眼の黒竜』を墓地に送り、デッキからカードを2枚ドローする。……追加効果を使用。デッキからレベル7の”レッドアイズ”1体を墓地へ送る」

『『紅玉の宝札』

『紅玉の宝札』は1ターンに1枚しか発動出来ない。手札からレベル7の”レッドアイズ”モンスター1体を墓地へ送って発動出来る。自分はデッキから2枚ドローする。その後、デッキからレベル7の”レッドアイズ”モンスター1体を墓地へ送る事が出来る」

前世のデッキに投入していた”レッドアイズ”専用のドローカード。今回の戦いに備えて、ここに来るまでに済ませておいたデッキ調整の結果だ。思い描いていた通りの初動をすることが出来た。

”レッドアイズ”……いい響きね。貴方のように平凡な子には不釣り合いじゃなくて?”

「更に魔法カード、『復活の福音』。墓地からレッドアイズを特殊召喚する」

『『復活の福音』

自分の墓地のレベル7・8の”ドラゴン”族モンスター1体を対象として発動出来る。そのモンスターを特殊召喚する。自分フィールド

ドの”ドラゴン”族モンスターが戦闘・効果で破壊される場合、代わりに墓地のこのカードを除外出来る」

「む、無視したわね！」

カミューラからの挑発を流し、フィールドに相棒を呼び出した紅也。不釣り合いなどの言葉は言われ慣れているので、最早挑発としての役割は果たせない。

無視されたことに怒るカミューラを黙らせるかのように、黒竜は洞窟を揺らす程の激しい咆哮を上げた。

『真紅眼の黒竜』 ATK/2400 DEF/2000

「……」

『グルウオ』

「わ、分かってるって」

順調にレッドアイズを呼び出した紅也だが、手札のカードを見て渋い表情をする。それを見ていた黒竜は、咎めるかのように1つ吠えた。

「……魔法カード、『黒炎弾』を発動。俺のフィールドに『真紅眼の黒竜』が存在するため、その元々の攻撃力分のダメージを相手に与える」  
「なんですってっ!?!」

淡々と告げられた効果に驚くカミューラ。たった3枚のカードで自身のライフを半分以上消し飛ばそうというのだから、当然といえば当然だ。

「ああああああアアアアッ」

カミューラ LP4000↓LP1600

モンスターと伏せカードをスルーし、カミューラへ火球が直撃する。大きくライフが削られたことで発生した痛み。カミューラは苦痛の悲鳴を上げた。

しかしポイントに見合った痛みではなかったようで、よろける程度の衝撃に収まっていた。そのため、カミューラはすぐに紅也を強く睨みつけた。

(……サンキュー、レッドアイズ)

『……』

紅也の呼びかけに振り向くことなく、黒竜は相手から視線を外さない。どうでもいいから集中しろと言っているようだ。

手札にきた発動可能な『黒炎弾』。ダークネスから受けた一撃に現在進行形で苦しめられている身として、紅也は発動するのを躊躇っていた。そんな思いを瞬時に汲み取った黒竜は、紅也を叱りつけると同時に火球の威力を調整。痛みを最小限に抑えたのだった。

『黒炎弾』を発動したターン、『真紅眼の黒竜』は攻撃出来ない。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「おのれ……私のターン、ドロロー！」

美しい顔が若干崩れつつ、カミューラがカードを引く。開かれた口に見えるのは鋭く尖った歯。ヴァンパイアらしい一面だ。

「畏発動！ 『リビングゲッツの呼び声』！ 墓地から『ヴァンパイア・バッツ』を特殊召喚！ モンスター効果でこのカードが存在する限り、私のフィールドに存在する”アンデット”族モンスターの攻撃力は200ポイントアップする！」

『不死のワーウルフ』 ATK/1200 ↓ 1400

『ヴァンパイア・バッツ』 ATK/800 ↓ 1000

効果で攻撃力が上昇したが、レッドアイズには遠く及ばない。しかしカミューラの表情に焦りは見えず、高圧的な笑みを浮かべていた。

「生意気な子には……お仕置きが必要ね。フィールド魔法『不死の王国―ヘルヴァニア』を発動！」

「……きたか」

カミューラの周りに現れる古風な城の壁。洞窟内ということだがソリッドビジョンとして現れることは出来なかったようだが、たった一部だとしても言葉で表せない禍々しさを感じる。

『不死の王国―ヘルヴァニア』

手札の”アンデット”族モンスター1体を墓地へ送ることで、フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。この効果を発動するターン、そのプレイヤーは通常召喚を行えない」

「禁断のフィールド魔法。レッドアイズに敬意を表して、全力でお相手するわ」

強力な破壊効果に加え、”アンデット”族モンスターと組み合わせることでデメリットも打ち消せる。禁断とされるのも納得のフィールド魔法なのだ。

「手札から『ヴァンパイア・ロード』を墓地へ送り、『ヘルヴァニア』の効果発動！——全てのモンスターを破壊する！」

赤い光が放たれ、フィールドに居る全てのモンスターに襲いかかった。しかし、カミューラはわざわざ召喚したモンスターを自分で破壊した訳ではない。

「『ヴァンパイア・バツ』の効果発動！このカードが破壊される時、デツキの同名カードを墓地へ送ることで破壊を免れる！」

デツキから取り出した『ヴァンパイア・バツ』を墓地へ送り、破壊が無効となった。墓地へモンスターを送ただけでなく、フィールドがガラ空きになるのは紅也のみ。カミューラは思惑通りにいったと高揚するが、相手はそこまで甘くはなかった。

「……墓地の『復活の福音』の効果発動。自分フィールド上の”ドラゴン”族モンスターが破壊される時、墓地に存在するこのカードを除外することで破壊を無効にする」

「なんですって!?!」

神々しい光が発生し、降り注いだ赤い光からレッドアイズを護った。流石は前世でも強いと言われていた魔法カードなだけある。

「くっ！ターンエンドよー！」

攻撃が決まらなかったことに苛立ちながら、カミューラはターンを終了した。

(……やっぱりか)

この時点で紅也が確認出来たことは2つ。

1つ目はカミューラのデュエリストとしての実力。十代や三沢、亮といった強敵と戦ってきた紅也からすれば物足りないものであった。眠りから覚めて日が浅いことを考えれば、仕方ないのかもしれないが。

そして2つ目は——インチキカードの使用だ。

先程自慢気に発動した『ヘルヴァニア』もそうだが、カミューラに

は切り札とも呼べる最強のチートカードが与えられている。原作通りならばこのデュエルでも使ってくる確信が持てた。調整に頭を悩ませた甲斐があるというものだ。

「どうしたのかしら？ 怖気付いちやっただ？」

中々カードをドロロしない紅也を見て、カミューラが嘲笑しながら言葉を放つ。予想外の侵入、レッドアイズ、『黒炎弾』と、冷静な彼女を焦らせる要素が畳み掛けてきたこともあり、自身が平静を装うために紅也を煽ったのだ。

だがそんな幼稚な言葉は、恐ろしい一言によつて潰されることになる。

「——貴女が願いを叶えるのは無理だよ」

口に手を当てながら目を細めていたカミューラの呼吸が止まった。流れ出す冷や汗と共に湧き上がる恐怖の感情。たかが人間、しかし彼女は確かに目の前の少年を恐れたのだ。

「ヴァンパイア一族の復興は叶わない」

——何故そんなことを知っている？

「俺を倒せても、他のデュエリストに必ず負ける」

——何故そんなことが分かる？

「貴女の魂は……幻魔に喰われる」

カミューラが放心していたのは、そこまでだった。

「貴様ああアアアアツツ!!」

敵意剥き出しの瞳に、長い舌が口から飛び出る。まるで怪物のような顔に変わり、美しい女性としての顔は消え去った。カミューラの激昂具合は、デュエル中でなければ紅也へ直接襲いかかっていたようにすら感じられる程だ。

そんな圧倒的な殺意を正面から向けられても、紅也は表情を変えず静かにカミューラを見つめている。少しだけ、悲しそうな眼をしながら



ら。

「潰すッ！ 貴様は必ずここで潰すッ！」

声を張り上げ、荒ぶるカミューラ。

紅也はそんな彼女の言葉を聞き、一度眼を閉じてから口を開いた。

「……俺達が勝つ。他の誰でもない、貴女のためにも」

「——ッ!？」

まさかの発言に動きを止めるカミューラ。敵である相手からの予想外の言葉に動揺を隠せなかった。

「……俺のターン、ドロー」

カードを引く紅也。

必ず勝つという強い意志を持ち、戦いを再開した。

『『サファイアドラゴン』を召喚』

『サファイアドラゴン』 ATK/1900 DEF/1600

2体のドラゴンを並べ、攻撃態勢に入る。

『『サファイアドラゴン』で『ヴァンパイア・バッツ』を攻撃』

「くつ、『ヴァンパイア・バッツ』の効果！ デッキから同名カードを墓地に送ることで破壊を免れる！」

「でも戦闘ダメージまでは無効に出来ない」

「ぐうっ！」

カミューラ LP1600↓700

攻撃表示であるため、戦闘ダメージが発生。ライフポイントはレッドゾーンへ突入した。しかし、紅也はお構いなしに勝負を決めにいく。

「レッドアイズ……攻撃だ」

「終わるものか！ 毘発動！ 『妖かしの紅月』！ 手札から『馬頭鬼』を墓地に送ることで攻撃を無効にし、攻撃してきたモンスターの攻撃力分だけ私はライフを回復する！」

『『妖かしの紅月』

手札の”アンデット”族モンスター1体を墓地に捨てる。相手モンスター1体の攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分の数値だけ自分のライフポイントを回復する。その後、バトルフェイズは終了

となる」

カミューラ LP700↓3100

攻撃を無効にすると同時にライフを回復。更にはバトルフェイズまで終了させて難を逃れた。

「舐めるなッ！ 私が抱く憎しみ……人間だけには終わらせない！」

「……カードを1枚伏せて、ターンエンド」

感情を昂らせたまま、カミューラが吠える。一刻も早く目の前の男を倒すため、執念を込めてドロローをした。

「ドローツ！ 『強欲な壺』を発動！ 更に2枚をドロロー！」

デツキもカミューラの思いに応えるように加速する。そして呼び込んだ2枚のカードを見て、カミューラは再び美しい女性の顔に変わった。

「ふふっ、いい子ね。これで生意気な貴方を潰せる！」

愛おしそうにカードを撫でるカミューラ。どうやらキーカードを引いたらしい。

「墓地に存在する『馬頭鬼』の効果発動！ このカードを除外することで、墓地の”アンデット”族モンスター1体を特殊召喚出来る！」

『ヴァンパイア・ロード』を召喚よ！」

”アンデット”族デツキに於いて強力な効果を持つ『馬頭鬼』によつて、ヴァンパイアを統べる王が蘇った。しかしここで終わることなく、カミューラは自身にとって最強のモンスターを召喚する。

『ヴァンパイア・ロード』を除外し——『ヴァンパイアジェネシス』を特殊召喚ッ！」

紫色をした筋肉質な身体に、まるで鮮血のような赤い眼。カミューラのエースモンスターが、紅也を滅ぼすべく現れたのだった。

『ヴァンパイアジェネシス』 ATK/3000↓ATK/3200

「そして決め手は……このカードよっ！」

「……」

カミューラが高らかに掲げた1枚のカード。

それこそ紅也が最も警戒していたものであり、カミューラの切り札とも呼べる魔法カードだった。その効果は凄まじく、卑怯な手を使っ

たとはいえ、原作であのカイザー亮を敗北させた程だ。

「魔法カード——『幻魔の扉』ッ!!」

発動させるのと同時に、カミューラの背後に禍々しい扉が出現する。見るからに普通ではない雰囲気を漂わせており、見た者を無条件で恐怖させる威圧感を放っていた。

「このカードを発動してデュエルに負ければ、貴方の言う通り私の魂は三幻魔への供物となる……でも勝てば問題ないわ。地獄へ落ちるのは貴方よ!」

強力なカードには大きな代償が必要となる。『幻魔の扉』を発動するための代償は重いものだが、覚悟を決めたカミューラにとつてはどうでもいいものだった。

「このカードはまず、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する!」

手始めに説明されたのは相手モンスターの一掃効果。

「更にこのデュエル中に一度でも使用したモンスターを私のフィールドに特殊召喚出来る!」

続けて説明されたのは無条件での蘇生。どちらか1つの効果でも強いものが合わさったチートハイブリッド。アニメのみに登場したインチキカードだ。

これでカミューラは手札を使い切ってしまったが、同時に勝負も決められるため問題はない。

カミューラのフィールドに居る『ヴァンパイアジェネシス』の攻撃力は『ヴァンパイア・バツツ』の効果で3200となっている。モンスターを蘇生しなかったとしても、ダブルダイレクトアタックを決められれば4000のライフは吹き飛ぶ。カミューラは勝利を確信し、高らかに笑い声を上げた。

「これで終わりよッ! あははははっ!!」

これで1つ目の鍵は手に入れた。このまま自分が全ての鍵を奪い、幻魔を復活させる。

そうすれば、自身の願いは叶う。

奪われた尊厳、奪われた自由、奪われた愛。

憎むべきは人間、カミューラは復讐の化身となりこの戦いに臨んでいるのだ。

卑怯な手も使う、手段は選ばない、何が何でも勝利する。悪魔に魂を売った彼女の前に、多くのデュエリストは敗北することになる。

——相手が竜転生者伊紅也でなければの話だが。

『グルオオオオオオツツ!!』

黒竜が、吠えた。

洞窟には強い衝撃が響き、地鳴りのような振動を起こす。

「な、なんなの!？」

フラつきながら体勢を維持するカミューラ。黒竜から放たれる異常なまでのプレッシャーに身の危険を感じ取る。

しかしすぐに自身の優勢を思い出し、後ろを振り返る。そこでは自身を勝利へと導く扉が——崩れていた。

「なんだとっ!? 何故『幻魔の扉』が!! ……貴様、何をしたっ!？」

再び殺意を込めた視線を紅也へ向けるカミューラ。こんな状況を引き起こした人物など、この場には1人しか居ないのだから。

「……カウンター罠、『王者の看破』」

【『王者の看破』】

自分フィールドにレベル7以上の通常モンスターが存在する場合、以下の効果を発動出来る。

●魔法・罠カードが発動した時に発動出来る。その発動を無効にし破壊する。

●自分または相手がモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚する際に発動出来る。それを無効にし、そのモンスターを破壊する。】

「俺のフィールドにレベル7の『真紅眼の黒竜』が存在するため……『幻魔の扉』を無効にして、破壊したんだ」

紅也の言葉が終わってから、再度レッドアイズが咆哮。崩れかかっていた『幻魔の扉』を完全に消滅させた。前世のデツキから投入しておいたカードが大活躍、紅也は狙い通りの展開に少しばかり緊張を解いた。

「……あ、ああ。私の、野望が……」

何も存在しない空間へ手を伸ばすカミューラ。そんな彼女へ、紅也はゆつくりと言葉を放つ。

「幻魔の力は……消えたんだよ」

「——ッ！ 『ヴァンパイアジェネシス』で『真紅眼の黒竜』を攻撃!!」  
「罨カード、『和睦の使者』。このターン、俺のモンスターは破壊されず戦闘ダメージも0になる」

紅也の言葉を、怒りの込もった攻撃で黙らせようとしたカミューラ。しかし罨カードによつて防がれ、出来ることは無くなった。

「……ターンエンド」

この宣言はターンを終了するためだけのものではなく、カミューラは勝負自体を諦めた。

全ての覚悟を込めた『幻魔の扉』が目の前で破壊された衝撃は、カミューラの心を折るのに十分過ぎる威力だったようだ。

「俺のターン、ドロー」

サレンダーする余裕もないようで、カミューラは俯きながら立ち尽くしている。腕からも力が抜け、デュエルディスクの構えすら解かれている状態だ。

デュエリストが勝負を諦めた以上、この勝負は紅也の勝利に決まった。だがそれでも、紅也の闘志は途切れることがなかった。

この勝負、勝てば終わりという単純なものではない。

原作知識を知っている紅也だけが、カミューラを本当の意味で止められる。まだ彼女は誰も傷付けていない、卑怯な手も使っていない、憎しみをぶつけ合ってもいない。止められるとすれば、今しかない。だからこそ紅也は、ボロボロの身体で無理をしてここへ来たのだ。

「カミューラさん。貴女は気付いていない」

「……」

紅也が言葉を発しても、カミューラは力無く項垂れたままだ。しかし紅也は構わず言葉を続ける。

「貴女に止まって欲しいと思っっている存在が……貴女が傷付くのを見たくないと思っっている存在が……貴女を大切に思っっている存在が……すぐ側に居ることに」

「……私を……？」

カミューラのか細い声にしつかりと頷く紅也。

「だから……俺達が気付かせる」

紅也は力強く宣言すると同時に、手札から一枚の魔法カードを発動させた。普段から助けられている強力な汎用カードであり、この勝負の決め手になるモンスターを呼び出すキーカードでもあった。

『死者蘇生』を発動。墓地からモンスター1体を特殊召喚する」

「……墓地から？」

首を傾げるカミューラ。それもその筈だ、紅也の墓地にモンスターなど存在していない筈なのだから。

「……い・あの時……い」

しかしカミューラは瞬時に記憶を呼び起こし、紅也が墓地へモンスターを送っていたことを思い出す。最初のターンで発動した『紅玉の宝札』には、ドローする以外にもデッキからモンスターを墓地へ送る追加効果が存在していた。

墓地から一枚のカードを取り出した紅也。カードを見て少し微笑んだ後、勝利の鍵として投入したモンスターをデュエルディスクへセツトした。

「——レッドアイズ・アンデットドラゴン真紅眼の不死竜」

可能性の竜は死して尚、

その眼に——真紅の光を宿らせた。

く愛ある一撃く

美しい漆黒の身体に纏う蒼炎が、洞窟内を妖しく照らす。

名前の通り真紅の眼をしており、対峙するカミューラへ穏やかな視線を向けている。

まさしく――”不死の竜”。

”アンデット”と化した真紅眼は主の呼びかけに応え、戦いを終わらせるべく降臨したのだった。

「……久しぶりだな」

『……ゴオ』

嬉しそうな顔で語りかける紅也と、それに応える『アンデット』。彼らの出会いは遙か昔、付き合いだけで言えば『レッドアイズ』に最も近い程だ。

公式が発売する構築済みデッキ、所謂ストラクチャーデッキと呼ばれる物に投入されていたのが『真紅眼の不死竜』だった。『真紅眼の黒竜』の影響で遊戯王を始めた身として、紅也は”真紅眼”という単語にとっても敏感であった。その月の小遣いを使い果たし、デッキを購入して手に入れたのだ。

しかし残念なことに、『真紅眼の不死竜』は”アンデット”族であった”ドラゴン”族ではなかった。”アンデット”族がメインとして発売されていたストラクチャーデッキに入っているのだから当然と言えば当然なのだが、幼い紅也にとってはそれなりにショックな事実であった。

紅也が”レッドアイズ”と合わせていたのが”ドラゴン”族だったため、『アンデット』に対しては機能しないサポートカードが多く存在した。その上『真紅眼の不死竜』自体の効果も独特なものであり、コレクションの1つとしての扱いとなってしまうていた。だからこそ、こうして召喚出来たことを紅也は嬉しく思った。

『真紅眼の不死竜』 ATK／2400 DEF／2000

「……綺麗」

新たなモンスターを召喚されたカミューラだが、抱いた感情は危機感ではなかった。まさに不死の名が付けられるのに相応しい姿に、戦いの最中であることも忘れて見惚れてしまっていた。

「このモンスターが、戦いを終わらせてくれる」

「……早くやればいいわ。私に防ぐ手段は残されていない」

投げやりな態度で言葉を発するカミューラ。伏せカードもない状況、防ぐ手段がないというのは本当のことだろう。

「……貴方のような坊やに負けるなんてね。どの道、私の野望は叶わなかった訳だ」

「……」

「早くトドメを刺しなさい。どうせあるんでしょう？ 私の『ヴァンパイアジェネシス』を倒す方法が」

人間を認めるような発言をしたことに、カミューラ自身が驚いた。敗北を受け入れてしまったからだろうか、何故か少しだけ気持ちがい。眠りから目覚めて戦いへの覚悟を決めた時から、常に張り続けた緊張感が消えていた。

「……装備魔法『巨大化』を『ヴァンパイアジェネシス』に装備。俺のライフが相手より多いため、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力の半分になる」

「……ごめんね」

『ヴァンパイアジェネシス』 ATK／3200 ↓ ATK／1700

無抵抗に弱体化されたエースモンスターへ謝罪し、カミューラは無力な自分を責めた。『ヴァンパイア・バツ』の効果で攻撃力が200ポイント上昇しているとはいえ、戦いに勝つにはお粗末な攻撃力にしてしまったのだから。

これで自身の敗北は決まったも同然。相手からの攻撃を防ぐ手立てもなく、ライフポイントが大量に残っている訳でもない。

（……までね）

目を閉じ、居なくなった同族へ思いを馳せる。結局、何も成すこと



は出来なかった。人間への復讐も、一族の再興も、生きる原動力であつたもの全て、叶えることは出来なかった。

『真紅眼の黒竜』で『ヴァンパイア・バッツ』を攻撃。……黒炎弾』低下させられた攻撃力で耐えることは出来ず、エースモンスターは灰となった。

カミューラ LP3100↓LP2400

「……『真紅眼の不死竜』で『ヴァンパイア・バッツ』を攻撃。——ア  
ンデット・フレア」

更に追撃として、紅也は容赦なく攻撃宣言をした。大博打に臨むような顔をして。

破壊を無効にするための同名カードはもうデッキに存在しない。放たれた蒼炎の火球から逃れる術もなく、『ヴァンパイア・バッツ』は焼き尽くされた。

カミューラ LP2400↓LP1000

「……そしてダイレクトアタックで終わりってことね。見事よ」

紅也のフィールドに存在する攻撃権を残した『サファイアドラゴン』を見て、拍手しながら微笑むカミューラ。どこか吹っ切れたような表情は、全てを諦めてしまったようにすら見える。

「確かにダイレクトアタックで終わりだよ……けど、攻撃するのは『サ  
ファイアドラゴン』じゃない」

「……なんですって?」

他に攻撃権が残っているモンスターは居ないのは事実、カミューラは首を傾げた。もう1度『黒炎弾』を使うのかとも考えたが、『真紅眼の黒竜』が攻撃している以上それはない。そもそも使えるのならばとつくに使っている筈だ。

思考を巡らせるカミューラだったが、次の瞬間——激しい怒りに包まれることとなる。

「……は?」

間拔けな声と顔で、カミューラは紅也のフィールドを凝視した。何も存在していなかった空間に『真紅眼の不死竜』が放った蒼炎が集まり出し、1体のモンスターが姿を現したからだ。



外見や特性の違いから”モンスター”と蔑み、幼子であろうと容赦なく剣を振るった。そしてカミューラ以外のヴァンパイアは全て、この世から去ってしまったのだ。

「……私の、私の同胞を……『ヴァンパイア・バッツ』を……返せ」

震えながら声を発するカミューラ。気付けば大粒の涙が流れ、悲しみが溢れ出していた。人間相手に弱みを見せたくないとして手で眼を擦るが、涙は止まることなく次々と流れていく。

そこに居たのはとても弱々しく、ただ悲しさに押し潰されそうになっただけの普通の女性だった。悔しそうに、ただただ小声で返せと呟いている。

「——やっぱり、貴女は優しい人だよ」

「……？ 何を、言ってる……？」

突然言われた意味が理解出来ない発言に、カミューラは涙を止めて固まる。きよとんとした顔は、ある意味これまでで一番可愛らしい顔であった。

「自分のモンスターのために怒れて……そうやって涙を流せるんだ。貴女は優しい人だよ」

「……人間にそう言われても、嬉しくないわよ。私のモンスターで私にトドメを刺そうとする外道のくせに」

鼻を嚙りながら、拗ねるように言葉を発するカミューラ。ようやく涙も収まってきたようで、小さな子供のよう仕草を取っている。

「そ、それは……何も言い返せない」

『グルウ』

『ゴオ』

肩を落とす紅也と、カミューラの発言に同意する『レッドアイズ』と『アンデット』。味方である筈の彼らにすら、紅也の行動は擁護されなかった。

「……けど、これしかないと思ったんだ。貴女を止めるためには、こうするしか」

「……さっきもそんなことを言っていたわね。私を止めるだの、私のためにだの……訳が分からないわ。貴方は私の敵、私は貴方の敵。そ

れ以上でもそれ以下でもない筈よ」

至極当然のことを言い放つカミューラ。これまでに面識もなく、ただ戦う相手という関係でしかない。だからこそ、紅也の行動理由がカミューラには理解出来なかった。

「……どうして俺達がこの場所に来られたと思う?」  
「えっ……」

優しそうな表情に変わり、紅也がカミューラへ質問を投げる。空気が緩んだことを察したのか、2体の黒竜も戦闘体勢を解いた。

「……分からないわ。私は証拠を残したりしていない」

カミューラは間違いなく断言出来た。魂すら懸けて戦いに臨んでいたのだ、そんな初歩的なミスなど犯す筈がない。大人しく答えを聞こうと、紅也へ静かに視線を向けた。

「——案内役が居たからさ」

「……案内役? ……まさか!」

紅也の言葉の意味を理解し、カミューラは洞窟の上を向いた。視界に入ってきたのは無数の赤い光、逆さまになって待機している愛すベきコウモリ達であった。

「お、お前達……私を裏切ったの?」

「それは違う」

「……えっ?」

カミューラの言葉を強く否定した紅也。同時に腕を前に出し、一匹のコウモリを腕に止まらせた。

「コイツらは、貴女を心配していたんだ。復讐のために戦うことを決意した……貴女を」

「心配、していた?」

「人間に命令されて従う、勝利のためにプライドを捨てる、苦しそうに戦おうとしていた貴女を……コイツらは見ていられなかったんだよ」  
「……そんな」

口に手を当て、信じられないような顔をするカミューラ。肩を震わせ、事実を受け入れられない様子だ。

「俺は人間だ。……復讐をやめろとも、恨みを忘れろとも言えない。」

貴女が人間にされたことは、とても許せるようなことじゃない」

でも、と続け。紅也は言葉を放つ。

「貴女を心配している存在が居る。辛そうな貴女を見てられない奴らが居るってことを……知って欲しかった」

「……お前達」

「それに、見たたのは背中……顔は見えないもんな」

「何を言って……ッ!!」

カミューラの視線を奪ったのは、1体のモンスター。従順な僕として支えてくれていた、『ヴァンパイア・バツ』だった。紅也の腕に乗っている個体と同じく大粒の涙を流している。ソリッドビジョンである筈のモンスターが、主を思つて涙を流したのだ。

「……『ヴァンパイア・バツ』」

「ゴイツらだけじゃない。『不死のワーウルフ』も『ヴァンパイア・ロード』も『ヴァンパイアジェネシス』も、みんな同じように貴女を心配してた」

精霊を視ることが出来る紅也。現れたモンスター全てに精霊が宿っており、消えてしまう時までずっと苦しそうな顔をしていた。

「……そう。あの子達も」

赤く腫らした目元を押さえながら、カミューラが口を緩める。人間に頼んでまで自身を止めてもらおうとしていた、それは同胞を失った彼女にとって何よりも嬉しいことであった。

「——認めるわ、人間。……いえ、竜伊……紅也だったわね」

「覚えてくれたのか、カミューラさん」

「出来る女は記憶力が良いのよ」

「そうなのか、覚えておくよ」

先程までの重々しい空気感は消えており、軽口すら叩けるようになっていた。クスクスと上品に笑う様は、まさしく麗しのヴァンパイアだ。

「……じゃあ、そろそろ終わらせようか」

「ええ、お願い」

憑き物が落ちたような穏やかな表情で頷くカミューラ。そんな彼

女の意味に込めるべく、紅也は勝負を終わらせるために攻撃宣言をした。自身の効果で攻撃力は1000、勝負を終わらせるのにちょうどいい数値である。

「ほら、行ってこい……『ヴァンパイア・バッツ』」

『ガアアア』

紅也の言葉を聞き、『ヴァンパイア・バッツ』はゆつくりと翼を広げてカミューラへ向かって飛んでいく。目標とされるカミューラは腕を大きく広げ、迎え入れる準備を完了。

主と配下は、優しく抱擁を交わしたのだった。

カミューラ LP1000↓LP0

????????????????????????????

……返します。すみませんでした」

脱力したように腰を落としているカミューラへ、紅也が『ヴァンパイア・バッツ』のカードを手渡す。受け取ったカミューラは大事そうに胸へ押し当て、静かに笑みを浮かべた。

「立てますか？」

「……ええ」

立ち上がるための補助として手を差し伸べる紅也。カミューラも素直に手を取り、ゆつくりと立ち上がった。

「……まさか、こんな形で負けるとはね。考えてもなかったわ」

言葉とは裏腹に、清々しい顔のカミューラ。荒々しさは完全に消え去り、上品な女性にしか見えない。

「“セブンスターズ”は……やめますか？」

「ええ。もう続ける意味はないわ」

「そうですか……。なら良かった」

ホッと息を吐く紅也。張り詰めていた緊張を解き、力が抜けたようだ。

「少し動かないでくださいね。……レッドアイズ、頼む」

『グルウオ』

「えっ？ な、何よ……!!!」

紅也の言葉に頷き、実体化したレッドアイズ。カミューラの側へ寄ると、腕を張り上げて鋭い爪を一閃。首に付いていたチョーカーを切り裂いた。これこそ“セブンスターズ”に与えられた闇のアイテムであり、カミューラにはもう必要のない物であった。

「これでよし」

「ちよ、ちよつとおっ!! いきなり何すんのよ!？」

「いや、”セブンスターズ”やめるって言ったから」

「心の準備があるわよ! いきなり首への攻撃を指示するな!」

「ああ……ごめん」

「誠意が伝わらないっ!!」

物凄い剣幕で紅也に詰め寄るカミューラ。急所である首をいきなり襲われれば当然かもしれないが。

ひとしきり文句を言い終わつた後、カミューラは紅也と視線を合わせ、静かに疑問を口にした。

「ねえ、どうしてそこまで……? 貴方と私は何の関係もない筈よね?」

「……まあ、そうですね」

原作知識があるから、そう言えないのは毎度のことだ。言つたところで信じてもらえるとも思えないが。

「貴女を助けて欲しいと必死に頼んできたコウモリ達を見て、貴女は悪い人じゃないと思つたので……理由としてはそんな所ですかね」

「貴方……お人好しね」

「……そうかもね」

呆れたようなカミューラと、それに同意する紅也。命懸けで戦つていた者達とは思えない程の緩い空気だ。

「……これからどうするか。また眠りにでもつこうかしら」

「いやいや、勿体ないでしょ。せつかく起きたのに」

「けど……私は……」

行く場所などない。その言葉を飲み込みながら、カミューラは俯く。復讐から解放されても、天涯孤独の身であることは変わらないのだから。

そんなカミューラを見て、紅也がパンツと軽く手を叩く。そして彼女へ予想外過ぎる提案をしたのだった。

「じゃあ……バイトしません？」

「……はあー？」

心から何を言っているのか分からない顔でカミューラが声を上げる。美人がやれば、意外に絵になるものだ。

「実はこのアカデミアの購買部でバイト探してるらしいんですよ」

「……だから？」

「カミューラさん、働きませんか？」

「……頭が痛いわ」

しつかりと説明を受けても、やはり理解出来ない。頭に手を当てつつ、カミューラが質問した。

「やめるとは言え、私は”セブンスターズ”だったのよ？」

「操られていたとか言い訳すれば良いんですよ。1人目もそうだったし、いけるいける」

疲れから知能指数が低下している紅也。普段なら言わないような無茶な発言をしまくっている。

「……大体、私に何の得があるのよ？ 人間が憎いのは変わってないんだけど？」

「そうですね……。人間観察、とか？」

「……貴方、バカだって言われない？」

可哀想なものを見る眼で、カミューラが呟いた。デュエルでの疲労がなければ頭を撫でていたかもしれない。

「頭が回らないんですよ。そして身体に力が全く入らない。——あつ、ヤバい、倒れそう」

「冗談やめなさいよ。こんな所で倒れられたってどうしようも……えっ、嘘！ 冗談よね!? ちよ、しつかりしなさいよ!!」

紅也の言葉を信じなかったカミューラだが、ボタンと倒れた紅也を



見て血の気が引いた。本来の優しい性格が完全に戻っている。

「……あー、なんとなく分かった気がする。意識が遠くなる感覚に慣れるのも……なんか嫌だなあ」

「アンタ何なのよ！ 急に乗り込んできて人の野望を打ち砕いて！ 用が済んだら倒れるなんて！ どういう神経してるのよ!!」

「……せ、正論過ぎる」

「ちよつと、顔色悪いわよ。ほ、本当に大丈夫なの？ しっかりしなさいよお」

「こ、これを……」

「えっ？ 何よこれ……紙？」

苦しそうな表情でカミューラの腕に抱えられたまま、紅也はズボンのポケットから取り出した一枚の紙を手渡した。

「それを……購買部の、トメさんって人に渡せば……大丈夫だから……もうダメ」

「ちよつ、ちよつと！ 分からない！ 私分からないって！ 誰!!? トメさんって誰!! もおおおおおつ!!」

叫ぶカミューラにグツと親指を立てた後、紅也は無責任に意識を手放した。

## く新しい看板娘く

「うくん、いい食べっぷりだねえ」

満足そうに頷いているのは、デュエルアカデミア購買部のトメ。おにぎり2個とドローパーン3個を完食した紅也を見て、感心するように呟いた。自身が奢ったということもあり、紅也の食べっぷりに喜びを感じたこともある。

「元氣そうで良かったよ。大変だったって聞いてたからさあ」

「ありがとう、トメさん。この通り元氣です。——最後のドローパーンがゴーヤ味だったのは不満ですけど」

口の中に残った苦みをお茶で流し込みながら、紅也は柔らかい表情でトメに向き合う。心配かけたことに罪悪感を感じながらも、こうして元気な顔を見せられて良かったと心を落ち着けた。

「3日も寝込んだって聞いた時はアタシも倒れそうだったよ。でも、紅也ちゃんも頑張ったんだねえ」

「いやあ、俺がしたことなんて洞窟に気絶しに行つたようなもんですから。……まあでも、また3日も意識が戻らないとは思わなかったけど」

何はともあれ目的は果たした。紅也が関与しようと考えていた“セブンスターズ”とは戦い終わり、頑張り所は過ぎ去った。

更には紅也が寝込んでいた3日間と寮で安静にしていた2日間で、残りの“セブンスターズ”も1人を除いて十代達が殲滅していた。動けずにいた期間で随分と物語が進んでいたようだ。

(……後悔はあるけどな)

情けなく意識を失っていた間で起こったデュエル。それはアカデミアを乗っ取ろうとした万丈目兄弟によるイベントだった。万丈目のデュエルを生で目撃するチャンス逃したことで落ち込んだ紅也だったが、三沢が記録してしてくれた録画を見て、なんとか自分を納

得させていた。

「食欲もあるみたいだし、アタシも安心した！ 奢った甲斐があるつてもんだ!!」

「ご馳走様でした、トメさん。奢ってもらってありがとうございます」  
「良いのよお〜！ それにお礼を言いたいののはこっちだよ！ やっぱり紅也ちゃんに頼んで正解だった！」

「……あそこまでハマるとは思ってたんですけどね」

満面の笑みで喜びを表すトメに、少々微妙な顔で返す紅也。こういった未来を期待しなかった訳ではないが、ここまで上手くいくと逆に肩の力が抜けてしまう。

ゴミを片付けながら紅也が視線を向けるのは購買部の受付。多くの生徒が、本当に多くの生徒が買う物を片手に肩をぶつけ合っている。赤、青、黄と色鮮やかな制服の群れにも関わらず全員が男子生徒だ。彼らの思惑はただ一つ、他の者よりも前に出て真っ先に受付へ飛び込む、それだけだ。

——美しい店員を独り占めするために。

「俺俺!! カミューラちゃん！ 次俺だから！」

「どけよお前！ 邪魔だわ！ カミューラちゃんが困ってんだろ!!」

「邪魔はてめえだ！ 辛気臭い顔しやがって！」

「お前に言われたくないわ!!」

「カミューラちゃあああん!! 好きだあああ!!」

「ドロ〜パンで金のタマゴ当たったら俺とデートしてくれえつ!!」

「痛ってえな！ 足踏んだの誰だツ!」

「カミューラちゃん！ 俺はこんなバカどもとは違うから！」

「アウチツ、痛いノーネ!!!」

約1名金髪の成人男性が見えた気がしたがスルー、紅也は見なかったことにした。

興奮気味に騒いでいる頭に血が昇った男達。怪我人すら出そうな殺伐とした空気だったが、そこへ凜とした声が張り上げられる。

「——黙りなさいっ!!」

か弱さなど感じさせない芯のある声は男子生徒達の耳を一瞬で貫き、黙らせることに成功した。声質も耳心地の良いものであり、一喝されたというのに男達の表情は緩みきつっている。

「順番に並びなさいと言ってるでしょう！　それが守れないなら買い物をする資格は無いわっ！　それに私とデートですって？　デュエルで私に勝てたら幾らでもしてあげるわよ。だから今持つてる物に合わせて——パックも買いなさい」

「二二「はい！　カミューラちゃんツ!!」二二」

更には盛り上がりを見せた男達。デートという単語にテンションを上げながらパック売り場へ爆走し、我先にとパックへ手を伸ばす。場所が変わっただけでやることは変わっていなかった。

目の前で繰り広げられる購買部とは思えない光景に苦笑いしつつ、紅也は少し引いたような顔で呟いた。

「……すっげえ」

「だろお？　ここ数日はカミューラちゃんのお陰で毎日こんな感じさ。商品が売り切れちゃうことも多いのよ。嬉しい悲鳴ってやつだねえ」

「トメさんは？　サボってるんですか？」

「やだよお、紅也ちゃんの相手してるんだからサボってないの」「んー、それもそうだ」

冗談を言い合うような朗らかな雰囲気。久しぶりに顔を合わせるということもあり、2人の表情は穏やかだ。そんな紅也とトメのほのぼののタイムを終わらせたのは、紅也の視界に入った1本の腕だった。「あつ、トメさんトメさん。あれ」

「なんだい？　……ありや、大変だ。ちよつと代わってくるよ」「行つてらっしゃい」

紅也が指差した先にあつたのは、先程男子生徒達を一喝したカミューラの華奢な腕であり、白い肌と相まって美しさを感じさせる。しかし手首の先からはそんな感想も抱けない状態であり、サムズアップによる親指でのSOSが発信されていた。プルプルと震えるそれ

を見て、紅也も流石にトメに対してヘルプを促したのだ。

男子生徒の集団がパック売り場から戻ってくる前にと、すぐに裏へと逃げ込んだカミューラ。

目を離れた際にカミューラからトメに変わっていたことで、膝から崩れ落ちている男子生徒の集団。大量のパックを落としながら絶望する様はとんでもなくシユールだ。

「……おつ、出てきた」

紅也がそんな集団をボケーつと見てみると、スタッフ専用の出口から1人の女性が出て来た。足取りがフラフラしており、疲労困憊といった顔をしている。

紅也は同情の意味を込めて、純粹な笑顔に向けた。

「——お疲れ」

「じゃないわよおおおおおつ!!」

鮮やかな緑色の髪を1本に束ねた美しい女性は、元凶であるという自覚もないムカつく笑顔を晒した男へ——最大限の怒声を浴びせたのだった。

「まあまあ、そんなに怒らないで」

「アンタのせいでしょ。よくもまあそんなヘラヘラ出来たものね」

「いやだって、思ったよりハマってたから面白……嬉しくて」

「今面白って言ったわよね？ 言ったわよね？」

「元氣そうで良かった」

「話を聞けえつ!!!」

荒く呼吸をしながら肩を揺らすカミューラ。裏の方の席に移動したこともあり、客の前では見せない脱力した態度を見せている。足を組んで様になっているのは、元の顔面偏差値とスタイルが成せる技か。

「……はあ、相変わらず小生意気で安心するわよ」

「カミューラさんも楽しそうでなによりです」

「どこがよ？ 鬱陶しいガキに囲まれたって少しも嬉しくないわ」

前髪を手で払いながら、ため息を溢す。少しばかり汗を流しており、労働の辛さが見て取れた。

「喉乾いた。何か買って来なさいよ」

「そう言うと思つて、コーヒートマトジュースがあります。どっち飲みますか？」

「……トマトジュース」

渋い顔をしながら差し出されたトマトジュースを受け取るカミューラ。やっぱりなあと呟く紅也を睨みながら、差し込んだストローへと口を付けた。

「——ふう。まあまあね」

「美味しいってことか。それは良かった」

「なんでそうなるのよ！」

「カミューラさんはツンデレだから」

「……言葉の意味は分からないけど、バカにされてるってことだけは分かるわ」

声を押し殺すように笑っている紅也を見て、不機嫌そうに頬杖をつくカミューラ。中世ヨーロッパでほとんどの知識が止まっている彼女からすれば、自身には分からない単語でバカにされている気分だった。

「でも本当に良かった。あの後上手く事情とかを説明出来たんですね。操られてたんだーって言い訳信じてもらえたでしょ？ ナイス俺」

「どこがよ!! 私は気絶したアンタをアカデミアまで背負って運んだのよ!! 人の背中で無責任にぐーすか寝ちやつて！ 私の苦労を知りなさい!!」

紅也が後処理を全て丸投げした後、カミューラは本当に頑張っていた。

男子高校生一人を背負いながら森を抜け、デュエルアカデミアまで

辿り着く。様々な質問攻めに対して涙目で同情を誘い、アドバイスを求めた言い訳でなんとか乗り切る。トメさんという言葉を頼りにバイトすることにも成功した。目を覚まさない紅也を心配しながら、ここ数日は経験したこともない労働に勤しんでいたという訳だ。

「……ほんと、本当に大変だったのよ」

「なんか……ごめん」

項垂れているカミューラを見て、罪悪感が出てきた紅也。目的を果たした達成感から丸投げしたとはいえ、流石に無責任だったと反省した。

「あつ、そうだ。アンタあの子に感謝しときなさいよ?」

「あの子?」

唐突に顔を上げ、紅也を指差したカミューラ。咎めるような顔と声で、出来の悪い弟を叱りつけるような態度だ。

「天上院って子よ。アンタを運んで来た私に泣きながらありがとうって——人間にお礼言われたって嬉しくないけど! ……それだけアンタを心配してたってことでしょ。女を泣かせたんだから、それなりの対応はしなさい」

「……泣いてたか。だよなあ」

カミューラと同じく頬杖をつく紅也。その表情は険しく、責任を感じているようだ。

「俺がベッドで目を覚ました時も号泣してたよ」

「うーわ、アンタ最低ね。あんな良い子……じゃなくて、人間にしてはそこそこまあまあな子を号泣させるなんて。男として最低よ」

「……何も言い返せない」

今度は紅也が深く項垂れる。

説明が難しい事情があったとはいえ、毎日看病に来てくれていた女の子の前から勝手に居なくなり、帰って来た時にはまた気絶していたのだから。よくよく考えれば最低と言われても当然だった。

「そういえば昨日、その天上院って子がタイタンって奴を倒したらしいわ。私はよく知らないけどね」

「タイタン?」セブンスターズですか?」

興味もなさそうに頷くカミューラ。最早“セブンスターズ”には何の関心も無いらしい。

「瞬殺だったらしいわ。なんか『スピリット・バリア』を発動した状態で『ドゥーブルパッセ』？ ……とか言ってたわね。戦闘ダメージを無効にしてバーンダメージ、そして次のターンでダイレクトアタック……だったかしら。そのコンボ使ってすぐに決着つけたらしいわ」

「…へ、へえ。そうなんだ」

「なによその顔。嬉しくないの？」

「いや、可哀想なことしたかなって」

「…？ まあいいわ。私にはどうでもいい話だし」

微妙な反応をした紅也を不思議そうに見ていたカミューラだったが、自身には関係ないと伸びをして流した。抜群のスタイルは制服の上からでも主張が激しく、随分と無防備な姿と言える。隣に居る男が紅也でなければ、ガン見していたことだろう。

「でも詳しいですね。なんで知ってるんですか？」

「嫌でも耳に入ってきたのよ。さっきの見たでしょ？」

「ああ、なるほどね」

たった数日で大人気の購買部カミューラ。彼女と少しでもお近づきになろうとする男達からの情報提供だったらしい。

「…：：：コウモリ以外に配下増やしてるじゃん」

「向こうが勝手に教えてきたのよ。私が頼んだ訳じゃないわ」

人気者には人気者なりの苦労があるようだ。

紅也がそんな風に同情していると、カミューラが目を細めながら口を開いた。

「…：：：まあ、体調は戻ったみたいね。減らず口は相変わらずだけど、顔色は良くなってる。乗り込んで来た時のアンタ、顔真っ白だったから。幽霊が出たのかと思ったわ」

「それ死にかけていうか死んでますね。…：：：体調はこの通り、全回復しました。不調の原因も分かったんでね」

「確かアンタ、気絶する直前にもそんなこと言ってたわね。——原因って？」



「ああ。……じゃなくって、中々体力が回復しなかった原因は……”精霊の実体化”でした」

思わず分かりにくいボケをしてしまいそうになったが、ツツコミがもらえる筈もないと中止。少し動揺しながら『レッドアイズ・ブラックドラゴン真紅眼の黒竜』のカードをケースから取り出し、カミューラへ見せた。

精霊として紅也を支えていたこと、それ自体が不調の原因だったと断言したのだ。

「私のチャーカーを破壊した時のやつ？」

「それが決定打ですね。実は洞窟に向かう時にも実体化したレッドアイズに補助してもらってたんですよ。元から体力切れかけなのにじわじわ減らしてて、カミューラさんに一撃喰らわせた時の実体化で限界を迎えたんでしようね」

「首が刈り取られるかと思っただわよ……。それにしても、やっぱりただ便利な能力つても無いのね」

『『幻魔の扉』とか？』

「デリカシーの無い口はこれかしら？」

「い、痛い痛い！」

上唇と下唇を同時にぐいーっと引つ張り、笑顔で痛みを与えるカミューラ。発動すら出来なかったことをバカにされているのも、彼女にとつてムカつきポイント高めだった。

「す、すみませんでした。……ま、まあ、俺の体力が回復しなかったのは他にも理由があるんですけどね」

制裁から解放され、唇の痛みも引いてきた。少し軽率な発言だったと謝罪しながら、紅也はもう1つの要因について触れた。

「ダークネスとのデュエルでダメージを負った時、今回みたいに俺は意識を失ってたんです」

「……アイツを倒したのはアンタだったのね」

「それはまあどうでもよくて。……同じく3日間ぐらいベッドで寝てたらしいんですけど、その時にレッドアイズが俺の安眠を守るためにちよこちよこ実体化してたらしいんですよ」

主に騒ぐ野良猫や耳元を飛び回る虫などに対して実体化し、紅也の

安眠を妨げる要因を排除していた。もちろん100%善意からの行動であり、紅也はレッドアイズに感謝していた。責めるつもりなど毛頭ない。

「携帯端末とかを充電中に使用すれば、減りはしないけど順調に増えもしない。それと同じことが起こってたから、俺の体力はほとんど回復してなかったんです」

睡眠による回復量と実体化による減少量を比べた時、減少する割合の方が多かったということだろう。

「体力が戻った今となつては、それ程問題でもないですけど。実体化も普通にさせてやれますし」

「ダークネスに受けたダメージが大き過ぎたってことね」

「そうなります。だから俺、カミューラさんとのデュエルではダメージを受けたくなかったんですよ。実際ノーダメージだったでしょ?」  
「本当にムカつくわねっ!!」

頭を抱えながら唸るカミューラ。ここまで弄り倒されることになるとは予想しておらず、言葉に出来ない苛立ちを覚えた。言っていることが事実なのも余計に腹立たしい。

「ごめんごめん。……それに、闇のデュエルに関わることはもうないかな。ないと良いなあ」

「今度やったら死ぬわよ。だからやめときなさい」

「ありがとう、姉さん」

冗談のつもりで言った一言だったのだが、何故か固まるカミューラ。紅也の顔をジツと見つめ、数秒を要して硬直から解かれた。

「……誰が姉さんよ。……ふふつ、バカね」

「??」

口元に手を当てながら上品に笑うカミューラ。貴婦人と自分で言っていただけのことはあり、とても様になっている。首を傾げる紅也を見てクスクスと笑った後、どこか清々しそうな顔に変わった。

「……さて、そろそろ仕事に戻るわ」

組んでいた足を直し、制服を正す。なんだかんだ言っても、仕事に對しての態度は良好なようだ。

受付の方から聞こえてくるのは、我慢の限界を迎えた男達によるカミューラちゃんコール。対応しているトメのことを考えて、カミューラは仕事に戻ろうとしていた。

「騒がしいな。あんなの聞くと、バイトに推薦したの少しだけ後悔します」

「全くよ、余計なお世話だわ。……でも」

——” 棺の中で孤独に眠るよりはマシ”。

そんな言葉を飲み込むように、残ったトマトジュースを全て喉へ流し込む。こんな言葉を聞かれれば、必ずまた弄られるとカミューラの本能が言っていた。

「やってやるわよ、人間観察。言い出したのはそっちなんだから、アンタも客として私の金ヅルになりなさい」

「時々様子見に来ますよ」

「ええ、それでいいわ。……さっ、見送ってあげるからとつと行きなさい。私に見送ってもらえるなんて幸せ者ね。言つとくけど惚れたらダメよ?」

「結構です」

「アンタはいつか絶対ぶっ飛ばすわ」

眉をピクピクさせながらも、柔らかい表情のカミューラ。購買部の出入口までついてきたことから、言葉通り紅也を見送るようだ。

別れの挨拶をするためにカミューラが口を開こうとした瞬間、紅也が言葉を発した。

「あつ、そうだ。——これをカミューラさんに」

「……えっ?」

「ラッキーカードってね」

「でも、これ……アンタの」

差し出された一枚のモンスターカードを確認し、あわあわと動揺するカミューラ。見覚えがあるモンスターどころの話ではない、自身がこうして新しい一步を踏み出すきっかけをくれたモンスターなのだから。

「——『レッドアイズ・アンデットドラゴン真紅眼の不死竜』。大切にしてくださいね」

「ちよつ、本気!? アンタの大事なカードなんじゃ……」

「大事だからこそ、ちゃんと活躍させてくれる人に持つていて欲しいんです。俺じゃそいつの力を十分に発揮させてやれない」

「でも……なんで私に」

突然のプレゼントということもあるが、なにより渡された物が予想外。カミューラは焦りながらも、『アンデットドラゴン』に視線を奪われていた。

「名前にドラゴンって付いてますけど、そいつは”アンデット族”です。効果と合わせて、カミューラさんのデッキにはしつかり合うと思います。フィールド魔法の『アンデットワールド』を入れると良いですよ。……『ヘルヴァニア』とかを抜いてね」

紅也とのデュエルでも使用した禁断のフィールド魔法『不死の王国―ヘルヴァニア』。このカードを抜いて代わりに『アンデットワールド』を採用すれば、戦闘破壊した相手の”アンデット族”モンスターを奪うことが出来る『真紅眼の不死竜』とのコンボも成立し、不正もなく強いデッキに変えることが出来る。

『アンデットワールド』

フィールドの表側表示モンスター及び墓地のモンスターは全て”アンデット族”になる。互いのプレイヤーは”アンデット族”モンスターしかアドバンス召喚出来ない」

「……本当に、いいのね?」

「……………うん」

「嫌そう! すっごい嫌そうじゃない! いいわよやっぱり、アンタが持つてなさいって」

「嘘ですよ」

「……………その割には酷い顔してたけどね」

流星に何十年という時間の付き合ひ、手放すのが惜しくない訳もなかった。しかし、先程の紅也の言葉も全て本心。活躍させてくれるデュエリストが現れ、尚且つ信頼出来る人物。託すのにこれ以上相応しい者も居ない。

「ちやんと……………磨いてやってくださいね」

「泣きそうじゃないの」

「そんなことないです」

「……はあ。貰えるなら貰つとくわよ。後で返せって言っても遅いからね」

不器用な覚悟を尊重し、カミューラは『真紅眼の不死竜』を受け取った。どこか嬉しそうな顔を見て、紅也も頬を緩める。

「もう行きますね」

「今度は金持って来なさい。それと、天上院って子にちゃんとお詫びするのよ？」

「わ、分かってますって。……じゃ、また」

「ええ、またね」

最後まで姉のようなカミューラに苦笑いしながら、購買部を去って行く紅也。

「……………ありがとう」

遠くなっていく背中を見つめながら小声で呟いたカミューラ。丸くされた自覚があるのも、紅也が放つ不思議な空気感のせいだと決めつけた。

気持ちを切り替えて仕事に戻ろうとしたカミューラだったが、そんな彼女に1人の男子生徒が震えながら声をかけた。見れば後ろにも多くの男子達が集まって来ており、全員がプルプルと震えている。

「……カミューラちゃん、あいつと仲良いの？」

違っていてくれという思いが伝わるような悲しい声音。

カミューラはそんな空気を読んでただの知り合いだと説明しようとしたが、瞬間的に紅也への報復を思いつく。弄られていた鬱憤を晴らす機会がきたと、満面の笑みで実行に移した。

先程から男子達に視線を向けられまくっている『真紅眼の不死竜』に軽く口づけした後——カミューラは特大の爆弾を投下したのだった。

「私の……大切な人♡」

カメラはとても良い笑顔を見せた。

〈学園祭デート〉

《オベリスクブルー》の女王・天上院明日香は焦っていた。デュエル中でも見せないような顔をして、自身の部屋を動き回っている。

普段の冷静さは見受けられず、バタバタと出かける準備を済ませていた。特に気を遣っていたのは身だしなみ。起きてから鏡を見た回数には既に数えきれない。

「もうこんな時間!？」

制服の乱れを直し、前髪を整える。

確認した時計が示す時間は10時12分。待ち合わせの時間を12分もオーバーしている。7時に起きたにも関わらずどうしてこんなにも余裕がないのだろうか、明日香は情けない自分に怒りすら感じた。

「……」

全ての準備を終え、後は出かけるのみ。そんな明日香の動きを止めたのは、机の上に置いてあった——ヘアゴムだった。

『明日香さん！ これめっちゃ可愛いんですよ！』

『きつとお似合いになりますわ〜!』

明日香の友人であるジュンコとももえからの贈り物であるヘアゴム。見た目に關しては派手な装飾もされておらず、小さなアクセサリーが2個付けられているだけだ。地味ではあるが鮮やかな青色をしており、こういった女子らしいアイテムに疎い明日香も珍しく気に入っていた。

「……よし」

覚悟を決め、ヘアゴムを手取る。腰近くまで伸びている髪を束ね、出来栄えをチェック。櫛で髪をほぐしながら、満足いくように手を動かした。

「って！ 急がないと！」

再び確認した時刻は10時23分。完全な遅刻である。慌てて部屋を出た明日香は、寮の出口を目指して全力で駆け出した。

本日、デュエルアカデミアは普段以上に活気に満ち溢れていた。1年に1度の大イベント、『学園祭』が行われているからだ。

青い空に白い雲。快晴にも恵まれた天気の下、多くの生徒達が思い思いに全力で学園祭を盛り上げていた。

各寮ごとに出し物をしており、島全体が賑やかな雰囲気に包まれている。

カフェを開いているのは《オベリスクブルー》。特別にブレンドしたコーヒーなどを提供しており、接客時の立ち振る舞いはエリートの名に恥じないレベルだ。イケメンが揃っているため、女子からの人気も高い。

出店を開催しているのは《ラーイエロー》。目を引くのは焼きそばにたこ焼き、綿菓子にりんご飴といった食べ物。更に食べ歩き出来るだけでなく、射的や輪投げといった遊び心ある店も存在している。規模だけで言えば、3つの寮の中で最も大きいだろう。

そんなお祭り騒ぎの日に、紅也は《オベリスクブルー》女子寮に足を運んでいた。もちろんやましい考えがある訳もなく、待ち合わせをするためだ。約束した待ち合わせ時間は過ぎており、大分待ちぼうけを喰らわされているのだが。

「はあ……はあ……竜伊くん！」

「おっ、来たか。おはよう、天上院」

扉から勢いよく飛び出して来た明日香を見て、穏やかに微笑む紅也。待ち合わせ時間を間違えていたかと不安になっていた所だったので、無事に合流することが出来て安心していた。



「ご、ごめんなさい！ 遅れちゃって!!」

「いいよ、別に。よく寝た？」

「それは……まあ」

勢いよく頭を下げる明日香に、ヒラヒラと軽く手を振る紅也。あま  
りにも緩い反応をされ、明日香は戸惑ってしまった。

「なら良いや。じゃあ行こう……か」

何故か言葉が途切れる紅也。視線は明日香の後方に向いており、ど  
こか気まずそうな顔をしている。何事かと振り向いた明日香の視界  
に入ったのは、青い制服に身を包んだ2人の女子生徒だった。

「……彼女達がどうかしたの？」

少しばかり細かい声になりながら訊ねる明日香。震えた声を出さな  
かった自分を褒めたいぐらいだった。

そんな質問に答え辛そうな表情をしながら、紅也はやはり気まずそ  
うに理由を話した。

「さっき声かけられたんだ。一緒に学園祭を見て回らないかってさ」

三沢とのデュエルでそれなりに目立った紅也。あの時から紅也を  
評価していた女子は少なくなかったということだろう。

顔も悪くなく、歳の割には落ち着いている大人びた雰囲気。加えて  
伝説級のモンスターである”レッドアイズ”を扱えるとなれば、この  
デュエルアカデミアでそれなりにモテていても可笑しくはなかった。

「へ、へえー、そうなんだ」

視線を泳がせまくりながら、動揺を隠せない明日香。ポーカーフェ  
イスや余裕のある笑みなど、普段使い慣れている表情筋は機能せず、  
滑稽なポンコツ顔を晒している。

「よ、良かったの？ 断って」

「えっ？」

「だって彼女達……可愛いみたいだし」

俯きながら言ったせいか暗い声が出てしまい、明日香は慌てて顔を  
上げる。軽い言い訳でもしようとした彼女より先に、紅也が口を開  
く。

「——約束だろ？ 天上院と見て回るって」

「……う、うん」

たった一言で気持ちが軽くなる。単純な自分に苦笑しながらも、嬉しさが胸に込み上げてくる。約束という単語と、自身を優先してくれているという優越感が明日香を優しく包んだ。

「……」

「ど、どうしたの?」

明日香が温かい気持ちになっていると、視線を向けられていることに気付く。珍しいものでも見るかのような眼をする紅也に、明日香は何か可笑しいところでもあるのかと心配になりながら訊ねた。

「……い、いや。髪縛ってるの珍しいと思っただけ」

「そうね。——が、学園祭だし! こういうのも良いかなって……変かしら?」

「いや、変じゃない! 似合ってると思う」

「そ、そう。……良かった」

ホツと一息つきながら、束ねた髪を弄る明日香。美しい金色の髪は太陽光を反射し、キラキラと輝いている。白く細い首もよく見えるようになったっており、健康的な魅力が放たれていた。

「じゃ、じゃあ行くか。昨日話した通り、俺が奢るから」

見慣れない姿に動揺しながら、紅也が歩き出す。これ以上見ていると照れているのに気付かれてしまうと考えたようだ。嬉しそうな顔をしながら、明日香もその背中を追った。

「でも私は遅刻したし……お詫びって言うなら私が」

「気にしてないって。それにお詫びのレベルなら俺は絶対に負けないぞ。天上院を2回も号泣させてるからな」

「……もう、それは言わないで」

恥ずかしそうに手で顔を隠す明日香。白い肌はほんのり赤くなっており、自らの醜態を思い出したくないようだ。

「だから今日は俺の奢りだ。せっかくの学園祭だしな、楽しもう」

「……ええ。そうね」

昨晚、明日香の端末に掛かってきた電話。液晶に表示された名前は、明日香の身体を硬直させるのに十分な威力を秘めていた。こちら

から掛けようかと頭を悩ませていた所だったということもあり、余計に慌てさせられていた。

”竜伊くん”と表示された端末に向かいベッドの上で正座。優秀な頭脳を数秒フル回転させ、意を決して電話に出た。そして緊張する間も無く、電話相手から用件が告げられたのだ。

『明日の学園祭、良かったら一緒に回らないか？』

フリーズが一瞬で済んだのは幸運だったと言える。それはまさに明日香が先程まで悩んでいた内容そのものであり、望んでいた結果が向こうからやってきたのだから。

明日香は声が震えそうになるのをなんとか抑えながら承諾。待ち合わせ場所と時間を決め、長く感じた短い電話は終了した。

こうして紅也と明日香、2人の学園祭デートが決定されたのだ。

(竜伊くん……元気そう)

肩を並べて歩き出し、目的地である《ライイエロー》へと向かう。横目で確認した紅也の顔色は良く、足取りもしっかりとしたものだ。目覚めてから2日間の自室待機が上手く体調を戻してくれたらしい。

「晴れて良かったな」

「そ、そうね!」

「……ふっ」

「な、なに?」

「いや、元気良いなって。天上院も学園祭楽しみだったんだな」

遊園地に行く子供でも見るかのような微笑ましい笑顔。普段とは違う声の張り方をしてしまい、明日香にとっては不本意な解釈をされたようだ。いや、楽しみだったことは事実なのだが。

「……竜伊くんも、元気になって良かった」

「お陰様で。天上院には心配かけたな」

「本当よ。いきなりベッドから居なくなつた時は心臓が止まるかと思つたから」

「それは大袈裟……ごめんなさい」

「ふふっ、良いわよ。無事に帰って来てくれたから」

何を言つても自分が悪いと、素直に頭を下げる紅也。それを見た明

日香は笑みを溢しながら、ようやく緊張が緩んできたのを感じた。

紅也が目覚めた瞬間に抱きつきながら号泣するという年頃の少女には恥ずかし過ぎるアクションをしてしまった日から、明日香は紅也の顔をまともに見られなくなっていた。

謎の感情に悩まされながらも、普段通りの接し方に戻せたことを安堵した。

(……前まではこんなことなかったのに)

以前は感じなかった胸の高鳴りは、紅也が隣に居るだけでとてもうるさい。隣を歩く以上に密着したことすらある間柄だ。この程度の距離で何を動揺しているのか、明日香には分からなかった。

そんなことを考えていると目的地に到着したらしく、賑やかな声が耳に届き始めた。

「いらっしやい！ 特製たこ焼きだよっ!!」

「焼きそば出来立てっ！ 美味しいよっ!!」

「綿菓子にりんご飴もありまっす!!」

明るい声が飛び交う《ライイエロー》主催の新店。鼻を通るだけで空腹になりそうな美味しい匂いが充満しており、耳に聞こえてくる鉄板の音は食欲を刺激した。

「す、凄いわね」

「本当な。やる気満々だ」

「そういうえば、竜伊くんは出し物の担当はないの?」

「俺は出し物決める時に意識不明だったから、やんなくていいって話に落ち着いたよ。天上院は? 出てくれて声は多かつたんじやないか?」

「私は……そういう気分になれなくて」

「……悪い。そうだな」

少しばかり無神経な発言だったと謝罪する紅也。三幻魔復活を阻止するため、優秀なデュエリストとして明日香は鍵の守護者に選ばれた。“セブンスターズ”との戦いに神経をすり減らされ、学園祭にまで意識が向けられなかったのだろう。

ただでさえ行方不明の兄との再会、そして恩人である同級生の一時

的な失踪と、精神的にくる出来事が畳み掛けてきたのだから。

「俺が休んでる間にみんなが戦って、”セブンスターズ”も残りは1人。吹雪さんも記憶が戻ったみたいだし、今日ぐらいいは鍵のことを考えないで楽しもう。気が張りっぱなしじゃ……って、原因の1つである俺が言えたことじゃないけどさ」

「……ふっ、ふふっ、本当にそうよ。ふふふっ」

どうやらツボに入ったらしく、声を押し殺しながら笑う明日香。結果オーライと、紅也は自身の自虐発言を誉めた。

「腹減ってるだろ？ 色々食べよう」

「ええ、実は朝ごはんも食べてないの」

「そりやいい、たくさん食べられるな」

「……そんなに大食いじゃないわよ」

「ははっ、悪い悪い。——よし、最初は焼きそばにするか」

不満そうに頬を膨らませた明日香。そんな彼女に軽く謝罪しつつ、紅也が焼きそばを扱っている出店を指差した。ソースの香ばしい匂いが近くまで漂ってきており、まんまと食べたくなっていた。

「焼きそば2つ頼む」

「はいよ！ 焼きそば2つ……はいお待ち」

「??」

2人を元気よく迎えた焼きそば担当の生徒。慣れた手つきでプラスチックの容器へ焼きそばを入れ、輪ゴムをかけた。笑顔で差し出し満点の接客かと思いきや紅也の顔を見た途端に豹変、どこか憎むような表情で焼きそばを手渡した。

思わず固まる明日香だったが、当の紅也は気にした様子もなく焼きそばを受け取る。2つの容器を持ったまま、手頃なスペースへ移動した。

「おお、美味そう。はい、天上院の分」

「あ、ありがとう。……竜伊くん、あの人に睨まれてなかった？」

「そうか？ 最近多いから気にならなかった」

「……なら良いんだけど」

「そんなことよりほら、冷めないうちに食べようぜ」

「結構本格的ね……」

「意外にこだわるんだよな。ん、美味しい」

モチモチとした食感の麺に、シャキシャキとした野菜。口に入れた瞬間に鼻を通るソースの香りも満足いくものであり、学生の出店で食べられる焼きそばとしては高レベルなものと言える。

「本当ね、美味しい」

「これぐらいの量だったらすぐに食べられるな。よし、次はたこ焼きだ」

「ええ、楽しみ」

空になった容器を設置されているゴミ箱に捨て、次の出店へ向かう。すれ違う生徒達も様々な種類の食べ歩きをしており、目移りしてしまいそうだ。

「たこ焼きの店は友達がやっててき。サービスしてくれるかも」

「そうなの。あの2人？」

「そうそう。おい来たぞ、小原」

店の前まで来た紅也達を迎えたのは、《ライイエロー》トップの戦略家である小原だった。前髪を固定しているのは紅也から貰ったカチューシャではなく、出店に合わせた白いタオルとなっている。

「おおっ！ 来たな紅也！ それと……彼女か？」

「ち、違います！」

「おい、天上院に失礼だろ？」

「そうかそうか！ 悪いな！ サービスするから許してくれ。——大原！ たこ大きめでいくぞ！」

生地を流し込む小原の言葉に頷くのは、たこ係の大原。親友同士とすることもあり、コンビネーションは抜群だ。

「ほいほいほい!! あらよつと!!」

「おおく!!」

華麗な手捌きで形が出来ていくたこ焼き。見ているだけでも楽しく、小原の技量が成せる技だ。

「はいお待ち！ たこ焼き2人分！ 友達サービスでたこ大きめだよ！」

「サンキュー。小原、大原」

「ありがとう」

「楽しんでくれな！ 後で味の感想聞かせてくれ！」

「おう、分かった。じゃな」

小原と大原に別れを告げ、近くにあつたベンチへと移動する。学園祭のために用意されたので立派とは言い難く、2人座るのが限界といったサイズ感だ。そのため必然的に両者の距離は近くなり、明日香はまたしても原因不明の動悸に襲われそうになった。

必死に感情を抑え込み、顔にも出さずたこ焼きを受け取る。たこの大きさで感動している紅也にほっこりさせられたのにも助けられた。「んー、たこデカいなあ」

「美味しい。鰹節もいい感じね」

「表面はパリッとなってるのには柔らかい。小原焼くの上手いな」

青のりの風味も良く、パクパクと食べ進めていく2人。6個入りのたこ焼きはすぐに食され、満足感を残して姿を消した。

「はあー」

幸せそうな顔で息を吐く紅也と明日香。少しの潮風に吹かれながら食べるたこ焼きというのも、中々に悪くない。

「なんか一気に食べちゃったな」

「そうね。美味しかったわ、ありがとう」

《『ライイエロー』の出店はレベル高いよな。……何か飲み物でも買ってこようか?》

「い、いいわよ。それなら私が行くし」

「今日は俺の奢りって話だろ?」

「……じゃあ、お茶を」

「分かった。少し待っててくれ」

たこ焼きに刺さっていた爪楊枝と空になった容器を受け取り、紅也がゴミ箱へ捨てる。そのまま要望に応えるため、お茶を求めて歩いて行った。

「……ふう」

肩の力を抜く明日香。緊張でガチガチになっている訳ではないが、

無駄な力が入っていることも事実。そしてそんな時に限って考えないようにしていたことを思い出すのだから、人間の思考というのは上手く回らない。

(なんか竜伊くんを見てると……)

——落ち着かない。

明日香の状態を表すなら、この一言に尽きる。

本格的にそういった意識が芽生え始めたのは——やはり兄を救ってもらった時だろう。

紅也がボロボロになりながら、文字通り命を懸けて戦ったことを明日香は知っている。不甲斐なく捕らえられ、ただ無力に見ていることしか出来なかったからだ。

(……いつも、助けられてるなあ)

友人として、デュエリストとして、命の恩人として。出会ってからというもの、なにかと助けられてばかり。行方不明の兄すら連れ戻してくれた時は、涙も堪えられなかった。

意識を失い、倒れるまで戦ってくれた恩人。

看病をしていた際は1日が長く感じ、気が気でなかった。そんな思いも知らずに勝手に次の戦いへ行かれれば、明日香としても心配で身が持たない。目を離せばどこかへ行っているのだから、まるで野良猫のような恩人だ。

「……ありがとうも、言えてないんだからね」

「なにが？」

「——ツ!!! た、竜伊くんっ!」

「お待たせ。どうした？ 天上院」

右手にお茶の入ったペットボトルを2本、左手には紙に包まれた何かを同じく2個持ちながら、不思議そうな顔をした紅也が目の前に現れた。

呼吸が止まりそうになりながらも、明日香はどうにか自分を落ち着かせることに成功した。伊達に女王などと呼ばれていない。

「な、なんでもないわ。……お茶ありがとう」

「ああ。それとこれ、良かったら食べてくれ」



「これは……なにかしら」

お茶を受け取り、喉を潤す明日香。冷えたお茶で頭も冷やし、動揺を抑え込む。その後紅也から差し出された白い紙に包まれた何かを受け取り、首を傾げた。

『サンダー・ドラゴン焼き』

「……えっ？」

「分かるよ。そんな顔になるよな」

何を言われたのか分からないという顔をした明日香。そんな彼女に同意しながら、紅也は苦笑い気味に肩を落とす。

「お茶を買いに行った時に友達の神楽坂って奴が出店やっててさ。声かけられたから寄ったんだ。そしたら——『俺のサンダー・ドラゴン焼きは美味しい！ 買っていけ！ 紅也！』……って、勢いで買わされた」

「そ、そうなの」

紙を広げて中を見れば、そこには綺麗な焼き色がついた細長いタイ焼きのようなものが入っていた。

「なんというか……ええつと」

「無駄にクオリティ高いな」

生地を流し込む型とかどうしたんだよというツツコミを入れたくなる程、神楽坂特製の『サンダー・ドラゴン焼き』は精巧に作られていた。鱗の1枚1枚まで丁寧に付けられており、雷のようなジグザグマークも美しい形を保っている。

神楽坂から『サンダー・ドラゴン』への深い愛情を感じさせる一品に、紅也と明日香はどう反応しているか分からなかった。視線を合わせ、意を決して口をつけた。

「……美味しい」

「……美味しいな」

小声で呟く2人。もっちりとした皮は歯を拒むことなく優しく迎え入れ、中に入っている濃厚なクリームが香りと共に舌を楽しませる。クリームを見てみれば鮮やかな黄色をしたカスタードクリーム、『サンダー・ドラゴン』愛は細部にまで感じさせられた。

「——食った食った。満足だ」

「ふふっ、そうね。私もお腹いっぱい」

ベンチにもたれながら、伸びをする紅也。そんな様子を見ながら、明日香も笑みを浮かべる。

「ありがとう、竜伊くん。全部美味しかった」

「どういたしまして。……それにしても、久しぶりにまったりしてる感じがする」

「あっ……。その、竜伊くん」

お礼を言うなら今だと、明日香は身構えた。兄である吹雪を助けてくれたことに対して、しっかりとした感謝を伝えるのだと。

——しかし、その前に紅也が口を開いた。

「さて、そろそろ次行くか」

「えっ、あっ、その」

「実は翔に呼ばれてるんだよ。《オシリスレッド》の方にも来てくれて」

「……そうなの。……そっか」

出鼻をくじかれ、黙ってしまう明日香。《オシリスレッド》に行くということは2人きりの時間も終わりだろう。そういった意味でも、明日香のテンションは下がった。

「聞いたら面白そうなことやってるらしいぞ」

「……どんなこと？」

少し拗ねたような明日香の質問にも、笑顔で答える紅也。寝たきりの時間が続いたからか、自分が思うよりも学園祭を楽しんでいるようだ。

「名物——」コスプレデュエル”だってさ」

## く超魔導コスプレく

デュエルアカデミア高等部に在籍している生徒達は所属する寮によつて3つのランクに分けられている。

デュエルアカデミア中等部から進学した者達が所属しているエリート集団——《オベリスクブルー》。

高等部からの編入生も混ざっている、成績優秀者達の集団——《ライイエロー》。

この2つの寮のどちらかに所属出来ていれば、落第の心配もなく快適な学園生活を送れることだろう。

しかし、最後に残ったレッドゾーン——《オシリスレッド》だけは話が別だ。

筆記・実技共に成績は最低レベル、常に落第の2文字が付き纏う崖っぷちな生徒達が集められている寮だ。だからといって、寮を建てる場所まで崖っぷちなのは普通にやり過ぎだが。

アカデミアの校舎から最も離れている寮ということもあり、《オシリスレッド》は学園祭の最中でも賑やかさで他に劣っている。そんな状況を打破するため、とある男が立ち上がった。

「——お願いしますっ!! 明日香さん!!!」

お手本のように綺麗な土下座をしながら、丸藤翔は全力で叫びを上げた。聞いた者を狼狽えさせる迫力を秘めた声は、向けられた本人である明日香を確実に動揺させた。

「またストリートだな。翔」

丸見えのつむじに視線を落としながら、少し呆れたように紅也が告げる。呼び出されて来てみればこの急展開、そんな反応をするのも無理はない。

「紅也くんが明日香さんとデートしてるなんて羨まし……じゃなくて、嬉しい誤算っす。どうか僕ら《オシリスレッド》のために明日香さんのお力を貸して欲しいんです!!」

「デ、デートじゃないわよ……それに、力を貸して欲しいって」  
「《オシリスレッド》名物のコスプレデュエル！ 盛り上げるためには華が必要なんスッ！ そして華と言えば明日香さん以外には考えられません！ どうか助けてください!!」

”セブンスターズ”との戦いで消耗した体力と精神。翔にとって尊敬するアニキの十代ですら、《オシリスレッド》寮長である大徳寺の失踪によって普段の明るさが薄れてしまっている状況だ。

翔は鍵の守り人ですらない自分に出来ることを考え、こうして実行に移していたという訳だ。

「そ、そんなこと言われても……竜伊くん」

あまりにも覚悟を決めた翔の言葉を聞き、明日香は助けを求めるように紅也へ視線を向ける。しかし、その紅也は逆に助けてもらいたい状況だった。

「……あの、近いですけど」

ガツシリと肩を組まれ、密着されている紅也。身長差があるため、完全に押さえ込まれている。紅也が明日香と共にここに到着し、翔へ声をかけたのと同時に肩を組みに来た男——天上院吹雪はとびきりの笑顔で返答した。

「いや〜君の噂は聞いてるよ、竜伊紅也くん。ずっと君に会いたかったんだ」

「そ、それはどうも」

「体調を崩して寝込んでいるという話だったからね。もう大丈夫なのかい？」

「は、はい。大丈夫です」

「そうかい！ それはなによりだ！」

白い歯を光らせながら、高らかな笑い声を上げる吹雪。記憶を取り戻したことにより、溢れ出るアイドル性が完全に戻っていた。

自身とは違い過ぎる人種に戸惑う紅也をフオローすべく、明日香が

声を上げた。

「兄さん！ 竜伊くんが困ってるでしょう！」

「明日香が世話になっただけでなく、僕も助けてもらっているらしいからね〜！ 会えて嬉しいんだよ！」

ダークネスに操られていた時の記憶は残っていないらしいが、助けられたという話から紅也に恩を感じているようだ。

「どうだい？ 僕の妹、明日香は可愛いだろ？」

「……へ？」

「兄としては寂しいが……紅也くん。君になら、明日香を任せられ――」

「兄さんツ!!!」

「ああっ！ 明日香！ 耳はやめてくれ！ 僕はただ未来の弟とのスキんシップを取ろうと」

「必要ありません！」

割とすぐにキレた明日香。素早い動きで吹雪の耳をグイツと摘むと、力任せに紅也から引き剥がした。ペラペラと出てくる吹雪の言葉を一刀両断し、僅かに頬を赤く染めながら紅也へ言葉を放った。

「ごめんなさい、竜伊くん。こんな兄で」

「い、いや、平気だ。強烈なお兄さんだな」

「おっと紅也くん？ お兄さんだなんて気が早いな」

「兄さん、これ以上変なこと言うならベッドに縛り付けるわよ？」

絶対零度の眼で睨みつけ、吹雪を黙らせる明日香。完全に兄へ向けていい類の視線ではなく、吹雪だけでなく紅也も固まった。

「あーっ！ もうー!! そういうのは後にして欲しいっす!! 今はとにかく明日香さんに力を貸してもらって、コスプレデュエルを盛り上げたいんす！ この通りです!!」

凍結しそうになっていた空気を切り裂いたのは、土下座しながら顔だけ上げるといふ器用な体勢で叫ぶ翔だった。吹雪への睨みを中断し、明日香が再び疑問を投げかける。

「私に力を貸して欲しいって言うけど……私はレッドじゃなくてブルーよ？」

そもそも所属する寮が違うという尤もな意見だったが、それに返答したのは翔ではなく吹雪であった。

「良いんじゃないか？ 明日香のコスプレなら僕も見たいぞ。それに……君も見たいだろう？ 紅也くん」

「……そ、そうなの？ 竜伊くん」

学園でもトップクラスの顔面偏差値兄妹に視線を集中され、紅也は無防備なダイレクトアタックを受けている気分になった。整い過ぎている2つの顔に見つめられて削れる精神、紅也は正直な意見を述べた。

「て、天上院のコスプレなら……俺も見たいな」

記憶にもあまり残っていないコスプレデュエル。学園祭の空気に触発されたのか、紅也は珍しく欲望に従った。

「……竜伊くんがそう言うなら」

「おおっ！ 流石は我が妹！ 翔くん、早速衣装のある部屋へ案内してくれ」

「はいっス！ やったやった！ 明日香さんの『ブラック・マジシャン・ガール』だあっ!!」

翔にとって最高のアイドル、『ブラック・マジシャン・ガール』。

デュエルモンスターズの中でも多くの男性ファンを獲得しているモンスターに明日香のような美少女がコスプレすれば、間違いなく集客の要になる。

明日香の手を引き、教えられた衣装部屋に歩き出す吹雪。本当に楽しそうな笑顔をしており、明日香も満更ではなさそうだ。

紅也は無事に再会出来た兄妹を見て達成感と微笑ましきを感じながら、喜びのあまり大粒の涙を流している翔の肩に手を置いた。

「良かったな。翔」

「うん！ 紅也くんが明日香さんを連れて来てくれたお陰っス！

……もう1人の候補に断られた時はどうなることかと思っただっスよ」  
「もう1人の候補？ 誰か他にも頼んだのか？」

「うん。最近購買部で働くようになったカミューラさんっていう人！ 美人でスタイル良いし、絶対似合うと思っただっス。一瞬で断られた

スけど」

「それは無理だな。『私は暇じゃないのよ』とか言ってるよ」

「えっ？　なんで分かったんスか？」

「……言ってるたのかよ」

不思議そうに首を傾げた翔へただの偶然だと言いつつながら、紅也は知り合いの単純さのために息を溢した。学園祭の影響で購買部も忙しいということを考えれば、カミューラの発言も間違っていないのだが。

「さあさあ！　紅也くんも衣装部屋に行くつスよ！　僕、紅也くんのためにとっておきのコスプレ衣装を用意したつス！」

「分かったよ、そんな慌てるなって。——おつ、十代と三沢」

紅也は犬のようににはしゃぐ翔を落ち着かせながら、レッド寮の2階からこちらに手を振る十代と三沢に手を振り返す。

「……2人とも元気そうだな」

紅也が気絶した後、明日香、万丈目と同じく“セブンスターズ”を倒した十代と三沢。闇のデュエルに挑んだことから体調を心配していたが、必要なかったようだと言ったと安堵。紅也は翔の背中を追って衣装部屋へと向かった——のだが。

「これは……酷いな」

人が絶望するのに時間は関係ない。

紅也はそれが事実であることを、床に倒れた翔を見て確信した。

「お、おい、翔。元気……は出ないよな」

「あ、あ、アアアアアア」

シヨックが大き過ぎるのか、言葉すら出てこない翔。

紅也は無理もないと、翔にここまでダメージを与えた人物を見て、静かに同情した。

「……トメさん、来てたんですね」

とびきりの笑顔で衣装部屋に飛び込んだ翔を出迎えたイレギュラー。それはよく知る顔のトメであり、更にはよく知る衣装をギリギ

りで身に纏っていた。

「うふっ、『ブラック・マジシャン・ガール』は私の十八番だからねえ。毎年こうして盛り上げに来てるんだよ」

露出は多いがいやらしさは感じさせない、とても完成されたデザイン。衣装自体は素晴らしいのだが、これが『ブラック・マジシャン・ガール』かと聞かれれば断固として首を横に振るしかない。

「ほら、似合うだろう？——あれ」

ビシツとポーズを決めたトメだったが、同時に衣装もビシツと裂けた。あの衣装にとつてトメの肉体は限界値を超えていたらしい。

思わず石化する紅也、十代、三沢、明日香、吹雪の5人。衝撃的な光景を見ることもなかったため、翔が床に倒れ伏したままだったのは不幸中の幸いだったかもしれない。

「去年はピツタリだったんだけどねえ……縮んだ？」

「「いやいやいやいや」」

シンクロした動きで手を振る紅也、十代、三沢。後ろから見ている明日香と吹雪も困ったような顔をしている。

そんな中でもトメは自身が太ったということを微塵も考えず、残念そうな顔をして購買部に帰っていった。

——丸藤翔に、深いトラウマを植え付けて。

「「おおっ！」」

狭い部屋に響く2人の男の声。コスプレ衣装に着替えた明日香を見て、紅也と十代が同時に発したものであった。

先程精神に大ダメージを受けた翔は感動のあまり涙しており、明日香に向かって何度も頭を下げていた。

「感激っス……感激っス」

「も、もう、翔くん。恥ずかしいからやめてよ」



「すっげえっ！ すっげえっ！ 紅也！ 三沢！ 俺達もコスプレしようぜ！」

「悪くないな。俺もするでしょう」

間近でコスプレを見てテンションが上がったのか、十代と三沢が衣装の山に駆け寄っていく。紅也はそんな彼らを微笑ましく思いながら、明日香のコスプレをジッと眺めた。

『「ハーピー・レディ」か。意外だったな」

「女性向けこれしかなくて……ちよつと派手かな？」

金色のアーマーに身を包み、紫色の翼を腕から生やしている。全体的な露出は少なめだが、肩と胸元が出されており女性的な色気が放たれている。髪を縛っていることもあり、うなじが見えているのも魅力を上げていた。

「よく出来てるな。……これ付け耳かあ」

「——ッ！ ちよ、ちよつと……竜伊くん」

尖った付け耳に手を伸ばし、優しく触る紅也。完成度の高さに好奇心が止められなかったようだ。明日香が恥ずかしそうに声を上げると距離の近さに気付いたのか、紅也は慌てながら手を離れた。

「わ、悪い！ ……その、よく似合ってる……と思う」

「そ、そう……ありがとう」

とても破壊力のある姿と顔を見せられ、緊張してしまった紅也。照れながらもなんとか褒め言葉を口に出ることが出来た。男としての最低限は果たせたようだ。

素直に褒められた明日香も、紅也と同じく頬を染める。翼で顔を隠す様はとても可愛らしい。

「た、竜伊くんはコスプレするの？」

「……そうだな。せっかくだしやってみるよ、翔がとっておきの衣装を用意してくれたって話だしさ」

「期待して欲しいっす！ ちよつと取ってくるっすね！」

「そっか。楽しみ」

翔が戻ってくるのを2人が談笑しながら待っていると、翔よりも先に十代と三沢が戻って来た。三沢は分かりやすく『切り込み隊長』だ

が、十代はゴチャゴチャした格好をしており、異様としか表現しようがない姿だ。

「じゃーん！ どうだ！ 紅也、明日香。似合っていないか？」

「……なんだそのコスプレ。三沢が『切り込み隊長』なのは分かる」

「魔法使いの帽子に戦士の鎧……盾に杖まであるわね」

冷静に十代が身に付けている物を分析する明日香。見れば見る程ぐちゃぐちゃであり、最早新たなモンスターと言った方が正しいときえ思える。

「あははっ、色々迷ってたらこうなっちまった。もう何にコスプレしたのか俺にも分かんねえ」

「ふっ、十代らしいな。紅也はコスプレしないのか？」

「衣装を翔が持って来て……くれたな」

魔法戦士のような感じで、見る人が見れば好きかもしれない。そんな感想を抱きながら、紅也は大きめの箱を持ちながら帰って来た翔に視線を向けた。

「これこれ！ 紅也くんのコスプレ衣装っス！」

「おおっ！ 良いじゃん！ 紅也、早く着替えてくれよ！」

「気になるな」

「分かったよ。何が入ってるのかな」

予想を立てつつ箱の中身を見てみると、やはりというかなんというか、紅也が予想していたモンスターのコスプレ衣装が入っていた。期待を裏切らない翔に感謝しつつ、制服を脱いで衣装を着た。

「うおーっ！ 最高じゃん！」

「ああ、良いコスプレだ」

「思った通り、似合うっスね！」

「ええ、とつてもよく似合ってる。やっぱり竜伊くんと言えば……このモンスターしかないわよね」

4人から賞賛され、紅也は少し気恥ずかしさを感じる。しかしそれ以上に嬉しさが勝っており、衣装の具合を確かめるかのように手を動かしている。

「……『レッドアイズ・ブラックドラゴン真紅眼の黒竜』。こうして自分になることになるとはなあ」

前世に存在していたとある儀式モンスターを思い出しながら、自身の格好に笑う紅也。トゲトゲとした身体に、明日香と同じく背中には2本の翼が生えている。手の爪や尻尾も再現度は高く、紅也は普通にテンションが上がっていた。

(……似合うか?)

返事をするように震えるデッキケース。どうやら相棒も満足な様子だ。十代にバレるのを防ぐため精霊化は出来ないが、感覚がリンクしているためレッドアイズにもコスプレ姿を見せることが出来た。

「でも頭はないんだな。用意しなかったのか? 翔」

「違うんすよアニキ。レッドアイズの頭って難しくって、時間足りなかつたんす」

「ええっ! これって翔くんが作ったの!?!」

「……凄いな。翔」

「えへへっ、そうすか?」

まさかの手作りに驚く紅也達。これだけのハイクオリティで仕上げようとしたのなら、頭部が間に合わなかつたという話も納得がいく。

「——なら、こういうのはどうだ?」

何かを思いついたのか、三沢が動いた。箱に入っていた『ブラック・マジシャン』の帽子を紅也に被せた後、十代が持っていた杖を構えさせた。

「よし、悪くない」

「……いや、なにこれ?」

満足気に頷く三沢に、冷や汗を流しながら訊ねる紅也。自身のコスプレしているモンスターが——ヤバいことになっている気がしたからだ。

『レッドアイズ・ブラックドラゴン真紅眼の黒竜』  
『デュエルキング友と言え、決闘王・武藤遊戯だ』

講義でもするかのように語り出す三沢。驚愕でそれどころではないが、紅也はなんとか耳を傾けていた。

「かの有名な『ブラック・デーモンズ・ドラゴン』は城之内克也と武藤

遊戯の友情が合わさった伝説のモンスターとされている。ならば、レッドアイズ・ブラックドラゴン『真紅眼の黒竜』と『ブラック・マジシャン』が合わさっても……友情のモンスターと呼べるだろうか?」

「おおっ! 確かに!」

「互いのエースモンスターが融合なんて素敵ね!」

「絶対カッコよくて強いっス!!」

三沢の言葉に興奮しながら賛成する十代達。コスプレしている本人とは真逆の顔をしている。

精霊など宿っていない筈だが、紅也は何故か自室の金庫に入れてあるカードが騒いでいるような気がしてならなかった。

「融合モンスターならさ、レッドアイズ専用の融合カードとかあったら良いよなっ!」

(……ある)

「攻撃力は3000ぐらいが妥当かしらね」

(……あつてる)

「効果もとんでもなく強い筈っスよね!」

(……その通りだよ)

それぞれの意見に内心で頷く紅也。何故かピンポイントで当てにくる友人達に恐怖しながら、転生者かよというツツコミをなんとか押さえ込んでいた。

「種族はドラゴン……いや、決闘王に敬意を表して”魔法使い”族が良いか」

「そ、その辺で良いんじゃない? もうこの話」

「名前をどうするか」

「話聞けよ」

わいわいと盛り上がる面々。新しいモンスターの想像が楽しいのは理解出来るが、紅也にとってはあまり盛り上がってほしくない話題だ。そんなにキラキラした顔で話すようなモンスターではないのだから。

『レッドアイズ・マジシャンドラゴン真紅眼の魔法竜』……ではありきたりだな」

「でもレッドアイズは入れたいよな!」

「マジシャン・オブ・レッドアイズとかどうかしら？」

「いいね!!」

「魔法使いって魔導士とかとも呼べるっスよね。……魔導士。……ドラゴンだから竜とか付けて魔導竜とかどうスかっ!？」

「「カッコいいっ!!」」

「……ご、強引じゃない？」

もう止まらない4人。声をかけて静止することもせず、紅也はただ突っ立っていた。

「エースモンスター同士の融合なんだ! ”超” って付けようぜ!」

十代の小学生レベルな発言にも、特に反対の声は上がらない。全員が本当に楽しそうな笑顔で、年相応の無邪気さを見せている。

言い出しっぺだからか、三沢が普段の冷静さも見せずに結論をまとめる。死んだ眼をした紅也を指差し、新たなモンスターの名前を叫んだ。

「これで決まりだ! そのモンスターの名前は——『超魔導竜—マジシャン・オブ・レッドアイズ』だっ!!」

——紅也は全てを受け入れた。

????????????????????????????????

……っ、疲れた)

疲弊しながら丸太へ腰掛ける紅也。既に辺りは暗くなっており、生徒達は祭りの空気を楽しみながらキャンプファイヤーを囲んでいる。原作通りに十代と『ブラック・マジシャン・ガール』が白熱したデュエルを行い、コスプレデュエルは大成功を収めた——までは良かった。

精神的疲労からデュエルに名乗りを上げなかった紅也だったが、予

想もしなかったアクションに見舞われたのだ。

——『ブラック・マジシャン・ガール』襲来。

ぐいぐいと距離を詰められながら言いたいことを言った後、勝手に満足して『お師匠様の匂いがしたと思っただけでなく』という一言を残して去っていった。短い時間だったが、紅也にとつては非常に辛い時間であった。

十代に目撃されなかったため、精霊が視えることを知られなかったのが不幸中の幸いだった。

(……お師匠様の匂い、ね)

懐のデツキケースに服の上から手を当てながら、なんとも言えない表情になる紅也。昼間のコスプレといい、今日は心臓に悪い日だ。

紅也がキャンプファイヤーを見ながらしばらく放心状態でいると、後ろから声をかけられる。

「竜伊くん。ここに居たのね」

「天上院。……コスプレはもう良いのか？」

紅也が振り向いた先に立っていたのは明日香。服装はいつもの制服に戻っているので、『ハーピー・レディ』のコスプレは終了したようだ。

先程まで友人のジュンコとももえの3人で『ハーピー・レディ』3姉妹を披露しており、多くのファン達がカメラを構えて真剣な眼でフラッシュを連発させていた。

「え、ええ。……恥ずかしかったわ」

「吹雪さんもめっちゃ撮ってたな」

「わざわざ自前のカメラ持ってくるんだもの。一番楽しんでたわよ」

「ははっ、愛されてるな」

少し見ない間に妹がこんな美人になって嬉しいぞく、などといった感想と共に激写。吹雪は自前のカメラを思う存分に活用していた。

恥ずかしいのか顔に手を当てる明日香。隣に座っても良いかという彼女の言葉に頷き、紅也は腰を浮かせて明日香が座れるようにスペースを空けた。

「……学園祭も、もう終わりだな」

隣に座る明日香のみに聞こえる声量で紅也が呟く。周りに生徒達も居ないため小声にする必要性はないのだが、祭りの終わりが近づいている空気感がそうさせた。

「そうね。……今日は楽しかった。誘ってくれてありがとう、竜伊くん」

「俺も楽しかったよ。最近寝てばかりだったからな」

「……」

ここ数日間はベッドの上で過ごしていた紅也。珍しく素直に楽しかったという言葉を使っていることから、本心であると分かる。

そんな紅也の顔を横から見つつ、明日香は感謝の言葉を放つタイミングが今であると確信。デュエリストとしてタイミングを逃さない能力は磨いてきた。その本能が今であると告げたのだ。

「た、竜伊くん」

「……ん？」

キャンプファイヤーに奪われていた視線を明日香へ向ける紅也。疲れたのか、少し眠たそうな眼をしている。

意志が揺らぎそうな顔を見せられるも、明日香は気を強く持ち口を動かす。この場を逃せばチャンスはない。自身にそう言い聞かせ、紅也に対して頭を下げた。

「兄さんを助けてくれて……ありがとう」

頭を下げているため、紅也がどんな顔をしているか明日香には分からない。あまり嬉しそうな顔はしていないだろうと予想しながらも、明日香は言葉を続けた。

「ボロボロになって傷付いて……それでも貴方は戦ってくれた。……そして、助けてくれた」

生徒達の騒ぐ声が耳から遠くなっていく。

今顔を上げれば情けない表情を見せることになる、明日香は頭を下げたままだった。

「……本当にありがとう」

最後まで感謝を込めて、明日香は言い切った。急激に恥ずかしさが込み上げてくるが、不快感などある筈もない。達成感にも似た何かを

感じつつ、明日香はゆつくりと顔を上げた。

——そして、息が止まった、

夜の闇とキャンプファイヤーによって作られた影、隣同士という近距離でなければ視認することは出来なかっただろう。

優しく、温かく、それでいて柔らかい。見ただけで胸がざわつくというのも単純な話だ。そう自虐することで、明日香は心の平穏を取り戻そうとした。

「はい、どういたしまして」

平穏が戻るどころか、ざわつきは加速した。

キャンプファイヤーのお陰で顔が赤いことも誤魔化せている。そんな風に思わなければ、明日香は羞恥に耐えられなかった。

明日香の気も知らず、満足そうな笑みを浮かべる紅也。ストレートに感謝されたことが素直に嬉しかったのか、珍しく緩い表情をしていた。

「良かったな。天上院」

「……え、ええ」

紅也の顔を直視出来ず、明日香は足元へ視線を逸らした。自身の青色のブーツが視界に入ると同時に、紅也の靴も見えた。近距離に居るということを視覚情報で伝えられたようで、明日香は更に動揺する。

「あ、あのね。竜伊くん」

そして決心する。

騒ぐ心をそのままに、明日香は紅也へ向き直った。

「1つ……お願いがあるの」

途切れそうになる言葉をなんとか繋ぎ、潤んだ瞳で視線を合わせる。その辺の男子生徒であれば速攻で勘違いをし、速攻で告白し、速攻で玉砕していただろう。精神年齢25歳の男でさえ、空気を察して頬を赤く染めているのだから。

思わず見惚れてしまう横顔に魅了されながら、紅也の耳に届いた言



葉は——予想外の一言だった。

「竜伊くんのこと……名前でも呼んでも良い？」

「……えっ？」

考えもしなかった展開に思考が止まる紅也。学園祭の終わり、キャンプファイヤー、楽しさと寂しさが混同する独特の雰囲気。そんな青春真っ只中のこの場で、紅也は思いつきり肩の力が抜けていた。

「そ、それが……お願い？」

こくりと頷く明日香。耳まで赤くなっていることから、咄嗟に照れ隠しで言ったという訳でもなさそうだ。

「あ、ああ、そういうことね。うん、なるほど」

「竜伊くんと知り合ってもうすぐ1年は経つし……。そろそろ名前で呼びたいというか——も、もちろん！ 無理にとは言わないけど!!」

遠い目をしながら己の愚かさを恥じる紅也に、明日香が慌てて理由付けをする。第三者から見ればイチャついてるようには見えませんが、当人達にそんなつもりは全くない。

「いや、名前は全然呼んでもらって構わないんだけど」

「本当っ!？」

「お、おお。もちろん」

勢いよく距離を詰められ、狼狽える紅也。

明日香も自身の行動に驚いたのか、すぐに身体を離れた。

「ご、ごめんなさい。……紅也くん」

「……」

あまりの衝撃に固まる紅也。

名前呼び程度で過剰だ、小学生か。などと自身を叱責するが、耳に届いた甘美な声が紅也の思考を鈍くさせる。

恥ずかしそうに照れながら、あの天上院明日香が名前を呼んでくれたという事実は——想像を絶する破壊力を秘めていた。

「……紅也くんも、呼んでくれる？ 私……名前」

学園祭という非日常が作る空気感に背中を押されるように、勇気を出した明日香が訊ねる。不安と期待を宿らせた瞳を紅也へ向け、答えを聞き逃さないように耳を傾けていた。

(な、名前!?! ……名前か)

そしてこういった状況に耐性がないヘタレは、内心めちやくちや焦っていた。とびきりの美人からこんなことを言われれば、自身に気があるのかと勘違いしても無理はないのだから。

「ど、努力します……」

「……ふふっ、ありがと」

そんな情けないヘタレに明日香は優しく微笑みを向ける。感謝を伝えることが出来ただけでなく、関係性も深まったと喜んでいるようだ。

夜空を彩る星々の下、周りの声も消えて2人だけの会話が続く。戦いを忘れ——つかの間の平穏を噛み締めるように。

## く最悪への序章く

「はあー？　そこでビビって名前呼びしなかったの？　このヘタレ！」

「……そこまで言います？」

同じベンチに腰掛けるカミューラと紅也。互いに用意していたドリンクを手に持っており、肩の力を抜いて休憩中だ。

場所はデュエルアカデミア屋上近くの小さなスペース。階段を登らなければならないため、あまり人気のない隠れスポットだ。そのため、こうしてカミューラと会っていても周りの視線が紅也へ刺さることもない。

「……情けないわねえ」

「お、俺のことはもういいでしょ」

今日で学園祭を終えてから4日が経過。紅也とカミューラは互いの近況を報告し合うために、放課後の時間を利用して会っていた。

「そういえば翔から聞いたけど、コスプレ断つたらしいですね」

「当たり前でしょ。私は誇り高きヴァンパイア、見せ物になんかなるもんですか」

「でもカミューラさんなら、あの派手なドレス着るだけで実質コスプレみたい……って痛い痛い!!」

「ゴミが付いてるわ〜？　取ってあげるわ〜！」

ブーツと空を眺めながら呟いた紅也を思いつきりつねるカミューラ。上品な笑顔では隠しきれない怒りが滲み出している。ここまで学習しない紅也はそれなりにアホなのかもしれない。

「全く。そんなんじゃ恋人も無理そうね」

「カミューラさんは？　良い人居ました？」

「居る訳ないでしょ」

「じゃあデート権獲得した奴は？」

「居る訳ないでしょ」

「……マジか。何連勝中だよ」

興味無さそうにペットボトルへ口を付けるカミューラ。休憩中だというのに腕にデュエルディスクを付けていることから、ここに来るまでで一戦終わらせてきたのかもしれない。人気者の苦労を思い、紅也は少しだけ同情した。

彼女とのデュエルに勝利した者には彼女とデート出来る権利が与えられるのは周知の事実だ。購買部で働き出してからというもの、1日に5戦までというルールに従い多くの男子生徒がカミューラへと挑んできた。しかし現在に至るまで勝利出来た幸せ者は1人も居らず、勝つためのグッズ強化をするべくパックを買い漁り売上に貢献する日々が続いている。

「私に勝ったのはアンタぐらいよ。お姉さんがデートしてあげましようか?」

「……お姉さ。吸血するわよ?」ごめんなさい」

紅也は身の危険を感じ、即座に頭を下げる。ここ最近で学んだことは、カミューラに年齢弄りはシャレにならないということだ。紅也もせっかく転生したのだから、干からびたミイラで二度目の人生を終わらせたくはない。

「で、でもあれですね! カミューラさんは本当に人気者になりましたよね! 美人だからなあ! ハハハハハ」

ぶるぶるとドリンクを持つ手を震えさせながら、紅也はぎこちない笑顔で声を上げる。そんな惨めな男に冷めた目を向けながら、カミューラは脚を組んだまま伸びをした。

「まあ、トメさんに看板娘を譲るとも言われたけどね」

「……あれだけ売り上げ伸ばしてたらね」

全てを懸けて勝利を目指すデュエリスト達を思い、紅也は静かに合掌。カミューラのグッズを強化してしまった張本人としても、罪悪感が無い訳ではなかった。

「コスプレで思い出したけど、アンタは何かコスプレしたの?」

紅也が散っていった男子生徒達に謝罪していると、頬杖をつきなが

らカミューラが訊ねる。よりもよって、あまり答えたくはない質問を。

「……これ」

「はあ？ なによそれ」

思わずジト目になるカミューラ。紅也が制服の中から取り出し、見せてきた物がなんなのか理解出来なかったからだ。どうやら首から掛けているらしく、細いチェーンで繋がっている。

「……カード？」

「正確にはプロテクター、かな」

カードの裏側そのままのデザインをしたカードプロテクター。紅也はチェーンを首から外すと、それをカミューラへと手渡した。

「……”これ”ってどういう意味？」

「そのプロテクターの中に入ってるモンスターにコスプレしたって意味」

「見えないじゃない」

「見えないようにしたんですよ」

あまり重さを感じないプロテクターをひっくり返しながら、表裏を確認するカミューラ。しかしモンスターのイラストは確認出来ず、表でも裏でもデザインは同じようなものだった。

「なによ、見られて困る物でも入れてるの？」

「えっ、何で分かったの」

「本当に入れてるのね……」

カミューラは少し呆れながら紅也へプロテクターを返却。すぐにチェーンを首に掛け、プロテクターを制服の中へ隠していることから先程の言葉に嘘偽りはないと分かる。

「なんか……ビビってない？ どんなモンスター入れてるのよ？」

『『幻魔の扉』が紙くずに感じるぐらいのめっちゃヤバいモンスター』

「……ふ、ふーん。そういう冗談言うのね」

「俺がそんな冗談言ったことありました？」

「……」

思わず黙るカミューラ。出会った時から振り回されていることを

考えれば、この言葉も真実なのではないかと考えさせられる。なにせ倒れそうと言って本当に倒れるような男なのだから。

「ゴイツは真正正銘の切り札・最終兵器・奥の手。……使うことがないならそれに越したことはないんです」

持ち歩くのは怖いが、もちろん理由は存在する。

(まさか……金庫をぶち破るとはなあ)

学園祭を終えて明日香を女子寮まで送った後、部屋に戻った紅也を出迎えたのは明らかに内側から破壊された金庫だった。その時ばかりは流石に紅也も顔面蒼白となり、机に飛び出していたカードを手にとってレッドアイズと共に2時間程凝視。コスプレ中に嫌な胸騒ぎはあったが、こんなことをやらかしているとは思いもしなかった。(やっぱ、ただのカードじゃないんだよな)

精霊の影すら見えないにも関わらず、鉄製の金庫を単独破壊出来る紙のカード。紅也は改めてそのモンスターに対する警戒度を上げ、保管場所を部屋から自身へと変更した。元々近い内にそうするつもりではあったのだが、そんな腑抜けた対応では間違いが起きると意識を切り替え即行動。プロテクターとチェーンを購入しに走ったという訳だ。中々のお値段だけあり、プロテクターは頑丈さに合わせて完全防水と性能は優秀だ。

「アンタの言うことが正しいとして……そんな危ないもの身近に置いとくの?」

「……まあ、俺に対しては安全……だと……思う」

「ビックリするぐらい自信無いじゃないっ!!」

「もしもの時はカミューラさんも……ね?」

「嫌よ!?! もしもの時ってなに!?!」

「……………道連れ」

「ボソツと怖いこと言うなあっ!!」

束ねている鮮やかな緑色の髪を振り回し、取り乱すカミューラ。自身を抱き締めるようにして怯えており、紅也にしか見せないような顔

をしている。

「冗談ですよ」

「……さつきそんな冗談言わないみたいなこと言ったじゃない」

「大丈夫、俺の仲間ですから。……世界滅ぼせるぐらいの力を持つてるだけで」

「二度とそのカードを私に近付けないで」

じりじりとベンチの端へ移動し、紅也から距離を取ったカミューラ。声と顔がマジであり、紅也は思わず苦笑い。

「そんな邪険にすることないでしょ。イラストもカッコいいし、強いし。……めちゃくちや人気あつたんですよ？」

「前の2つはともかく、最後のはそんな顔で言われても説得力無いわよ」

「人気はあつたんだよ……人気は」

デュエリストなら誰しもがデッキに投入し、同じモンスターを戦わせていた時代すらあつた。毒を以って毒を制すように、このモンスターにはこのモンスターしか容易に対抗出来ない実力を持っていたからだ。

「ふーん。じゃあ今になって身に付ける理由は？」

紅也が血塗られた悲しき過去を思い起こしていると、カミューラが顎に手を当てながら質問を飛ばす。不思議そうな顔をしているため、純粹に気になったようだ。

”金庫封印が破壊されたから”——などと言える訳もないが、一応それ以外の理由もあるので言葉には詰まらない。残り少なくなったドリンクを飲み干し、ペットボトルを空にする。軽く息を吐いてから、紅也は質問に返答した。

”セブンスターズ”が全員倒されたから……ですかね」

狙いを定め、近くのゴミ箱へシュート。

——見事、外れた。

「……カ、カミューラさんも知ってるでしょ？」

ベンチから腰を上げ、ペットボトルをゴミ箱へ捨てる紅也。近い距離で外したことが恥ずかしいようで、視線は下を向いている。

「噂は嫌でも耳に入ってくるって言ったでしょ。一昨日だったわね」

流石に弄るのは可哀想だと思ったのか、紅也が目の前で晒した醜態をスルーしたカミューラ。そんな気遣いに感謝しつつ、紅也は理由の補足説明に入った。

「そ、その通り。十代が倒しました」

最後の”セブンスターズ”。錬金術師・アムナエル。

その正体はデュエルアカデミア教師にして、《オシリスレッド》寮長でもある大徳寺だった。行方不明であった謎は最悪な形で解き明かされ、十代は激しい葛藤の中でギリギリの勝利を掴んだのだ。

「アンタは戦わなかったのね」

「学園祭の時に鍵を万丈目に預けましたからね。俺は病み上がりみたいなもんでしたし、反対されることもなかったですよ」

「万丈目？ 誰よそれ」

「えっ、知らないの？ 1年生なら有名だと思ったけど」

「遊城十代の名前だつてこの件で初めて聞いたわ」

噂が勝手に入ってくるだけであつて、カミューラ自身はそこまで周りに興味がない。ようやく慣れ始めた仕事が楽しくなってきたところではないだけかもしれないが。

「十代とかカミューラさんにデュエルを挑みそうだと思つてたけどな。アイツ強い人と戦うの好きなんで」

「……あー、なんか来た気がするわ。順番待ちの男子生徒に名前叫ばれて帰らされてたけど」

「なるほどね。怖い怖い」

腕を空へと伸ばし、身体をほぐす紅也。吹き抜ける風が合わさり、とても心地良い。

「話がズレてるわよ。戻りなさい」

「ああ、そうだった。——吹雪さん……いや、ダークネスとカミューラさん。俺が2人と戦つて万が一負けた時にこのカードを取られたりしたら本気でヤバかったんで、今までは部屋の金庫に入れてたんですよ。用心して損することはないですからね」

世界の破滅に関してイベントに事欠かないGXの世界だが、それら



を解決するのは主人公である遊城十代の役目。ポツと出の転生者などお呼びではないのだ。

紅也が吹雪とカミューラを横取りしたのも、原作が大きく変化する可能性が低いと判断した結果。世界を救うのは主人公に任せて当然だ。

「ちよつと待って。じゃあアンタがそのカード使えばもつと簡単に勝てたんじゃないの?」

「簡単に勝てましたよ」

即答する紅也。

誇張などではなく、単なる事実だ。

「……じゃあ、なんで使わなかったの?」

「使いたくなかったから」

「……??」

首を傾げるカミューラ。顔面偏差値の高さでとても様になっていく。紅也はそんな彼女に笑いかけながら、自身の言葉に訂正を加えた。

「少し言い方を間違えましたね。——カミューラさん達には使いたくなかったから……って感じですよ」

「私達には……?」

「正直言って、俺もコイツのことがよく分かってないんです。助けようとした相手を勢い余って焼き殺す……とかもあり得そうで。だから最初から使うつもりはありませんでしたよ」

「……闇のデュエルだっていうのに。本当……お人好しね」

腕を組みながら、ため息混じりに表情を和らげるカミューラ。命懸けの勝負で相手を助けようとする時点で、理解出来ない程のお人好しだ。

「そんな闇のデュエルも終わりました。三幻魔復活は阻止、平和な学園生活に戻るでしょ。コイツだって、いつまでも金庫の中じゃ可哀想ってだけです」

「なんだ、思ったより大した理由はないのね」

「ははっ、酷いなあ」

笑っている紅也だが、内心はあまり落ち着けていない。この不自然な状況に対して、自分なりの答えがどうしても出てこないからだ。

(……なら、三幻魔は——どうやって復活したんだ?)

十代が最後の”セブンスターズ”・アムナエルを倒したと聞いた時、紅也は喜ぶと同時に1つの疑問に襲われた。原作知識によれば三幻魔は復活し、その強大な力で世界中を恐怖させた。

三幻魔の復活が阻止されたため、自身の知っている未来とは異なる路線に入ってしまった。紅也が危機感を持っているのはそういうた事情もあつた。

(この辺は記憶が曖昧なんだよな。……アムナエルが大徳寺先生で、それを十代が倒すことは覚えてるんだけど)

難しい顔をしていたからか、いつの間にか立ち上がったカミューラが紅也の顔を覗き込んでいた。

「なによ、その顔」

「うおっ、ビックリした」

「心配事?」

「いいえ、別になんでも」

「……あつそ」

カミューラもドリンクを飲み終えたのか、紅也と同じくゴミ箱へシュート。ヘナチヨコとは違い、ペットボトルは吸い込まれるようにゴールした。

遠慮なく勝ち誇るカミューラに肩を落とす紅也。そんな彼の様子を見て、カミューラは上機嫌に側へと寄る。

「まっ、何かあつたら力ぐらい貸してあげるわよ。ペットボトル捨てるとかね……ぷぷ」

「そ、そうですね。デュエルじゃノーダメージで負けるぐらいですもんね。それぐらいはやってくれないとねえ?」

それ程ない身長差で煽り合う2人。第三者が見ればただの仲良しにしか見えないだろう。そんな微笑ましい光景を終わらせたのは——紅也の端末から鳴り響いた通知音だった。

「……十代から? ちょっとすみません」

「ふふっ、私の勝ち♪」

睨み合いに勝利したとドヤ顔をするカミューラにイラツとしながら、紅也は十代からの通話に応じる。最近では明日香と同様にデツキ構築の相談をしているので、そのことに関する用件だろうか。そんな予想を立てながら、紅也は特に何の躊躇もなく通話ボタンを押した。

「もしもし？ 何か用……」

『——紅也っ！ 大変だ！ 万丈目が七精門の鍵を全部持ち出して明日香とデュエルすることになった!!』

「……へっ?」

耳を貫くような大声で十代から告げられたのは、全く予想していなかった人物によるとんでもない行動だった。

「ちよ、ちよっと待て。何がどうなって万丈目が？ それに天上院つて」

『分かんねえけど、校長室に置いてあった七精門の鍵を持ち出したんだ！ それで明日香とデュエルするとかなんとか……ああ！ とにかく紅也も来てくれ！ 《オシリスレッド》近くの海沿いでやってるから！ 急いでくれよ!』

「だから待ってって! ……切れた」

言いたいことだけ言い放ち、通話は終了した。少しだけわくわくした声音から察するに、恐らくデュエルが開始されたのだろう。

状況が飲み込めず、呆然とする紅也。一連の流れを見ていたカミューラは心配そうな顔をして訊ねた。

「ど、どうしたのよ?」

「いや……よく分からないけど、呼び出されたんで行ってみます」

「……そっ、じゃあ私も戻るかな。誰かさんは私と話す時間より友達を取るみたいだし」

拗ねたように手を後ろで組み、カミューラが声を上げる。紅也はそんな発言を咎めながら端末をポケットへ戻し、既に疲れた表情で歩き出した。アカデミアから《オシリスレッド》近くまで行くとなると、そ

れなりに時間が掛かる距離だ。

「ちよつと、誤解される言い方やめてください……あつ」

「なによ、変な声出して……あつ」

いきなり硬直した紅也に声をかけるカミューラだったが、彼と視線の方向を同じにした途端同様に硬直。情けない声を溢すと同時に、自分がした不用意な発言を後悔したのだった。

存在を確認したのは——3人の男子生徒。

2人に、というより紅也に強い敵意を向けている。明らかに好意的な様子ではなく、腕にはデュエルディスクすら装着していた。

こんな人気のない場所で2人きり、先程のカミューラの発言と合わせて言い訳の難易度はとても高い。

「い、いや……違うんですよ。ねっ？ カミューラさん」

「そ、そうね！ 私と竜伊紅也とは何もなくて……」

カミューラ、再び失言。

「カミューラさんが、名前呼び……！」

「やはり噂は本当だったのか!!」

「カミューラちゃんに近づく男が居ると!!」

「ゲツ」

導火線に火が付いたらしく、怒りの感情が高まる3人。興奮状態になりながらゆっくりと距離を詰めてくる。

「ちよつと、ちよつと！ 何余計なこと言ってるんですか!」

「し、仕方ないじゃない！ 咄嗟に出たんだから!」

「だからポンコツなんですよ！ ドジ！ マヌケ!」

「う、うるさいうるさい!! 元はと言えばアンタが私に意地悪するからでしょ！ 責任取りなさいよ!」

「だからそういうのが誤解を招くんだって!!」

言い争う紅也とカミューラだが、そんなやり取りが火に油を注いでいることに気付かない。購買部でしか拝めない女神、話すことが出来ない天使、視線を合わせることが出来ない天女。紅也がそれを聞けば鼻で笑うだろうが、彼らにとってはそれが事実。嫉妬の感情に支配されても仕方のないことであった。

更に相手が竜伊紅也であることもよろしくない。

「き、貴様……！俺達のアイドルであるカミューラちゃんもそんなにも仲良くしやがって……！」

「学園祭ではあの天上院明日香と一緒に居た目撃情報すらあるというのに!!」

「美女2人と親密とは良いご身分だなあつ!!」

怒りが頂点に達したのか、デュエルディスクを展開する3人。今にも殴りかかってきそうな雰囲気だ。

「勝負だつ！ 竜伊紅也つ!!」

ついに飛び出した勝負発言に冷や汗を流す紅也。急いでいる身としてはデュエルなんてしている暇はない。それも3人となれば余計にだ。どうにかして冷静になつてもらおうと努力するが、結果は焼石に水だった。

「だ、だから誤解で……ん？ なんですか？ カミューラさん」

「諦めなさい、もう無理よ」

「誰のせいだと思つてんだ！」

「急いでるなら潰して行きなさい。その方が早いわ」

「だから誰のせいだと思つてんだ!! ……それに今はデュエルディスク持つてないし」

「私のを貸してあげる。はい」

最早取り繕うのも疲れたのか、カミューラが投げやりな態度で紅也へデュエルを受けるように促す。自身の腕に付けていたデュエルディスクを手渡すと、さつきまで座っていたベンチへと戻り、優雅な動作で腰を落とした。

「頑張つて〜♡」

「〜っ!! 覚えてろよ!!」

潔く諦め、デュエルディスクを装着した紅也。ケースから取り出したデッキをセットし、展開を完了する。

「遊城十代に少し遅れるってメール入れといってくださいー!」

「うおっと。はいはい」

端末をカミューラへ投げ渡し、手短に要件を伝える。カミューラも

素直に従うようで、一応申し訳ないという気持ちが無い訳ではないよ  
うだ。

「悪いけど急いでるんで！」

「生意気なっ！」

「我らの怒りを受けろ！」

「この女たらしクソ野郎っ!!」

「誰がだっ！——お前から『黒炎弾』を喰らわせてやるからなッ!!」

まったりとした休憩から一変。紅也は急いで呼び出し場所へ駆け  
つけるべく、相棒の力を思う存分に奮った。

く触れられた逆鱗く

「……ハア……ハア……!!」

疲労した身体にムチを打ち、紅也は足場の悪い森の中を走っていた。ただでさえ目的地である海沿いはアカデミアから遠いというのに、3人の男子生徒とのデュエルで余計な時間を消費。そのため、こうして息を切らせながら必死になっているという訳だ。

（あーもう、なんなんだ。万丈目が七精門の鍵を持ち出したってだけで意味分からののに。……カミューラさんめ、覚えてろよ）

後ろで観戦していたカミューラから憐れみのような目を向けられていたことも、紅也にとって腹立たしいことの一つだ。今度トマトジューズに偽装した激辛ジューズでも喰らわせてやろうと心に決めた。

体力を削り続けた甲斐もあり、もうすぐ森を抜ける。数分前には島全体を揺らす程の地鳴りも発生し、空は厚い雲に覆われ出した。この辺の記憶は曖昧だが、良いことが起きようとしている予兆でもないだろう。最悪の事態を想定しつつ、紅也は踏ん張りながら足を動かした。

「……出た」

鬱蒼と生い茂る木々の迷宮を抜けると、潮の香りが鼻をくすぐる。視界に広がる青い海も、急激に曇り出した天気のせいで台無しだ。

ドツと押し寄せてきた疲労から、膝に手を突いて呼吸を繰り返す紅也。汗を拭いながら辺りを見回すと、砂浜に立つ1人の女子を発見した。

「……天上院」

「紅也くん！」

脇腹を押さえている情けない男に駆け寄る明日香。どうやら十代から紅也が来ることを聞かされ、待つていてくれたようだ。

「ハアハア……ちよ、ちよっと待って」  
「え、ええ」

デュエルで3人を同時に相手した後には1km以上の猛ダッシュ。しかも何故か急げ急げと時折背中をつつくレッドアイズ。紅也の脳は酸素が足りず、機能停止寸前だった。

「……ハア。よし、落ち着いてきた」  
「だ、大丈夫？」

「色々アクシデントでな。『黒炎弾』してきたから大丈夫」  
「……そ、そうなの」

「それで……何があった？」

深呼吸を繰り返して、ようやく息が整った紅也。身体を襲う疲労が消えた訳ではないが、話が出来る程度には回復した。

「万丈目くんと私がデュエルしたことは聞いた？」

「ああ、十代からな。勝ったんだろ？」

「えっ……どうして分かったの？」

「いつもデツキの話し合っているからな。天上院の強さは俺が一番知ってるつもりだ」

「そ、そう……」

嬉しさのあまり表情が緩みそうになる明日香。しかし今はそんな場合ではないと引き締め、状況の説明を続けた。

簡潔にまとめた万丈目とのデュエル内容。恥ずかしさが勝ったので、デュエルの発端となった万丈目の自身に対する恋心などは口にしなかったが。

「……万丈目のやつ、また頭のおかしいデツキを回してたもんだな。どうなってんだよ、わざわざ自分の魔法を相手に送りつけて『ハリケーン』で手札に戻させるって。普通は事故るだろ」

「流石だったわ。楽に勝てた訳じゃないもの」

「………見たかったなあ」

「どうしたの？」

「いや、何でもなし。……それでデュエルの後、輝き出した七精門の鍵に引つ張られて万丈目が走り出していったと」



「ええ、あの方角にね」

明日香の説明と指差す方向を見て、状況を理解した紅也。視線の先に広がっているのは地面から飛び出した七本の石柱という異様な光景。土煙も巻き上がっていることから、既に何かが起こっているのは間違いない。

「……行くか」

「そうね」

万丈目を追いかけていった十代達に合流するべく、紅也と明日香が走り出す。紅也は満足な休憩もなく足を酷使しさせているので、少し震え気味だ。しかし今は泣き言を言っている余裕もない。動揺が大きくなるにつれて、紅也の速度は増していった。

紅也と明日香が飛び込んだ森を抜けると、強い衝撃で出来たような土のみが存在する広場へと出た。息を切らせながら周囲を確認、十代達の姿が見えることから無事に合流出来たようだ。事の発端である万丈目はもちろんとして、鍵の守り人であった三沢や亮も立っている。

「……十代!」

「紅也!」

「間に合った……訳じゃないか」

広場の中心を見て、持っている記憶と場面が完全に一致した紅也。光に包まれる3枚のカード、側にはスーパーテクノロジーメカ。そんなハイテク機械の中には呼吸器をつけた白髪の老人。これだけの状況が揃っていれば、ラストバトル前であることは一目瞭然だった。

間違いなく——三幻魔が復活した。

「万丈目！　なんで鍵を持ち出した!？」

「そ、それは……すまん」

強気に万丈目を叱りつける紅也だが、意外に申し訳なさそうな顔をされ困ってしまう。デュエルが見られなかった苛立ちもあるが、済んでしまったことは仕方ないと気持ちを切り替える。

「紅也！　アイツが”セブンスターズ”の親玉だ！」

「……だろうな。あの人だけ世界観違い過ぎるし」

十代の叫びに対して、少し困惑気味に頷いた紅也。蜘蛛を連想させる細い足で1人の人間が入った容器を支えている。まるでSF映画にでも出てきそうだという感想を抱きながら、紅也は異様なプレッシャーに思わず目を奪われた。

「このデュエルアカデミアの理事長——影丸。彼はそう名乗った」

どうやって動いてんだよ、と紅也が機械へツツコミたくなるのを我慢していると、いつの間にか隣へ来ていた三沢が補足説明をした。

「三沢。……えっ、あれが理事長？」

「そうらしい。このデュエルアカデミアは元々、三幻魔のために設立されたものだったともな。……俺達はまんまと利用された訳だ」

「……そうか」

握り締めた拳を震わせる三沢。

アカデミアへの思いが強い男であるが故に、影丸の発言は到底許容出来るものではなかったようだ。

紅也が友人の心境を察していると、ウィーンという王道の機械音を響かせて影丸が動いた。

『ふっふっふ、そう悲観することはない。お前達が”セブンスターズ”と激しいデュエルをし、デュエリストの闘志を充満させてくれたお陰で——こうして三幻魔が完全に復活するのだからな』

「あっ！　三幻魔のカードがっ！　やめろ！」

十代の制止が届く訳もなく、影丸は機械から飛び出したアームで三幻魔のカードを手にした。そのまま精密な動きで3枚のカードをデュエルデスクへと取り込み、起動まで完了させた。

「……よく出来てるなあ」

「影丸！ 三幻魔のカードを返せっ!!」

全く異なる反応を見せる紅也と十代。やはり紅也に主人公になれる器などないらしく、ただ単に影丸の生命維持装置のような機械の技術に感心していた。

『返せだど？ 無理な相談だな。三幻魔は最早……私の手駒だ』

周りを取り囲む七本の石柱から青白い電撃が走る。空を支配する黒い雲は渦を巻き、この世の終わりのような雰囲気は漂い出した。

『さあ、最後の仕上げだ。——私とデュエルをしてもらおうか』

「望むところだ！ 俺が相手になるぜ！」

流石は主人公。臆することなく真っ先に声を上げた十代。そんな彼に続くように、紅也以外のデュエリスト達もプライドを懸けて意思を示す。

「いや、俺が相手だ。この《オベリスクブルー》の帝王・丸藤亮が！」

「いや、このデュエルはこの……一・十・百・千——万丈目サンダーに任せてもらおう!!」

「いや、三幻魔の相手はこの三沢大地がする！ 俺達を餌としてしか見ていない老人に、俺の勝利の方程式を叩き込んでやるっ!!」

次々と雄叫びを上げる者達。高まる闘志を瞳に宿し、己の信じるデュッキをデュエルデスクへとセットした。

そんな盛り上がる様子を他人事のように見ている紅也。お前もいけと言わんばかりに頭をつつくレッドアイズを無視しながら、傍観者でいることに徹底している。当然、参戦するつもりがないからだ。

(……いよいよか。最後だな)

無抵抗に頭をつつかれながら、紅也が腕を組んで思考する。初めのボスである三幻魔との対決は“セブンスターズ”編の終わりを意味するのだ。

(頑張れよ。……十代)

本来であればダークネスもカミュラも十代が倒していた相手。理由があったとは言え、紅也がそれを横取りしたことに変わりはない。遊城十代が得る筈であった経験値を奪ってしまったことに、紅也は陰ながら申し訳なさを感じていた。だからこそ最近では明日香と同

じく十代のデツキ強化や相談などにも乗るよう努力している。

『グルウウウ』

『ちよ、ちよつと落ち着いて』

非常に不機嫌そうな声を溢すレッドアイズを宥める。どうやら頑なに動こうとしない紅也に痺れを切らし、身体を乗っ取ろうか悩んでいるらしい。

『……グルウオ?』

軽く身体のコントロールでも奪おうとしたのか、レッドアイズが動いた。しかし予想に反し、紅也の身体に入り込むことは出来なかった。

弾かれたように紅也の隣へ放り出され、薄く精霊化したまま不思議そうに首を傾げている。

『悪いな、相棒。俺だつてやられつばなしじゃない。もうコツは掴んだぞ』

『……グルウ』

これまで何度も好き勝手にやられた結果、紅也の精霊の力に対しての理解度が上昇。乗っ取りに対抗するためのコツを掴み、レッドアイズの暴走を押さえ込むことに成功した。両者の力関係に優劣が無いからこそ出来る技だ。

プイツと顔を逸らし、拗ねたように唸るレッドアイズ。紅也に活躍して欲しいという相棒心が叶うことはなく、静かにカードへと戻っていった。

(ごめんな。レッドアイズ)

デツキケースに手を当て、苦笑い気味に謝罪する紅也。レッドアイズの気持ちや伝わっている分、余計に罪悪感が込み上げる。だがここは転生者が出しゃばる場面ではない。主人公がバシツと決める最終決戦なのだから。

(……大徳寺先生も、見てるかな)

十代と戦い、姿を消したアムナエルこと大徳寺。十代の可能性に懸けて自身の力を残していったと紅也は記憶している。あのアニメでしか許されない笑える程のインチキカードを。

所属している寮も違えば錬金術の授業も取っていないなかったので、紅也は大徳寺との関わり自体がそこまでない。三沢とのデュエルで使ったかった『F・G・D』を譲ってもらったために3日間こき使われたぐらいのものだ。

紅也が空を見上げながら苦い記憶を呼び起こしていると、全ての元凶である影丸がゆつくりと口を開いた。

『……ダメだ。私の相手はお前達ではない。私の相手はデュエルモンスターズの精霊を操る最も強き力を秘めたデュエリスト。その者を倒し、精霊を操る力を奪い取ること、三幻魔を完全に支配することが出来るのだ』

身体に数多くのチューブが繋がれているとは思えない迫力のある声音で、影丸が重々しく告げる。そしてその発言に納得する紅也。やはり相手は十代であると確信し、内心で安堵した。これで物語は知識通りに進む、原作知識という自分しか持っていないアドバンテージは無事に保たれる。

——そう、思っていた。

雷が轟く中で、影丸が指名したデュエリスト。それは紅也が全く想定していなかった人物だった。

『私の相手はお前だ。——竜伊紅也!!』

「……………はっ?」

紅也の時間が止まる。何を言われたか理解出来ない頭は停止し、口からは空気にも似た声が溢れた。影丸の発言を聞いていた者達も紅也へ視線を向け、動揺が伝染し始めた。

「こ、紅也が…………?」

「馬鹿な…………。アイツも俺達と同じ力を?」

すぐに疑問を態度や口に出したのは十代と万丈目。紅也と同じく精霊を視ることが出来る彼らだからこそ、影丸の言葉の意味を瞬時に理解した。

「待て! 紅也はもう関係ない! 訳の分からないことを言い出したと思えば…………俺が相手すると言っているだろう!」

「そうよ! 紅也くんはもう危険なデュエルをする必要はないの!

どうしても言うなら私が相手をしてあげるわ!!」

影丸の言葉よりも指名された相手を庇うため、三沢と明日香が叫ぶ。闇のデュエルで受けたダメージが回復しているとは言え、寝たきりだった紅也を知っている2人にとって紅也が影丸と戦うことは認められることではなかった。

いきなり話題の中心に引つ張り出された紅也。腕を組んだまま冷静な顔をしているが――めっちゃくちや焦っていた。

(ええええええええええっ?!?!?)

その動揺っぷりはレツドアイズも少し同情してしまう程であり、身体からは嫌な汗がどんどん噴き出していた。

ずつと隠し続けてきた精霊の力を暴露されたこともあるが、それ以上デュエルの相手に選ばれたことが動揺の大半を占める。原作知識が守られたなどと安堵していたところにこれだ、動揺するなという方が無理な話だろう。

紅也の荒ぶる感情に反応したのか、懐に入れていた前世のデッキが震え出した。更には首から掛けたカードケースに入っているヤベエやつまでもがカタカタと自身の存在をアピールしており、1人の人間が背負うには重過ぎる力が暴れ出そうとしていた。

「あつ、いや……その、あの」

口が上手く働かず、言葉が出せない紅也。まずこの状況で自分が最初に何をすれば良いのかすら分からない。精霊のことを黙っていた十代に謝るべきか。自分には無理だと十代に泣きつくか。情けない声を上げながら背を向けて逃げ出すか。

「――ッ!! やっぱり俺が相手だ! 影丸ッ!」

「……十代」

顔面蒼白の紅也を見たからか、十代が再び前へ出る。事情は知らないが友達が困っている、十代が動くにはそれだけで十分だった。

頼もしい背中を見て、紅也が落ち着きを取り戻す。改めて主人公の偉大さを知りながら、情けなくも安心したのだ。

「……紅也くん、大丈夫?」

「あ、ああ。大丈夫。ありがとう」

噴き出した汗をハンカチで拭き取りながら、明日香が心配そうな顔をして紅也へ声をかける。三沢も亮も紅也の前に移動し、影丸から守るように立っている。

『フン、情けない。お前はその程度のデュエリストか。竜伊紅也』

転生してから何度されたか分からない煽りを受け、紅也がため息を溢す。それと同時に実体化して飛び出してきたレッドアイズを慣れた手つきで制止する。名高い黒竜だというのに、やっていることは短気な犬と大差ない。

「おおく！ すっげえっ！ 本当にレッドアイズだ!!」

流石に隠しきれず、十代にレッドアイズを視認される。有名モンスターの精霊を生で見ることが出来たからか、普段の無邪気さが爆発している。同じく見ていた万丈目は自身のデツキに宿る精霊との格差に肩を落とした。

『やはり素晴らしい。手駒の精霊を実体化させるとはな』

「……手駒じゃない。アンタと一緒にするな」

少しイラツとしたように紅也が言葉を返す。運命共同体である相棒に対し、手駒などという単語が使われたことが気に食わなかったようだ。

『さあ、私と戦え。お前を倒し、私がその力を有意義に使ってやろう』

「……断る。アンタを倒すのは俺じゃない。十代だ」

「おう！ やってやるぜっ！」

拳を突き出し、やる気満々の十代。

影丸は少し目を細めると、紅也へ視線を向けたまま見下すように言葉を放った。

『やはりお前はその程度か……』レッドアイズ・ブラックドラゴン『真紅眼の黒竜』などという——弱小モンスターを使っているようではな』

再び、紅也が停止した。

流れ出していた汗はピタリと止まり、白くなっていた顔に血が巡り始める。何を言われたのか理解するのに数秒かけていると、影丸は更

なる追撃を実行した。

『何を驚いておる？ 当然のことだろう？ 生贄を2体要求する上級モンスターであるにも関わらず、攻撃力はたったの2400。貧弱と言う他ないだろう？』

語られたのは——『レッドアイズ・ブラックドラゴン真紅眼の黒竜』への侮辱だった。

『ステータスが貧弱かと思えば効果も無い通常モンスター。サポートカードがなければ何の役にも立たない紙クズ同然だ。フハハ、こんなものを伝説のレアカードなどと呼べるものか』

遠慮もなく、配慮もない。

ただの言葉の暴力が紅也へ襲いかかる。

『精霊としての力は強いようだが、モンスターとしては雑魚以外の何者でもない。そんなモンスターをエースとしているデュエリストなど、所詮はお前のように情けないものだ。少しは三幻魔を見習ったらどうだ？ ……ああ、すまない。三幻魔とトカゲ如きを比べては失礼だったかな。フフフ、フハハハハッ!!!』

——影丸は嗤わらった。

デュエリストとしての誇りをこれ以上ない程に傷付け、手にした強大な力に思う存分酔いしれた。

「て、てめえっ!! 謝れッ!!」

「十代の言う通りだ。聞き捨てならん」

「貴方のような人に……!」

眉間に皺を寄せながら激昂する十代と三沢。彼らの温厚な性格からは考えられないような顔をしている。

そんな2人と同じく、明日香も激情に身を任せて影丸へ言い返そうとした。隣に立っている紅也に——肩へ手を置かれなければ。

「……紅也くん?」

明日香の剥き出しの肩に触れる紅也の手。そこから伝わる熱は尋常ではなく、炎でもぶつけられているのかと錯覚する程だった。すぐに手が退けられたため何ともなかったが、そのまま乗せられていれば火傷すらしたかもしれないと思う熱量だ。

恐ろしいまでに静かな紅也。様子を確かめた明日香は初めて、竜伊



紅也という人間に”恐怖”の感情を抱いた。

「こ、紅也……くん」

「悪い、天上院。熱かったな」

「へ、平気だけど……紅也くん。……その眼」

明日香の言葉を遮るように、紅也が手を顔の前に出す。明日香の視界には普段と変わらない優しい表情が映り、少し冷静さが戻る。そんな彼女の様子を察してか、紅也は懐から漆黒のデツキケースを取り出すと静かに口を開いた。

「天上院……いや、明日香」

「……は、はい」

初めて名前を呼ばれ、明日香が息を呑む。これまでの紅也からは考えられないようなプレッシャーを肌で感じ取り、緊張が明日香の身体を硬直させた。

吸い込まれそうな魅力を放つ——真紅に染まった眼のまま、紅也は強い覚悟と共に一言だけ言葉を落とした。

「——デュエルディスクを……貸してくれ」

## く三幻魔降臨く

人は怒りが限界突破すると、視界が紅く染まるらしい。そんなアホな考えが浮かんでしまう程に、竜伊紅也の頭は冷静さに満ちていた。明らかに身体の熱が上がっていることを感じ、躊躇なく制服を脱ぎ捨てる。

長袖の黒シャツとなった紅也。戸惑いを隠せていない明日香から受け取った青色のデュエルディスクを腕へ装着すると、ケースから取り出したデツキをセツトした。

「ありがとう。明日香」

「……え、ええ」

まるでレッドアイズを思わせる真紅の瞳。最高級の宝石にも劣らない紅色の輝きは、明日香の視線を縛り付けた。

呆然とする明日香を尻目に、紅也がゆっくりと歩き出す。一歩踏み締める度に空気が震え、それを感じ取った者達にプレッシャーを与えた。

「……悪いな、十代。——アイツは俺がやる」

「お、おう。分かった」

有無を言わせない強気な物言いでも承諾を得る。普段とはかけ離れた異様な雰囲気の中にも、十代も完全に萎縮しているようだ。彼の相棒精霊である『ハネクリボー』も一緒になってビクビクしている。

「お望み通り……相手してやる」

『フッフッフ、そうこなくてはな』

紅也を知る者達はその豹変ぶりに驚愕しているが、影丸は今日が初対面。自身の挑発が見事に刺さり、怒らせることに成功したのだと信じて疑わなかった。実際、怒る程度の騒ぎではないことにも気付かずに。

「……みんな。頼みがある」

影丸から視線は外さずに、紅也は十代達に背を向けたまま語り出す。

「アイツは俺達が必ず倒す。……だからアカデミアに戻ってて欲しい」

頼みという割には決定事項を告げるかのような口調。やはりらしいくない態度の紅也に、全員が動揺する。ただ一人、影丸を除いて。

『そうはいかな。お前の力を頂いた後は遊城十代だ』

紅也が最大の狙いというだけで、十代がターゲットから外れているという訳でもないらしい。精霊の力を操るデュエリストなど世界中探してもそう数は居ない。三幻魔を支配下に置くためのレアな道具として、逃すつもりはないようだ。

『こうすれば……逃げられんדרוּ?』

紅也の言葉通りになることを防ぐため、影丸が動く。周りを取り囲む七本の石柱からエネルギーを放出させ、広場全体を覆う巨大なドーム型の障壁を作り出した。三幻魔を手にしたことで、影丸にもある程度の力は既に使用可能となっていた。

バチバチと雷が走る障壁、触れば感電することは間違いない。影丸の思惑通り、全員が逃げられない状況になった。

——竜伊紅也が居なければ。

「……レッドアイズ」

『グルオオオオオオッ!!!』

障壁を見上げながらされた紅也の呼びかけに、実体化したままのレッドアイズが応じる。弾かれたように動き出すと口に灼熱の黒炎を集中させ、天へ向けて勢いよく撃ち放った。

黒炎が障壁に着弾すると同時に激しい轟音と閃光が辺りを襲う。影丸だけでなく十代達までもが手で顔を守る程の衝撃が収まると、目を開けた者達の視界に飛び込んできたのは光の粒子に姿を変えた障壁の残骸だけだった。

「……さあ、早く」

消えていく光の粒子を横目で確認しながら、紅也が十代達へ動くよう促す。まるで飴細工のように軽々と破壊された障壁を見て、十代達

が固まってしまうていたからだ。

「で、でもよ……紅也一人に任せるなんて」

「十代。紅也の言う通りにしよう」

「……三沢」

紅也へ全て任せることに躊躇いを見せた十代。そんな彼の肩に手を置き、三沢が口を開いた。

「俺達は知っているだろう？ ——紅也の強さを」

親友と呼べる間柄だからこそ、三沢は紅也を信じた。なによりあそこまで紅也が怒りを露わにしたのは初めてのことで、本気を感じ取ったからこそ任せる判断をしたのだ。

「三沢くんの言う通りね」

「明日香まで……心配じゃないのか？」

「ええ、全く」

紅也が脱ぎ捨てた《ライイエロー》の制服を拾いながら、明日香が三沢に同意する。先程までの動揺はどこかへ消え去り、顔には朗らかな笑みだけが浮かんでいた。

「……分かった。全部紅也に任せる」

真剣な表情で頷く十代。紅也へ駆け寄ると、一枚のカードを手渡した。

「紅也。これは大徳寺先生が俺に託してくれたカードだ。きっと役に立ってくれる」

「……十代」

「絶対勝てよなっ！」

人懐っこい笑顔をして指で鼻を擦る十代。紅也は信頼して任せてくれたことに感謝しながら、1つ謝罪をした。

「……精霊が視えること、黙ってて悪かった」

「へへっ、気にすんなよ。友達だろ？」

「……ありがとう」

「おう！ 全力でぶっ飛ばしてやれっ!!」

グツと拳を紅也へ突き出した後、十代は明日香達と共にアカデミアへと戻っていった。それを優しい表情で見送ると、紅也は意識を切り

替える。鋭い眼で影丸の方へと振り返り、とても冷たい声音で言葉を放った。

「……随分と大人しく見逃したな」

『フツフツ、お前の力が想像以上だと分かったからな。お前の力さえ奪い取れば、遊城十代の力は必要無い』

上機嫌に語る影丸。自身の置かれている状況が全く理解出来ていないようで、自らが奪い取る側であると少しも疑っていない。

『それにしても優しいことだな。友を巻き込まぬために1人を選ぶとは。自己犠牲の精神に免じて時間を掛けずに葬ってやろう』

そんな影丸の言葉に紅也が眼を細める。放つプレッシャーが増大すると、呆れたように返答した。

「……巻き込まないため？ 違うな。みんなに離れてもらったのは――デュエルを見られたくなかったからだ」

そう言い終わると同時に1枚のカードを自身の真上に勢いよく放り投げる紅也。十代に手渡されたカードであり、大徳寺の残した最後の力でもある。しかしそんな最後の切り札は――レッドアイズの黒炎によって灰すら残らず完全消滅した。

消えたカード、『賢者の石ーサバティエル』。

究極の錬金術師にしか使えないとされる魔法カードなだけあり、その性能は破格。アニメ効果のままOCG化など出来る訳もなく、大幅な弱体化からは逃げられなかった。

本来このカードは十代と共に三幻魔を打ち破る役割を持っている。そのため、この場面で必ず消滅していなければならぬカードだ。残しておけば後の方でどんな影響を及ぼすか分からない。万が一、敵に悪用でもされたなら手が付けられない程の脅威となってしまう。

(……すみません。大徳寺先生)

紅也は独自の判断で燃やしたことを天に向かって謝罪する。いつもヘラヘラした顔の教師が怒る様子は想像出来ないが、罰として猫の世話を押し付けられそうではあるなど、紅也は少し困ったように口元を緩めた。

『……何の真似だ?』

「お前が知る必要はない」

『……フン。その威勢、どこまで続くかな』

長い時間を過ごした大徳寺のカードを目の前で焼き払われ、流石に影丸にも思うところはあったようだ。

紅也は影丸にもそんな人間らしきがあつたのかと内心馬鹿にしなから、僅かに残った冷静な部分で気になっていたことを乱暴な口調で訊ねた。

「——1つ教えろ。どうして俺に精霊の力があると知っていた？」

この世界に来てから紅也は細心の注意を払って精霊関連の力を隠し続けてきた。それこそ、同じ力を持つ十代だろうと、親友の三沢だろうと、よく関わる明日香だろうと例外はない。情報を知る術などある筈がないのだ。

『フッフッフ。知りたくないか、ならば教えてやろう。お前がたつた今燃やしたカードの持ち主——大徳寺が教えてくれたのだ』

「……大徳寺先生が？」

『アレも私の手駒、当然だろう？ ……竜伊紅也。大徳寺からの報告でお前がダークネスとカミュラを倒したことは知っている。その際に、強い精霊の力を使用していたこともな。だからこそお前に対する警戒度は最大だ。油断すればすぐに終わるぞ？』

「……なるほど。聞きたかったことはそれだけだ。——そろそろ始めようか」

両者の意思が高まるにつれて、強風が吹き荒れ、空は荒ぶる。三幻魔とレッドアイズ、2つの力が本格的にぶつかり始めたのだ。

(やるぞ、相棒)

『グルウウウウ』

普段使用しているデッキに入れていた数枚のカード、そしてエースである『真紅眼の黒竜』を取り出し、デュエルディスクにセットしているデッキへと投入。40枚の完全状態になったマイデッキと共に、EXデッキの方も元通りであることを確認。久しぶりに本来のデッキで戦える高揚感に満たされながら、紅也は影丸に向けて腕を突き出した。



「さあ、その手札<sup>可能性</sup>とやらを捨て去るがいい！ その後、捨てた分だけ互いにデッキからドロ―する」

「……」

影丸は4枚、紅也は5枚の手札を捨て、ドロ―を強要される。可能性を潰せたと影丸は高笑いを上げるが、紅也はそんな彼に対しても無表情で反応を見せず、ただ捨てなければならぬ手札をジツと見た。

・『真紅眼の黒竜』

・『レッドアイズ・インサイト』

・『黒炎弾』

・『連続魔法』

・『灰流うらら』

最早懐かしさすら感じながら、手札を墓地へ送る。デッキのやる気具合がとんでもないことになっていると分かり、紅也は少々苦笑いした。

『絶望はまだこれからだ。セットしていた魔法カード『おろかな埋葬』。デッキからモンスター1体を選択し、墓地へ送る。私が選択するのは……『幻魔皇ラビエル』！』

「幻魔を……墓地に？」

三幻魔の共通点としては、召喚条件の重さが挙げられる。それぞれに決められた召喚方法が備わっており、それ以外の方法では召喚することが出来ないという制約が存在する。そのため墓地へ送ったとしても『死者蘇生』や『リビングデッドの呼び声』で蘇らせることは不可能だ。

『安心しろ。先程言ったように、私はお前が危険であることを知っている。お前に勝つためには……それ相応の準備が必要であることもな』

「準備だと……？」

「すぐに見せてやろう……我が三幻魔をな。——魔法カード『死者蘇生』！」

首を傾げる紅也。そのカードでは蘇生させられないと考えたばかり、影丸が何をしようとしているのか理解出来なかった。



紅也の表情から察したのか、影丸が愉快そうに笑う。

『フッフッフ、これがお前を倒すための準備というやつだ。……金はかかったがな。——私は墓地より『暗黒の召喚神』を特殊召喚するツ!!』

現れたのは暗黒と称されるに相応しい風貌をした悪魔。禍々しい黒色の身体に背中からは翼を生やしている。

『暗黒の召喚神』 ATK/0 DEF/0

『暗黒の召喚神』? なんでそれを持って……』

三幻魔専用のサポートモンスターとして、OCGでは三幻魔デッキに必ず投入されていたモンスターだ。しかし、アニメに登場したという記憶がない紅也にとっては疑問が深まっただけだった。

先攻を取られたので普通に三幻魔の内の一体でも出されるのかと予想していたが、出てきたのは予想外の『暗黒の召喚神』。自身の記憶が正しければこのタイミングで出しても意味がない筈だと、紅也は影丸へ鋭い視線を向けた。

(……何をやる気だ?)

身構える紅也に気を良くしながら、影丸が手を振り上げた。

『これで全ての条件は整った! よく見ておけッ! これが世界を統べる力! ——三幻魔の姿だッ!!』

島全体を地鳴りが襲い、周りを囲んでいる海は激流を作り出した。巨大なエネルギーが渦を巻き、全ての状況を悪い方へと変え始めたのだ。

『私は『暗黒の召喚神』の効果発動! 表側表示のこのカードを生贄に捧げることで、墓地に存在する『神炎皇ウリア』『降雷皇ハモン』『幻魔皇ラビエル』を——全ての召喚条件を無視して特殊召喚することが出来るッ!!』

「……………はあ」

呆れて言葉が出ない紅也。三幻魔を拜んでやろうとは思っていたが、こんな方法で目の前に現れるとは考えてもいなかった。

(『ウリア』と『ハモン』は最初の『手札抹殺』で墓地送りしてたか。それにしても……俺が知ってる『召喚神』と効果が違う。アニメ効果か

？ それに加えて蘇生制限無視……いや、そもそもアニメ次元だと蘇生制限が無かったっけ？)

アニメ効果のカードが存在していること自体はこれまでのデュエルで理解している。十代の『バブルマン』に始まりテニス部長といったアニオリまみれの男まで居る世界だ。今更紅也にも驚きはなかった。効果のぶっ飛び具合には驚かされたが。

そして蘇生制限の無視——否、存在が消えている。

本来、召喚条件を無視したところでモンスターを蘇らせる際には”蘇生制限”という言葉が出てくる場合がある。正規の召喚方法以外で召喚していないモンスターは墓地から蘇生させられないといったルールだ。

召喚条件を無視すれば三幻魔と言えど蘇生させることは出来る。しかし、それは正規の召喚方法で召喚した後に墓地へ送られた場合のみ。今回の場合、三幻魔は『手札抹殺』と『おろかな埋葬』を使用して墓地へ送られているため、OCG次元では適用外となる筈だ。

(それでも召喚可能とされてるってことは……蘇生制限無しで確定か。やりたい放題だな)

『フハハハハ！ 恐怖で声も出んようだな!!』

(……まあ、間違っではないけど)

大半が呆れの感情に満ちる紅也だったが、僅かばかり安堵した気持ちもある。何故ならば今使用しているのは前世で使用していた本気も本気のガチデッキ。紅也がずっと使うのを躊躇い続けてきたチートのようなデッキなのだ。

(……これならまあ、いいか)

しかし相手はアニメ効果使い。この調子なら三幻魔の効果も当然アニメ仕様だろう。前世のデッキを使用しても問題はないと、紅也は都合良く決めつけることにした。

紅也が場違いな考えを巡らせていると、影丸が叫ぶ。『暗黒の召喚神』は生贄に捧げられ、三幻魔降臨の瞬間がやってきた。

『現れるッ！ 第1の幻魔——『神炎皇ウリア』！』

影丸の声に合わせて地面から噴き出した激しい炎の柱。見ている

者に原始的な恐怖を与える炎の中から現れたのは、赤色の身体をした神の炎を司る幻魔だった。

『神炎皇ウリア』 ATK／0 DEF／0

『ウリア』の攻撃力と守備力は墓地に存在する罨カードの数×1000ポイントアップする。私の墓地にある罨カードは1枚、よって数値は1000ポイントとなる』

『神炎皇ウリア』 ATK／0↓ATK／1000 DEF／0↓DEF／1000

「……レッドアイズの攻撃力を馬鹿にしといて、たったの1000か。笑えるな」

『ならばもつと笑わせてやろう。続けて現れろッ！ 第2の幻魔――』

『降雷皇ハモン』!!』

勢いよく振り下ろされた影丸の手に反応するように、空から青い雷が地面へと落ちる。そこから飛び出してきた何本もの氷柱を粉碎し、中から黄色の身体をした雷の幻魔が姿を現した。

『降雷皇ハモン』 ATK／4000 DEF／4000

「……攻撃表示か。舐められたもんだな」

『ほう、『ハモン』の効果を知っておるのか。お前の言う通り『ハモン』には守備表示の時に発動する効果が備わっておる。……だがせっかく呼び出した幻魔を情けない姿にすることなど出来る筈もない。そういうのはお前の相棒とやらにこそ相応しい姿だろう？ フッフッフ』

「……さつさと進めろ」

『言われるまでもない。絶望を宿して現れるがいいッ！ 最後の幻魔――『幻魔皇ラビエル』!!』

次々に集結した闇が形となり、最後の幻魔が降臨した。幻魔の名を冠するだけあり、他の2体を超えるプレッシャーを放っている。

『幻魔皇ラビエル』 ATK／4000 DEF／4000

『……ついに、ついに私は三幻魔を手に入れたッ！ 私のモノだ！ 私の方だ！ フッフ、フハハハハハッ!!』

死にかけの様な見た目とは裏腹に、大声で歓喜する影丸。自身の後

ろに並び立つ三幻魔の強大な力を感じ取り、既に世界すら手中に収めたと錯覚しているようだ。

『三幻魔よッ！ 我が願いに応えろ!!』

影丸が三幻魔へ呼びかけると、幻魔達は声を揃えて絶望の雄叫びを上げた。至る所からゆつくりと集まってくる光の球を吸収し、増幅させたエネルギーを影丸へ向けて放ったのだ。

『うおおおおお。感じるぞ……素晴らしい。これが三幻魔の力!!』

デュエルモンスターズの精霊から生気を奪い取り、己の力へと変換する。三幻魔が世界の破滅をもたらすとされ、封印されることになった禁断の能力だ。その能力を支配することが出来れば影丸の野望である不老不死——永遠の命さえも実現することが出来る。

三幻魔から光を当てられ、生命維持装置の中で変化していく影丸。脆く折れてしまいそうな程の細い腕は筋骨隆々の太い腕へ変わり、白くなっていた髪は毛量の増加と共に漆黒に染め上げられた。

そして、影丸は外へ飛び出した。

「——いい気分だ。……もうこれは要らん」

完全に若さを取り戻した影丸。デュエルディスクを自身の腕へ装着し、用済みとなった生命維持装置を腕力だけで投げ捨てた。

「……すげえ〜」

「見たか、竜伊紅也。これが三幻魔だ」

(いや、あんな重たい物ぶん投げるアンタが凄いや)

急にパワーアップした影丸にドン引きな紅也。リアルファイトならまず間違いなく瞬殺されるだろう。

「絶望は終わらんぞ。フィールド魔法『失樂園』」

(……やっぱあるか)

この時代の幻魔ならば必ず入っているであろうフィールド魔法が発動される。絶望をそのまま形にした様なフィールドが展開され、生命が枯渇した荒廃した大地が広がった。

『失樂園』の効果！ 俺のフィールドに幻魔が存在している時、1ターンに1度デッキからカードを2枚ドロウ出来る!!』

ここはアニメ効果でもなんでもなく、ただのぶっ壊れ。手札消費が

激しい幻魔をサポートするのにこれ以上ない程の手札増強カードだ。

「このドローで手札は4枚。三幻魔を揃えたとは思えん枚数だろう？」

これが完全無欠の幻魔だ。可能性の竜などと呼ばれる名前負けの雑魚とは次元が違うんだよ！」

「……老いたままでも、若くなっても、口の悪さは変わらないんだな」

口では冷静に返しても、紅也の激情は更に高まる。レッドアイズを遙かに超える怒りを燃え上がらせているため、宿っている力が紅也の方へ多く流れている状態だ。

「気に障ったか？　だが俺は事実を言ったまでだ。悔しいなら、レッドアイズの力とやらを見せるんだな」

影丸の全てにムカついていた紅也だが、この言葉に対してだけは素直に領けた。嘲笑を薪として、荒ぶる闘志の炎は激しさを増した。

『暗黒の召喚神』の効果を使用したターン、バトルを行うことは出来ない。だがこちらは先攻、元々攻撃など出来ん。命拾いしたな。——カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

これだけ派手に動いたにも関わらず、手札が2枚残る。『失樂園』がアニメ仕様なので、幻魔への耐性付与効果が無いのがまだマシな部分だ。耐性付与があつたところで、前世パワーでぶち破ることは変わらないのだが。

「……………」

「どうした？　戦意喪失か？　——まあ無理もない、目の前には三幻魔だからな。そんなお前に更なる絶望を与えてやろう」

眼を閉じる紅也を見て、心底愉快そうに煽る影丸。圧倒的な力に心酔し、よく回る口で言葉を続けた。

「三幻魔に共通する耐性として罨カードは通用せず、魔法・モンスター効果は発動ターンのみ有効となる！　ここまでの絶望、そう味わう機会もないだろう？　感謝してくれよ。——フハハハハハッ!!!」

腰に巻いた布だけの、ほぼ全裸の男が高笑い。こんな状況でなかったのなら、即座に通報案件だ。

ゆっくりと眼を開けた紅也。不審者極まりない影丸へ真紅の視線を飛ばし、放つプレッシャーを増大させた。

「……ほう。三幻魔を前にして、まだ折れないか」

「——……折れる？ 何か勘違いしてないか？」

「なんだと？」

「確かに幻魔は強い。『暗黒の召喚神』にも驚かされたし、共通する耐性は強いとしか言いようがない。それだけに終わらずしつかりと伏せカードも用意してる。普通なら諦めて降参する様な場面かもな」

「フン、分かっているじゃないか」

腕を組みながら満足そうな表情を見せる影丸。ちなみに伏せカードは『聖なるバリアミラーフォース』と『サイクロン』。相手に罫を封じさせ、自身は使うことが出来る。まさに理不尽の押し付けだ。

踏み抜いた地雷の大きさ、破壊力、危険度にも気付かずに、影丸は笑みを深めた。

「——でも、それだけだ」

「……何が言いたい？」

「その程度で完全無欠なんて笑えるって話だ。……見せてやるよ、お前が散々馬鹿にした可能性の力を」

デツキトツプに指を置き、構える紅也。

「俺のターン……ドロー」

真紅の眼はそのままに——カードを引いた。

## く最凶の最強く

「可能性の力だと? ……お前は三幻魔を前にしても、まだそんな腑抜けたことを言うのか?」

これ以上無い程の圧倒的な力を見せつけたにも関わらず”大したことない”と一蹴され、影丸は不機嫌そうに紅也を睨みつけた。

「俺のフィールドには3体の幻魔。そしてお前がエースとしている『真紅眼の黒竜』は墓地へ落ちた。ここからこの状況を巻き返せるとでも?」

「当たり前だ。良いものを見せてやるから、若返った視力でよく見てろ」  
既に惨劇のドロローは済ませた。

紅也は6枚となった手札を確認しながら相棒の意図を受け取ると、内心で笑みを浮かべてカードを操った。

「魔法カード『紅玉の宝札』を発動。手札から『真紅眼の黒炎竜』を墓地へ送り、デッキからカードを2枚ドロローする」

「フン、代償を払わなければドロロー出来んとはな」  
「ドロロー」

「お、俺を無視しやがった……!」

プルプルと震える影丸を完全に無視して、紅也は自身のペースで準備を進めていく。そもそも影丸は前世デッキに『強欲な壺』を入れていない紅也に感謝するべきだろう。

「もうドロローは無しだ。この手札で十分過ぎる」

枚数こそ増えていないが、新たなカードは呼び込んだ。満足のいくドロローになったのか、紅也は口端を吊り上げる。『紅玉の宝札』の追加効果は使用せずに1枚のカードを手に取ると、影丸のフィールドへ――  
激しい雷撃が走った。

「うおおおおおオオオッ!! なんだ!? 何が起きたッ!!」

まるで生きているかのような動きで影丸のフィールドを駆け抜け

る雷撃。バリントツという音を3回響かせると、役目を果たしたのか瞬く間に消滅した。

突然のことに状況が理解出来ない影丸。動揺をなんとか押さえ込み、被害の確認へと移った。

「俺の魔法・罫が……全滅している」

意気揚々とセットした2枚の伏せカードだけでなく、辺りに広がっていた『失樂園』までもが破壊された。フィールド魔法が消えたことで、周りの景色は元通りとなっている。

「魔法カード——『ライトニング・ストーム』」

「……なんだ、そのカードは？」

「俺のフィールドに表側表示のカードがない時、相手フィールドの魔法・罫を全て破壊出来る」

『『ライトニング・ストーム』』

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動出来ない。自分フィールドに表側表示のカードが存在しない場合、以下の効果から1つを選択して発動できる。●相手フィールドの攻撃表示モンスターを全て破壊する。●相手フィールドの魔法・罫カードを全て破壊する」

ご丁寧に攻撃表示で並べてくれたので、三幻魔全てを破壊することも出来た。しかし、紅也はそうしなかった。せつかく三幻魔が揃っているのだから、たった1枚の魔法カードで終わらせるには贅沢過ぎる。

「破壊したのは……『ミラーフォース』に『サイクロン』か。道理ですんなり発動したと思った。『マジック・ジャマー』ぐらい伏せとけよ」  
『神炎皇ウリア』 ATK/1000↓ATK/2000

1枚の罫を破壊したことで『ウリア』の攻撃力が1000ポイントアップしたが、紅也は特に気にした様子も見せない。

「そ、その程度でいい気になるなよ！ 三幻魔を撃破した訳ではないんだからな！」

「ああ、そうだな。実際よく3体も揃えたよ。素直に凄いと思う。見逃すことで1体か2体出てくれば良いかって思ってたからさ」



紅也の言葉に食ってかかる影丸だが、その後の発言で冷静さが戻る。幻魔に魅せられた男にとって、絶対的な存在である三幻魔は精神的支柱となっっているようだ。

「フツ、当たり前前だ。このデツキは三幻魔を扱うために最高の調整を………」見逃す”だど?”」

聞き捨てならないといった様子で影丸が聞き返す。まるで幻魔の出現を防げたかのような発言に、思わず間の抜けた声を溢した。

そんな影丸に言葉を返すこともせず、紅也は墓地にある可愛らしいイラストのモンスターを見た。可愛いのは見た目だけで、デュエリスト達にしてきた仕打ちはえげつないものであったが。

影丸が最初に使用した『手札抹殺』を抹殺し、手札事故で詰ませることも出来た。返しのターンで呆気なく焼き尽くすことも出来た。ならば何故それをしなかったか、理由は単純。

「アンタのお陰で……まとめて潰せる」

——真正面から叩き潰す。

紅也が先攻であつたなら、彼は影丸を遠慮なく焼き払っていた。しかし後攻になったのなら話は別だと、紅也は前世のデツキを取り出した時から決めていた。散々相棒を貶された怒りは、それぐらいしなれば晴れることはないのだから。

「魔法カード『復活の福音』。墓地から『真紅眼の黒竜』を特殊召喚する。……来い、レッドアイズ」

『グルオオオオオオオオッ!!』

『真紅眼の黒竜』 ATK/2400 DEF/2000

三幻魔すら威圧する咆哮を上げながら、レッドアイズがフィールドへと現れる。デツキに1枚しか入っていないエースのため、蘇生させる手段は数多く用意されている。

「出て来たか。軟弱なトカゲめ」

「そのトカゲにお前は焼かれるんだよ。幻魔と一緒に……永続魔法『切り裂かれし闇』を発動」

「また見たことのないカードか。小癩な」

先程の『ライトニング・ストーム』に続く見たこともないカード。

腐ってもデュエルアカデミアの理事長である影丸が名前すら聞いたことがない。警戒はするが妨害の手立てもないため、影丸に出来ることはない。ただ不機嫌そうに紅也のプレイングを見るだけだ。

そして次に紅也の口から飛び出した一言に——影丸は驚愕することとなる。

「——バトルだ。レッドアイズで『降雷皇ハモン』に攻撃」

「ッ!? ……フハハハハハッ! 血迷ったか? 『ハモン』の攻撃力は4000、その程度の雑魚じゃ相手にならんぞ!」

影丸の言葉にもお構いなしに攻撃宣言を行った紅也。レッドアイズもそれに従い、口を開けて黒炎を集中し始める。

「馬鹿め。ヤケになったか。……『ハモン』! その雑魚を返り討ちにしろっ! ——”失楽の霹靂”!」

レッドアイズの攻撃を迎え撃つべく、『ハモン』が迎撃態勢に入る。激しい雷を纏う姿は降雷皇の名に相応しい。

「幻魔を相手に臆することなく攻撃したことは褒めてやる。だが現実には残酷だ! 覆せない力の差を教えてやる!」

無意味な攻撃を仕掛けてきたと影丸は紅也を笑った。現実の残酷さを教えられるのが、自分であることも知らずに。

「この瞬間……永続魔法『切り裂かれし闇』の効果を発動」  
「無駄だ。何をしようと結果は——……何?」

そこで異変に気付いた影丸。頼もしい存在である『ハモン』に対してではない。今まさに攻撃を放とうとしているレッドアイズに対しての違和感だ。

集中させている黒炎に見えたのは——雷。

そしてその雷は『ハモン』のものと酷似していた。

「な、何故『ハモン』の雷を……その程度の雑魚が」

「『切り裂かれし闇』の効果。1ターンに1度、自分フィールドに存在するレベル5以上の通常モンスターが相手モンスターとバトルする時、ターン終了まで自分のモンスターの攻撃力を相手モンスターの攻撃力分アップすることが出来る」

「なんだとっ!?!」

『切り裂かれし闇』

このカード名の①②の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用出来ない。①：自分がトークン以外の通常モンスターの召喚・特殊召喚に成功した場合に発動出来る。自分はデッキから1枚ドローする。②：以下のいずれかの自分のモンスターが相手モンスターと戦闘を行う攻撃宣言時に発動出来る。その自分のモンスターの攻撃力はターン終了時まで、その相手モンスターの攻撃力分アップする。●レベル5以上の通常モンスター。●通常モンスターを使用して儀式召喚したモンスター。●通常モンスターを素材として融合・??・??召喚したモンスター

「よって、レッドアイズの攻撃力は『ハモン』の攻撃力分アップ」

『真紅眼の黒竜』 ATK/2400↓ATK/6400

「攻撃力……6400だどっ!?!」

降雷皇の雷を吸収し、巨大化した黒炎に雷が走った。レッドアイズの眼と紅也の眼が同時に紅く輝くと、三幻魔の1柱へ向けて灼熱の1撃が放たれた。

「――黒炎弾」

『グルオオオオオオッ!!』

黒炎雷弾とも呼べる1撃を受け、『ハモン』が焼き尽くされる。見上げるような巨体はすぐに消え去り、低く轟いた断末魔だけが影丸の耳に残った。

「ぐああああアアアッ!!」

影丸 LP4000↓LP1600

身体を襲う大きなダメージに膝を付く影丸。闇のデュエルのため発生したダメージだが、幻魔の力で若返っていなければ耐えることは出来なかっただろう。

「……『ハモン』が……一瞬で」

「まず1体」

淡々と告げる紅也。表情に喜びの感情はなく、ただ当たり前の作業を終えたような様子だ。そんな男に影丸は、僅かばかり恐怖した。

「……だ、だがッ！ これでお前の攻撃は終了した！ 『ハモン』を倒

したことは素直に賞賛してやる……。しかしまだ俺のフィールドには2体の幻魔が残っている。次のターンの総攻撃で——お前は負けるツ!! フハハハ、フハハハハハツ!!」

肩を上下させながら、影丸は荒い呼吸のまま無理な高笑いを上げた。動揺を押し殺せたのは、全て影丸のプライドと執念によるものだった。もう少しで、後一步で、長年の野望が叶うのだから。

そんな影丸を冷たい視線で貫きながら、紅也は非情な言葉を放った。

「——お前に次のターンはない」

影丸の笑い声がピタリと止まる。代わりに額から流れ出てくるのは大量の汗。若返った影響なのか、自分でも驚く程の汗が流れ始めたのだった。

「な、何を……」

”馬鹿なことを”、影丸はそう続けることが出来なかった。

簡単に『ハモン』を破壊されたからだけではない。先程までなんとも思わなかった紅也の眼に——確実に恐怖し始めていた。

流れ出した汗と共に身体は震え出し、手札を持つ手も小刻みに振動している。何か言い返そうとする口も上手くは動かず、開けては閉じてを繰り返すだけだ。

「お前の敗因は3つある」

怯え出した影丸にも表情は変えず、紅也は静かに語り出した。前に出した手で1本ずつ指を立てながら、低い声で現実の残酷さを突き付けた。

「1つ。『ハモン』を守備表示にしなかったこと」

三幻魔の中でも守りに優れている『ハモン』には、守備表示の時に破壊されるとそのターン中にプレイヤーが受ける全てのダメージを0にする効果がある。調子に乗って攻撃表示にしていなければ、少なくとも次のターンは回って来ていたのだ。

「2つ。十代でなく俺を狙ったこと」

これは単なる事実。相手が悪かったという言葉がここまで適用される場合も珍しいだろう。

そして最後の1つをレッドアイズと共に視線を向けて、強い口調で言い放った。

「3つ……俺の相棒を——侮辱したことだ」

真紅の光が線を作り、終わりへの軌跡となる。

紅也は残り3枚となった手札の中から1枚のカードを手にとった。

「魔法カード……『融合』」

それはデュエリストであれば誰しもが知っている極々ありふれた魔法カード。紅也が気に入っているカードということもあり、前世デッキにも1枚だけ投入されている。デメリット無しはそれだけで可能性に繋がるのだ。

そんな平凡な魔法カード。しかし、これこそが影丸と幻魔を絶望させる地獄への片道切符。正真正銘の切り札、最凶の最強を呼び出す1枚だ。

「フィールドのレッドアイズと手札のモンスターを融合させる」

「い、今更融合したところで何が出来るツ!! 何度も言わせるな! お前の攻撃は終わったんだよツ!!」

紅也の言葉に激昂する影丸。追い詰められた感情をぶちまけ、余裕など消え去った表情で叫ぶ。紅也はそんな影丸に対し、更なる追撃を行った。

「融合素材はレッドアイズと……『ブラック・マジシャン』」

「ブラック……マジシャンだと? どうしてお前がそんなモンスターを……? しかも、レッドアイズと融合だと?」

デュエルキング  
決闘王・武藤遊戯が最も信頼したモンスター、『ブラック・マジシャン』。忠実にして最強の僕である黒魔族は伝説のカードとされており、そのレア度は世界的に見ても最上位だ。デュエルアカデミアの生徒が所持している代物ではない。

「そんなこと気にしてる暇はないぞ。さっき言った通り……良いものを見せてやるよ」

フィールドに並び立った黒竜と黒魔族。

2体をエースとしている伝説のデュエリスト、城之内克也と武藤遊戯に合わせてファンが見れば興奮間違いなしの盤面だろう。今から

降臨するのは夢も希望もない絶望の権化なのだが。

『真紅眼の黒竜』と『ブラック・マジシャン』を素材に……融合召喚」  
紅也はEXデッキから飛び出して来た1枚をキャッチし、デュエル  
ディスクへセット。融合モンスターの証である紫色が鮮やかな光を  
放った。

【可能性の赤き竜と伝説の黒魔族が1つになる時、環境世界を破壊した禁  
断の力が目覚める】

轟く雷は激しさを増し、周りの海は更に荒れる。空を覆っていた厚  
い雲が渦を巻くと、その渦の中心へ向けて真紅の光が柱となって出現  
した。

「なんだ、あれは……？」

血の気の引いた顔で空を見上げた影丸。目の前で起こっているこ  
とが何も理解出来ない。それに加えて、絶対的な存在である筈の2体  
の幻魔に異変が見えた。

(幻魔が……震えている)

影丸と同じく空を見上げていた『ウリア』と『ラビエル』。それぞれ  
が強大な力を持つモンスターであるにも関わらず、光の柱を見た途端  
に巨大な身体を震えさせ始めたのだ。

「……何かが降りてくるのか？」

影丸が再び空へ視線を戻すと、視界に映ったのは渦を巻いた雲から  
降りて来た正体不明の影だった。

光の柱の中をゆっくりと降下してくるそれは巨体でもなければ、見  
た者を恐怖させるような異形の風貌でもない。

しかし、影丸は理解した。

あれは——次元の違う存在であることを。

紅也以外の全ての視線を独占しながら、それは静かに降り立った。

『超魔導竜騎士ードラグーン・オブ・レッドアイズ』

黒・金・赤の3色で構成された神々しい鎧。背中から生えている翼は美しく、夜を思わせる漆黒に染まっていた。

手には剣のようにも見える杖を装備しており、淡い真紅の光を全身に纏っている。呼び出した紅也の方を少し見てから微笑むと、すぐに表情を切り替えて影丸と幻魔へ刺すような視線を飛ばした。

『超魔導竜騎士ードラグリーン・オブ・レッドアイズ』 ATK／3000  
DEF／2500

「ドラグリーン・オブ……レッドアイズ？ ……ハ、ハハハ。大層な登場をしたかと思えば、攻撃力はたったの3000。それがお前の言う良いものとはな。拍子抜けだ」

乾いた笑いを溢しながら、影丸にほんの少しだけ余裕が戻る。ステータスが勝敗を大きく左右するこの時代に於いて、攻撃力で上回っているという事実は影丸に安心感を与えた。

「召喚したから何だと言うんだ？ 召喚しただけだ！ 攻撃も出来ないただの置き物だろうがッ!!」

「置き物で十分。……『ドラグリーン』の効果発動。選ぶのは——『神炎皇ウリア』」

「こ、効果だと?」

紅也の言葉に動きを見せた『ドラグリーン』。持っている杖に真紅の魔力を集め出し、ミニ黒炎弾のような小さな炎を作り出した。そのまま生成した炎を『ウリア』へと向け、優しく杖で押し出すように発射。ふわふわと緩やかな速度で真っ直ぐに飛んで行った。

「舐めるなアアアッ!!! 神炎皇に対してその程度の火を放つとはふざけた真似を!! 『ウリア』ッ！ 神の炎を見せてやれ！ ——”ハイパーブレイズ”ッ!」

血管を浮かび上がらせながら吠える影丸。こちらを舐めているとしか思えないお遊びのような火の粉に我慢ならなかったようだ。『ウリア』も影丸の指示に応え、自慢の炎を口から放射。『ドラグリーン』が放った炎と真っ向からぶつかった。

そして——呆気なく勝負がついた。

火力の違いは一目瞭然だったにも関わらず、神の炎はちっけな炎

を全く受け止めることが出来なかった。炎を簡単に押し返された後、『ウリア』は螺旋状に燃え上がった炎で全身を焼き尽くされた。

『ドラグーン』の効果。自分のメインフェイズに相手モンスター1体を選んで破壊することが出来る」

「ウ……『ウリア』までもが」

「これで2体」

恐怖が隠せなくなってきた影丸に、紅也がやはり淡々と告げる。皮肉なことに紅也のその態度があったからこそ、影丸も意地を見せることが出来ていた。憎らしいところへ噛み付くことも出来なければ、影丸は戦意を失っていたかもしれない。

「……見事だ。認めよう」

「何がだ」

「俺が馬鹿にした可能性の力とやらだ。『ハモン』だけでなく『ウリア』まで、我が幻魔を2体も倒したのだ。認めるしかないだろう」

だが、と続け。影丸は覚悟の決めた顔で自らの勝利を宣言した、

『ウリア』には手札の罠を1枚墓地へ送ることで自身を蘇生させる効果を持つている。攻撃力が上昇した状態で、次のターンに俺のフィールドへ戻って来るという訳だ。『ラビエル』と合わせれば、お前のライフを削り切ることも出来る。……よくやった。お前は……いや、お前達は尊敬に値する。最強のデュエリストとして、俺の記憶に刻まれることだろう」

何かしらのイレギュラーで『ウリア』が破壊されることも想定し、手札に罠を残していた影丸。ここまで自身と幻魔を追い詰めた紅也とレッドアイズを讃え、絞り出せる最大級の褒め言葉を送った。

紅也は影丸の言葉に喜びを見せることもなく、残った最後の手札を取ろうとした。しかし意味のないことだと、動きを止めた。

「攻撃は終わった。効果も使った。もうお前に残されているものは無い。潔くターンを回すことだ。せめてもの慈悲で楽に終わらせてやる」

「……………」

「さあ、早くターンを……」



「お前は何を言ってるんだ？」

「……なんだと？」

本気で何を言っているのか分からないという表情で紅也が口を開く。少し呆れの感情も混ぜながら、一言だけ影丸へ叩き付けた。

「言った筈だぞ。——お前に次のターンはないってな」

今度は影丸が頭を困惑させた。確かに先程言われた言葉ではあるが、あまりにも非現実的だ。要するに、自分はこのターンで負けると言われているのだから。

「見苦しい悪あがきは……待て、どういうことだ？」

「何がだ？」

「ふぎけるな……。何故、何故……。——2度目の炎を作り出しているッ!？」

受け入れたくない現実を見せられ、影丸が大きな怒声を上げた。再び魔力を集め始めた『ドラグーン』を指差しながら長く伸びた髪を掻きむしり、体温の上昇と共に全身が赤くなった。

『ウリア』を破壊したことで効果は終了した筈だ！

「そんなことは言っていない」

「どういうことだッ!？」

『ドラグーン』の破壊効果はこのカードの融合素材となった通常モンスターの数まで1ターン中に使用出来る。素材となった通常モンスターは『真紅眼の黒竜』と『ブラック・マジシャン』の2体。よって効果は2回使用可能だ」

「常識的に考えろッ!! そんな効果を連続で使用など許されて良い筈がない!!」

「それは本当にそう」

まさかの影丸に完全同意した紅也。そのことで『ドラグーン』から軽く睨まれるが、完全な事実であると意見を変えることはなかった。

「ま、まさか……。『ラビエル』まで」

影丸は震えた声で『ドラグーン』を見た。対峙している紅也と同じく無表情であり、感情は読み取れない。底知れない恐ろしさが影丸の身体を支配すると同時に——無慈悲な炎は放たれた。

「う、うわああああアアアアッ!! ラ、『ラビエル』ッ! ——”天界蹂躪拳”ッ!!」

枯れそうになる喉を酷使して声を上げた影丸。『ラビエル』はその太い腕を振り上げて死の拳を放ち、小粒としか言いようがない炎を殴りつける。それが幻魔皇の——最初で最後の攻撃となった。

「あ、ああ……。『ラビエル』……」

攻撃によって弾けた炎に包まれ、『ラビエル』は焼き尽くされる。悲鳴すら上げることもなく、地獄の業火によってその姿を灰と化した。

「これで3体。全部だ」

「……」

言葉が出て来ない影丸にも、紅也は態度を変えない。圧倒的な力を見せつけて影丸を見下す訳でもなければ、幻魔を貧弱だと貶したりもしない。ただデュエルをしている、それだけだ。

「……それは何だ?」

ふと気が付いたように呟く影丸。視線の先にあるのは三度目の『ドラグーン』。今度は杖を掲げて、その先端に何かを集中させていた。周囲を確認してみると、それが焼き尽くされた『ラビエル』の灰であることが分かった。

「これ以上……何をやる気なんだ」

「まだアンタのライフは0じゃない。ちゃんとそのデュエルを終わらせないと」

相変わらず無表情に言葉を返す紅也。どこか疲労しているようにも見えるが、影丸へ向けるプレッシャーは少しも変わっていない。

周りに散らばっていた『ラビエル』の灰が杖へ全て集まり終わると、『ドラグーン』は初めて声を上げて杖を高く振り上げた。そしてこれまでとは比べ物にならない程の——巨大な業火球を作り出したのだ。

「……なっ。……は、うあ」

最凶の最強が作り出した光景に、思わず絶句する影丸。自身を焼き殺そうとする業火の中には『ラビエル』の幻影が浮かび上がり、それを見た影丸の恐怖を大幅に増幅させた。

『ドラグーン』の破壊には追加効果がある」



モンスターに対してそこまで考えていたら身が持たないと考えを放棄した。

全身から力が抜けたように倒れている影丸が死んでいないことを確認し、紅也は軽く安堵した。『ドラグーン』の手加減は上手くいったようで、命を取るような結果にはならなかった。あれで手加減したのかと言われれば、紅也も渋い顔をするしかないのだが。

『……』

「……」

三幻魔のカードを再び封印に突っ込んだ後、紅也と『ドラグーン』の間に何とも言えない空気が流れた。デュエルで使用したのも顔を合わせたのも久々のこと、少なくとも紅也には気まずさに似た感情が溢れ出していた。

『……』

そんな紅也を見たからか、表情を柔らかくした『ドラグーン』。基本ベースが『ブラック・マジシャン』なだけあり、流石にイケメンだ。

どこか満足そうな笑みを浮かべた後、『ドラグーン』は紅也に背を向けて静かに消えていった。スタイリッシュなバイバイである。

「……………ありがとな」

含みを持たせた感謝を伝えると、紅也の眼が元に戻る。同時に身体をとんでもない疲労が襲い、紅也はその場で倒れそうになった。

『グルオ』

「おー……サンキュー。レッドアイズ」

地面へ倒れる前に、実体化して紅也を受け止めたレッドアイズ。これまで介護してきた経験から、身体を支える体勢は完璧だ。

「——ッ。……きつつ」

紅也はレッドアイズに補助されながら近くの木まで歩くと、そのまま背中を預けて腰を落とした。何度か深呼吸をして自身を落ち着かせ、違和感が残る眼を押さえた。

「……戻ってる。何だったんだろうな」

『……グルウ』

「俺とお前でオーバーレイ……って、それはないか」

茶化すような紅也の言葉に、口元を緩めるレッドアイズ。どうやら痛みを感じている訳ではないと、相棒心に一安心していた。

「お疲れ」

『グルオ』

紅也は拳を、レッドアイズは爪を差し出し、両者は器用にグータツチ。満足そうな表情で笑い合った。散々馬鹿にされた分を何倍返しにもしたことで、頭を支配していたマグマのような怒りはすっかりと消えていた。

「……俺はもう動けないし、迎えに来てもらうか」

力の入らない腕をどうにか動かし、ポケットから携帯端末を取り出す。誰に連絡を入れようか一瞬考えたが、通話履歴の一番上にあるという理由で十代を選択した。

「……もしも？ 終わつたよ。それで悪いんだけど迎えに来てもらっていいか？ それと校長を呼んで理事長をなんとかしてもらってくれ。……ん、じゃあそういうことで。頼んだ」

十代からの言葉に返答する気力も無く、紅也は用件だけを伝えて通話を終了した。頼み事をする立場で無礼かとも思うが、それ程までに体力が削られているのだ。

「……眠い」

『……グルウオ』

時間にして数秒。先程まで天地を揺るがす戦いを練り広げていた者達とは思えない穏やかな顔で、紅也とレッドアイズは身を寄せ合つて眠りについた。

晴れ始めた雲の隙間から差し込む日の光に——優しく照らされながら。

1年の終わり

紅也が”セブンスターズ”編のラスボスである影丸を前世デツキで叩き潰してから2週間。その間、デュエルアカデミアには平穏な時間が流れていた。

十代の友達——前田隼人がデュエルモンスターズの生みの親であるペガサス・J・クロフォードにスカウトされたりしたが、そこまで接点のない紅也にはあまり関係がなかった。クロノスとの試験デュエルはしっかりと観戦し、しっかりと感動したのだが。

カードデザイナーとしての道を進むとのことなので、紅也は淡い期待を込めて『真紅眼』レッドアイズ専用のフィールド魔法を依頼した。

そして今日、デュエルアカデミアでは学生達にとって——いや、最上級生である3年生にとっての一大行事である『卒業式』が行われていた。

長いようで短い3年という学生時間の終わりを告げる式であり、これから新しい道へ進む生徒達を送り出す始まりの式でもあった。

ピンク色の桜が舞う中で、多くの卒業生達が学生最後の会話を楽しんでいる。涙を流している者も多く見られ、デュエルアカデミアという学校の楽しさを物語っていた。

そんな光景が自身にも2年後には訪れるのかと考えながら見ていたのは紅也。目の前に立つ白と青の制服も見納めかと思うと、少しだけ寂しさを感じていた。

「卒業おめでとうございます。亮さん」

「ああ、ありがとう」

卒業試験を満点合格した絶対王者・丸藤亮。学園最強の『帝王』カイザーとしてトップを走り続けていた男の進路は皆が納得するプロデュエリスト。これから世界的に活躍するであろう男を前にしても、紅也はただの後輩だった。

「なんか……ぐったりしてませんか？」

「いや……少し、な」

どこか疲れているような表情の亮。紅也は僅かに乱れた制服を見て、第2ボタンがないことに気付く。

「さつきから気にはなっていましたけど、あそこでやってるデュエルつて……」

「聞かないでくれ……」

卒業式で最後のため、青春を締めくくるデュエルでもしているのかと紅也は思っていたが、どうやら違ったらしい。繰り広げられていたのは在校生女子も交えた女の戦い。七精門の鍵より激しく奪い合われる1つのボタンが火種だった。

紅也は混沌の戦いを見なかつたことにし、亮へ向き直る。

「プロでの活躍、楽しみにしていますよ」

「ああ、見ていてくれ。俺は……今より強くなる」

「ははっ、どれだけ強くなるつもりですか」

「お前へのリベンジもあるからな」

「すみません勘弁してください」

3年間で自分に唯一黒星を付けた紅也に、亮は好戦的な笑みを浮かべた。クールな顔をしていてもデュエリスト、根っからの負けず嫌いだ。

「十代との卒業デュエル……凄かったです」

「ありがとう。負けていてもおかしくはなかったがな」

卒業式前に行われた亮と十代の卒業デュエル。最優秀卒業生と指名された在校生が戦うこのデュエルは結果として亮が勝利したが、その激闘は多くの生徒の心に残る名勝負となった。

「流石は三幻魔を倒したデュエリスト。骨があった」

「……嫌味はよしてくださいよ」

「フツ、すまん」

卒業式という特別な日だからか、普段より亮のテンションが高い。

紅也は痛いところを突かれたと、肩を落とした。

「影丸理事長を……三幻魔を倒したのは十代つてことにしてもらいま

したからねえ」

「目立つのが嫌とは言え、そこまでするとはな」

「いや、今回に関しては……色々と事情があると言うか」

溺れる勢いで目を泳がせる紅也。天候が変わったり地震が起きたり、三幻魔が出現した影響と思われることが、まさか自分の召喚したやべーやつとのせいとは口が裂けても言えなかった。

前世のデツキを知られたくない紅也は土下座をすることで、世界を救ったヒーローの役目を十代に押し付けたのだ。

「無理には聞かんさ。誰しも人に話せないことはある」

「……亮さん」

「いつかりベンジはさせてもらうがな。……本気のお前に」

「……えーっと」

なんか原作より鋭くないかと、紅也は冷や汗を流す。1度負かされただけでここまで変化するとはどこの戦闘民族だ。

「お前に負けたことで俺は強くなった。リスペクトに囚われるのもやめ、勝利を強く求めるようになった。以前とは違い、俺なりのデュエルを見つけたつもりだ」

「エスパーですか?」

「俺はサイバー流だ」

(天然なのは変わらないんだよなあ……)

紅也がその辺の進化がないことに安心すらしていると、亮が懐からデツキを取り出し見せつけてくる。そして視界に入ったカードは、紅也の度肝を抜くものであった。

「サ……『サイバー・ダーク・ホーン』?」

その他にも『サイバー・ダーク・エッジ』に『サイバー・ダーク・キール』と、見覚えのあるモンスター達が飛び込んでくる。呆然とする紅也に、亮は少しだけ得意気に口を開いた。

『裏サイバー流』として封印されていたカード達だ。鮫島師範を説得して、俺に預けてもらった」

「よ、よく許可が出ましたね」

「何度もぶつかったが、最後には分かってもらえた。……カードに罪



などない、全ては使うデュエリスト次第だ」

本来はヘルカイザーとなつてから使う筈のモンスター達がまさかのこの時点で亮の戦力に加算。紅也はこれから彼と戦うことになるであろうプロデュエリスト達に心の中で合掌、せめてオーバーキルされないことを祈つた。

「本当に世話になつたな。紅也」

「いえ……むしろごめんなさいと言うか」

「……？ お前には翔のことも随分と助けられた。在学中に昔のような兄弟に戻れるとは思つていなかったよ」

卒業デュエルには翔を選ぼうか迷つたぐらいだと、亮は珍しく明るい笑顔を見せた。写真でも撮れば大儲け間違いなしだ。

「お前は良い教師になれそうだな。アカデミアへの就職を勧めよう」

「いやいや、荷が重いですよ。翔が変わつたのは翔の努力。俺は別に大したことはしてません」

「……フツ、やはり教師が合つていふと思うがな」

優しい笑みを浮かべ、亮は去つて行く。

自身の影響でとんでもない怪物を誕生させてしまったのではない。紅也は離れていく亮の背中を見て、ふとそんなことを考えた。

????????????????????????????????????

「……はあ、はあ」

軽く息を切らせながら、金髪の髪を揺らして明日香は走っていた。長い足に白い肌と、ただ走っているだけでも周囲の視線を集めてしまふ。

そんな明日香が向かつていた場所には、1人の男が待っていた。

「こ、紅也くん！」

「……天上院。来たか」

「ごめんなさい……。待たせてしまつて」

「ありがとう、走って来てくれたんだな」

「え、ええ」

到着したのは明日香が入学してからよく訪れていた灯台。兄である吹雪の情報を亮と交換していた場所だ。明日香は紅也から送られてきたメールで、この灯台へと呼び出されていた。

「——良い場所だな。潮の香りと風が気持ち良い」

「……そうね。最近は来てなかったけど、良い場所ね」

潮風に髪を靡かせながら、明日香が柔らかく微笑む。吹雪の件でしか足を運ばなかったこの場所に対してそう思えるようになったのだと、明日香は清々しい気分で空を見上げた。

白い雲、青い空、遠くの方からは生徒達が賑わう声。2人しか居ない空間にも届く要素に、何故か明日香の胸の鼓動は加速した。

「……あ、あの」

海を眺めている紅也を横目で見ながら、明日香が口を開こうとする。この場に呼び出された理由を聞きたいのだが、普段とは違う紅也の異様な雰囲気を感じ取り言葉が出さないでいた。

「悪いな、天上院。急に呼び出したりして」

「……別に良いけど」

会話のきつかけが生まれたことに安堵する明日香だが、その表情は少しばかり拗ねた子供のようだった。

「天上院、か。……もう名前で呼んでくれないの?」

「……うっ」

冗談半分・本気半分の問いかけに、紅也の口から空気が溢れる。予想よりも揶揄い甲斐のありそうな反応に、明日香が笑った。

「あの時は呼んでくれたのに」

「……あの時は気が大きくなってたというか。……怒りで我を忘れてたというか」

「だからもう……呼んでくれないの?」

「……………」

沈黙した紅也。言い訳を並べても勝ち目がないと悟ったようだ。そんな情けない男を見ても、明日香の笑顔は崩れない。

「冗談よ。無理して呼ばなくても良いわ。紅也くん」

せめてもの嫌味に、明日香は紅也の名前を強調する。無理をしなくて良いというのは本音だが、呼んでももらえなくても平気とは言っていない。

流石の紅也も明日香の心境を察したのか、不甲斐なさを恥じるように頭を掻いた。

「あつという間の1年だったわね。私達も2年生か」

「そ、そうだな……。結構濃い1年だった」

「本当ね。色々なことがあつたわ」

行方不明の兄との再会から忙しくなり、闇のデュエルなどという命懸けの戦いが始まったかと思えば世界を滅ぼす三幻魔の復活。1年という短い時間に詰め込まれるには少々濃い密度だった。

(ふふっ、変なの)

そんな濃い時間の中でも真っ先に浮かんでくるのが隣に立つ男であることに、明日香は自身の恋心を認めるしかなかった。

新入生であるにも関わらず『真紅眼の黒竜』レッドアイズ・ブラックドラゴンを使いこなしていたあの衝撃。兄の行方が分かるかもしれないという考えはあつたものの、紅也と出会ってからの明日香は本当に楽しかった。

デッキの調整ということで放課後に集まり、カードを広げては意見も交換した。尤も、自分は意見を貰っているばかりだったと明日香は苦笑い。そのお陰で実力は格段に向上し、学園でも最上位のデュエリストになったのだが。

遊城十代、丸藤亮、三沢大地、万丈目準。明日香がすぐに思いつくだけでもこれだけ実力者の名前が挙がる。しかし、隣に立つ男に対してはそんな評価が出せない。何故なら——実力の全てが把握出来ないからだ。

(……兄さんを助けてくれたドラゴン。それに……三幻魔に挑むと決めた時の紅也くんの眼はまるで——『真紅眼』レッドアイズだった)

デュエルディスクを貸す際に見た真紅の瞳。魔性の美しさを放つあの眼を、明日香は紅也に会う度に思い出していた。普通の人間にあるような変化はまず起こらないのだから。

誰の目も気にせず話を聞けるチャンスは今しかない、明日香は意を決して問いかけた。

「こ、紅也くん。聞きたいことがあるの」

「分かってる。——呼び出した理由だよな」

「……あつ、それもそうなんだけど。それとは別と言うか」

「分かってる。ちゃんと言うよ」

なにやら軽く深呼吸を繰り返して真剣な様子。明日香は出鼻を挫かれたことで言葉に詰まってしまった。紅也はそんな明日香の状態を『聞く構え』と思い込み、真面目な顔で口を開いた。

「——好きです。付き合ってください」

明日香の時間が止まった。

油断していたところに飛んできた一撃は正確に鼓膜を刺激し、意味を理解した途端に身体は大きな熱を発した。

シンプルで短い言葉。しかし、紛れもなく告白だった。まさかこんなことになるとは思っておらず、明日香の脳は軽く処理落ちしかけた。

「えっ、そ、そのっ……」

上手く言葉が出てこない。確かなのは今の自分の顔が猛烈に赤いということだけだ。鏡を見なくとも明日香はそう断言出来た。

これまでの人生で異性から告白されたことは何度かあるが、ここまですべて感情が揺れ動いたことはない。返す答えなど決まっているにも関わらず、明日香の動揺は続いた。

「……急で驚かせたよな。三幻魔の件が片付いたから、ゆっくり言えるのは今かと思ってる」

「う、ううん！ そんなことは……ないけど」

明日香の口から、誰でも見透かせる程の分かりやすい嘘が出た。ぶんぶん手を振っている様子は普段とのギャップがあり、とても可愛

らしい。

「さつき1年が濃かったって言ったけど、真っ先に浮かぶ思い出には天上院——……いや、明日香が居たんだ」

「……っ！」

紅也が自分と同じような気持ちであったことに、明日香の鼓動は更に加速。紅也の耳に届かないか心配してしまう程であった。

「明日香とテツキの話し合いしたり、購買で一緒に昼飯食べたたり……めちやくちや心配してもらったり。いつの間にか……その、明日香が好きになつてた」

ヘタレな主人が男気を見せたことに、ヒツソリと聞き耳を立てていたレッドアイズがガッツポーズ。祝福の黒炎弾を撃ち上げたい衝動に駆られたが、グツと押さえ込んだ。

ヘタレの頑張りに返事をしると、レッドアイズは明日香へ念を送る。それが届いた訳ではないが、明日香は紅也へしっかりと視線を向けた。

「わ、わ、わ」

こんな驚かせ方をしてくる幽霊なら可愛いなど紅也が思ってしまう程に、明日香は焦っていた。自分よりも慌てている人間を見ると冷静になるとはよく言ったもので、紅也は僅かばかりの落ち着きを取り戻した。

「落ち着けて……ぷっ」

「ど、どうして笑うの!？」

「いや、明日香のそんな顔初めて見たと思って……ふふっ」

「わ、笑わないで……もうやだ」

両手で顔を隠し、恥ずかしがる明日香。真っ赤に染まった耳までは隠せておらず、それを見た紅也まで再び恥ずかしさに襲われた。

「……そ、それで……明日香の返事は？」

ここまですれば勢いだど、紅也は残り少ない男気を全て投入。ヘタレがヘタレることもなく、最後の最後まで言い切ったのだ。

ハツと顔を上げた明日香。白い肌は赤くなり、目は少しだけ潤んでいる。ほぼ答えを言っているようなものだが、告白された側としての

責務を果たすために覚悟を決めた。

「……私も、貴方が好きです」

普段の凛々しい姿とは違い弱々しい立ち姿と震えた声。しかし、それを聞いた紅也が肩を落とす筈もなく、ゆっくりと息を吐いて湧き上がる実感に表情を緩めた。

「……………良かったあ」

「こ、紅也くん!?!」

一瞬で身体から力が抜け、紅也がその場にしゃがみ込む。プレッシャーから解放され、立っていることも出来なくなったようだ。

「断られたらどうしようかと……………」

「た、立てる?」

当然勝算がなかった訳ではないが、100%などと言い切れる筈もない。青春の一大イベントに見事勝利した紅也は明日香に手を取られ、力無く立ち上がった。

「でも……………本当に私で良いの?」

「も、もちろん!」

「……………そっか。良かった」

ホツと胸を撫で下ろす明日香だが、彼女がこんなことを訊ねたのは訳があった。

「……………私と付き合うことで、紅也くんに迷惑がかかるかもしれないって思ったから」

「ああ……………そういうことか」

学園内でも高い人気を誇る明日香。そんな彼女の彼氏になろうものなら、大半の男子生徒が敵に回るだろう。付き合っていなかったこれまでですら、嫉妬と共に勝負を挑まれてきたのだから。

事実迷惑を被ってきたからこそ、紅也はハッキリと自分の言葉でそれを否定した。

「迷惑じゃない。誰に何を言われても、俺は気にしない。……………友達なら、三沢や十代達がいるしな」

少し照れ臭そうな紅也に、明日香が微笑む。

「勝負を挑んでくるなら受けるし、負けるつもりもない。……俺が、その……明日香と一緒に居たいからさ」

「……紅也くん」

大一番を乗り切ったからか、紅也はいつもならあり得ないレベルの頼もしさを見せた。

「だから、迷惑じゃない」

「……ッ！」

「うおっ」

驚きの声を上げた紅也だが、それも無理はない。明日香が急に身体を寄せて、ピツタリと密着してきたのだから。

「あ、あ、あ……明日香さん？」

「……ごめんなさい。……嬉しくて」

「そ、そっか」

お互い声を発さず、伝わる体温のみに意識が向けられる。そんな状態に限界が来たのは紅也。僅かに身長差で勝る分、目の前にある明日香の髪から漂う同じ人間とは思えない良い香りに耐えきれなくなっていた。

「……少しズルいかとも思ったんだ。告白するの」

「……えっ？」

「明日香にとって俺は吹雪さんを助けた恩人だろ？ だからなんていうか……そういう部分につけ込んでるんじゃないかって。恩人だから好きに——」

「それは違うわ」

不安そうな紅也の言葉を一刀両断。デュエル中に見せるような力強い瞳のまま、明日香は自分の意志を伝えた。

「確かに、兄さんの件で貴方は恩人。でも私が紅也くんを好きになったことには関係ない。……だからそんなこと言わないで？」

「わ、悪い」

頬を赤くしながら謝る紅也に、明日香が表情を和らげる。とても至近距離で会話しているというのに、照れよりも幸せが上にきいていた。

「……友達に優しく出来て、大切にされる貴方が好き」

「えっ……」

「相手の本気には本気で返す、真剣な貴方が好き」

「ちよっ……えっ??」

「大切な存在のためには怒れる、そんな貴方が……好き」

「……」

受け入れ可能な容量を超え、紅也がオーバーヒート。元々前世を含めても女性経験がほぼ皆無だった人生、とびきり美人からの純粋な好意に耐性などある筈もなかった。

「ふふっ。紅也くん、顔真っ赤よ」

「……その言葉そのまま返す」

「まだ好きな所を言った方が良いかしら?」

「……もう満腹だ」

完全にしてやられたと、捻くれた返しをすることなく紅也は降参。

明日香は恥ずかしくなりながらも、勝ち誇った顔をした。

「……そろそろ戻るか」

「ええ、そうしましょう」

灯台に友達と待ち合わせ、恋人になって帰る。告白スポットの宣伝が綺麗に当て嵌まる2人は肩を並べ、学園に向かって歩き出した。

「ど、どうぞ」

「……ふふっ。ありがと」

結ばれた想いを表すように、紅也と明日香の手が固く繋がれる。

「紅也くんには色々聞きたいこともあるの。良い?」

「……ああ。俺も明日香には知っておいて欲しいし、俺も明日香のことを知りたい」

「そ、そう……恋人、だものね」

関係性に大きな変化があったと、未だにあまり実感がない。恋人という言葉を使うとくすぐったく感じてしまう程だ。しかし、それも慣れていくのだろう。これから先の2年間を一緒に過ごしていくのだから。

「今日の夜……電話しても良い?」



「……分かった」

想いの通じた紅也と明日香。

レッドアイズは今度こそ我慢が出来ず、天に向かってド派手に黒炎弾をぶっ放した。

く巻き込まれた恋路く

留年することもなく、無事に進級を果たした紅也。

2年生になってから1ヶ月以上の時間が流れたが、事件に巻き込まれることもなく平和なものだった。

それというのも、紅也は“セブンスターズ”との戦いで刺客2人を撃破するだけに収まらず黒幕まで片付けてしまう大金星を上げた。吹雪・カミューラと戦ったのは自らの意思だが、黒幕に関しては完全に事故。余計な出しゃばりをしてしまった。

『もう事件には深く関わらない』

GXは学園が舞台ということで、基本的には明るい雰囲気が多い。しかし物語が進むにつれて、放送時間を間違えてないか心配になる。ダークなストーリーが展開される。闇のデュエルもビックリな闇さだ。

だからこそ停滞することなく成長した主人公、遊城十代の存在が必要不可欠となってくる。GXという物語を完結させられるのはポツと出の転生者ではない。これ以上、十代の邪魔をする訳にはいかないのだ。

——と、紅也は思っているが、実際のところ後1回は物語に介入しなければならぬと考えていた。そこがGX最大の闇期であり、紅也が最大限の警戒をしている部分だった。それこそ、前世デッキの使用も躊躇う気がない程に。

動くべき時が来るまでは動かない。そんな決意を強く固めて始まった2年生だが、ここ最近の紅也の心はあることでほとんどが満たされていた。

——彼女が出来たのだ。

「…………ふ、ふふ」

自室のベッドで目を覚ます紅也。寝起きという条件を含めても気の抜け過ぎた顔をしており、手に取った携帯端末を眺めている。画面に表示されていたのは通話終了画面、深夜まで彼女——天上院明日香と電話していた動かぬ証拠だった。

「……………」

5時間1分という数字を見て、紅也の表情がだらしなく緩む。付き合ってまだ1ヶ月ということ、浮かれ気分は落ち着きそうにない。

今日が休みということもあって続いた初めての長電話。紅也の頭に残っている最後の記憶は、耳元に聞こえてきた明日香の穏やかな寝息だった。

「…………可愛いなあ」

明日香との電話を思い返し、紅也が細い声で惚気を溢す。寮の自室ということとで第三者に聞かれることはないが、またかという呆れたような眼を相棒に向けられる。

紅也も流石に恥ずかしかったのか、起き上がってレッドアイズのカードを手に持った。

「な、なんだよ」

『…………グルウ〜』

「い、良いだろ別に。そんな眼で見るな」

『グルウオ』

「えっ？ 文句はないって？ ……そうか」

黒炎弾で勝手に祝福した身として、レッドアイズは2人が恋仲になったことを喜んでいた。特に告白の際に見せた男気には感心しており、改めて主人に惚れ直した部分もあった。

しかし、こうも毎日だらしない顔を見せられてはたまらない。最初の1週間などカードを手に取られて延々と惚気られるという拷問を受けたのだ。

「…………眠い。…………二度寝しよ」

圧倒的な寝不足から睡魔が襲ってくる。休み前の夜に長電話したのは正解だったと自身を誉めつつ、紅也は再び眠りにつくためベッドに寝転がろうとした。

『グルウオ』

「……誰かが居る？」

そんな紅也を止めたのはレッドアイズ。先程までの呆れた表情はしておらず、眼光に鋭さが戻っている。短く吠えた警告は窓の外に誰かが居るといふもの。こんな朝早くから怪しい行動をしているということで、紅也に注意を呼びかけたのだった。

「郵便配達……な訳ないよな」

停止しようとしていた頭を再起動させ、紅也もだらしのない顔を引っ込める。十代に三幻魔を倒したヒーロー役を押し付けたとは言え、どこから情報が漏れるかなど分からない。自分を狙いにきた刺客という可能性は十分あると考え、すぐにレッドアイズを実体化出来るように構えた。

「……開けるぞ？」

『グルウ』

窓のロックを解除し、手をかける。頼みの綱であるレッドアイズと意思疎通してから、紅也は窓を開けた。

そこに居たのは――。

「………万丈目？」

朝だというのに普段と変わらず主張するツンツン頭に、朝日が全く似合わない黒色の制服に身を包んでいた――万丈目準だった。

しかし普段とは違う様子も見受けられる。女子が羨むような白い肌は病気ではないかと心配してしまう程に白くなっており、目の下には深い隈がハッキリと付いていた。

朝でなければゾンビと間違えてもおかしくない。もう少し頭が寝ぼけていれば、紅也は問答無用でレッドアイズに黒炎弾を指示していた。

「……ど、どうした？ 何か用事か？」

手で軽く押すだけで簡単に倒れてしまいそうな万丈目に、紅也は若

干引きながら声をかけた。

「……た、竜伊……竜伊……」

ガチャリ。

紅也は俊敏な動きで窓を閉め、しっかりと鍵もかけた。死にそうな顔をしながらこちらへ手を伸ばしてくるのは流石にホラー過ぎる。夜だったら叫び声を上げていた。

不審者に対する自分の行動は間違っていないと頷いてから、紅也は二度寝するために寝転がれ——なかった。

「……何してるんだ？」

二度寝を邪魔してきた存在へ視線を向けながら、紅也は深いため息をつきたくなくなった。万丈目を物理的に防げたと思つた矢先、物理的に防げない奴らが突撃して来たからだ。

『お願いよお〜！ 話だけでも聞いて〜っ!!』

『アンタだけが頼りなんだよおっ!!』

『俺達を助けると思つてっ!!』

『『『竜伊の旦那っ!!』』』

黄・緑・黒の3体の精霊、その名を『おジャマ・イエロー』、『おジャマ・グリーン』、『おジャマ・ブラック』。俗に言うおジャマ三兄弟が窓をすり抜けて部屋へ侵入してきたのだ。鼻水と大粒の涙を撒き散らしながら、窓の施錠を解除。万丈目のアシストを見事に完遂した。  
(……しれっと実体化させてるし)

窓を開け、再び顔を見せた万丈目。やはり絵面がホラー過ぎて、紅也は少し後ろに退がった。万丈目が意識しているかどうかは分からないがおジャマ三兄弟を実体化させているので、籠城することはもう無理だ。精霊相手に窓1枚では対抗など出来る筈もない。紅也は大人数話を伺うしかなかった。

「……竜伊」

「な、なんだ？」

「天上院くんと……付き合ってたんだってな」

「……そうだけど」

言葉を濁さずに断言する紅也。万丈目が明日香に恋心を抱いてい

たと知っているのです、彼氏としての立場をハッキリさせる意味も含んでいた。

万丈目は強い意志と共に放たれた紅也の言葉を聞くと、紅也の腕を掴んで涙ながらに懇願した。

「——頼むっ！ 相談に乗ってくれっ!!!」

「……………へっ?」

こうして、二度寝の計画は潰れた。

????????????????????????????????

……………恋愛相談?」

嫌々制服に着替え、嫌々部屋を出て、嫌々アカデミアまで出て来た紅也。落ち着いて話せる場所ということで、選ばれた場所は広い食堂。

紅也は目の前で項垂れている万丈目を見ながら、購買部で買ったサンドイッチを頬張っていた。

「……………もしかして明日香のことか? それなら当然無理だけど」

「ち、違う! 天上院くんのことではない!!!」

睨む紅也に慌てて首を振った万丈目。信じてもらうためか、渋い表情で言葉を続けた。

「俺があの日、七精門の鍵を持ち出したのは……………天上院くんに告白するためのデュエルを挑むためだった」

「……………それで?」

「俺は……………すっかりとフラれた。とつくにそれは受け入れている。——お前と天上院くんが正式に付き合っているんだからな」

顔色は悪いままだが、真っ直ぐな瞳でそう告げた万丈目。嘘をついているようにも見えないので、紅也は睨むのを止めて何故自分を頼るのか訊ねた。

「じゃあ何なんだよ。他に好きな人でも出来たのか?」

「……………」

「えっ、マジ?」

真っ白だった肌に赤色が戻る。紅也は自分の指摘が当たっていたことに驚きながら、面倒事に巻き込まれたのだと確信した。

「軽い男だと罵るならそうしろ! 軽蔑されても文句は言えん! 俺だって自分に幻滅しているんだ! 俺は……俺は……!!」

「ま、まあ落ち着けよ。ほら、サンドイッチ食べるか?」

情けない声を上げながら頭を抱える万丈目。そんな推しキャラを見ていられなくなり、紅也はサンドイッチを分け与えた。抵抗せず受け取り、リスのように頬張り出すのも面白い。

「見ろよ。『帝王』<sup>カイザー</sup>だぜ」

「すげえよな。また連勝記録伸ばしたのか」

「ああ、亮様……素敵」

紅也がどうやって話を進めるかを考えていると、周りの生徒達が騒ぎ出す。彼らの視線は食堂に設置されている巨大テレビに向けられており、ヒーロー番組でも見ているかのようなキラキラの瞳をしている。

放送されていた内容はプロデュエリストの大会。少し前にデュエルが終わったばかりのようで、勝者に対するインタビューが行われていた。

紅也はよく見覚えのあるプロデュエリストの顔を見て、複雑な感情を抱いたのだった。

「デビュー戦から無敗……か」

アカデミアの制服がモチーフとなっている青と白の服を纏い、隙を与えないプレイングで相手を蹂躪するプロデュエリスト界の新星――『機械竜の帝王』・丸藤亮。

プロの洗礼を受けると思われたデビュー戦をワンターンキルで決めた日から、亮の快進撃は止まることを知らない。

(……『サイバー流』と『裏サイバー流』を合わせた亮さん専用デッキ。今のところ唯一張り合えたのはアイツだけか。強くなり過ぎですよ、亮さん)

先輩の無双っぷりに紅也が引いていると、亮へマイクが向けられる。圧倒的な強さに興奮するインタビュアーからされた質問はちようど紅也が思い浮かべていた場面であり、プロの世界でも亮が『帝王』カイザーと呼ばれるようになったデュエルのことだった。

『今回も圧勝でしたねっ！ やはりエド・フェニックス選手との激闘を経験して更に強くなられたんでしうか？』

——エド・フェニックス。

若くしてプロの最前線で活躍するデュエリストであり、GX2年生編からアカデミアに入学した十代のライバルキャラでもある。その卓越したタクティクスは使用するカードを選ばず、プロとしての試合でも毎回デツキを入れ替えて戦っている。そんな芸当をしながらも勝率はトップクラスであり、間違いなくプロ最強候補に名前が挙がる程の天才だ。

だがそんな天才は『帝王』カイザーの前に膝を折ることとなった。プロとしての厳しさを教えるためか、エドはデュエル中に挑発するような言葉を投げかけ、亮の魂とも呼べる『サイバー・ドラゴン』をコケにするようなプレイングもした。

しかし、結果はエドの敗北。インタビューアールはエドを氣遣って『激闘』と表現したが、見る者が見ればエドの完敗であったことは一目瞭然だった。

エドもD―HEROデステニーヒーローを使っていなかったので本気ではないのだが、見ていた観客にそんな事情が分かる筈もない。プロ最上位をルーキーが倒した大物食ジャイアントキリングいに会場は激しい盛り上がりを見せた。

『エドとのデュエルでデツキの扱いに慣れた部分があります。あの戦いは俺を確実に成長させてくれました』

『トドメとなった『DNA改造手術』からの『キメラテック・フォートレス・ドラゴン』は今や語られる伝説ですからね！』

実際、亮を相手にしてまともにデュエル出来たのがエドだけという話だ。他の選手は『裏』を使うまでもなく『表』だけで粉碎されてしまっているのだから。

『連勝記録を7に伸ばしましたが、どこまで勝ち続けるおつもりなん



でしよう!』

『全力を尽くすだけです。相手をリスペクトし、勝利をリスペクトする。このプロの世界で——俺は更に強くなります』

テレビの中と食堂で歓声が巻き起こる。女性からの黄色い声援だけでなく男からの野太い声も混じっている辺り、デビュー1ヶ月にして既に多くのファンを獲得していることが分かる。

カッコいい台詞を残した亮はインタビュアーへ軽く頭を下げながら、クールな顔のままその場を去った。

「……だから、どこまで強くなるつもりですか」

敗北を経験したことで僅かな慢心も消え、更には『表』と『裏』が融合。メンタルが原作より強化されているにも関わらず、引きの強さは十代にも劣らない。ラスボスが誰だったかを、紅也は真剣に考え出した。

「……カイザーは勝ち続けているというのに、俺ときたら」

喜びの雰囲気で包まれる食堂でただ1人、万丈目だけが暗い顔をしていた。深いため息と共に溢れたのはネガティブ発言。亮が光だとすれば、今の万丈目は間違いなく闇だ。

「な、なあ、万丈目が好きになつた人って誰だ?」

「……そうだ。そのことを相談してきたんだ」

万丈目と呼んでも『サンダー』と訂正してこない辺り、本気で参っているらしい。紅也はなるべく力になってやろうという気持ちにさせられ、万丈目が今から語るであろう想い人の説明に集中した。

「……購買部はよく行くか?」

「ん? まあ、今食べたサンドイッチも購買部で買ったしな。割と利用する方ではある」

「……その人は購買部で働いている」

「へえ、歳上か。良いんじゃないか。なんとなく万丈目は歳上が合ってると思う」

世話を焼きたくなるという意味では言わず、紅也は購買部のメンバーを思い出していた。トメ以外の。

「その人はとても美人で気が強い。客商売をしているとは思えん程

だ」

「……へえ。良いんじゃないか？ 万丈目とは相性良さそうだ」

気弱な性格よりはハキハキとしている方が話しやすそうだと思い、紅也は微笑んだ。少しだけ感じた嫌な予感を無視しながら。

「その人は……デュエルが強い。今までに多くの男が挑戦したが、全員負かされたらしい。——俺も含めてな」

「……………へ、へえ」

紅也の眼が曇り始め、声のトーンが低くなる。デュエルが強いなら万丈目も嬉しいじゃないか等というアドバイスをする気も起きず、嫌な予感的中しないことを神へ祈っていた。

「……ちなみに、その人の名前は？」

購買部で働いており、美人で気が強く、デュエルアカデミアに在籍している男子生徒達を倒せる實力を持ったデュエリスト。

紅也が想像した最悪の予想は——現実となった。

「購買部の……カミューラさんだ」

「ごめん。帰って寝るわ」

神など存在しなかったと絶望しながら席を立ち、寝起きとは思えない速度で走り出した紅也。食堂に居た何人かの生徒を謝りながら押し退ける様は必死そのものだ。

「——待て」

「いや速いよ。なんで追いつけるんだよ」

全力を出したにも関わらず、万丈目に追いつかれた紅也。身体能力で勝っているとは思っていなかったが、先にスタートして追いつかれる程だとも思っていなかった。流星はリアルファイトも起こるアニメ次元、OCG次元の人間とではスペックに差があり過ぎた。

「お前が逃げる事は想定していた」

「いや怖いよ。俺お前が怖いよ」

この場合、紅也の考えが甘いと言うよりは万丈目の執念が上回ったと言うべきだろう。そして万丈目には紅也がカミューラの名前を出した時に間違いなく逃げると確信するだけの情報を得ていた。

『レッドアイズ・アンドットドラゴン』  
『真紅眼の不死竜』。聞き覚えはないか？」

「…………いや？ 知らないけど？」

「ほう、そうか。俺が入手した情報によると、カミューラさんはそのモンスターをとある男から貰ったと話したらしい」

再び逃げようとする紅也だったが、万丈目に腕をガツチリ掴まれて動けない。そのまま近くの席に座らされ、完全に逃げられなくなった。

「カミューラさんにカードを渡したのは…………お前だな？ 竜伊」

証拠を並べられた訳でもないが、確信しているような万丈目の言葉を聞いて紅也は動揺。名探偵サンダーはそれを見逃さなかった。

「やはりな。お前以外に居ないと思っていた」

「…………なあ、万丈目」

「サンダー」

「…………サンダー」

心に余裕が出てきたらしく、万丈目に威勢が戻る。紅也は肩を落としながら訂正に従い、単刀直入に要件を訊ねた。

「…………俺に何をしたいんだ？」

恋愛相談などと言っていたが、話を聞くだけで終わる筈がない。相手がカミューラであると知った瞬間から、温い恋とは無縁の話に切り替わったのだから。

「カミューラさんとのデュエルに勝利すればデートをしてもらえる。それは知っているな？」

「…………ああ。よく知ってる」

勝率は100%。惜しいと言える部分すらないデュエルばかり。最近では勝利を諦め、カミューラを眺めているだけで満足している男子も居るぐらいだ。それ程までにカミューラは強く、彼女に勝利することは困難を極める。

「俺も挑んでいるが…………負け続けている」

「なるほど。だからさつき亮さんと比べてたのか」

連勝記録への反応から察するに、かなり負け続けている可能性が高い。この先の展開が手に取るように分かる紅也は、一筋の光を信じて戦績を確認した。

「えーつと……何連敗？」

「……3」

「えっ？　なんて？」

聞き取れなかったので再度要求。

「……1……3連敗だ」

「なんだ3連敗か。それぐらいならチャンスあるって。よし、俺も協力する。一緒にカミューラさんに勝てるデッキを考え——」

「——13連敗だッ!!!」

「頼むから諦めてくれ」

食堂に響く万丈目の叫びを聞きながら、紅也はこれから自分を襲うであろう苦勞に脱力。死んだ眼をしながら無意味な懇願をした。

「協力すると、言ったな？」

「言っていない」

「竜伊、頼みがある」

「やめろ。聞きたくない」

「カミューラさんを倒すの手伝ってくれ」

「……聞きたくないって言ったじゃん」

机に倒れ込む紅也。

余計なことを言ってしまったと激しく後悔した。

(……………明日香に会いたい)

レッドアイズも流石に同情した。

## 〈14度目の正念場〉

「……ふわぁ。……疲れた」

げっそりとした顔で欠伸を繰り返す紅也。カミューラに勝ちたいという万丈目を手伝うべくデツキ調整に付き合っていたので、身体に大きな疲労が溜まっている。襲ってくる睡魔も強力だった。

『無理しないでちゃんと寝て？ 紅也くん健康が一番大切なんだから』

優しい彼女の提案でここ3日程、明日香との電話はお預けとなっている。彼女との電話を無しにしてまで手伝っているのだから結果を出してもらわなければ納得がいかない。それだけが、紅也の原動力となっていた。

「万丈目……覚悟は出来たな？」

「……ああ」

紅也と同じレベルでげっそりした顔の万丈目。当事者として努力を惜しんではおらず、カミューラ戦への気持ちをこれ以上ない程に高めていた。13回の敗北を経験しているにも関わらず、勝利への執念は少しも衰えていない。

「デツキの調整は完璧……秘策もある。後はお前次第だ」

カミューラを強化してしまった立場として、紅也も思うところはあ  
る。『真紅眼レッドアイズ・アンデッドドラゴンの不死竜』だけではない、相性が良さそうなカードをアドバイスしたり渡したりもしたのだから。

1番不味いのは——渡したカードの中に前世のカードが存在していることだ。明日香へ告白する際に背中を押してやったあの、デュエルディスクを貸した時の借りを返せだのと迫られ、面倒になってサイドの方に入れていた1枚を譲渡した。物凄くマッチしてカミューラが更に強くなったのは言うまでもない。万丈目を相手に13連勝するのも納得だ。



紅也はカミューラが随分生活へ染まってきたなと感心しながら、万丈目を勝利に導くために用意した秘策の内の一つを発動した。

「このデュエルの間だけ『アンデットドラゴン』と俺から巻き上げた永続魔法を返し——」

「嫌よ」

「ですよー」

秘策その1、失敗。

交渉の余地すらない態度で一刀両断され、紅也は軽く笑いながら万丈目へ向き直った。

「俺に出来るのはここまでだ。頑張れ」

「お、おう。手間をかせげたな」

潔い諦めに、万丈目が戸惑いながらも言葉を返す。あの状態のカミューラには何を言っても無駄だと知っている紅也からすれば、秘策その1を第一声で断られた瞬間にもうやれることはない。大人しくデュエルを見守ろうと、観客席へ移動した。万丈目が貸切にしてくれたため、観客は紅也と何故か精霊化しているレッドアイズのみだ。

デュエルフィールドに残ったカミューラと万丈目。それぞれの顔に見える感情は正反対。片方には余裕、もう片方には緊張が浮かんでいた。

「貴方も懲りないわね。まだ負け足りないのかしら？」

赤と黒の塗装が施されたデュエルディスクを装着しながら、カミューラが呆れたように告げる。13回も負かしているのだから、この台詞も当然と言えば当然だが。

「今回は勝たせてもらいます。……そして、俺は貴女のことをもっと知りたい」

万丈目の言葉を聞いて、紅也は意外に紳士だなと失礼なことを考えた。いつものように横柄な態度で高らかに勝利宣言をし、欲望に従って発言すると思っていた。どうやら万丈目はカミューラに本気で恋しているらしく、紅也は今になって少しだけ純粋に応援しようという気持ちになった。

「それなら私に勝つことね。そんな言葉、弱い奴に言われたって無意

味よ」

「分かっている。——いくぞー！」

互いにデュエルディスクを展開。

万丈目にとって14度目となる正念場が始まった。

「デュエルツ!!」

万丈目           LP 4000

カミューラ       LP 4000

高らかな宣言と共に開始されたデュエル。どっちも声の通りが良  
いなという感想を抱きながら、紅也が初動に意識を向ける。先攻は—  
—カミューラだ。

「私のターン、ドロー！ 魔法カード『おろかな埋葬』を発動！ デツ  
キからモンスター1体を選択し、墓地へ送る。『真紅眼の不死竜』を  
墓地へ」  
レッドアイズ・アンデットドラゴン

早速カミューラが誇る2大エースの内の1体が墓地へ送られた。  
墓地は第二の手札と呼ばれるだけあり、カードを置いておくだけで  
ゲームが有利になる。カミューラが操る”アンデット”族は特にそ  
の傾向が強い。

「魔法カード『死者蘇生』！ 来なさい……『真紅眼の不死竜』ツ！」  
『ゴオオオオツ!!!』

蒼炎を巻き上げ、墓地より蘇る不死竜。真紅の瞳を光らせ、妖しい  
魅力を放っている。

『真紅眼の不死竜』 ATK/2400 DEF/2000  
「来たか……!」

眉間にシワを寄せて構える万丈目。自身を何度も敗北させてきた  
モンスターには条件反射で嫌な顔をしてしまう。

「フツツ、そんな弱腰じゃお話にならないわよ？ 私はカードを1枚  
伏せて、ターンエンド」

「俺は勝つ！ ドロー！」

トラウマになっただけでもおかしくないが、万丈目は臆することなく



ドローした。真剣な表情でカードを選択し、デュエルディスクへセツトする。

「俺は——『おジャマ・イエロー』を守備表示で召喚！」

「……は？」

にゆるんという効果音が付きそうな登場をしたモンスターを見て、カミューラが間抜けな声を溢す。見間違いかと目を擦ってから2度見するが、自分の視力の問題はなかった。

『おジャマ・イエロー』 ATK/0 DEF/1000

「……ふざけているの？」

カミューラからすれば純粋な疑問だったが、万丈目はこれを強く否定。紅也と同じく寝不足なので、テンションは普段より高めだ。

「俺は大真面目だ！ この攻撃力0の雑魚こそが貴女に勝つための秘策！ クズなどとは言わせない！」

「そこまでは言っていないわよ」

これこそ秘策その2。

これまで行ってきた13回の勝負で、万丈目は恋する相手に『おジャマ』達を見せたくないという気持ちからデッキに入れておらず『アームドラゴン』と『WXYZ』のみで戦っていた。

紅也としても万丈目の気持ちは分からなくもなかったが、勝利のためだと万丈目を説得。対カミューラ用決戦最終兵器——『おジャマ』が立ち上がったのだ。

(……やっぱこれだよなあ)

万丈目と『おジャマ』が並ぶ光景を見て、紅也が口角を上げる。勝利のためにという言葉は嘘ではないが、ファンとして『おジャマ』で戦う万丈目が見たいという欲もあった。

何故なら『おジャマ』と共に戦う万丈目があり得ない展開や逆転劇を見せてくれると紅也は知っている。カミューラという自分が生み出してしまった怪物を倒せるように、紅也は万丈目と『おジャマ』達の無限の可能性に賭けた。

「俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド！」

「……はあ、どこかあのバカに似てるわね」

カミューラから残念そうな視線を向けられた紅也だが、当然何のことかは分からない。取り敢えず握り拳を見せ、負けねえからなと念を送った。

「私のターン、ドロー！ 手札から魔法カード『手札断殺』を発動！ 互いのプレイヤーは2枚の手札を墓地に送り、その後デッキから2枚ドローする」

紅也はカミューラへ念を送ることをやめて、渋い表情に切り替わる。『手札断殺』を入れるようにアドバイスしたのが他でもない自分だからだ。墓地を活用するカミューラのデッキと相性が良いなどと言ったばかりに、デッキが回る回る。

前世であれば相手にもアドバンテージを与えてしまうこの魔法も、この時代であればそんなことには滅多にならない。手札枚数での発動条件は存在するが、ただ好きな手札を墓地に捨てられてその分をドロー出来るだけの強カードだ。

「墓地に送った『馬頭鬼』の効果発動！ 自身を除外することで、墓地に存在する”アンデット”族モンスター1体を特殊召喚出来る！

『ヴァンパイア・ロード』を特殊召喚！」

墓地に捨てたモンスターの効果で流れるようなコンボが決まり、カミューラのフィールドに上級”アンデット”が並んだ。それでもカミューラはまだ止まらず、妖艶な笑みを浮かべる。

「更に『ヴァンパイア・ロード』を除外し、手札から『ヴァンパイア・ジエネシス』を特殊召喚!!」

「なんだとっ!?!」

愛する主人の呼びかけに応え、カミューラ自慢の相棒が登場。2大エースが瞬く間に揃ってしまった。

『ヴァンパイア・ジエネシス』 ATK/3000 DEF/2100  
「バトルよ！ 『アンデットドラゴン』で『おジャマ・イエロー』を攻撃！ ——アンデット・フレア！」

十分過ぎる戦力を持って、カミューラは攻撃を宣言。『おジャマ・イエロー』では到底耐えきれない火力の蒼炎が放たれた。

『アニキッ!!』

「ぐっ！」

そして呆気なく黄色が破壊される。

2枚の伏せカードは微動だにせず、少しも反応しなかった。

「続けて『ヴァンパイア・ジェネシス』の攻撃！ ヘルヴィシヤス・ブラッドツ!!」

万丈目を守るモンスターが消えたとは言え、2枚の伏せカードにもお構いなしにダイレクトアタック。この思い切りの良さもカミュラの強さと言える。

「罨発動！ 『ガード・ブロック』！ 発生した戦闘ダメージを0にし、カードを1枚ドロウする！」

優秀な防御カードによって万丈目がピンチを乗り切る。格上相手にライフアドバンテージを簡単に渡す訳にはいかない。ダメージを0にすると同時に手札も増やすことに成功した。

「今までとは違って消極的ね。……これでターンエンドよ。ここからどう逆転するのか楽しみだわ」

「消極的かどうか見せてやる！ 俺のターン！ ドロー！」

カミュラの盤面を崩すにはまだ準備が足りない。いくら万丈目の引きが優れていると言っても、そうまで現実には甘くなかった。

(……いけ、万丈目)

『グルウ』

(……楽しそうだな。レッドアイズ)

旧友である『アンデットドラゴン』が出ているからか、紅也の隣で静かに観戦しているレッドアイズ。飼い猫と一緒にテレビでも見ているような気にさせられ、紅也は少しほっこりした。

「手札から『魔の試着部屋』を発動！」

紅也が少し気を抜いていると、万丈目が動いた。発動したのは流れを引き寄せる一手、エンターテイナーの本領発揮だ。

「ライフを800ポイント払い、デッキの上から4枚のカードをめくる。その中にレベル3以下の通常モンスターがあれば特殊召喚し、残ったカードはデッキに戻してシャッフルする」

万丈目 LP4000↓LP3200

「ギャンブルじゃない。舐められたものね」

「いくぞ！ ドロー！」

呆れた顔のカミューラにも、万丈目は揺るがない。ギャンブルであることなど百も承知、ただ結果を信じて突き進むのみだ。

「——出てこい！ 『おジャマ・グリーン』！ 『おジャマ・ブラック』！」

「なんですって!?!」

4枚中2枚に対象となるモンスターを引き当てた万丈目。流石は単体で十分なテーマをまとめて盛り込んだ激重デッキを使いこなすデュエリスト。デッキを回すことに関してはあるの武藤遊戯にも劣らないだろう。

『参上くく!!』』

長い舌とメタボな腹を隠すこともなく曝け出し、緑と黒が守備表示で登場。確かに恋している相手には見せたくないモンスターだ。

『おジャマ・グリーン』 ATK/0 DEF/1000

『おジャマ・ブラック』 ATK/0 DEF/1000

「まあ、運はあるようね。でもソイツらでどうしようっていうの?」

「こうするつもりだ！ 『死者蘇生』！ 戻ってこい！ 『おジャマ・イエロー』」

「……またそんなモンスターを」

先程『アンデットドラゴン』に焼かれたからか、包帯を巻いて墓地から飛び出した黄色。松葉杖まで突いており、見ているだけで痛々しい。

『弟〜!』

『誰がオレ達の弟をつ!』

『グリーン兄ちゃん！ ブラック兄ちゃん！ アイツよアイツ！ あの目つきの悪いドラゴンよお!』

『なにい!? おいブラック！ 弟の仕返しだ!』

『睨みつけてやるぜい!』

美しき兄弟愛による睨みつけ攻撃。それは真紅の眼によって容易く反撃された。

『——ゴオオ?』

『『すみませんでしたっ!!』』

被害者である黄色も含めて三色土下座。

万丈目は自身の精霊達の情けなさに肩を落とした。

「……バカ共め。……毘発動! 『おジャマトリオ!』」

「トリオ? ……ッ! ……なによコイツらは!?!」

カミューラが首を傾げていると、毘の効果と思われる異変が発生。自身のフィールドに土下座をしてきたヘナチヨコ三兄弟が出現したのだ。

「このカードは相手フィールド上に3体の『おジャマトークン』を召喚する。このトークンは生贄召喚には使えず、破壊された時に300ポイントのダメージを与える」

『『おジャマトリオ』』

相手フィールドに『おジャマトークン』(獣族・光・星2・攻0/守1000)3体を守備表示で特殊召喚する。このトークンはアドバンス召喚のためにはリリリース出来ない。『おジャマトークン』が破壊された時にそのコントローラーは1体につき300ダメージを受ける」

「……小賢しいわね」

出現した『おジャマトークン』のせいでモンスターゾーンが全て埋まってしまった。これでカミューラは新たなモンスターを呼び出すことが出来ない。

「なんと言われても構わない。この戦いに勝利するためなら俺はいくらでも泥を被ろう」

「必死ね。しつこい男は嫌いよ?」

「……確かに、カミューラさんの言う通りだ。……だが、この戦いは俺だけの戦いではない。だから負ける訳にはいかんだ。俺に協力してくれた……友のためにも!」

真剣な顔でビシツとポーズを決め、力強い宣言と共にカミューラを指差す万丈目。その熱い言葉と眼差しは、カミューラの心を確実に揺らした。

「やるぞー! 魔法カード——『融合』!!」

この瞬間、観客席の紅也は立ち上がった。弱い力を纏め上げ、『王』と呼ばれるまでになったモンスターの登場を察したからだ。

「いけ！ 雑魚どもッ!!」

『おジャマ〜!』

『究極合体〜!』

『いくわよお!』

3体の弱小モンスターが融合し、『おジャマ』の王が誕生した。

「現れろっ! 『おジャマ・キング』ッ!!」

『お〜ジャ〜マ〜キ〜ン〜グ〜ッ!!』

赤い瞳に白い巨大。首には泥棒の風呂敷に似た柄のマントを付けており、それ以外では当たり前のようにブリーフ一丁だ。お世辞にもカッコいいとは言えず、オブラートに包んでも精々『ゆで卵の化け物』と言った感じだ。

『おジャマ・キング』 ATK/0 DEF/3000

「で、でも攻撃力は変わっていないわよ!」

「抜かりはない! 魔法カード『おジャマツスル』!」

「お、おジャマ……マツスル?」

段々と万丈目のペースに巻き込まれてきたカミューラ。困り顔で汗を浮かべながら、普通に戸惑っていた。

『『おジャマツスル』はフィールドに『おジャマ・キング』が存在する時、それ以外の『おジャマ』を全て破壊し、破壊した『おジャマ』の数だけ『おジャマ・キング』の攻撃力を1000ポイントアップさせる!!』

「貴方のフィールドには……まさか!」

「そう。破壊するのはカミューラさんのフィールドに居る3体の『おジャマトークン』! よって『キング』の攻撃力は3000ポイントアップする!」

『おジャマ・キング』 ATK/0 ↓ ATK/3000

「攻撃力……3000」

「まだだ! 『おジャマトークン』が破壊されたことで1体につき300ポイントのダメージを与える!」

「くっ!!」

カミューラ LP4000↓LP3100

「——バトルだ! 『おジャマ・キング』で『真紅眼の不死竜』を攻撃!  
フライングボディプレスッ!」

ムキムキの筋肉を宿し、『キング』が宙を舞う。巨大から繰り出されたボディプレスは『アンデットドラゴン』を一気に押し潰した。

「ぎゃあッ! ……やったわね!」

カミューラ LP3100↓2500

「よし! 俺はこれでターンエンドだ!」

盤面をひっくり返し、ライフも逆転。1ターンで随分と優位に立った。やはり『おジャマ』を手にした時の万丈目は強い。

「逆転、出来たぞ」

「……少し、見直したわ。私も本気で相手してあげる」

言葉通り熱くなってきたのか、静かに闘志を滾らせるカミューラ。それでも淑女らしく、優雅な動作でドロローした。

「ドロロー。『ヴァンパイア・ジエネシス』の効果発動よ。手札の”アンデット”族モンスター1体を墓地へ送り、そのモンスターよりレベルの低い”アンデット”族モンスター1体を墓地から特殊召喚する!

レベル8の『闇より出でし絶望』を墓地へ送り、レベル7の『真紅眼の不死竜』を特殊召喚!」

『ゴオオオオオッ!!』

不死の名に恥じず、再びフィールドへ舞い戻った『アンデットドラゴン』。やり返してきた『おジャマ・キング』を完全に敵と認めたのか、背筋が凍るような咆哮を上げた。

「この子達に相応しい舞台を整えなきゃね。フィールド魔法『アンデットワールド』を発動!」

「きたか……」

「ふふっ、効果の説明は要らないわよね?」

ソリッドビジョンによってフィールドが禍々しい世界へと変わっていく。万丈目だけでなく、多くの男子生徒達に敗北を叩き付けてきた処刑場だ。

カミューラは万丈目の反応に満足そうな顔をしながら、追撃の一手である奥の手を発動した。

「いくわよ。——永続魔法『一族の結束』を発動！」

「……そのカードまで」

不味い、と紅也は顔に手を当てる。万丈目が身構えるのも無理はない、あのカードこそ紅也がカミューラに巻き上げられ——譲渡した前世カードだ。ステータスが重要視されるこの時代に於いては強力な永続魔法である。

「前から疑問だったが、何故カミューラさんが使うカードに雑魚達のイラストが……？」

苦しめられてきた永続魔法だが、効果以上に万丈目の意識を引くのはイラストであり、見覚えのある『おジャマ』が描かれていた。見覚えのない色の奴らも居るが。

「あら、本当ね。……まあどうでも良いわ。このカードは自分の墓地にある全てのモンスターの種族が1種類の場合、自分フィールドに存在する同じ種族のモンスターの攻撃力を800ポイントアップさせるのよ」

「な、なんだと!?!」

カミューラの墓地に存在するモンスターは『闇より出でし絶望』のみ。『真紅眼の不死竜』と入れ替わる形で墓地に行つたため、『一族の結束』の発動条件は満たしている。扱いつらい『ヴァンパイア・ジェネシス』の効果を使いこなしているのは流石と言つたところか。

種族を強制的に変更する『アンデットワールド』とも相性が良く、カミューラのデッキにはとてもマッチしていた。

『ヴァンパイア・ジェネシス』 ATK/3000↓ATK/3800

『真紅眼の不死竜』 ATK/2400↓ATK/3200

「いくわよ! 『アンデットドラゴン』で『おジャマ・キング』を攻撃! アンデット・フレアツ！」

先程のリベンジに燃えているのか、『アンデットドラゴン』は蒼炎の業火球を放つた。僅かな攻撃力差が出来てしまったので、このままでは『おジャマ・キング』が焼き尽くされてしまう。



「それは通さん！ 墓地の『ネクロ・ガードナー』の効果発動！ このカードを除外し、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする！」  
「……ふーん。『手札断殺』で墓地に送っていたのね」

幻影として万丈目の前に現れた『ネクロ・ガードナー』によって、『アンデットドラゴン』の攻撃が防がれる。もしも『おジャマ・キング』が『アンデットドラゴン』に破壊されていれば、効果でコントロールを奪われた上にモンスターゾーンが3箇所使用不能になって万丈目は詰んでいた。

「やるじゃない。少しは敗北から学んだということかしら」  
「その通り。この万丈目サンダーは進化し続ける」

13回負けてるけどなど、紅也は心の中でツッコんだ。カミューラにアドバイスしたのが紅也であるならば、その対策を紅也が思いつかない道理はない。伊達に寝不足になるまでデッキ調整に付き合った訳ではないのだ。

「でも次の攻撃は防げないでしょう？ ——『ヴァンパイア・ジェネシス』で『おジャマ・キング』を攻撃よ！ ヘルヴィシヤス・ブラッドツ！」

「ぐああああ!!」

万丈目 LP3200↓LP2400

今度は防ぐ手段もなく、『おジャマ・キング』が破壊される。勝負を決められることはなかったが、絶望的な状況には追い込まれてしまった。

「手札もないしターンエンド。……さつ、貴方のターンよ」

余裕を隠そうともしないカミューラ。万丈目を試すかのように手を広げ、笑みを浮かべる。もう1度逆転出来るものならやってみろと言っても言いたげだ。

「……………ふう」

万丈目は自身の現状を確認。フィールドにカードはなく、手札は1枚。この最悪な状況を覆すのに必要なカードは——2枚。

1度しか無いドローで2枚のカードを引き込まなければ勝てないとは笑える話だ。手品師でもなければ不可能だろう。

——しかし、万丈目は諦めていなかった。

この絶望的な状況で思い返していたのは、紅也の言葉だった。言われた時には鼻で笑ったものだが、今では不思議とそんな気にはなれなかった。

『おジャマ達を信じろ』

デュエルに運など関係なく、あるのは高度に計算された戦略だけ。アカデミア高等部に進学して間もない頃であれば、間違いなくそう言っただけで否定していた。

「——俺のターン、ドローツ!!」

心を研ぎ澄ませ、デツキを信じる。

そんな万丈目の想いに——デツキは応えた。

『強欲な壺』を発動！ 更に2枚をドロローだ！」

「ここで『強欲な壺』……！」

1度のドロローで2枚引くという最初の困難を突破。更に引き込んだ2枚のカードを見て、万丈目はニヤリと口角を上げた。

「このデュエル……もらった！」

「——ツ!？」

動揺するカミューラへ畳み掛けるように、万丈目が引き込んだカードを操る。狙い通り過ぎるドロローを決め、勝利の方程式が完璧に見えるていた。

「魔法カード！ 『おジャマンダラ』！ 1000ポイントのライフを払い、墓地から『おジャマ』三兄弟を特殊召喚する!!」

万丈目 LP2400↓LP1400

『おジャマンダラ』

1000ライフポイントを払い、自分の墓地の『おジャマ・グリーン』『おジャマ・イエロー』『おジャマ・ブラック』をそれぞれ1体ずつ選択して発動。選択したモンスターを特殊召喚する」

OCG化していないアオリカードの効果で、フィールドに戻って来た三兄弟。まさかまた呼び出されるとは思っていなかったようで、手を取り合いながら驚いている。そして何故か攻撃表示で呼び出されていることに気づき、ビビり始めた。

「またそんな雑魚を……本当に諦めが悪いわね」

「いくらカミューラさんと言えど、コイツらを馬鹿にすることは俺が許さん！」

『『『アニキ〜!!!』』』』

庇われて喜ぶ『おジャマ』達だが、それが早とちりであったと知ることになる。

「確かにコイツらは攻撃力が0の弱小モンスターだ！ 通常モンスターで効果もない上にビジュアルと性格も最悪！ はつきり言って良いところなど全く無い!!」

「ちよ、ちよつと言い過ぎじゃない？」

白くなって涙を流す『おジャマ』達を見て、カミューラも流石にフオローする側に回った。まさか使い手本人が一番辛辣とは予想出来る筈もない。

「だが！ 俺はコイツらに教えてもらった！」

『諦めない大切さを！』

『絆の素晴らしさを！』

『力を合わせることを！』

「——下には下が居ることをツ!!!」

(……うわあ)

万丈目のオーバーキルに、紅也とカミューラの思考がシンクロ。可哀想なものを見る目で『おジャマ』達へ視線を向けた。

「コイツらに比べれば俺なんて、全然マシだ!! 13連敗したことなど恥じることですらない!!」

「……じゃあ結局、そのぎ——その子達じゃ私に勝てないってことでしょ」

カミューラも慎重に言葉を選び、『おジャマ』達へ配慮した。既に燃え尽きているような顔をしているのだから、わざわざ追い討ちをかける必要はない。

「それは違う。俺はコイツらだからこそ、貴女とここまで渡り合えた」

『『アニキツ?!』』

「何を落ち込んでいるんだ貴様ら。俺の勝利のために力を貸せ！」

『『おおうっ!!!』』

単純だなど紅也は呆れるが、対峙しているカミューラはそう緩くは  
いられない。ここまでするからには何か策があると見て間違いない。  
伏せカードが『リビングデッドの呼び声』のため妨害出来ないのが辛  
い。

「これが俺の……俺達のカだ！ 魔法カード——『おジャマ・デルタハ  
リケーン』 ツ！ いけえええ！ 馬鹿どもおお！ 必殺ツ!!!」

『おジャマアア!』

『デルタアアアア!』

『ハリケエエエエン!』

空中に飛び上がった三兄弟がお尻を突き合わせ、ぐるぐると回転を  
始める。残像が残る程の速度まで回転すると、そのままカミューラの  
フィールド全体を囲み——大爆発を起こした。

「わ、私のフィールドが……全滅ツ!」

余裕の表情は崩れ、声を荒げるカミューラ。愛するモンスター達が  
一瞬にして破壊された事実には動揺を隠せなかった。

『『おジャマ・デルタハリケーン』は俺のフィールドに『おジャマ』三  
兄弟が存在する時……相手フィールドのカードを全て破壊する』

これぞ『おジャマ』の最終奥義。発動条件は厳しいが、決まれば相  
手のモンスターだけでなく魔法・罫も含めて全滅させられる強力な効  
果を発揮する。綺麗に片付けられてしまったフィールドを見て、カ  
ミューラが少し笑ったように口を開く。

「……なるほどね。……雑魚と言ったことは撤回するわ。ごめんなさ  
いね」

「謝ることはないさ、ただの事実だ」

「感情がぐちゃぐちゃ過ぎないかしら……?」

全ては寝不足が原因である。カミューラは情緒不安定な万丈目を  
心配しつつ、1度咳払いをしてからデュエリストの眼に戻った。

「……けれど、結果は変わらないわ。その子達の攻撃力では私にトド

メは刺せない」

カミューラの指摘に反応したのは万丈目ではなく、『おジャマ』達の方だった。指摘が事実であることを誰より分かっているのは彼らだ。

『おおくん!!』

『すまねえアニキ!!』

『オイラ達が弱いばかりにく!!』

無力な自分達を責め、涙を流す。クズカードとして捨てられていた自分達を救ってくれた万丈目の力になれないことが、『おジャマ』達にとっては何より悔しいことだった。

「泣くな！ お前達は弱くなどない！」

しかし、万丈目はそれを否定する。

「情けない声を出すな。お前達は……俺のデッキのエースなのだ」

『エース?』

『お、おれ達が?』

『アニキの?』

「そうだ。このデュエルに勝利し、カミューラさんと俺を結びつける恋のキューピットでもある！」

『『……ア、アニキ!!』』

口も態度も悪く、その上性格も生意気。だがどん底から這い上がってきた万丈目——いや、万丈目サンダーは嘘を吐かない。

「俺がお前達を信じてやる！ だからお前達も——この万丈目サンダーを信じろッ!!」

『『アニキッ!!』』

精霊との信頼度で負けるつもりはないが、紅也は今の万丈目達を見て少しばかり嫉妬した。それと同時に、やはり自分の推しキャラはカッコいいのだと再確認したのだった。

「決めるぞ！ 魔法カード！——『右手に盾を左手に剣を』ッ!!」

カミューラに続いて、今度は紅也が驚愕する番だった。何故なら、あんなカードはデッキ調整の際に入れていなかったからだ。万丈目がこういった状況を想定し、独自の判断で入れていたということになる。紅也はファンとして、急激にテンションが上がった。



め息をついた。

「……負けたわ」

「負けましたね」

「あれ、アンタが助言したの？」

『お ज्याマ』のこと？ あれは元々万丈目のエースでしたよ。カミューラさんに見せたくないから使ってなかっただけ」

「……あつそ」

不機嫌そうに鼻を鳴らす様子は、どこか万丈目に似ている。

「……なに笑ってんのよ？」

「別に。良いデュエル見たなって」

「私が負けてるんだけど？」

「良いデュエル見たなって」

「ムカつく！」

「痛つてえ!!」

容赦なく紅也の爪先を踏みつけたカミューラ。痛みに飛び跳ねる紅也に背を向け、髪を束ねていたヘアゴムを豪快に取り払った。

「……万丈目に伝えなさい。デート内容は好きにして良いから、都合の良い日が決まったら言いに来なさい。その日に仕事を休んであげるってね」

「じ、自分で伝えれば良いのに……」

「うっさい。頼んだわよ」

その言葉を最後に、カミューラは振り返ることもなく歩き出した。

「……はあ。素直じゃないな」

『グルウオ』

「ん？ どした？」

静かに隣に出てきたレッドアイズ。紅也も促されるままに視線の向きを揃えてみると、思わず口元が緩んだ。

『……………ゴオ』

去って行くカミューラの隣に現れていた『真紅眼の不死竜』。それは間違いない、デュエルモンスターの精霊だった。

「……カミューラさんに渡して正解だったな」

『……グルウ』

旧友の輝きに喜ぶレッドアイズと、それを見て笑う紅也。そろそろ騒いでいる万丈目にカミューラの言葉を伝えてやろうと思いい、大喜びしている男と3体の精霊の側へ近寄った。

「万丈目、おめでとう。やっとな勝ったな」

「おお！ 竜伊！ 見たか!? この俺の勝利を！ カミューラさんもきつと……あれ？ 居ないぞ!」

「もう帰ったよ」

「なんだとつ!? す、すぐに追って……」

顔に抱きついていっている『おジャマ』達を引き剥がし、万丈目が焦りながら走り出そうとする。紅也はそれを制止し、一方的に預けられた言葉を伝えた。

「カミューラさんから伝言だ。デートしてやるから都合の良い日が決まったら教えに来いってさ」

「ほ、本当か……?」

「本当だ。良かったな」

「くくくつ!!」

両腕を突き上げ、勝利を実感する万丈目。『おジャマ』達も盛り上がっているが、精霊が視えない者からすれば万丈目がただの不審者だ。しかし男として、紅也はそれを責めることも出来ない。誰も手にすることが出来なかった美人（顔だけ）とのデート権を勝ち取れたのだから。

『流石アニキ!』

「当然だつ!」

『デート権ゲットだぜ!』

「実力だつ!」

『カッコいいわあく!!』

「言われるまでもない!」

仲良いなあと紅也が見ていると、万丈目達はいつも通りの決め台詞をたった1人のギャラリーへ見せつけた。

「——いくぞ!」



『十!』

『百!』

『千!』

『『『万丈目サンダーアアアアツ!!!』』』

(……本物だあ)

『グルウ〜?』

推しキャラの眩しさに感動しながら、紅也はとても大きな達成感で満たされるのだった。